ぐわいばんつうしょ　外蕃通書　四冊　近藤　守重

諸外國との通書を纂輯辨註したるものなり。其の目を擧ぐれば、朝鮮、阿蘭陀、唐土、安南、遲羅、東埔塞、占城、太泥、田邏、呂宋、阿媽港、附五和、新伊西把儞亞、瑞又利亞等の國書なり。

◎近藤守重の傳記は「右文故事」の下にあり。

ぐわいばんつうりゃく　外蕃通略　一巻　吉田　松陰

德川幕府の外交を評議したるもの。寧ろ其の僭論の罪、卑屈の非を痛論したるもの。其の自序に曰く「人臣無二外交一、古之道也。自二武臣壇一レ國、古道漸廢。如二足利義滿一者、至二國王自處一、臣二外域一。人臣之悖、至レ是極矣。德川氏既代二覇臣一、宰二制天下一、凡百制度、多歩二趾足利一。然足利之罪、人能言レ之。德川之非、孰敢議レ之。固有二待于隱居放言之士一也。吾頃讀二外蕃通書一、得二具見一レ德川氏交二通外國一文書一。蓋有二蹙然不一レ安者一。顧其蒞レ事所レ著、明知二其非一而不レ能二極議一者勢也。吾故據二其略一、倣以二王法一、垂二鑑萬世一云々」と。以て其の一斑を窺ふべし。關外に三洲長崎の評語を掲げたり。安政四年丁巳（一八五七）三月著。明治廿七年甲午（一八九四）四月版行。

◎吉田松陰の傳は「靜孟割記」の下に掲げたり。

ぐわいばんどくみ　外蕃十組　一巻

香組の書なり、花重香、園鶯香、芳野香、六儀香、源氏雛樂香、蹴鞠香、相模香、龍田香、吳越香、獵狩香、以上十組を詳說す。享和元年辛酉（一八〇一）秦豐繩の寫本にかゝる。

ぐわいばんようぼうづぐわ　外蕃容貌圖畫　二巻　東春堂

東西各國人の容貌風俗を彩色畫して、更に各國體、風俗、習慣、氣候、文野の事等を略記す。畫繪を主とし、其の行程、由川、城邑、驛宿、橋梁、社寺を記したるものなり。

くわいへんたい　華夷變態　卅三十五巻　林　恕

明清國の所傳上書等數百種を輯集したるもの。自序中に「按朱氏失馭、當我正保年中、商來三十年所、福、潦商船、來往長崎、所傳說、有達江府者、其中間於公件々、諭遣之、和解之、吾家無不與之、其草案留在反古堆、恐其亡失、故裁其次第、錄爲冊子、號華夷變態云々」といひ、「華夷變態」に就ては、序端に「崇禎登天、弘光陷虜、唐魯幾保南閩、而疑虛橫行中原、是華變於夷之態也云々」とあり。自序は嶽元天皇の延寶二年甲寅（一六七四）六月八日の記にかゝる。

◎林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

くわいようろく　膾餘雜錄　五巻　永田　道慶

和漢古今の事實を漢文にて雜記したるものなり。慶安五年壬辰（一六五二）の自序を附す。

◎永田道慶は紹伊の人にして藤原惺窩の門人なり。善醫また、沔潛居と稱す。

くわいらんけいづ　皇朝系圖　卅二巻

神武天皇より、伏見院の御孫に至る皇朝系圖なり。「續群書類從」卷百〇六、系圖部第一に入れたり。前田侯にある此の書の原本は、「帝王系圖」と表題して傳記最も正しといふ。

くわうえきこくさんかう　廣益國産考　八巻　大藏　永常

地味の應否、草木種藝のことより、砂糖、醬油、燈油、絹、木綿、紙、葛、海苔等の製法に至るまで專ら農産增殖の事を圖說せり。天保十五年甲辰（一八四四）正月作るところなり。

◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

くわうえきしょかじんめいろく　廣益諸家人名錄　二巻

文政年間より天保の當年に至れる名人の姓名、雅號、住所等を列擧したるものなり。儒家、國學者、連俳家、兵家、書畫家、有職、鑒定、家相、篆刻、棊事、閒番等凡そ六百名をいろは順に排列す。江戸當時現在者として天保七年丙申（一八三六）上梓す。

くわうえきしょかじんめいろくにへん　廣益諸家人名錄二編　一巻

前掲「廣益諸家人名錄」に遺漏せるものを拾集して是れ亦凡そ六百名を收む。天保十三年壬寅（一八四二）發行す。

くわうえきじょごじ　廣益助語辭　四巻　三好　似山

盧允武の「助語辭」を增訂したるもの。元祿五年壬申（一六九二）の凡例中に「凡そ盧氏の載する所の字辭僅に一百有餘、今、增益する所のもの一千有餘。每字の下に梅誕生が字彙を以て切音を附し、又若干の和書に依りて訓話を加へ以て攻考に便す」とあり。四卷の中一卷は序目たり。元祿七年の版行。

くわうえきせいじつう　廣益正字通　一巻

四書、五經、左傳、國語、史記、漢書其の他老莊子類等の文字を摘出し、部首を正して編輯順序したる字書なり。安政二年乙卯（一八五五）加唐忠重復讐の校訂出版するところなり。

◎鎌田禎の傳は「玉編補說」の下にあり。

くわうえきぞくせつべん　廣益俗說辨　五十巻　井澤　長秀

天子、皇子、后妃、公卿、士庶、婦女、僧道、近世雜類、或は居所、地理、人物、官職、藝術、文籍、器用、音樂、書圖、歲時、佛家、草木、禽類、魚蟲等に類別して各和漢の書に據りて俗說の誤謬を正したるものなり。一書前編二十卷、後編五卷、續編五卷、附編七卷、幾編八卷、贅辨二卷、贅辨續編三卷より成れり。正德五年乙未（一七一五）五月の自序あり。

◎井澤長秀の傳は「漢字和訓」の下にあり。

くわうえきちきんせう　廣益地錦抄　八巻　伊藤伊兵衛

花木類、草花類、紅葉類、藥草類等各數十種を集載圖解したるものなり。享保四年己亥（一七一九）の作。

◎伊藤伊兵衛は江戸染井增地錦抄六卷、草花錦全集一卷等の著あり。

くわうえきひじたいぜん　廣益秘事大全　五巻　三松館主人

民家日用廣益秘事大全

子弟を陶冶す。其の詩は實に天下隨一なりと稱せられ、全國の學者之れと交を結ばざるものなし。其の著す所に、遊藝日記、室町志、福山志料、冬日記、筆のすさび、隨筆答、福山風俗、和歌集、常遊記、大和紀行日記、文稿、及び本詩集等あり。文政十年丁亥(一八二七)八月十三日、年八十にして病歿す。

くわうゑんぜんしふ　黉園全集　㊀二十卷　野村　溫

著者の詩文を全集したるもの。單行のまゝに區別すれば、「靜堂集」四卷、「採花集」一卷、「秋聲管譜」二卷、以上は著者の手定なれば、之れを首卷に置き、其の他の十餘卷、門人等編次して全集とせり。天保十五年甲辰(一八四四)九月石川滋の序あり、二十卷を二十三冊(中に目錄三冊あり)に寫傳す。

◎野村溫の傳記は「靜堂橅稿」の下にあり。

くわうきけいけんひはう　廣求經驗祕方　㊀一卷　向井　元升

諸病の療法、處劑を記したるもの。眼目部に十六方、婦人部三十方、口中部三十二方、瘡瘍部六十二方、小兒部廿五方、心腹部廿方、二便部廿二方、損傷部七方、癒結部五方、腋臭部三方、四肢部四方、毛蝨部四方、解毒部三方、黃疸部二方、耳鼻部二方、五絕部一方、雜病部六方、頭痛部附り諸瘡八方、痰嘔部附り喉痺五方、凡て二百五十七方を記す。享保六年辛丑(一七二一)長崎陽頃の住先生(センシン)晴雲の序あり。

◎向井元升は肥前の儒醫。以順と字し、後、素伯と稱す。中年にして學に志し日夕精研して又醫術に勉勵す。近隣の諸侯診を請ふもの多し。其の高祿を以て招くものあるも應ぜず。寬治元年京都に徙り住す是れより皇室の御病を診ること度々なりき。其の著書に乾坤辨說、庖厨本草、知事も考へ記されしものなり」と「伊吹能舍雜書目錄」に云ふ。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

くわうこくいせきめくろく　皇國醫籍目錄　㊀一卷

慶長以前の皇國醫書少數を、方論、本草、針灸、創瘍、婦人、養生、藏象、雜書、口齒、道三派連等に分ちて、十條部又は一部宛資素鈔本の罫紙の所々に寫せり。思ふに同人の讀書目錄なるべし。卷末欄外に「安政乙卯四月十三日針裝成」と記せり。

くわうこくねんぎやう　皇國曆鏡　一卷

我が五十連音韻に據りて、二合反切開合輕重の眞僞等音韻に關することを論述したるものなり。文化元年甲子(一八〇四)冬十一月の作。同二年丘岬としひらの書あり。同十年大阪に出版す。著者木崎幸敦は若狹國小濱の住人なり。

くわうこくかいびやくゆらいき　皇國開闢由來記　六卷　平野　重誠

卷一叢雲の神銀世間に出現して永く國家を守る。大少二神天下を經營して鳴滝卷に至る。國家の衛氣を生じて外虛邪の鏡鏡光を放ちて神風敵船を寄せを挿入して開闢の由來を綴る。名「大日本國開闢由來記」といふ。安政三年丙辰(一八五六)の作。萬延元年庚申(一八六〇)出版す。著者の名は、指滿

光源院足利十三代將軍義輝が存亡事績の大略を記書したるものなり。

くわうごのみやじふごばんうたあはせ　皇后宮十五番歌合　㊀一卷

寬治三年己巳(一〇八九)の同歌合にして、民部卿經衡の判にかゝる。

くわうごのみやしゆんじうじふばんうたあはせ　皇后宮春秋十番歌合　㊀一卷

天喜四年丙申(一〇五六)四月三十日同宮御簡の春秋十番歌合なり。

くわうごうひまなび　皇語うひまなび　一舖　殿村　常久

文政十一年戊子(一八二八)作の「かたばみぐさ」を、改題して、嘉永四年辛丑(一八五一)再版に付したるものなり。

◎殿村常久の傳は「千草の根ざし」の下にあり。

くわうこくいしようかう　皇國異稱考　二卷　平田　篤胤

我が大日本國の異稱に就き考證論辨したるものなり。「唐土の古書に扶桑國といひしは卽ち皇國の事なるを、和漢の學者たち、別國のこと論じ來れるが非なる由を、諸書に徵して論定し、且、彼の國初に出たる三皇伏羲、女媧氏などいふも、其の扶桑國より渡れる由なれば、卽ち我が皇神たちなる事の大概を論じ、又た扶桑といふは櫻なる事、又、固に倭國、君子國、日本國、若木國、大人國などいふ國號の

くわうこくいしようかう　皇國異稱考　二卷　平田　篤胤

我が大日本國の異稱に就き考證論辨したるものなり。「唐土の古書に扶桑國といひしは卽ち皇國の事なるを、和漢の學者たち、別國のこと論じ來れるが非なる由を、諸書に徵して論定し、且、彼の國初に出たる三皇伏羲、女媧氏などいふも、其の扶桑國より渡れる由なれば、卽ち我が皇神たちなる事の大概を論じ、又た扶桑といふは櫻なる事、又、固に倭國、君子國、日本國、若木國、大人國などいふ國號の

くわうこくいしきかう　皇國醫籍考　六卷　平野　重誠

卷一叢雲の神銀世間に出現して永く國家を守る。大少二神天下を經營して鳴滝卷に至る。國家の衛氣を生じて外虛邪の鏡鏡光を放ちて神風敵船を寄せを挿入して開闢の由來を綴る。名「大日本國開闢由來記」といふ。安政三年丙辰(一八五六)の作。萬延元年庚申(一八六〇)出版す。著者の名は、指滿

くわうこくかいびやくゆらいき　皇國開闢由來記　六卷　平野　重誠

くわうこくくしやくおん　皇國釋音　㊀二十二卷　黑川　春村

此の書は、名音韻考證二の續下に解題したり。

くわうこくだいいちぎ　皇國第一義　一卷　藤本　眞金

くわうこくしんめいか　皇國州名歌　一折　市川　米菴

書家米菴の行書臨本なり。明治十三年の雕刻にかゝる。

◎市川米菴の傳は「五體墨場必携二」の下にあり。

くわうこくくすのきやう　皇國樟鏡　一卷

我が五十連音韻に據りて、二合反切開合輕重の眞僞等音韻に關することを論述したるものなり。文化元年甲子(一八〇四)冬十一月の作。同二年丘岬としひらの書あり。同十年大阪に出版す。著者木崎幸敦は若狹國小濱の住人な

神胤連綿たる皇室を拝戴して忠君愛國專ら王事に盡瘁すべき事を述べたる短編なり。『やまと叢誌』第十五に收錄す。明治元年戊辰(一八六八)羽田野たか雄の跋あり。

◎藤本眞金は備前の藩士。字を鐵石といひ、鐵寒士、部門號樂翁等の號あり。少より武を練り文を研き兼ねて畫を學ぶ。廣瀬淡窓、草場佩川、村上佛山、矢上快雨等と交る。嘉永安政以來外患切迫するに及びては吉村寅太郎、松本奎堂、竹下熊雄、那須信吾、安積五郎等と謀り擧義を企つ。遂に黙家口の軍に戰死す。時に文久三年癸亥(一八六三)九月十五日なり、年四十七。

くわうこくどせいかう

皇國度制考 三卷 平田 篤胤

我が尺度の制を考證したるもの。古、八部加、八阿多、八比呂など云ひし時度の本義は更なり、其れよりして、丈尺寸分などの精度の出來し本は、長きや皇大神の御朝より起り、其の尺やがて今に傳ふる曲尺にて、古今其の長短を誤ることなく、後に令の御定めありし時に、大尺小尺を立て給ひしも卽ちこの尺にて曾て唐制を用ひ給へるに非ざる事、又、聞はゆる吳服尺鯨尺をはじめ、諸尺の沿革を明かし、古今學者の度制を論じたる書數十部あれど、一人も皇朝固有の尺を知れる者なく、其の論說の妄なるよしを、正史實錄に徵して、悉く論辨を加へたるものなる由『伊吹能舍著撰書目』に見えたり。

◎平田篤胤の傳記は『古史傳』の下にあり。

くわうこくぶきづ

皇國武器圖 一卷 首藤 徹龍

清國寧波府鄞縣天童寺住持書、同清國江寧府六合縣長蘆寺住持の書とを和譯したるものなり。

くわうこくめいえでん

皇國名醫傳 三卷 淺田 宗伯

上古以來近代に至る我が邦名醫の傳記錄なり。參考三百餘卷に渉り、片言俊語の遺事をも載せたり。嘉永四年辛亥(一八五一)の序あり。

◎淺田宗伯、名は榮、號は尚齋、栗園と號す。信州筑摩郡栗村の人。祖父以來漢家の名醫たり。少より洪學醫術を修め、後江戸に開業す。年ありて安政五年將軍家茂に誂して徵士となり、慶應二年同將軍を診察し大奧の侍醫となりて三十人俸二百俵を受け法眼に叙せられたり。明治二十一年皇太子殿下誕生の時、尚位に叙せられ、明治二十二年五月東宮侍醫の職を辭し、終身年金千圓を賜ひ從六位に昇せらる。著すところ『勿誤藥室方函口訣』三十卷、『傷寒辨要』、『雜病辨要』、『醫記事』、『先哲醫話』、『杏林風月』等あり。明治二十七年甲午(一八九四)四月十六日八十一歲にて歿す。

くわうこくやくおん

皇國譯音 一卷 二十二卷 黑川 春村

此書は別名『音韻考證』といふ題下に解題せり。

くわうごんじしよかんわかい

光嚴寺書翰和解 一卷

日本曹洞宗越中國光嚴寺住持洞水へ送り越したる清國寧波府鄞縣天童寺住持書、同清國江寧府六合縣長蘆寺住持の書とを和譯したるものなり。

くわうごんのゐんごしふ

光嚴院御集 一卷 光嚴天皇

「よもの柿かすむを見ればまたきより、花の心ぞはやにほひける」といふ霞の歌より、「月影はまだなかぞらにのどけきを、はやとりきこゆ明ぬこの夜は」のやどり木に至る凡そ百數十首を揭げたり。『續群書類從』卷四百二十五、和歌部第六十に收む。

◎光嚴天皇は後伏見の太子たり。後醍醐天皇の酌特と共に帝位に卽く。在位二年後醍醐天皇の入洛に際して位を遜り太上天皇となり給ふ。後廿三年剃髮して光智、無縫と號し專ら佛學を研究し給ひ、貞治三年甲辰(一三六四)御年五十一にて崩じ給ふ。

くわうごんのゐんごそくゐき

光嚴院御卽位記 一卷

正慶元年壬申(一九九二)同院御卽位の御記事なり。萬治二年、寛文三年、明和六年等の寫本奧書あり。『續群書類從』卷二百七十四、公事部第二十七に入る。

くわうさうぎん

皇相吟 一卷 紫野 覺

著者洛の中外の神社佛閣を題詠したる詩三十二首を集めたるものなり。著者紫野覺は天林和尚の俗弟にして、印諦と法號す。

くわうさんいかう

晃山遺稿 一卷 石川 晃山

著者の詩集なり。數十首あり。明治十四年、哀筆豪谷ノ諸家の序を階して活刷す。

◎石川晃山は下野國都賀郡荒川村の人にして、士晃と字し、號山、晃山また東毛墨客等の號あり。壯より諸方に游學して諸友と相砥磨す。明治二年己巳(一八六九)十二月二日、年四十六にて歿す。

くわうざんきゝがき

鑛山聞書 一卷 赤穗 滿矩

鑛山の測量試掘より、鑛石の淘汰製錬に至るまで詳に圖解したるものなり。天明五年乙巳(一七八五)の作。

◎赤穗滿矩は通稱を利兵衛といひ多年鑛山業に從事したるものなり。

くわうざんくわんていしちうぜんづ

晃山官程私注全圖 一折

江戸和田倉橋より、湯島、森川、駒込西ヶ原、王子等を經て日光廟に至る當時の官道を圖し、小區劃毎に里程間尺を記し、道路兩傍の地名狀況を圖したるものなり。天保十四年癸卯(一八四三)十一月千坂機の跋中、上條某といふもの仮田某と共に新製せる由あり。絹製帙入にして珍藏す。編者は「大澤某」と記せり。

くわうざんこしやうしき

晃山扈從私記 一卷 成島 司直

天保十四年癸卯(一八四三)四月將軍德川家慶に從ひ日光山東照廟に詣したる時の往返九日間の日記なり。來に著者が途中得る所の古今體詩三十餘首を揭げたり。同年六月十七日大學頭林鵞の漢文序あり。

◎成島司直の傳記は『琉球錄話』の下にあり。

くわうじぜんじぎやうげふ

廣慈禪師行業 一卷 僧 一光

南禪寺佛惠廣慈禪師在庵大和尚の行狀略記なり。漢文二枚より成る。『續群書類從』卷二百三十七、傳部第四十八に入れたり。

くわうせきしふ

礦石集 六卷

地藏菩薩女人の橫死を救ひ給ふ事、佛、孝を說き給ふ事、大阪の女現に地獄の相を見る事等、因緣應報の事談數十項を記したるもの。元祿五年壬申(一六九二)孟春二十四日の自敍中に「頃年鈔纂雜錄、復撰利生記、及利益集、宇宙之感應、昭昭乎可見焉。而予所見聞數十條、編爲二部之拽雜、復不能無遺憾矣。肆不揆譾陋、設作二編輯、因號二續應之說一。終歸二於祕密一。愿曰二鑛石集一。分爲二四卷一。配二于彼四親近一。亦有二發意一耳。云々」といふ。元祿六年出版。著者は「林下乞士無盡藏」と署名して、其の姓名を著さず。

くわうそきうしよかう

皇祖宮所考 一卷 菊池 正古

伊邪那岐、伊邪那美二柱の御宮居を論證したるもの。卽ち最初二神天降りまして先づ淡能碁呂島を成し、やがて大八洲國を生み成し給ひけるが、其れより後の大宮所は何處なりしとの傳なきを、著者多年研究の結果にて種々の明證を得、遂に大和國なりと考究したるなり。天保十一年庚子(一八四〇)著、安政二年乙卯(一八五五)六月伊吹の屋の二世平鐵胤の序を附す。

◎菊池正古は陸奧國盛岡の人にして平田篤胤の門人なり。

くわうだいえんらん

光臺一覽 五卷

禁裏年中の故事儀式より、倒延より幕府へ賜る御書錄、及び幕府較定の式、將軍宣下、武家へ賜る口宣の式、其の他公武に關する雜事を記す。著者は「伊達某」と記せり。

くわうだいゐんわか

光臺院和歌 一卷

「光臺院歌五十首和歌」と內題して、春十二題、夏七題、秋十二題、冬七題、戀六題、雜六題、以上五十題を詠じたる歌凡そ二百餘首を收む。作者は家隆、定家外凡て二十二家なり。

くわうだいき

皇代記 一卷

最初天神七代地神五代より、後圓融天皇の康曆二年庚申(一三八〇)に至る皇代記なり。『群書類從』卷三十一、帝王部第三に入れたり。

くわうたいしかげんぶくしき

皇太子加元服式 一卷

文化八年辛未(一八一一)、皇太子惠仁親王【後に仁

孝天皇と申す）元服を加へさせられたる正式當時の記錄なり。「輪池叢書」第二十一に收めたり。

くわうたいしごげんぶくしだい
皇太子御元服次第　冊一卷
中御門天皇の享保十八年癸丑（一三九三）二月朔日、皇太子昭仁親王（櫻町天皇）御元服の次第を略記したるものなり。

くわうだいじんぐうぎしきちやう
皇大神宮儀式帳　一卷　荒木田公成
伊勢大神宮の儀式並に年中行事祭禮等の事を記す。朝宮より朝廷へ上る法進書の正しきものなり。一名を「內宮儀式帳」といふ。延曆二十三年甲申（一四六四）八月二十八日禰宜荒木田神主公成、大神宮司正八位大中臣朝臣眞儀等連署す。

くわうだいじんぐうじんしゆ
皇大神宮神主　冊一卷
明曆、寬文、寬永、萬治、延寶、長承、延久、乾元、眞享承應、天和年中の神宮雜事の奏狀等を集錄したるものなり。

くわうだいじんぐうでんしやかうしやう
皇大神宮殿舍考證　冊一册　度會　延經
伊勢內宮外宮の古殿舍の事に就き諸記錄を引きて考證したるものなり。卷首に同殿舍の圖をも添へたり。延享二年乙丑（一四〇五）寫本の奧書あり。
◎度會延經の傳は「伊勢國神名帳考證」の下にあり

くわうだいじんぐうねんぢうぎやうじ
皇大神宮年中行事　冊二卷　荒木田忠仲
伊勢大神宮の年中行事にして、建久三年壬子（一八五二）六月三日注するところなり。寬正五年甲申（一四二四）禰宜從三位荒木田氏經の當代儀式をも書き添へたり。今見る所は正應四年辛卯（一九五一）荒木田常通の寫本にかゝる。
◎荒木田忠仲は大神宮權禰宜兼宮掌大內人正四位下なり。

くわうだいじんぐうりやくき
熱田　皇大神宮略記　冊一卷
鎭座　尾張熱田なる皇大神本社の由來緣起を略記したるものなり。

くわうだいりやくき
皇代略記　冊六卷　洞院　公賢
本書は「皇代曆」の名によりて次項に解題せり。

くわうだいれき
皇代曆　冊六卷　洞院　公賢
神武天皇の元年より、後土御門天皇の文明九年丁酉（一二三七）に至る御歷代記なり。一紙を五段に裁割して、帝號、宮號、年號等、事件の大なるものを記入す。卷首には神世十二代の事績の大略を記せり。裏書一卷あり、總て六卷なり。別名を歷代皇紀、また露寺親長纂を加へたるなり。
◎露寺親長の傳は「歷代撮要」、また「皇代略記」と稱す。「續群書類從」卷八十二、帝王部第一にも收めたり。
◎洞院公賢の傳は「園太曆」の下にあり。

くわうだろん
皇道論　二卷　池田　大淵
我が古典によりて皇道を論說したるもの。卷二には「神代卷」、「黃泉國等の詳論を揭げ、更に姓號考、柱考、「文政元年六月の作」を附錄とす。孫金長、瑞伯等同校して、明治五年壬申（一五三二）出版す。同年男池田全安の序あり。
◎池田大淵の傳記は「壺科方意解」の下にあり。

くわうたくしふさう
廣澤輯藻　四卷　望月　兼友
著者の歌文集。卷一より卷三までに歌を類排し、卷四に文を收む。晚年京都嵐山の東なる廣澤池邊に隱居したりし時の編なり。「享保十一年丙午（一三八六）京都に於きて二冊に出版す」「桂雲集類題」と參照すべし。
◎望月兼友は閑入軒、小狹野屋長孝（或は長好と書せり）等は其の號なり。松永貞德に就きて和歌を學びたることあり。延寶九年辛酉（一三四一）三月十五日、六十四歲にて歿せり。

くわうていきせう
皇帝紀抄　一卷
高倉院の嘉應元年己丑（一一七九）より、安德天皇、後鳥羽天皇、土御門天皇、順德天皇等を經て後堀河天皇の貞永元年壬辰（一二九二）に至る帝紀略抄なり。「群書類從」卷三十五、帝王部第八に收む。

くわうていけいづ
皇帝系圖　冊一卷
神武天皇より、九十四代花園院に至る系圖なり。「續群書類從」卷百〇七系圖部第二に收む。

くわうてうかなさんたいいちらん
皇朝假字三體一覽　一折　片岡　眞錢
我が片假名、平假名、變體假名の三體を揭げ、音訓、用格、清濁等を略記せる一小折本なり。

くわうてうざうじかう
皇朝造字攷　冊一卷　木村　正辭
古く皇國にて製造したる文字を、古書より摘出して、一々其の出典を記し、編旁を以て部を分ち、字書の體となし、其の文字の製造の意義を記したるものなり。
◎木村正辭の傳は「萬葉集美美夫君志」の下にあり。

くわうてうさんしゆしやくづせつ
皇朝三種尺圖說　一卷　栗原　信充
皇國古來の尺度三種の起原につきて論辨す。平田篤胤の「皇國度制考」を評論是正したるものなり。「やまと叢誌」卷三に入れたり。
◎栗原信充の傳記は「鞍鐙新書」の下にあり。

くわうてうじゑん
皇朝事苑　四卷　僧　大典
卷一聖德、政令、官職、儀服、時節、宴會。卷二地迹、神祇、佛法、人物、女流。卷三孝義、學術、典籍、調藥、書畫、工技、音樂、金玉、器用、衣食。卷四草木、穀物、鳥獸、蟲魚、貢獻、祥瑞、讖緯、雜載、異獸、外交等に就き古史意記によりて類抄したるものなり。凡例中に「此編也祇爲操觚家屬辭比事一二考檢而設耳。敢比國史之補云乎哉」と、ことわれり。光格天皇の天明五年乙巳（一二四五）八月の自序あり。同七年丁未出版す。
◎大典の傳は「梅本人丸事蹟考」の下に出でたり。

くわうてうじふはつかうでん
皇朝十八孝傳　一卷　大槻　清崇
晉陶潛、孝傳を作り、天子諸侯卿大夫、士庶人を合すること十八人なり。今、之に倣ひて十八孝傳を作るといふ。公卿、士大夫、庶人、婦女、武人に分ち、中將道信の孝より左衞門佐氏頼の孝に至る十八傳なり。漢文にて記し、時々評論を加ふ。明治五年壬申（一二五三）「國語史略」に附して版行す。
◎大槻清崇の傳は「鴻漸齋一百詩鈔」の下にあり。

くわうてうじゅしんでん
皇朝儒臣傳　四卷　岡　白駒
我が國儒臣を傳したるもの。一名を「日本儒林傳」といふ。舊く竹內窟鼎に始り、近く藤原濱成に至る六十人を揭げたり。各傳末に讚語を附す。文化四年丁卯（一二四六七）出版せらる。
◎岡白駒は千里と字し、泊洲と號す。播磨の人にして醫を以て業とし、後京師に移り業を攻めて儒となり。文學を以て蓮池藩に仕へたり。年七十六にて歿す。

くわうてうせいせい
皇朝正聲　一卷　荻生　茂卿
皇朝の古人大友皇子、河島皇子、大津皇子、以下凡て十五家の詩三十五首を撰集發行せり。明和八年辛卯（一四三一）上毛宇世璠の序あり。同年出版す。
◎荻生茂卿の傳は「譯圖秘錄」の下にあり。

くわうてうせんりやくへん
皇朝戰略編　十五卷　宮田　敏

古今の軍事戰略を記述す。上、承平天慶の平將門の亂より、下寛永年間の天草の亂に至る凡そ七百年間の戰略の軌範たるべきものを、諸史野乘に採りて年序に從て記述せり。全編漢文にて作る。天保十五年甲辰(一八四四)の自序、嘉永元年戊申(一八四八)深田正韶の序、弘化二年乙巳(一八四五)澁田師厚、神埜世猷の序等あり。安政三年丙辰(一八五六)十五卷八册に版刻す。別に「皇朝戰略編拾遺」二卷あり、同じく宮田敏の作なり。明治八年高見猪之助の著に「續皇朝戰略編」五卷あり。共に參看すべきものたり。

◎宮田敏の傳は「李衛公兵法」の下にあり。

くわうてうせんりやくへんしふい

皇朝戰略編拾遺　二卷　宮田　敏

先輩「皇朝戰略編」に脫漏したる諸戰略を輯收す。又本編に徵び年代の順に漢文を以て記す。年代の詳かならざるは著者の推斷によりて順序せり。明治八年著者の死後に至りて出版す。

◎宮田敏の傳記は「李衛公兵法」の下にあり。

くわうてうにじふしかう

皇朝二十四孝　一卷　松平　容敬

我が上下の孝行を傳したるもの。仁德天皇、顯宗天皇、仁明天皇、藤原吉野、藤原伊周、源雅實、源光圀、大江擧周、役小角、倭果安、奈良許知麻呂、美濃孝子、丈部路祖父麻呂、紀夏井、丸部明麿、山田古嗣、額身公助、僧栄、鎌倉孝子、綿屋勘兵衛、兄姨、衣縫造金織女、楠逸勢女、微妙等の傳なり。各繪圖を插入す。安政三年丙辰(一八五六)男容保の序あり。

◎松平容敬は奥州會津の城主にて、正四位下中將肥後守なり。

くわうてうめいぐわしふる

皇朝名畫拾彙　五卷　檜山　義愼

「本朝畫史」の遺漏を拾集したるもの。文化元年甲子(一八〇四)林榴宇の序あり。嘉三年出版す。

◎檜山義愼の傳記は「華押譜」の下にあり。

くわうてんぶんるゐ

皇典文彙　三卷　平田　篤胤

皇典の漢文序表を彙集して校正訓點したるもの。「伊吹能舍考撰書目」に「古事記、姓氏錄、續日本紀、以下吾園史、及び令、式、格、大同類聚方、古今集等の序表、又、和名鈔、名目抄の序など、凡て漢文なる類を彙めて數本を校正し、訓點を加へて古學の楷式となし、幼童の讀書に定められし物なる故に、七行の大字本なり」とあり。其の主旨體裁等を知るべし。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

くわうざうじゆじゆづ

皇統授受圖　一卷　山宮　維深

神武天皇より、光格天皇に至る天皇尊諡のよみくせ、歷代年號のよみくせ、姓尸人名のよみくせ等を詳しく記したるもの。奥書に「右者從三條西殿(三光院實澄)家御免趣也、誠此道光之至資知之哉、可旨、可仰慶長十二年三月其辰法印玄旨」とあり。慶長十二年は丁未(一二六七)なり。次に玄旨より傳授の由、正保二年乙酉(一三〇五)十二月長頭丸貞德の奥書あり。

くわうさくせつようまんきよくはうさう

廣德節用滿玉寶藏　一卷

地理、歷史、曆日、年代、逸事、因緣談、雜遊戲、字彙其の他の事を雜記したるものなり。全編中繪圖を插入して子女の觀覽に便せり。寶保五年庚子(一三八〇)開版。

くわうさくぶかん

廣德武鑑　一卷

いろは順に、大小名諸家の姓名屋敷、家文領高等を記したる横綴一册子なり。

くわうねんじうりやうし

荒年充糧志　一卷　館　機

栃の實、檜の實、葛の根、蕨の根等の食法を說き、往往圖說を以て示せり。天保三年壬辰(一四九二)の著なり。

◎館機の傳は「中唐二十家絕句」の下にあり。

くわうねんだいりやくき

皇年代略記　一卷

最初に天神七代地神五代を揭げ、以下神武天皇より後陽成天皇の慶長年中に至る皇年代記なり。「群書類從」卷三十二、帝王部第四に收めたり。

くわうのじさたぶみ

皇字沙汰文　初一册

伏見天皇の永仁四年丙申(一九五六)十一月外宮へ皇字を進め給ふ敕宣並に官符數十通の寫、兩宮神官の奏狀案數十通共の他の古證等を集錄したるものなり。

くわうみやうしんごんをことば

光明眞言繪詞　三卷　爲重

光明眞言の奇驗特功を記したるもの。一名を「光明眞言功德辭」といふ。畫は鵬後法橋の筆に成る。應永五年戊寅(一四〇五)の奥書あり。著者は「毘沙門堂黃門爲重」とあり。

くわうみやうしんごんくどくじ

光明眞言功德辭　三卷　爲重

此の書は一名「光明眞言繪詞」の下に解題したり。

くわうみやうのねんごそくゐのき

光明院御卽位記　初一卷

建武四年丁丑(一九九七)十二月二十四日同院御卽位の記事なり。「續群書類從」卷二百七十四、公事部第二十七に收む。

くわうもんはくせきもんだふ

黃門白石問答　初一卷　野宮　定基

那鄕、庄園、社御厨、勳位、介、別當、勾當、開閤、寄人、公文、院掌、其の他數十項の雜事に付、新井白石の問に野宮黃門の答へたるもの。末に「以上簡見の至僻案可有之候へ共愚存の趣卿書記申候雖被信用候歟、返々赤面に候」とあり。本書は單に「黃白問答」とも云ふ。

◎野宮定基の傳記は「有職聞書」の下にあり。

くわうやまとぼんざう

廣大和本草　十二卷　貝海　龍

貝原益軒の著「大和本草」の遺漏を拾集して大に增補したるものなり。故に廣の字を冠す。寶曆五年乙亥(一七四五)作る。著者貝海龍は元周と字す越中の人なり。

くわうやまとめいしようし

廣大和名勝志　初四十七卷　植村　禹言

此の書、大島武好が「山城名勝志」に擬して作れるものに似たれど、未成の草稿に屬し、粗脫尙ほ多し。卷數、四十七卷とすれど、三十三册に作れり。荒木田久老の「大和河內旅路の記」にも「廣大和名勝志三十册、伊勢に來れる折其の歸路に木の國熊野を經たる日記三卷、すべて檜に寫して名だゝる所の故山は其れが上下に書き、また東海道木曾路などの事をも書けるを、其の家にて見たり」といへり。實地に就て見れば三十三卷のものなるに似たりと今は現書に記す所によりて四十七卷と記せり。

◎植村禹言は奈良正田村の人にして、(或は勝禹言ともいふ)之助の字とす、博く輿地のことに通ぜり。本書の外に庚午紀行、己巳紀行、乙未紀行、丙子紀行、但馬國大繪圖等の著書あり。

くわうようき
皇應記　本一卷
應の故實に關する十枚の古寫本なり。天智天皇の御爐盤手野守應より、鳥柴の事に至る凡て六十餘條を記す。

くわうりうじえんぎ
廣隆寺緣起　本二卷　僧　濟承
山城國葛野郡楓野（カヘデノ）大堰畑廣隆寺（當寺は秦公寺、蜂岡寺、桂林寺、三槻寺等の五寺號あり）の由來記なり。同寺は推古天皇の十一年癸亥（一二六三）の建立にかゝる。著者濟承は權僧都なり。

くわうりうじくやうにつき
廣隆寺供養日記　本一卷
永萬元年乙酉（一八二五）六月十三日山城國葛野郡廣隆寺の供養日記なり。「續群書類從」卷七百八十七、釋家部第七十二に收めたり。

くわうりうじしざいかうたいじつうくちやう
廣隆寺資財交替實錄帳　本一卷
弘仁九年戊戌（一四七八）山城國葛野郡廣隆寺の火災に遇ひたる後に於て其の資財帳を改正したるものなり。「續群書類從」卷七百八十七、釋家部第七十二に收めたり。

くわうりようかう
皇陵考　本一卷
神武天皇以下歷代の皇陵を考定したるもの。將軍家の命によりて、其の領は代官、諸國の私領は國主城主等を以て訪搜せしめ、悉く藩籬を設け、樵採を禁じ、其の旨京都所司松平紀伊守信綱より注進したるもの。時に元祿十二年己卯（一六九九）四月の事なり。九枚の寫本なり。

くわうりんしんせんひやくづ
光琳新撰百圖　二卷　緒方　方祝
著者の遺蹟を拾集列載し併せて原本所藏者氏名、實物彩色の模樣等を附記したるものなり。元治元年甲子（一八六四）藤原之信燕松軒の序あり。

くわうわぎよふ
皇和魚譜
我が國の河魚を列舉して圖說したるもの。著者未だ稿を脫せずして歿したるを以て天保九年戊戌（一八三八）藤原之信燕松軒の序あり。
◎緒方方祝は畫家にして光琳と號し、法橋たり。

くわうわぎよふ
皇和魚譜　一卷　栗本　昌臧（マサヨシ）
我が國の河魚を列舉して圖說したるもの。著者未だ稿を脫せずして歿したるを以て天保九年戊戌（一八三八）藤原之信燕松軒の序あり。
◎緒方方祝は畫家にして光琳と號し、法橋たり。

くわうわじんぶ
皇和畫譜　本一卷　僧　槃
本邦畫類を列舉して其の名稱能否を示したるものなり。文化頃の作なるべし。
◎曾槃の傳は「水草識略」の下にあり。

くわうわつうれき
皇和通曆　三卷　中根　元圭
我が古來の通曆なり。神武天皇の東征甲寅の年より起り、草保十八年癸丑（一三九三）に至る二千四百年間の通曆、每朝干支、大小、閏月等を記す。多田養後本書を評して云へることあり、「日本古來曆學精しからず、故に干支も時も違ふ所あり。宋代の學者昔の事を記するに、今の曆より推し上せて記する故に、古來と干支合はざる事あり。理はよけれども記錄と合はば用を爲さず。中根氏作の皇和通曆といふもの三卷、印版にあり。古來の人は記錄にまかせて干支を立つ、山槐記なと引けり。日本の古史を考へんと思ふものは皇和通曆を以て見るべし云云」と。其の寬慣を知るべし。正德四年甲午（一七一四）刊行す。
◎中根元圭の傳記は「異體字辨」の下にあり。

くわうわつうれきしよくしかう
皇和通曆蝕私考　三卷　千葉　蔵胤
神武天皇の元年辛酉より、眞享元年甲子（一六八四）に至る二千三百四十餘年間の日月蝕通曆なり。中根璋の「皇和通曆」の誤なも正し閏なも補ひたるなり。明和五年戊子（一七六八）著作す。
◎千葉蔵胤は江戸の人にして、陽生と號す。幸田親盈の門人なり。

くわうわへうきろく
皇和表忠錄　一卷　蒲生　秀實
應神天皇の御子稚郎子皇子と大鷦鷯皇子と天位相讓の義を論斷し、更に蘇我馬子の專橫等を論議したる漢文なり。文化年中の自序あり、明治元年戊辰（一八六八）版行す。
◎蒲生秀實の傳記は「今井」の下にあり。

くわえいさんだいき
花營三代記　本三册
足利義滿、義持、義量、三世の記なり。卽ち眞治六年丁未（一四〇七）十二月より、應永三十二年乙巳（一四二五）十一月二十三日までの日次記なり。

くわおくせう
花屋抄　本四卷
「源氏物語」の銅の註なり。各卷首に卷の名の事、年立の事、歌數の事等を記す。跋に曰く、「源氏の注本紫明、河海、花鳥此の三つのみなもとを正して、又三賢一覽といふもの、ますかゞみのかげ明らかに、疑ひ殘らざるものあり、それより後にさまざま人の智恵に任せおみたてたるもの多し云々」婦女子の爲めに四帖につめたる由を記す。

くわがいまんろく
花街漫錄　二卷　西村　貌庵
江戸吉原の故事を輯錄せり。元吉原町の繪圖、同江戸町二丁目沽券狀、墨勘稻荷假名之額以下二十餘條の古物を模寫す。畫は鈴木其一の縮寫するところにて、書は以一の筆するところ。文政八年乙酉（一八二五）三月の自跋、同年雨華庵抱一の序あり。
◎西村貌庵は俳人にて、佐兵衛と稱し、伊之と名け、宗先と字し、狀仙庵と號す。吉原江戸町二丁目の名主たり。年五十二にして淺草寺奥山に隱居し、人丸堂を建て、西院と號しこれに居る。貌庵の號は近衞三藐院の書流を學びて攝びたるなり。多能の人にして、俳、書、茶、琵琶等を善くし、古筆、茶器等の目利をなす。嘉永六年癸丑（一八五三）十一月二十日、七十歲にて歿す。淺草等覺寺に葬りて、貌庵宗先居士と法名す。著書は本書の外に、花街年中記、茶家印譜等あり。

くわかくたふもんろく
華客答問錄　本一卷
風俗物產等の事に就きて、日本人と支那人と筆談したるもの。凡て二十條あり。其の南京に關するは南京話、福州に關するは福州話、漳州に關するは漳州話と題し、皆支那當時の俗文にて記せり。

くわがくにふもんしよへん
化學入門初編　十二册　竹原平次郎
菱拉陣の「化學全書」の中より抄譯して、一般化學の大要を記述したるものなり。堀尾川織の註あり。慶應三年丁卯（一八六七）開成所開學化學二科教授方桂川甫策の序あり。後編十五册は同人の編なり。

くわがくにふもんしよへん
化學入門初編　十卷　赤田　元義
菱拉陣の「化學全書」の中より抄譯して、一般化學の大要を記述したるものなり。堀尾川織の註あり。慶應三年丁卯（一八六七）開成所開學化學二科教授方桂川甫策の序あり。後編十五册は同人の編なり。

くわぎ
火技　本一卷
鐵砲、硝藥、狼煙等の事を略說したるものなり。同器渡來後久しからず、尙普く人の其の方法效用等を知らざる時の說明なるべしと思はる。

ぐわぎうしふしよへん
臥牛集初編　十卷　赤田　元義
著者の詩文集にして、男光鶴の軼校するところなり。天明元年辛丑（一七八一）江村綏の序、文化十四年丁丑（一八一七）二月の自序、文政二年己卯（一八一九）七九）菅原長親の序、同八年光鶴の跋、同十年秦鼎の序等あり、同年十卷五册に發行す。
◎赤田元義に飛驒高山の儒者にして、伯宣と字し、臥牛と號す。

くわくおうしよくげんせう
鶴翁職原鈔　本三卷　壺井　義知
北畠親房の「職原鈔」を評註したるものなり。
◎壺井義知の傳記は「官職滑稽或問」の下に揭ぐ。

くわくかう、いかう
鶴皐遺稿　三卷　小栗　元愷
著者の詩集にして、長短編數十首を收む。江都北海の批點するところなり。安永六年丁酉（一七七七）江都北海の序、同清田君錦の序、同巻堂の序等あり。同七年版行す。
◎小栗元愷は若狹の人にして、字佐と字し、常山また鴻皐と號す。元愷は名なり。幼にして學を好み、京に出でて、柳川滄洲に詩を學び、業成り、仕を求めず、郷に還りて徒を敎ふ。明和三年丙戌（一七六六）九月病で家に歿す。

くわくげいづせつ
獲鯨圖說　一卷　木崎　盛標
捕鯨の法を圖說したること長道の示すが如し。安永二年癸巳（一七七三）の作なり。
◎木崎盛標の傳は「肥前國產物繪圖」の下にあり。

くわくげんそうしよ
鶴原叢書　本十六卷

諸家の雜作を謄書したるものなり。細目を列擧すれば、卷一に傳、竹譜、圖譜、覆盆子五種辨、憑霖辨。卷二に諸蕃錄異記、僊游雜錄、醇本草、三餘贅筆、西肆說鈴、推窻瑣話、蓬窗續錄。卷三に倚書樂、狙徠、孟子註。卷四に泰山紀勝、登華記、匡廬絕游、游雁蕩山記、塞瀚紀略(林蘇光)、同上(李麒光)、安南紀游、中山紀略、安南雜記。卷五に詠物詩(王元美)、同上(朱之蕃)、采花集。卷六に古今樂考、神代山陵考、雜辨。卷七に辨詩傳旨、芳洲口授、位署式私考。卷八に韓使往復書簡、水府義公、在韓日記(僧是琢)、對州修聘儀注。卷九に日本論(周弘祖)、高千穗游記、那須國造碑釋文、船氏墓誌考證、亂蟬傳、徠翁與德夫書、離情詩話、懷樂園記。卷十に職役配當抄、林家官職擬名、三器攷略、歷代戶口攷。卷十一に改元考、同酒社芻言、裝演志、兵狀記、關言、春秋三傳異同考、十六國年表、明人楷書帖。卷十二に樂律考、大樂發揮、律呂通考、詩草木解、日光八景詩。卷十三に孝經備攷、古義堂遺書總目、徂徠先生著述書目、木朝千字文、習行說、印章說、近人書評、燕談、投轄夜話。卷十四に屏居十二課、掾憶。卷十五に四時幽賞、將就園記、書畫論、天台山畫幅記。卷十六に北隴杞憂、讀遂筆讀等を收む。別に目錄一册あり。

くわざんいくん　鶴山遺訓　一卷　澤田　一齋

著者の爲めに、道義智術、日用緊切の事項を、漢字四言句に綴成せるものなり。巍谷世弘の「大統歌」と稽を同うす。著者の父鶴山の遺訓の兒等の父に在るものを綴り、聖經賢傳に考へて作成せりといふ。嘉永三年庚戌(二八五〇)の自序、同四年大槻磐溪の跋あり。

◎澤田一齋は伊豫國吉田藩の人にして、義韋と稱す、父鶴山は森華山、紀平洲等に學び、儒學教訓に長に、かれて武技に妙なりきといふ。

くわくだういかうしよしふ　蘐堂遺稿初集　三卷　山田　政茜

著者蘐堂の詩集なり。七言古詩、律絕各一百首より成る。慶應三年丁卯(二八六七)川上弘の序あり。今井潛、佐藤保の同校出版するところなり。

◎山田政茜は米澤藩士なり。字を實茜と稱し蘐堂と號す。幼にして讀書を好まざりしが、某君の禁錮するところとなりて憤然學に從ふ。又詩を作ることを得ざりしも自ら洪親以下歷代諸名家集を取て誦唱し遂に悟るところあり、一機軸を出す。是れより文學を以て國校總監となり子弟を教ふ。安政年間五十九にて病歿す。

くわくばくわふ　鶴馬畫譜　一卷　狩野　守信

著者の百鶴百馬の墨畫譜なり。延寶二年甲寅(二六七四)五月の筆にかゝる。今見るところは明治十八年愛知縣人原棣吉の臨模版行せるものなり。

◎狩野守信は京都に生る。畫家狩野家中興の祖なり。幸信の長男にして、采女と稱し、剃髮して探幽齋また白蓮子と號し、宮內卿法印に敍せらる。幼にして畫を喜び、可翁、雪舟等の筆意を學び、遂に一機軸を出し、山水人物花鳥等最妙の域に入り、時人稱して畫仙となす。慶長十七年壬子(二六一二)十一歲にして、始めて德川家康に召され、元和七年鍛冶橋外に居宅を賜る。後に入稱して鍛冶橋狩野といへり。寬文二年壬寅(二六六二)京都に召されて太上天皇の御影を拜寫し、筆率大居士の印を賜り、法印に敍せられ、食邑を增加せらる。また仙洞侯伊達正宗の爲めに七尺の金屏風に。馬腦を以て畫きたることあり。探幽の一世其の技の秀逸なるより、遂に既衰の家業を中興せり。探幽は傍ら古畫の鑑定に通じ、書は高野山眷深に學びて大師流を善くし、茶は小堀宗甫に就て遠州流の點茶を善くし、また和歌の道にも通じたりといふ。延寶二年甲寅(二六七四)十月七日歿す。年七十三。

くわくまつき　掛網記　五卷　僧　持寬

淨土宗の徒支阿の「考原錄」の中に眞宗を誹毀せし箇處ありしに就き、持寬筑に「刊邪論」を著して返破せしかば、支阿復た「鼓間答」を作りて答辨せしに因り、更に斯書を著して彼れを彈駁したるなり。寬元天皇の眞草二年乙丑(二三四五)著者四十二歲の作に係る。著者持寬は眞宗の僧なれど其の傳記未だ詳ならず。

くわくめいぶんせう　鶴鳴文鈔　二卷　岡田　阜

著者の漢文集にして、男岡田本福、塾生井上充芳、加地高宅等の同校するところなり。寬政十二年庚申(二八〇〇)友人海保皐蘭の序、塾生井上充芳の跋あり。同年二册に版行す。

◎岡田阜は河內の儒者にして、水野氏の幕たりし士聞と字し、鶴鳴と號す。本書の外に「岡氏家訓」をも著せり。

くわくりやうぶんせう　鶴梁文鈔　十卷　林　長孺

著者鶴梁の文集。卷一に雜七章。卷二に書、傳、合て五章。卷三に論三、說四、序六。卷四に序九、紀事三。卷五に記十三。卷六に碑五、墓碣銘一、墓表一、墓誌銘一。卷七に雜著二十四編。卷八に附載一。卷九に同一。卷十に同一編を擧げたり。藤田東湖が「推倒一世之智勇開拓萬古之心胷」の題辭を附して明治十四年辛巳(二八八一)出版す。

◎林長孺は武藏國の人。通稱を伊太郎といひ鶴梁と號す。祖父以來德川氏武庫の吏たり。長孺一朝感ずる所ありて讀書に志し、長野豐山、松崎慊堂等に就きて古文、經史を研究し遂に其の名を著す。弘化二年甲辰の歲官に擢られ、嘉永六年遠州中泉の代官に任ぜられ、後羽州に徙る。後當局者と議論適ず遂に退居して優遊す。明治十一年(二八七八)一月十六日年七十三にて歿す。湯島池源泉寺に埋葬せり。

くわくろういへん　鶴樓遺編　三卷　益田　助

著者の詩文集なり。鶴樓は其の號、故に書名とす。中御門天皇の正德三年癸巳(一七一三)室鳩巢の序、及び同元年辛卯朝鮮國李礥が跋あり。

◎益田助は字を伯隣、通稱を助右衛門、號を鶴樓と云ふ。父祖以來貲藥を以て業とす。鶴樓は小にして學を好み新井白石に學び詩に於て高足とせらる。白石屢其の家に至り、樓上鶴を畫けるを見て鶴樓と題命す遂に之れを取りて號とす。平生客を好み宴を張りて樂むこと數十年一日の如し屢々として儒者の狀をなさゞる憾ある貲藥家に安んぜり。安永四年乙未(一七七五)十二月三日歿す。或は寶曆元年辛未(一七五一)六月三日死せりともいふ。

くわくわんふりやくせつ　火浣布略說　一卷　平賀　源內

石綿を以て火浣布を作る方法を主として記述したるものなり。明和元年甲申(一七六四)六月の自序中に「茲に一夜の旅寢を同じうし倦るに、伴ひ給ひし月や師と庭、風雅の蘊奧を論じて、更深るまで已まず。螢で之れを聞くに師說皆千載の確言にして、いと貴く覺えければ、後の忘を補はむ爲め、坐に臨を操て逐に一夜論とは名けぬ」と題命す遂に之れを取りて號とす。平生客を好み、別に雪月書堂、補拙廬等の號あり。家代々藩醫たり。源、幼より文學を好み、藩主の特命に依て儒員となる。是れより東都に出て古屋昔陽、岳東溟に從ひて經を修め、谷文晁に就て畫を學ぶ。後官を辭して天下に歷遊し、李梁溪、大城壺梁、村井琴山、賴山陽、篠崎小竹、小石樞園、華雲上人等と交遊し詩文書畫益進歩を以て傲遊す。就中書は山水人物花鳥に長じ明淸人の筆勢を凌ぐとて世に尊重せられたり。著す所に二項詩圖譜」あり。天保六年乙未(一八三五)八月二十五日大阪に病歿す、年五十九。

くわげつさうし　花月草紙　六卷　松平　定信

著者の和文隨筆なり。卷一は花の事、月の事等より志と智の事、軍の道等に至る二十八。卷二は、雨の事、中熱の事等より、甲冑の事、學問の事に至る十八。卷三は不炎の備、小松內府等より、觀相の論、降伏の敕額等に至る三十四。卷四に蟲の名、かつみ等より、老農の事に至る二十。卷五に西風、日新より、禍福、ある山里等に至る二十七。卷六に老鯉、ねざめの床等より、人の評、花月の遊等に至る二十九、凡て百五十六編より成る。

◎松平定信は白川の城主松平定邦の嗣たり。實は田安中納言宗武卿の子。天明三年其の封を襲ぎて越中守と稱し從四位下に敍せらる。同七年老中となり、侈從に任ぜらる。夙に學を好み兼ねて和歌及び書に巧なり。其の職にあるや貨を崇び能を用ひ、又、柴野栗山、賴春水、尾藤二洲、古賀精里、赤崎海門等を擢用して日夜治を講じ天に政績を樂ぐ。常に勤儉下を率ひ、內外の感化少からず。寬政五年左

くわげつ　花月雜筆　一册　田能村孝憲

幼學作詩本なり。各題淸人の例題を擧げて示す。名を"璞調圖譜"といふ。平仄字句填補を圖解せり。文化二年乙丑(一八〇五)の作。

◎田能村孝憲は有名の畫家竹田のことなり。略して竹田と稱す。

近衛少將に任ぜられ、文化九年致仕して樂翁と稱す。文政十二年己丑(一八二九)七十二にて卒す。

くわげつせんく

花月千句 一冊 **野々口立圃**

諸門人幸和、常知、仲昔、成次等との間に成れる俳諧千句にて、慶安二年己丑(一六四九)の版なり。近年發行の俳諧文庫第十四編「素堂蕉貫全集」の中にも收む。

◎野々口立圃の傳は「なさな源氏」の下にあり。

くわげつはいかい

花月俳諧 二冊 **野々口立圃**

俳諧の集。門人等の千句なり。慶安二年己丑(一六四九)の編輯にかゝる。

◎野々口立圃の傳記は「なさな源氏」の下にあり。

くわげつひとりあんない

花月獨案内 一卷 **秋里 籬島**

都名所の外にて花月に著名なる地名、及び故事等を記したるもの。花、月、丹楓、梅、桃、款冬、蕨、燕子花、薄、荻、松、石、瀧、清水、郭公、鶉、水鳥、鹿、蛍、蟲、河鹿等の二十一目に分ちて簡明に說示せる小册子なり。寛政五年癸丑(一七九三)刊行す。

◎秋里籬島の傳記は「近江名所圖會」の下にあり。

ぐわこうせんらん

畫巧潛覽 六卷 **狩野 雪齋**

卷一に狩野家系圖、年畫位階、洛中洛外名畫、小圖地取。卷二に十體畫法、人物表文、百馬百鵞圖、探幽畫粉本、花鳥山水。卷四に探幽寫粉本、和漢人物。卷五に和漢地紋集、並に朱印色方、古畫改口流。卷六に近世畫印譜、門生名目等を掲く。元文五年庚申(一七四〇)岡白駒の序あり。同年梓行せらる。

くわさいざつき

火災雜記 本一冊

明暦二年丙申(一六五六)江戸火災記、同三年戊戌(一六五八)火災記、同二年、同五年、同六年、同八年、同九年、同十年の火災記、及び、明和九年壬辰元年辛丑(一七七二)江戸大火記、三宅侖政の江戸火災記、野尻三位のやけ野の日記等を集めたるものなり。

くわざんきよさう

和山居草 一卷 **鳥山 輔寛**

明廣陵醫師の山居の三十詠を載み、和韻したる三十詠なり。更に瑞芝軒八詠、香雪亭六詠、菅公詞八詠、彦山遠眺八詠等を加ふ。天和三年(一六八三)の自序あり。

◎鳥山輔寛の傳記は「芝軒吟稿」の下にあり。

くわざんのるたいきやうき

花山院大饗記 本一卷

文治五年己酉(一一八九)花山院兼雅の大饗の時の記なり。雜具、役者其の他等を詳しく記せり。

くわざんのるんのひでん

花山院之祕傳 本一卷

病馬療治の藥方を詳說したる傳書なり。「弓馬叢集」の中に收む。

くわじし

課兒詩 一卷 **藤森 大雅**

唐詩一百首を選鈔して、略詳釋を加へ、作法典故を明らかにして、子弟研究に充てたるものなり。明治十七年弟子川田剛の序を附し、依田百川校刻す。

◎藤森大雅の傳記は「如不及齋文鈔」の下にあり。

くわしたいぜん

菓子大全 二卷

菓子の形狀製法を圖說したるものなり。上卷に洛陽風雅亭主人の撰みたる「御前菓子圖式」を掲げ、下卷に雜種一百餘種を載す。天保十一年庚子(一八四〇)刊本するところの小册子なり。

くわじつさしなみぐさきんよせう

華實年浪草三餘抄 十五卷

鵜川 龐文

俳諧の材料を集め季節的に排列して博く掌故を尋ね、廻く書記を徴りて考說したるものなり。天明元年辛丑(一七八一)十二月の自序中に「前略其の季節の品に渉りては牡丹を夏とし、西瓜を秋とするの境、其の理なきにあらず。故に世々の先輩、季節を分てる書數げて數ふべからず。然りと雖も、彼に譲り、此れに昔さて未だ全きものあることなし。予不敏なりと雖も、其の掛けたるを歎き之れを補はんと思ふ事久し、仕官のいとまなきものから、日の餘に考へ、月の餘に撰び、年の餘に記して一年十二

月に分ち、其のうち上下となすものありてすべて十五卷、俳諧三餘抄と名づく云々」とあり。然るを獨り俳諧の料とのみ限らんより、普通人の材用にもといふ意より華實年浪草と改題したる由見ゆ。

くわじやうしふ

花上集 本一卷

老僧二十家の詩各十首宛二百首を編輯したるものなり。袁宏、絕海、太白、惟肖、謙岩、惟肖、鄧隱、西胤、江西、心田、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、南江、中恕、仲芳、玉畹、東沼、村庵等なり。半陶子の序あり。

くわしよのくものがたり

華胥國物語 一卷 **中井 積德**

著者の夢物語なり。華胥國南珂郡等の圓滿善政國の景況を夢るまゝに寫し出でたる和文なり。明治十九年丙戌(一八八六)新に版行す。

◎中井積德は「七經雕題略」の下に傳す。

くわしわふなばし

菓子話船橋 一卷 **船橋屋主人**

菓子の製法を記したるもの。砂糖の煎法より餡の製法、饅頭各種、羊羹類、脊類、干菓子、打物等凡そ八十種の製法を記載す。天保十一年庚子(一八四〇)刊行の小册子なり。著者船橋屋主人は江戸深川の菓子商にして織江と稱す。

くわするふうさいざつしふ

火水風災雜輯 一卷

幕府時代に於ける水火、風災等に關して、其の時に發行したる讀賣物を取り集めて雜輯したるもの也

くわせつひかん

花說祕鑑 本十卷 **聽風亭遊山**

井伊掃部頭殿物語之事、有馬中務大輔殿少將に任ぜらるゝ事、附り支藩頭殿嘗の事、等以下十數項より成る史談雜記なり。安永五年丙申(一七七六)七月の著にかゝる。

ぐわせん

畫筌 六卷 **林 守篤**

首卷に序、凡例、目錄。卷一に畫具製法、畫法口訣。卷二に山水、水、草木、竹、岩、降枝。卷三に禽鳥、獸類、魚類、貝蟲。卷四に聖賢、仙人、武將、騷逸、詩客、浮屠。卷五に七福神、和歌三神、五歌仙、歌人、源氏藏、相撲、衣冠、器物。卷六に紙、絹、翼、硯、諸具製法、表具定式等凡て畫學の諸法諸注意を記す。正德二年壬辰(一七一二)著、享保六年辛丑(一七二一)の出版なり。

ぐわせんづろく

畫錢圖錄 一卷 **僧 慈海**

我が國古來の畫錢を圖錄したるもの。其の數大小凡て百八十五種あり。末に「庚申晩冬刊」とあり。

◎慈海は江戸上野東叡山凌雲院の僧なり。其の傳を詳にせざれど、其の著は本書の外に、訓點譜經、及び諸陀羅尼等の出版あり。元祿九年丙子(一六九六)十一月十六日入寂す。

くわせんはうぎよく

火箭放玉 本一卷 **伴 資友**

砲術の傳書。最初鐵砲の得失論より、野戰攻守船軍之用概、鐵砲雜記目錄、船軍、火器利方、城攻籠城等に分ち、其の細目を擧ぐ。寛文十年庚戌(一六七〇)の傳なり。著者伴資友は筑前福岡の人にして、加右衛門尉と稱す。

くわたういつけん

過當一件 本一册

安政二年乙卯(一八五五)及び同三年の法政書類にて、幕府評定所より引續きて內閣文庫にあり。

ぐわたうへいわ

臥掃兵話 二卷 **積水陳人**

卷の上の總論に和漢の兵法得失を論ず。洋兵談に三兵合して一陣を作る法、三兵の輕重並に任務開鉄砲射法、三兵併合レシダルコルフス隊の圖並に解等を詳說し、卷の下レーゲルコルフス中區分戰法に、步兵陣法、騎兵陣法、砲兵陣法等を細論せり。文久二年壬戌(一八六二)の自序あり。著者積水陳人は但馬國の人なり。

くわだんあさがほつう

花壇朝顏通 二卷 **壺天堂主人**

朝顏の種類を列擧し其の性質を述べ栽培法を記したるものなり。文化十二年乙亥(一八一五)の著。

くわだんかうもく

花壇綱目 三卷 **水野 元勝**

四季花草植の種植の時季、及び培養の方法等を記し、更に牡丹、芍藥、菊、椿等の異名をも掲げたり。

享保元年丙申(一三七六)の著たり。

くわだんせう

花壇抄 一卷 屋代 通賢

本書は一名「通賢花壇抄」といふ題下に解題せり。

くわだんもきんせう

花壇地錦抄 六卷 伊藤伊兵衛

草木の下植栽培等を詳述したるものなり。元祿七年甲戌(一三五四)著す。

◎伊藤伊兵衛の傳記は「廣益地錦抄」の下にあり。

くわだんやうきくしふ

花壇養菊集 三卷 志水 閑事

菊の培養を主として其の他の事を細叙したるものなり。正德四年甲午(一三七四)著、翌年出版す。著者志水閑事は京師の人なり。

くわちやうざんだいはふまつ

華頂山大法會圖 一卷

華頂山は京都智恩院の山號なり。同境内に宗祖圓光大師の廟あり。寶曆十一年辛巳(一四二一)正月、大師の五百五十年忌にあたり、大法會を執行したる行列規式等を圖繪したるものなり、故に本書は一名「圓光大師五百五十年御忌圖錄」とも稱せり。寶曆十一年正月、京師に版行したるものなり。

くわつえうさんぱふ

括要算法 四卷 關 孝和

元卷に垜積總術並演段、垜積術、衰垜術。亨卷に五約、遍約、增約、損約、零約、遍通、剩管の諸術。利卷に角法演段。貞卷に求圓周率環矩術、求弧矢弦率術、求立玉積率術等を論證す。荒木村英校閱し、大高由昌校行す。寶永六年己丑(一三六九)大高由昌、圓張の序、荒木村英の跋等あり。正德二年壬辰(一三七二)二冊に出版す。

◎關孝和の傳記は「大成算經」の下にあり。

くわつかくわつぱふくわつりせう

活語活法活理抄 四卷 大國 隆正

動詞動助詞の變化のことを論述したるものなり。第一卷に總論。第二卷に枝詞葉詞等の事。第三卷に本行の詞の對格其の他中間のはたらき等。第四卷に用言一貫圖其の他等を掲げたり。

◎大國隆正の傳は「學統論」の下にあり。

くわつごさうわ

活語雜話 一卷 僧 義門

國語活用に關する法例を說示せるもの。一自他の詞の事二なれる計を女郎花、三給はせる、給はせの詞の事二なれる計を女郎花、三給はせる、給はせる、四いたれるの區別等より、二十九古と今と活きざま異る詞ども、三十すまる、ずぶる等の辨に至る凡て三十箇條を記す。天保九年戊戌(一四九八)四月二十三日の撰にかゝる。翌十年刊行す。

◎義門の傳記は「活語指南」の下を見るべし。

くわつごじたせふらん

活語自他提覽 一帖 橫山 由清

動詞の自他につきて、說明したるものにて、享和三年癸亥(一八〇三)の著なり。

くわつごしきなん

活語指南 二卷 僧 義門

「詞の八衢」により我が國語の將然言、連用言、已然言、希求言に分ち、更に活語名詞等の區別を說き、遂に動詞助辭に至るまで詳しく說明したるもの。著者の稿を平井重民の補成したるものなり。天保十一年庚子(一五〇〇)の著。同十二年平井重民の序、新井守村の跋あり。同十五年出版

◎義門は名狹國妙玄寺の住職なり。言語の學に明にして、其の著、山口栞、活語指南、活語雜話、奈末之栞、詞栞雅俗言、和語說略圖、そしての礎、礎のすさき、友鏡、同底遡影、活語餘論、玉の緒くりわけ、於乎輕重義、月草等あり。

くわつごしんろん

活語新論 一卷 井上 淑蔭

我が言語の活用法を論述したるもの。文久三年癸亥(一八六三)奚疑塾同翁の序、同年柯堂文雄の序等あり。慶應二年丙寅(一八六六)六月出版す。

◎井上淑蔭の傳記は「神兵稜威考」の下にあり。

くわつごせふけいへうしき

活語提徑標機 一卷 八木 立禮

五十音圖に基きて、活用語の活用法を說明したるものなり。

◎八木立禮のことは「歌文撰要」の下にあり。

くわつごたいせいづ

活語大成圖 一卷 落合 直澄

「辭玉襷」により、活語の次第を圖示したるものなり。文久二年壬戌(一八六二)十月出版す。

◎落合直澄は武藏國多摩郡駒場野驛の人なり。夙に漢學詩文を修め、また國學を堀秀成に學び、和漢の學共に通ぜり。著書頗る多し。列舉すれば、古事記後傳、同別傳、古事記講錄、開闢本紀考、上古物語、新三大考、開闢古說辨三大考、後說辨三元生成圖、太古史年曆考、上古紀年、八書比較、古代文字考、教義要典、忠義護國編、儒教正見、汚穢起元考、假名起元考、究理根原、音義研究編、訓點問答、武烈天皇記、考論語千字文貢進時代考、知道要言、古事考證、日本神字考辨妄、同文考、上古年代問答、辨古今集講義、語學系統問答、詞考筆錄、言語成立轉語規則、要語考證、語格大成圖、同附錄、詞考妄說辨、帝國紀年私案、同駁論辨、太古紀年考等なり。明治二年神祇官宣教權少博士に任ぜられ、贈從五位を歷て大教正となり、明治二十四雲大社少宮司等を歷て、明治二十四年辛卯(一八九一)一月六日五十二にて歿せり。

くわつごだんぞくふ

活語斷續譜 一卷 鈴木 朖

活用言の斷續、連用言、截斷言、連體言等の事を譜表したるものにて、享和三年癸亥(一八〇三)の著にかゝる。

◎鈴木朖の傳は「源氏物語玉小櫛補遺」の下にあり。

くわつごづせつ

活語圖說 一帖 井上 淑蔭

活用詞を圖表して、てにをはのとゝのへ等の事をも說明したるものなり。

◎井上淑蔭の傳は「神兵稜威考」の下にあり。

くわつごはつのしをり

活語初の栞 一卷 長野 義言

我が言語の活用法を詳述せる文典なり。巽元の序、弘化二年乙巳(一八四五)八月伊勢の人瀧野知雄の跋あり。嘉永三年庚戌(一八五〇)出版す。

◎長野義言の傳記は「玉の緒末分櫛」の下にあり。

くわつごよろん

活語餘論 本卷三卷 僧 義門

活語、假名遣、眞、言語の事等數十條を雜考したるものなり。活語のみの事にはあらず。自序あり、第一卷は天保十三年壬寅(一八四二)に成れり。

◎義門の傳は「活語指南」の下にあり。

ぐわつさいゆうだん

畫圖西遊譚 五卷 司馬 江漢

東海道以西長崎に至る旅中物語なり。天明八年戊申(一七八八)江戸を出でて長崎に遊びたることあり。本書は其の經過したるところの名所、奇景、風俗、物產等を詳に圖說せり。書中に圖するところ百三十三處あり。天保八年丁酉(一八三七)に刊行す。一名を「西遊旅譚」といふ。

◎司馬江漢は江戸の人にして畫を善くす。名を俊、字を君岳といひ春波樓、不言道人等の號あり。また桃冒、無言、西洋道人等の別號あり。晚年長崎に至りて蘭學を修め、又銅版の創製な試みて世に用ひられたりと。本書の外に、紅夷俗語二卷、和蘭陀通舶二卷等の著あり。

くわつごしよいかう

活所遺稿 十卷 那波 道圓

著者活所の詩文集。男祐生未庵守之の編輯するところなり。卷一に五言詩、卷二より卷六に至る七言詩。卷七に文、賦、書、記。卷八に文、辨、論、說、敍。卷九、卷十に雜文、銘、贊、褒詠等を收む。寬文六年丙午(一六六六)梓行す。

◎那波道圓は播磨姫路の人にして紀州藩の儒員となる。館と名け、活所と號す。京師に出でて惺窩の門に學び業成りて元和元年乙卯〔一六一五〕德川家康に侍講す。年四十一に及び寛永十一年紀州侯に仕へ祿五百石を食む。著すところ人君明暗圖說、通俗四書註音考、活所備忘錄、老圃集、帝王曆數圖及び活所遺稿等あり。正保五年戊子〔一六四八〕正月三日、五十四歲にて病死す。

くわつしよかう　活所藁　和一卷　那波　道圓

著者の詩文集なり。最初寛永十九年壬午〔一六四二〕の作、書退藏稿後より、以下最近合せて二百餘編あり。

◎那波道圓の傳記は「活所遺稿」の下にあり。

くわつぱふきはう　活法機方　和一卷　香月　啓益

人參敗毒散、附り交加散、平血飮、芎藭散、荊防敗毒散、參蘇飮、附り芎蘇散、葀苓、補心湯等以下數百項、悉く藥種處方の說明なり。正德二年壬辰〔一七一二〕の自序あり。

◎香月啓益の傳記は「牛山活套」の下にあり。

くわつぱんけいせきかう　活版經籍考　和一卷　吉田　漢官

我が邦活字版の起原を論じ併せて足利本の事等を記す。天明八年戊申〔一七八八〕の著なり。「漢書解題集成」の中に入れて近年出版したるもあり。

◎吉田漢官の傳記は「論語集解攷異」の下にあり。

くわつぱんぶぶくへんねんしふせいびかう　活版武德編年集成備考　和三十一卷　田丸　直職

活版の「武德編年集成」〔德川氏の記錄〕に增訂參考したるものなり。男直純の校正にかゝり、享和三年癸亥〔一八〇三〕石賀正信三十一卷を一冊に寫傳す。

くわていきだん　過庭紀談　五卷　原　瑜

著者の文學的考證的の雜著なり。卷一に詩賦を作る整齣と唐韻に通ずるにより、王者の正朔を改らゝ、郊亥が譯說に至る廿五項。卷二に文字より、文翰詩書迄に印章を押す法に至る四十一項。卷三に復姓を單姓にする譯より、夫婦を合葬する題署に至る十條。卷四に諸侯世子の墓碣題署の法、並に君公二字の辨より、碑誌銘を天下の文人に求む孝子の心に至る十九條。卷五に葬師風水の說より、神牌題署の法に至る十一條。凡て一百〇八條を輯收す。明和五年戊子〔一七六八〕の作。天保五年甲午〔一八三四〕新刊したるものなり。

◎原瑜は字を公瑨といひ備後福山の儒官なり。天保三年戊戌〔一八三七〕三條街に生れ、幼にして頴悟。少にして伊藤東涯に學び熟中に頭角を現す。醫を學び其の名又四方に聞ゆ。後江戶に出でて鏑殼町に住し明和四年丁亥〔一七六七〕九月五十歲にて病歿す。著す所、非朱詰物疑藤、洙泗微纂、四書指斥、三家規榘、闕明洙泗、桂館野乘、桂館詩軌、桂館文集、雙桂集、偽樂私斷、溫泉考、桂館隨筆、辨談錄、轉音析義、漢津六帖、過庭紀談、同拾遺等あり。

くわてうせんく　花鳥千句　一册　佐々木定行

著者の花鳥を詠ぜる俳諧千句なり。野々口立圃の追加判あり。編輯の年月は詳ならず。著者佐々木定行は俳人にして、玄兵衞と稱す。

くわてうへん　花鳥編　一册　谷口　蕪村

著者の門を叩きたる人々の花樹の賢句と、宗因及び同門の賢句連句を集めたるものとを合併す。天明二年壬寅〔一七八二〕の編なり。近年賢行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

くわてうよじやう　花鳥餘情　本文二十卷　一條　兼良

源氏物語の註釋書なり。著者は主として「河海抄」〔四辻善成作〕の誤謬を是正し、不足を補訂したる由をいへり。自序に曰く、「我が朝の至寶は源氏物語に過ぎたるはなかるべし。之によりて世々のもてあそびものになりて、花鳥の情をあらはし、家々の注釋まち〳〵にして、雲盤の功を積むと雖も、なにがしのをとゝの河海抄は、古今を考へて深き淺きを分てり。最も折中の旨に適ひて指南の道を得たり。然はあれど、罪の海にすなどりて、あみをもれたる魚をしり、嗣の林にまよふしてくいぜをまもる兎にあへり。殘れるを拾ひ、誤れるを改むる先達の業にそむかざれば、後生の罪、何ぞ從はざらんや、

終に愚眼の及ぶところを筆舌に述べて、花鳥餘情と名づくるのことしかなり」と。文明四年壬辰〔一四七二〕除月上澣桃華居士七十一歲にて記す由卷末に記されたり。桃華居士は著者の別號なり。

◎一條兼良の傳記は「歌林良材集」の下にあり。

くわてうよじやういほん　花鳥餘情異本　和廿卷　一條　兼良

花鳥餘情と多少の異同あり。「明星抄」には、「花鳥餘情に兩本あり、一は筑紫より所望申し、一本は美濃歟、故に兩本相違の事有り」云々とあり。

◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

くわでうるゐてん　科條類典　和七卷

今見るところは「科條類典」の下卷にして、寛保以下明和頃に至る幕府の法政書類を輯集す。附錄一册を添へ七卷九册に作る。

くわでんせう　花傳抄　四卷

舞能謠曲の由來及び其の作法に關する口傳を記したるもの。五調子の次第、十二天の調子、五音相通の事等を始めとして謠、調子、鼓、能、物眞似、囃等の故實、稽古等種々の事を網羅輯錄せり。題號の意は書中に「此世界にありとあらゆるもの、中に花にましたるおもしろく見ごとなるものはなし。又色々のおもしろきあそび曲には能にこしたる事はなし。されば能をなしへならひ大事なつたふる所は、はなを傳ふるなりとて花傳書とこれをかいたり。能の極意、この傳書に殘る事はなし」と云へるにて知らるゝなり。

ぐわてんつうかう　畫典通考　十卷

古來の史話選說故事譚等を集錄したるもの。五調子の次第、十二天の調子、五音相通の事等を始めとして謠、調子、鼓、能、物眞似、囃等の故實、稽古等種々の事を網羅輯錄せり。題號の意は書中に「此世界にありとあらゆるもの、中に花にましたるおもしろく見ごとなるものはなし。又色々のおもしろきあそび曲には能にこしたる事はなし。されば能をなしへならひ大事なつたふる所は、はなを傳ふるなりとて花傳書とこれをかいたり。能の極意、この傳書に殘る事はなし」と云へるにて知らるゝなり。

**く

漫遊文草、旭山文集等あり。寛政三年辛亥(一四五一)正月十五日五十九にて歿す。

くわやうぶんしふ　華陽文集　十巻　山根　清

著者華陽の稿。巻一より巻五に至る詩。巻六より巻十に至る文を收む。明和六年己丑(一四二九)春瀧長愷の序。栗山叢庵の跋あり。附録二巻あり別に解題す。

◎山根清は周防國華浦の人なり。字は子澄、華陽と號す。山縣周南に學び、業成りて萩府の書記となり、又門生を集めて教授せり。明和八年辛卯(一四三一)十二月二十八日、七十八にて卒す。

くわやうぶんしふろく　華陽文集附録　二巻　山根　道晉

著者の遺稿を編輯發行したるものなり。古詩律詩絕句等若干首を載せたり。明和六年己丑(一四二九)吉田文猷の序を附し、父の「華陽文集」十巻に附録として刻せらる。

◎山根道晉は山根清の嫡子なり。字を世祿といひ龍山と號し、後濟洲と改む。山縣孝孺に就て儒を修め、後、仕へて長州藩の都講となる。

くわらくきかう　花洛紀行　冊一巻　島田　則祐

寛保十一年辛巳(一四二一)三月伊勢より京に至り、洛の中外を歷覽したる時の詩歌を集錄す。詩二十首、歌百十八首を收めたり。

◎島田則祐は伊勢の人なり。本書の外に「日光紀行」をも著せり。

くわらくさいけんづ　花洛細見圖　十五帖

京都の風俗、社寺の模樣、名所旧蹟、相撲戲場、花街の體までを圖して簡短なる標註あり。其の第十帖に朝鮮來聘使通行の圖、及び曲馬の圖等を載せたるを見れば、天和二年壬戌(一三四二)七月、朝鮮使來聘以後の作なること知るべし。繪圖は拙劣なれど、風俗の一班は窺ふに足るべし。書肆の手に版行せられたるものなるべし。

くわらくじしやぜんづ　花洛寺社全圖　四帖

「花洛細見圖」十五帖中より、社寺を抄出して、「細見圖」の表題を「寺社全圖」と改めたるものなり。序文も細見圖より剽竊して、享保十五年庚戌(一三三〇)發行す。書林商利の爲に作りたるものならむ。

くわらくろくひやくゑん　花洛六百韻　一札　自悅

自悅、友靜、千春の俳諧六百韻なり。延寶八年庚申(一二四〇)霜月中旬の編にかゝる。

◎自悅のことは「空林風葉」の下にあり。

くわりうぜんしよ　驊騮全書　七巻

騎馬法、療馬術、及び馬具故實等を記述したるものなり。寛永六年己巳(一二八九)の序、二冊に作る。著者住友貞政は通稱を勝兵衛と云ふ。

ぐわりうざんこまのしろやまきうき　臥龍山駒野城山舊記　冊一巻

美濃國石津郡上野河戸村なりし臥龍山菩提寺の沿革を記し、附錄に駒野村城山の事を記せり。寺は聖武天皇の時の創建にして、幾多の變遷あり。寛永十七年庚辰(一三〇〇)小笠原土佐守貞信が舊蹟を再興したるもの。城は天文年中高木彦左衛門と云ふもの、築きたりしものなりと云ふ。

ぐわれきさつかう　瓦礫雜考　二巻　喜多村信節

見聞古今の雜事を說明考證したるものなり。例せば千字文の傳來、いろはの由來、京の字の附加等より、以下數十項、圖畫をも插入して說示せり。文化十四年丁丑(一四七七)の作、翌十五年戊寅出版す。

◎喜多村信節の傳は「萬葉集折木四考」の下にあり

くわんゐん　官位訓　四巻　三宅　環翠

我が邦官職の故實を俗解易解して童蒙婦女にまで辨じ易からしめたるものなり。享保十一年丙午(一三八六)の自序あり。

◎三宅環翠の傳記は「官職備考」の下にあり。

くわんゐつうかう　冠位通考　二巻　石原　正明

古來の位階を、假名文にて說明考證したるものなり。卷末に、文化二年(一四六五)七月二十三日これを注する由自らの奥書あり。

◎石原正明の傳記は「壬戌隨筆」の下にあり。

くわんゐふしんもんだふ　官位不審問答　冊一巻　三條西實隆

古來の官位につきて、不審の條々數十箇條を、或人の問に從つて答へたるものなり。明應二年癸丑(一一五三)禮閣御記の中より拔書して傳ふる由の奥書あり。

◎三條西實隆の傳記は「石職問答」の下にあり。

くわんゐりやう　官位令　冊三巻　藤原　冬良

當代の官位職員令等を編輯せるもの。著者總裁して數人の下僚と共に成就したるなり。

◎藤原冬良は葉室の第二子なり。父の後を繼ぎて太政大臣從一位關白氏長者となる。少より文學を好み又朝典に明かなり。"世諺問答"を著す。永正十一年甲戌(一二七四)五十一にて薨ず。諡して後妙華寺と號す。

くわんいんふ　官印譜　冊一巻

天皇の玉璽を始め太政官印其の他古代の印影四十六種を模したる印譜なり。

くわんゑいおかみおきのき　寛永御髮置之記　冊一巻

寛永二十年癸未(一二三〇)正月十一日德川四代將軍家綱が髮置の事を記したるものなり。

くわんゑいかふゆつごにふらくき　寛永甲戌御入洛記　林　道春

寛永十一年甲戌(一二九四)七月、德川三代將軍家光入京參內の時の記なり。漢文にて記す。旨命を受けて記せりといふ。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

くわんゑいき　寛永記　冊一巻

寛永十九年壬午(一三〇二)德川四代將軍歿有院家綱が誕生、宮參り行列等を記したるものなり。

くわんゑいぎやうかうき　寛永行幸記　三巻　僧　崇傳

後水尾天皇の寛永三年丙寅(一二八六)二條城へ行幸遊ばされたる時の記並に圖なり。諸大名普請

禁中御留守居の事、供奉女房の事、行列の次第、座敷飾圖等の事、將軍家進物目錄其の他等を記す。本書は寛永の刻本を元祿六年癸酉(一六九三)等に重刻したるものなり。別出「御行幸次第」「御行幸之記」等と同じ性質のものたり。著者崇傳は南禪寺に住し、敕賜號を圓照本光國師といふ。

くわんゑいくねんえどゑづ　寛永九年江戸繪圖　冊一舖

東は淺草川を限り、西は麴町の門を限り、南は芝增上寺を限り、北は後の神田川を限る。題して「武州豐島郡江戸庄圖」といふ。寛永九年は紀元二千二百九十三年にあたる。

くわんゑいくねんはいりやうき　寛永九年拜領記　冊一巻

寛永九年壬申(一二九二)德川二代將軍台德院秀忠より、三代大猷院家光及び三家、諸侯、並に小祿者へまでの遺金遺物を記したるものなり。

くわんゑいこうぶんぜんしふ　寛永公文前集　冊十巻

寛永年間に於ける國家の大事、及び吉利支丹渡來始末等に關する公文を集錄したるものなり。

くわんゑいごじやうらくだうちうそんゑい　寛永御上洛道中尊詠　冊一册　德川　家光

寛永十一年甲戌(一三九四)德川三代將軍大猷院家光が上洛の時の詠。六月二十日より七月十八日ま

での分二十七首を集め、供奉近侍の者編輯して端書を加へたるものなり。

◎徳川家光の傳は「家光卿記」の下にあり。

くわんゑいごそくゐき

寛永御即位記 巻一巻 林 道春

寛永六年己巳(一二八九)後水尾帝御位を第一の皇女興子〔後に明正天皇と申す〕に譲らせ給ひしより、同七年御即位の式を行せらるゝまでの詳細を記録したるものなり。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

くわんゑいしよかけいふでん

寛永諸家系譜傳 巻百八十六巻 林 道春

諸家の世系を類別して松平氏、清和源氏、平氏、藤原氏、諸氏の五類とし、末に譜者、同朋、茶道の三類を添へ各其の傳諸を審にしたるもの。其の示綸中に曰く「其の官祿を記す時は先祖の勤功に依て當時の恩寵を加ふる事を忘れ、其の父祖を序づる時は爭か所生を思ふ心なからんや。然れば忠孝の道畢て皆茲にあり。前代の事作と云ども何ぞ是れに優る事あらんや。實に是れ天下太平の時久しくして國家治安の政盛なるしるしなり云々」と。日下寛氏曾て本書を概評して「但諸家の墨譜、均しく詳略あり、原文に據りて之れを起草し、繁簡未だ必しも當を得ず、事も亦深く究めざるものあり。是れを以て瑕瑜互見、得失相參す。然れども數百年諸家の世系履歴を總括し、信を後世に裘する功、之れを姓氏錄、譜牒分脈に視るに、遥に其の下にあらんや。

くわんゑいしよかけいふでん

寛永諸家系譜傳 巻百八十六巻 林 道春

諸家の世系を類別して松平氏、清和源氏、平氏、藤原氏、諸氏の五類とし、末に譜者、同朋、茶道の三類を添へ各其の傳諸を審にしたるもの。其の示綸中に曰く「其の官祿を記す時は先祖の勤功に依て當時の恩寵を加ふる事を忘れ、其の父祖を序づる時は爭か所生を思ふ心なからんや。然れば忠孝の道畢て皆茲にあり。前代の事作と云ども何ぞ是れに優る事あらんや。實に是れ天下太平の時久しくして國家治安の政盛なるしるしなり云々」と。日下寛氏曾て本書を概評して「但諸家の墨譜、均しく詳略あり、原文に據りて之れを起草し、繁簡未だ必しも當を得ず、事も亦深く究めざるものあり。是れを以て瑕瑜互見、得失相參す。然れども數百年諸家の世系履歴を總括し、信を後世に裘する功、之れを姓氏錄、譜牒分脈に視るに、遥に其の下にあらんや。

著者の體裁なり。其の目を擧ぐれば漆書古文、石經、隸、楷字、方寸地、執籌事、朽木不可雕、行年、臆同、火輪車船、八份、了字、報仲良、孫思邈、天狗、麒生、清平調詞、官家、書簡、陳子昂、李杜、放勳、白賓、鹿吹、抱朴子、丘濬論誤、僞書、尚圭、談唐、日本、嚴夫子等なり。談文無點にて版す。萬延二年辛酉(一八六一)の自序あり、同年出版す。

◎山田重春のことは「雨蔵叢話」の下にあり。

くわんゑんきだん

寛延奇談 巻七巻

寛保、延享間の雑事奇談を輯錄す。西本願寺隠居並に悪僧御仕置の事、寛保四子年出現星並に年號改元の事等より、延享四卯年外櫻田屋敷々々焼失に付落首の事、新吉原遊女屋上と浪人原田評太夫心中に付落首の事等に至る數十項あり。七巻四册に寫傳す。

くわんえんせんしゆ

寛延千首 巻一巻

寛延元年戊辰(一七四八)二月、内侍所の御法樂千首なり。櫻町院、家仁親王、尚實、公雄、光胤、光綱、宗家、爲村等三十六人の詠にかゝる。

くわんおんゐんこうれいけちえんくわんちやうき

観音院恒例結縁灌頂記 巻一巻

安徳天皇の諱永元年壬寅(一八四二)十二月十四日に於ける観音院恒例結縁灌頂會の記事なること書名の示すが如し。「續群書類從」巻七百五十七釋家部第四十二に收めたり。

くわんおんかうしき

観音講式 巻一巻 僧 明惠

第一手觀音を讃し、同名號利益を明示し、同發願廻向を示したるものなり。

◎明惠の傳記は「高雄讃嘆式」の下に出たり。

くわんおんきやうべつでん

観音經別傳 一巻 小池 貞景

著者の佛學は卽心卽佛を根據として、木佛金佛は勿論、彌陀佛をも賴まざる卽ち卽佛を說けるにより、其の主義に基さて、普門品第二十五、觀世音菩薩の利益を略述したるもの。村野宿の序あり。著者の背て作りたる「三敎眼目答書」に就さて然らば、觀世音の利益はと人の問ひたるに答ふるため作りたるなり。一名を「普門品別傳」ともいふ。

◎小池貞景は上野の人にて、平田篤胤翁の門に入り、著述數十部あり。當藤國河内郡古渡村に住す。明治二年己巳(一八六九)大學少助教に任ぜられ、後、大原野櫟宮司中講義と成り、其の後土佐國高知に歿せり。年七十餘歳。

くわんおんさんげんき

観音菩薩玄記 一巻 僧 鳳潭

観音菩薩に關して、その名稱の意義、諸像儀義の同異、南天竺補怛洛迦山の観音道場、支那明州の寶陀寺、木邦紹州那智山の観音靈場、十一面観音菩薩、聖観音尊、不空羂索尊、葉衣観音、馬頭明王尊等の事を詳述して、圖像及び印呪の圖を多く掲げたる書なり。巻御門天皇の享保九年甲辰(一七二四)の作。

◎鳳潭の傳は「因明入正理論疏瑞源記」の下に在り

くわんかいいぶん

環海異聞 巻十六巻 大槻 茂質

寛政五年癸丑(一七九三)の冬、仙臺の船子津太夫、儀平、左平太、太十郎の四人、奥州岩城の海上にて暴風に遇ひ、遂に魯西亞に漂着して、文化二年乙丑(一八〇五)まで彼地に居り、十二年を經て漸く歸りたる間の經歴を記したるものなり。彼等歸朝の際、陸奥侯より、大槻茂質、志村弘強の二臣に命じて、其の始末を聞書せられたるものなり。漂流記中の確實精細なるものなるべし。

◎大槻茂質の傳記は「蘭學階梯」の下にあり。

くわんかいしふ

観海集 五巻 松崎 惟時

著者觀海の遺稿。門人熊坂子彦の編輯するところなり。巻一に古詩、巻二に絶句、巻三、巻四、巻五に律を收む。本書はもと十二巻の稿にして六巻以下文を收めたりといふ。後桃園天皇の安永四年乙未(一七七五)湯淺元禎の序、明和九年壬辰(一七七二)熊坂子彦の序、光格天皇の天明三年癸卯(一七八三)宮田明の跋を附す。

◎松崎惟時は字を君修、又、子默といひ、觀海と號す。世々丹波篠山藩に仕ふ。東都に出でて太宰春臺に師事し、又高瑯亭に從ひて詩を學ぶ藩にありて政績著しく學海にありて經義詩文に長す。安永四年乙未(一七七五)十二月二十三日五十一歳にて病歿す。「觀海集」は其の歿後詩文を集めて門人等の發行するところなり。

くわんがくひつだん
觀樂筆談　本朝一卷　新井　君美

正德元年辛卯(一七一一)十一月三日、朝鮮の使者に將軍家より雅樂を賜ひたる時、座間に於て筆語したる相互の問答也。內閣文庫に特別書として藏す

◎新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

くわんかふいぐんろく
擬甲易便錄　一折　陵雪園主

初心者の爲めに甲冑着用次第を平易に圖說したるものなり。最初に山鹿素行の武具短歌を掲げたり。一小折本なり。

くわんかふづか
擬甲圖歌　一折　正木　兵馬

武具着用の次第を、常式の手順に從ひ、繪圖に寫し、更に洒落歌に作りて初心者の稽古に供へたるもの。例せば「一下着「下帶をしかと結びて具足した、常の衣を着るぞよろしき、二帶甲冑なきんと思はゝ前帶に、むすび餘りをはさみおくべし」等より、「十八草鞋」よく打ち」草鞋の紐は鰐野がけ、とけぬやうにぞ結びおくべきに至る。享和二年壬戌(一八〇二)五月の自序、丙午歲精淡叟の後序あり。著者正木兵馬は美作藩の人なり。

くわんかよだ
館暇餘唾　本一卷　林　恕

鷲峰の文集中の一にして、「中秋雨夜問答」三千六百二十六言の漢文なり。內閣文庫に特別書として所藏せり。

◎林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

くわんかんれいそく
看鑑蠡測　本二卷　古賀　煜

宋の司馬溫公の「資治通鑑」を讀みて、胡注の紕繆なる評正したるもの。其の值々二卷にして中絕したるは惜むべきなり。弘化二年乙巳(一八四五)の自序あり。

◎古賀煜の傳記は「延元襲編」の下にあり。

くわんきそんしき
歡喜天私記　本一卷

種子三形、形像、荷葉座印等の事、歡喜聖天供の次第、獻喜扇、請印の事、聖賢閣梨傳、諸眞言の事、其の他等を記せり。

くわんきぶかん
管窺武鑑　本九卷　夏目　定房

上杉謙信及び其の臣藤田能登守信吉、永井右近大夫直勝、夏目舍人助定吉等の事を記し併せて、武田氏、勿臣氏等の事を錄したり。

◎夏目定房は軍八と稱す。寛永十四年丁丑(時に年十一)より雄德山豐識坊に在りて業を孝伯法師に受け、年十五にして始めて永井尚政に仕へて軍功ありし人なれば、其の物語によりて本書を成せりといふ。

くわんきやうえうぎせう
觀經要義鈔　四卷　僧　月珠

淨土眞宗の宗義を以て「佛說觀無量壽經」を註解したるもの一にして、孝明天皇の嘉永三年庚戌(一八五〇)に上梓せられたり。この經の註解にして淨土眞宗に屬せるもの、本書の外に、慧空の叢林解三卷、日溪法燈の述要二卷、泰巖の大意一卷、慧雲の微笑記六卷、泰通院義敎の敎旨記四卷、彷圓大瀛の述義二卷等あり。

◎月珠は眞宗本願寺の僧にして、名は圓鏡、後覺了と改む、月珠は其の字なり。勿前國今津淨光寺圓然の嫡子にて、淨信院道隱及び父圓然に就て宗學を研究したり。文政十一年戊子(一八二八)本山に奉務し、專ら助敎に超進し、嘉永二年己酉(一八四九)司敎となり、同四年十月勸學職を命ぜらる。孝明天皇の安政三年丙辰(一八五六)十一月に病歿し、本山謚を賜うて善通院と曰へり。著書頗る多し。但、本書の外、淨土論圖釋二卷、本典對問記十卷、世に刊行し、大經纂賞、小經松江錄、易行品管見、論註箚錄、安樂集々解、玄義分集解、序分義集解、定善義集解、愚禿鈔信順錄、二門偈集義、行信義、三心釋私考等皆世に寫傳せり。

くわんぎやうえんどんせう
觀經厭欣鈔　三卷　僧　融舜

淨土宗西山派の宗義を以て「佛說觀無量壽經」を註解したるものなり。後柏原天皇の永正三年丙寅(一五一六)の作にして、東山天皇の貞永元年甲申(一七三四)に梓行せり。この經の註解にして同派に屬するもの、本書の外に、京都誓願寺超然の作なる「別行鈔」二卷あり。

◎融舜は淨土宗西山派の祖、證空上人の八世の弟子にして、京都東山禪林寺に住せしと云ふ。

くわんぎやうぶきだんせう
觀經直譚鈔　十卷　僧　源譽

淨土宗鎭西派の宗義を以て「佛說觀無量壽經」を註解したるものにして、後光明天皇の正保四年丁亥(一六四七)の梓行に係れり。著者源譽は淨土宗鎭西派の僧なり、譽法と字す。

くわんぎやうゆうしうせうかうろく
觀經妙宗鈔講錄　二卷　僧　光譯

天台宗の宗義を以て「佛說觀無量壽經」を註解せし宋四明知禮の「觀經妙宗鈔」を更に複註せしものなり。中御門天皇の享保十三年戊申(一七二八)の著作に係る。

◎光謙は天台宗の僧、字は靈空、筑前福岡の人なり。後光明天皇の承應元年壬辰(一六五二)に生る。寬文八年比叡山に登りて四敎三觀の妙義を研究し、延寶六年妙立和尚に從て梵網戒を受け、道聲倍倍高し。夫より諸處に轉住し、楞嚴楞伽梵網十不二門法華文句等、講演連環、歲に虛日なし。櫻町天皇の元文四年己未(一七三九)十月、壽八十八にて逝りぬ。その著す所本書の外、文句止觀講錄、戒疏集註、一枚起請旁觀記、台宗綱要、諫箴錄敎行權機等無慮六十三部あり。律寺を開創すること四十五箇所也。

くわんきよくげんぶんかう
觀旭軒文稿　三卷　木村　溫

著者の漢文集なり。各體數十編を收む。元治二年乙丑(一八六五)大須賀信章の序、岡儉齋、三上則義の跋等あり、同年三册に刊行す。

◎木村溫の傳記は「病餘百絕」の下にあり。

くわんくわいしよくきやう
卷懷食鏡　一卷

穀菜果蔬魚介等食品の氣味、主治、禁忌等を記し、併せて人體炎法をも附したる小册子なり。正德六年丙申(一七一六)出版す。

◎香月啓益の傳記は「宇山活套」の下にあり。

ぐわんくわめいぶつき
玩貨名物記　一卷　香月　啓益

點茶家所傳の古器目錄なり。後西院天皇の萬治三年庚子(一六六〇)の序あり。

くわんくわろくふろく
觀火錄附錄　本二卷

文化三年丙寅(一八〇六)九月、魯西亞船二艘、蝦夷地に來寇せる說に關する諸手續諸始末記を詳記したるものなり。今、見るところは外務省の寫本にかかる。乾坤二册に作れり。

ぐわんぐわんせう
願々鈔　一卷　僧　覺如

佛說無量壽經に說きたる阿彌陀佛四十八願の中、第十一、十二、十三、十七、十八の五願、及び願成就の文を擧げて、其の大旨を和述したるものなり。光明天皇の曆應三年庚辰(一三四〇)九月の著作に係り、一卷に收めらる。註釋には、昭儀坊了意の「願々鈔注解」三卷(元祿四年梓)あり。

くわんけんき
管見記　本十六卷　藤原　公衡

著者の日錄なり。「群書一覽」には五卷とせり。卷一元亨元年辛酉(一三二一)より延元元年まで敎元十

四度の部類を集め、以不行幸次第、其の地の記錄にて、卷十六、慶正二年丙子（二一一六）雜記にまで到る。佚失して全編は傳はらず。但し、正和以後の部は後人の追錄なるべし。

◎藤原公衡は西園寺太政大臣實衡の子にして竹林院と號す。累官して延慶二年庚子（一九〇九）三月左大臣となる。正和三年甲寅（一九一四）九月薨ず。

くわんげんごじやうのき
寛元御讓位記　一卷　葉室　定嗣

後嵯峨天皇の寛元四年丙午（一九〇六）正月二十二日位を皇太子久仁親王（後深草天皇）に讓り給ふ。本書は同御讓位の詳細を記錄したるものなり。「群書類從」卷九十六公事部第十八に收めたり。

◎葉室定嗣の傳は「葉黄記」の下にあり。

くわんげんさうじやうぎ
管絃相成義　二卷　僧　法住

眞言宗の教義を述べたる書にして、祕密因緣俱成門、三大本修即離門、一多事理俱密門、理智兩部顯現門、祕密一乘建立門、所被機根差別門、所行々位斷證門、所得五智四身門、說法主伴時處門、三國事教流傳門の十科を分ちて辨明せり。天明五年乙巳（一七八五）の作なり。

◎法住は眞言宗の學僧にして、中御門天皇の享保八年癸卯（一七二三）五月に生る。字は智幢、大和國の人なり。内山の快範、法隆寺の住山、豐山の無等等に歷事し、又三輪の戒月、華開の湛慧に大小乘を學び、宗風の開揚と根山の興復に力を致せり。光格天皇の寛政三年辛亥（一七九一）三月、豐山の化主に進み、同十二年庚申（一八〇〇）五月、權七十八にして卒したり。其の著す所本書の外に、勝宗十句義論記、決擇俱舍論、攝八轉義論、補八轉義論、略八轉釋、大日經玉振鈔、論場旗竿等あり。

くわんけんしふせつ
管見拾掇　一卷　三册

諸家の日記記錄等によりて、叢議拜賀、新嘗祭儀等を類聚したるものなり。文化十二年乙亥（一八一五）十一月二日の事實までを記したり。

くわんけんてにはぶるゐ
管見手爾波部類　一卷　藤原　季綱

手爾乎波の意義用法調べへの事等を說明したるものなり。

◎藤原季綱のことは「續本朝文粹」の下にあり。

くわんけんやすなせう
管見野水抄　三卷　滋野井公澄

種々雜例古法等を古書に考徵したるもの。卷一に神事不忌父母事、私神事不忌父母事等より、仗圍巡事、盛尾酒事等に至る百〇七項。卷二に殿舍事附櫻橘事、蘆尾酒事等より、御中書札禮事、社司判官之類菜儛或覩下事等に至る五十九項。卷三に廢朝事、庚申事等より、龜事、布施裝物事等に至る五十二項を收む。一々原書の本文を揭げたれば、最も參考たるべきなり。

◎滋野井公澄は權大納言正二位にて、寬曆六年丙子（一七九六）薨せり。

くわんこくしんしうしよもく
官刻新收書目　一卷

文化三年丙寅（一八〇六）十二月以來、文政五年壬午（一八二二）十二月までに新收せる官刻書目なり。凡そ五百數十部あり。幕府書物奉行の編するところなり。

くわんこざつでふしよへん
覩古雜帖初編　一卷　穗井田忠友

東大寺法隆寺の古物中より、書類雜物十種を寫し出でて一々其の考案を詳述せり。天保十二年辛丑（一八四一）九月作るところなり。

◎穗井田忠友は駿河の人。後參河に移る。御代官手附小原雄英の長男にして、大江氏なり。初め久間次郎と稱し、穗井田敎貞と改め、後に繰助と改め、晚年穗北源助といひ、叢軒と號す。平田篤胤に就て國學を修め、又京師に往き香川景樹に從て和歌を學び其の技に長ず。勝地臆斷、萬葉地名考、及び覩古雜帖初編等の著あり。天保四年癸巳（一八三三）九月十九日、五十六歲にて歿す。

くわんごしふ
寬五集　五册　元　順

諸家の俳諧を集めたるものなり。編輯の年月は詳ならず。著者元順は泉州堺の俳諧者にして、別著に曠野、獨吟二百千句等あり。

くわんこしよじやくもくろく
官庫書籍目錄　三卷

賜書三十四種、經類六百六十四種、雜類一千百二十七種の書目を收め、各種册數と寫本と版本とを記せり。

くわんこしよもく
官庫書目　四册

德川官庫の藏書目中、記錄目錄上下、諸職撮要、地誌書籍目錄等の四册なり。

くわんこづ
覩古圖　一卷

古硯圖、瓦器圖、古銅器、陣具、一重切、八角鐃、北條家文書、古刀圖等を揭載したるものなり。

くわんこつしき
換骨志喜　一卷　松崎　復

寬政六年甲寅（一七九四）七月二十七日、江戸を出でて、上州草津溫泉に浴し、同年八月二十七日、江戸に歸るまでの紀行にして、經歷する所の里程風俗その他の見聞を記載せり。附錄に、此の記を佐藤一齋に送りて添削を求めたる書牘一編と、詩二十首とを揭ぐ。

◎松崎復の傳記は「接鮮搨譜」の下にあり。

くわんこんしんれう
還魂紙料　二卷　柳亭　種彥

考證隨筆にして、千年館の由來より、戲曲、俳諧小唄其の他の事を考說す。文政九年丙戌（一八二六）冬十一月發行の由あり。別に刊本あるか、將、又、未だ版に至らざるか。

◎柳亭種彥の傳記は「修紫田舍源氏」の下にあり。

くわんさいいかう
寬齋遺稿　五卷　市河　世寧

著者の遺稿。男三亥の編輯するところなり。先著「寬齋摘草」に入らざる詩數百を拾輯す。寬齋の肖像、同贊文「大雅行の作」、同銘「林遜齋の作」等を揭げたり。文政四年辛巳（一八二一）菅晉師、池桐孫の序あり。

◎市河世寧の傳記は「金石私志」の下にあり。

くわんさいてきさう
寬齋摘草　四卷　市河　世寧

著者の詩集にして、卷一に五言古詩十六首、七言古詩十六。卷二に五言律九十三、五言排律四。卷三に七言律七十三、六言律一。卷四に五言絕句三十二、七言絕句五十七、六言絕句一首等を收む。天明六年丙午（一七八六）仙臺祉弟新山賞の序を附し、同年四卷二册に版行す。

◎市河世寧の傳記は「金石私志」の下にあり。

くわんさいひじ
官裁祕事　十五册　本

天明八年戊申（一七八八）以後に於ける幕府の裁判評議錄なり。其の敎實に敷百件、答辨書、評議書、御仕置科書等の例あり。浩瀚なる評議書中より適意に拔抄したるものと見ゆ。

くわんさんちうそんじあんないき
關山中尊寺案內記　二卷　菅野　良覩

奥州平泉なる關山中尊寺の案內記なり。故裏觀の著を、岩手縣西岩井郡中尊寺村八十七番地菅野澄泉といふもの、明治二十年、二卷一册に版行す。

くわんしうじかふ
勸修寺家譜　一卷

左大臣藤原冬嗣の六男良門を勸修寺家の第一代として、二代高藤、三代定方、四代朝輔、五代爲輔六代宣孝、七代隆光、八代隆方、九代爲房等を經て十代爲隆までの各略傳を記せり。

くわんしうじきうき
勸修寺舊記　一卷

延喜帝の創建に係る同寺の一切雜事を集錄したるものなり。「續群書類從」卷七百八十、釋家部六十五に收む。

くわんしうじちやうりしだい
勸修寺長吏次第　一卷

延喜帝の建立に係る同寺の長吏、一代大僧都濟高より、三十二代無品法親王尊孝に至る累代の次第書なり。「續群書類從」卷九十七、補任部第九に入れたり。

くわんしかう
管子考　三卷　近藤　守重

管子本文の異同を示し、注文の譌謬を正し、且、自家の考を擧げたり。寬政四年壬子（一七九二）秋八月の自序を附す。

◎近藤守重の傳記は「右文故事」の下にあり。

くわんじかう

冠辭考　十卷　賀茂　眞淵

古事記、日本紀、萬葉集、其の他國史格式等より、吾が國のあらゆる枕辭を集め、五十音順に次第して各、註釋說明したるものなり。

◎賀茂眞淵は遠江國敷智郡岡部新宮の神官定信の二男なり。始め三四郎といひ後御士と改む。眞淵は其の號なり。後に縣居と號す。中年京都に出で荷田東麻に從ひて國學を修め、更に流學、儒法等に長じたり。業成りて江戸に教授し、名聲大に聞ゆ。田安中納言宗武に聘せられて寵遇を受く。國學和歌の復古を主張して遂に一家風を大成す。時人稱して眞淵翁の前には古人を見ず、其の後には來者を見ずといへりと。門人の數三百餘、就中藤原宇萬伎、村田春郷、輯取魚彦、橘千陰、村田春海、本居宣長、荒木田久老等最も聞えたり。著書には古事記私記、古事記劉考、神代記劉考、萬葉考、古今集傳說、伊勢物語大意、源氏物語新釋、百人一首古說、神樂歌考、能馬樂考、古器考、古冠考、外宮考、淨土三部抄言釋、山間文神代卷、延喜式祝詞解、祝詞考、假名古事記、伊勢物語古意、勢語七考、落久保物語頭書、大和物語直解、萬葉新採百首解、古今集序傳說、古今集私說、古今集打聞、古今新採百首、古今考、百人一首初學、神樂東遊考、遠江歌考、竹採翁長歌考、東歸集、縣居家集、千歲筐、國家臨說、梅花子集、西歸集、縣居歌集、千歲雜錄、歌意考、語意考、國意考、車服拔萃、應問答、本言、かりの行かひ、論語紀聞、法華祭講衆對案、文意考書意考、十二月考、田安殿奉對案、雜問答考、さいはり琴の譜、獨吟曲、陸奥出羽風土記文附攷、雜陽詩草等あり。明和六年己丑(一二四九)十月三日歿す。年七十三。

くわんじかうつぎを

冠辭考續貂　七卷　上田　秋成

賀茂眞淵の「冠辭考」中の冠辭に尚廣く諸書に考へて考證註解したるものなり。續貂の名は「狗尾續貂」の古語の意にとりたるなるべし。寛政十二年庚申(一四六〇)出版す。

◎上田秋成の傳記は「續語通」の下に出す。

ぐわんじつぶるゐ

元日部類　二冊

諸家の記錄中より、古來の元日に於ける朝廷の儀式を部類したるものなり。

くわんしほせい

管子補正　二卷

管子の誤謬を抄出して、群書に據り又自己の考を以て訂正說明したるものなり。寛政十年戊午(一四五八)五月の自題跋あり。

◎猪飼彦博は文卿と字し、敬所と號す。尾張の儒者なり。岩垣龍溪に學び、後津侯の聘に應ず。夙に學を好み強記を以て稱せらる。弘化二年乙巳(一八五〇)五十一月十日歿す。時に年八十五なりきといふ。

ぐわんじやうきみやうべん

願生歸命辨　二卷　僧　功存

淨土眞宗の安心の要目たる願生歸命及び「たのむ」の意義を解釋したる書にして、歸命卽ち願生卽ち「たのむ」の義を主張し、「たのむ」とは單に信順依託の義に非ざることを辨じ、必ず身口意の三業に歸命の相を表すべきことを述べたり。元、是れ偏に一念歸命を攝して自力となし、無念無想を安心の極致となすの說を破せんが爲めに作りしものなれども、橘幸坊知洞の三業安心の大騷動を驅致せしに至ては、本書の影響亦大なりと云ふべし。桃園天皇の寶曆十二年壬午(一四二二)の作なり。

◎功存は眞宗本願寺の僧にして、同寺第六の能化(學頭職)なり。越前大田平乘寺に住し、實明院と號せらる。本書の外、大經稱揚錄五卷、往生論註風航記九卷、安樂集太田錄五卷、序分義私鈔二卷、定善義講錄二卷、領解文大意一卷、他力信行問答二卷、肉食妻帶辨疑鈔一卷等の著あり。

くわんじやうしよ

關城書　一卷

北畠親房東征の時、奥州野州の邊にあり、偶關城に入りて忽ち敵兵の來り圍むに會し、此の書を作りて白河の結城親朝に贈り、援兵を求めたるものなりといふ。或書に興國元年庚辰(一三四〇)より、同五年に至る關東宮方の合戰略蹟を記せり。正保四年丁亥(一六四七)林恕の考證文を附す。中山信名の「關城書攷」には、本書は後人の、結城文書に採りて作りたる由を詳しく辨じたり。

くわんじやうてんだいしうねんぶんがくせいしき

勸奬天台宗年分學生式　一卷　僧　最澄

比叡山延曆寺に於ける天台宗得業學生の人數、衣食、受戒、修業、授階、禁制等の事を規定したる法式にして、凡べて八箇條あり。嵯峨天皇の弘仁九年戊戌(一四七八)八月に制定して敕裁を請ひたるものなり。

◎最澄の傳は「宇護國界章」の下に在り。

くわんじやうまさのしだい

勸請的之次第　一卷　長澤　正信

弓法故實書にて、勸請的の次第、勸進の掛言葉の次第、立弓の次第、組合片矢當の次第、相所なき時の次第、射上の星の次第、星當たる人盃の次第、早矢通にて星不上次第の事、的場並掃の圖の次第、卷藁射樣の次第、相の弓の次第、卷藁藁の寸法、卷藁の寸法等を說明す。「弓馬集法」の中に收めたり。

◎長澤正信のことは「弓馬集」の下にあり。

くわんしやうろくねんあをうませちゑしだい

寛正六年白馬節會次第　一卷

後花園天皇の寛正六年乙酉(一四六五)白馬節會を行はる。本書は其の詳細記事なり。「續群書類從」卷二百六十一、公事部第十四に收めたり。

くわんしやうろくねんたうかせちゑしだい

寛正六年踏歌節會次第　一卷

後花園天皇の寛正六年乙酉(一四六五)宮中に於て踏歌節會あり。本書其の次第を詳記す。「續群書類從」卷二百六十二、公事部第十五に收めたり。

くわんしゆひせう

貫首秘抄　一卷　藤原　俊憲

くわんしよ

勸請的之次第　一卷　長澤　正信

弓法故實書にて、勸請的の次第、勸進の掛言葉の次第、立弓の次第、組合片矢當の次第、相所なき時の次第、射上の星の次第、星當たる人盃の次第、早矢通にて星不上次第の事、的場並掃の圖の次第、卷藁射樣の次第、相の弓の次第、卷藁藁の寸法、卷藁の寸法等を說明す。「弓馬集法」の中に收めたり。

◎長澤正信のことは「弓馬集」の下にあり。

くわんしやうろくねんあをうませちゑしだい

寛正六年白馬節會次第　一卷

後花園天皇の寛正六年乙酉(一四六五)白馬節會を行はる。本書は其の詳細記事なり。「續群書類從」卷二百六十一、公事部第十四に收めたり。

くわんしやうろくねんたうかせちゑしだい

寛正六年踏歌節會次第　一卷

後花園天皇の寛正六年乙酉(一四六五)宮中に於て踏歌節會あり。本書其の次第を詳記す。「續群書類從」卷二百六十二、公事部第十五に收めたり。

くわんしゆひせう

貫首秘抄　一卷　藤原　俊憲

くわんしよくつうかい

官職通解　一卷　千葉　玄之

我が朝古今の官職を擧げて、略說し、漢土の官職とも比較して漢學初步の人に便せり。安永四年乙未(一七七五)卷二月の自序あり、同年飯室昌容の跋あり。寶五年出版す。

◎千葉玄之の傳記は「雲陽文集」の下にあり。

くわんしよくづぐわはんれい

官職圖畫凡例　一卷　山本　由古

別著「官職補任圖畫」に附錄して、百寮の轉任、遷任、還任、赴任、叙位、除目等の故實の一班を記載したるものなり。桃園天皇の寛延元年戊辰(一七四八)の自序あり。著者山本由古は通能と字す。別著には「官職補任圖畫」あり。

くわんしよくなんぎ

官職難義　一卷　吉田　兼右

上卷には古今冠位之次第、天皇と稱する事、御宇と稱する事、太子と稱する事等より、稱號を加へざる官の事、官位昇進の名目等に至る五十餘條。中卷には三宮の事、中宮の事、女院の事等より、御進物所の事、膳部の事、女房禁色の事等に至る七十餘條。下卷には僧官位、法親王、御門跡等のこと、凡て數十條を掲げたり。

くわんしよくびかう

官職備考　七卷　三宅　雅刀

官職の起元より、位階、姓氏其の他の事に至りて四十四條を詳明す。元祿十五年壬午(一七〇二)の著、享保三年戊戌(一七一八)出版す。

◎里見安直は東武の人なり。嘗て西遊したる時親しく公卿等に交りて本書の材料を得たりといふ。

て知らる。著書には官職備考の外、官位俗訓、職原抄追加摘解、本朝年代記、大唐年代記、和漢歴代備考等あり。

くわんしよくひせう
官職秘鈔　二巻　平　基親

神祇官、太政官、八省卿、同輔、同大少丞、同大少錄、諸衛督、同大少將、同中將、同少將、諸司正、同佑、同令史、諸職大夫、同權大夫、同權亮、同大少進、同大少屬等以下檢非違使六位藏人に至るあらゆる官職補任の例なり。『群書類從』巻七十、官職部に收む。著者平基親は從三位行兵部卿たり。

くわんしよくふせつわくもん
官職浮說或問　一巻　壺井　義知

我が邦官職の事に就て古來言ひ傳へたる浮說を或問的に辨解したるものなり。寶永六年己丑(一三六九)の著に係る。彼此の間に對して答へたるものといふ。尚同人の著に『職官職浮說或問』一巻あり。

◎壺井義知は河内の人。鉋翁、溫故軒等の號あり。通稱を安左衛門といふ。有職典故に精し。著す所は頭書枕草子裝束抄、裝束要領、昔傳拾葉、源氏男女裝束抄、紫式部日記傍註、職原辨疑、職原抄解、裝束圖式等なり。享保二十年乙卯(一七三五)十月二十四日歿す。享年七十九。

くわんしよくぶにんづぐわ
官職補任圖畫　一折　山本　由古

官職圖繪を示し階、等、級を明にし、冠脰その他等を明にしたるもの。大折本一册に版す。寛延元年戊辰(一七四八)に著せる『官職圖畫凡例』に、「こは十年餘り前の著といへり。今見るところ、惜むらくは闕本に屬す。

◎山本由古のことは『官職圖畫凡例』の下にあり。

くわんしよくべんらん
官職便覽　五十五巻　平田　職忠

巻一神祇官、巻二齋宮寮、齋院司、巻三位階、巻四、巻五、巻六、巻七、巻八、巻九、巻十太政官等より、巻五十五諸國の雜官に至る諸記事なり。

◎平田職忠の傳は『龍訓略頌類纂』の下にあり。

くわんしよくりやくき
官職略記　十三巻　青木　敦書

支那の大古、伏羲氏より唐に至る官職の大略を記したるもの。元文四年己未(一七三九)の自序に曰く、「古の聖王位官を制して君臣の禮を正し、上下の差を辨ず。其の後の君、時の宜きと事の便とによりて官名職掌混同じからず。今伏羲氏より唐までの因革の大略を記して十三巻となし、官職略記と名く。此の書學くも上覽を經て臣敦書に命じて淨書して來らしむ。因て再び校して以て獻で上るといふ」とあり。

◎青木敦書の傳記は『昆陽漫錄』の下に拾ふ。

くわんしりやうかう
關市令考　一巻　神村　正鄰

關津市廛に關する令條二十條を註したるものなり。蓋本の不十分なるより、明和六年己丑(一七六九)正月正鄰是正して發行すといふ。著者神村正鄰は尾張の人なり。

くわんしんかくむせう
觀心覺夢鈔　三巻　僧　良遍

法相唯識宗の教相法義を敍述したるもの。卽ち、所依本經、一代教時、百法二空、四分安立、三類境義、種子熏習、十二緣起、三種自性、三種無性、二諦相依、二重中道、唯識義理、據在刹那の十三題に分ちて、能く其の要領を得たり。著者に就て、或は中觀律師の作なりと云ひ、或は眞遍僧都なりとも曰へり。今は且らく後說に從ふ。是れ本書の文體が中觀の十門文集よりも、眞遍の傳通要錄等に首る所あればなり。近刊『纂頭觀心覺夢鈔』あり。以て本書研究の資に供すべし。

◎眞遍の傳は『傳通要錄』の下に在り。

くわんしんじえんぎ
勸心寺緣起　一巻　僧　眞雅

河内國錦部、石川郡の南山中なる勸心寺の由來記なり。承和四年丁巳(一四九七)三月僧眞雅と共に勸錄するところなり。

◎眞雅の傳は『稻荷流記』の下にあり。

くわんじんせつ
廣參說　一巻　小野　職博

清國渡來の廣東人參を以て山漆根となせども、世人未だこれを信ぜざるより、更に本書を著して考證說明したるなりといふ。文化七年庚午(一八〇七)刊行す。

◎小野職博の傳記は『畝傍摘要』の下にあり。

くわんじんそんぎ
廣參存疑　一巻　大槻　茂質

清國渡來の廣東人參は、其の實三七根にて人參にあらざることを辨じたるものなり。寛政年中の作。

◎大槻茂質の傳記は『蘭學階梯』の下にあり。

くわんじんてふ
勸進牒　二册　路　通

俳句の集なり。元祿四年辛未(一六九一)の編輯にかゝる。

◎路通の傳記は『芭蕉翁行狀記』の下にあり。

くわんしんほんぞんせう
觀心本尊鈔　一巻　僧　日蓮

『法華經』及び天台智者大師の『摩訶止觀』等に據りて、法華宗敎義の本尊とも言ふべき十界互具一念三千の觀法の事を詳述したるものにして、其題には『如來滅後々五百歲始觀心本尊鈔』と云へり。亀山天皇の文永十年癸酉(一二七三)の作にして『錄內』第八巻、及び『續圖藏經』第八帙第十二に收めたり。

◎日蓮の傳は『開目鈔』の下に出でたり。

くわんしんりやくえうしふ
觀心略要集　一巻　僧　源信

天台宗觀心門の要義を述べたる書なり。一部分つて十章となす。卽ち、夢、娑婆界過失、厭念佛、明觀心、歎極樂依正德、辨空假中、汲執、釋凡聖備二一心、知流轉生死源、教出離生死觀、修空觀行三觀悔、發眞正菩提心、及び、問答料簡是なり。後一條天皇の寛仁元年丁巳(一〇一七)五月の作。

◎源信の傳は『往生要集』の下に在り。

くわんしんりやくえうしふ
觀心略要集　二巻

前項に出でたる『觀心略要集』の鼈頭に詳細なる冠註を加へたるものなり。寛文十一年辛亥(一六七一)七月、冠註を加へて上梓したるなれども、其の何人の手に成りしかは未だ知る能はず。

くわんしんわうじやうくんせう
勸心往生慈訓抄　一巻　僧　了學

天台宗沙門忍室の著し、『勸心往生論』を註解したるものなり。後小松天皇の應永三年丙子(一四〇六)六月、著者五十六歲の作に係れり。

◎了學の傳は『釋淨土二藏義』の下に在り。

くわんしんわうじやうろん
勸心往生論　一巻　僧　忍室

念佛三昧の觀行を說き勸めたる書にして、其の解釋の多くに天台宗の見地に根據せるものなり。近衛天皇の久壽二年乙亥(一一五五)正月、前年の作を再治したり。

◎忍室は天台宗の僧なれども、その傳は未だ詳ならず。『勸心往生慈訓抄』にも、『撰者事檢可レ註之』又は『不レ知師跡不レ聞指示』と云へり。

くわんせいいらいにしまるこじふにんがしらだいだいき
寛政以來西丸小十人頭代々記　一巻

寛政以來天保十五年頃に至る小十人頭十餘番を列擧したるものなり。

くわんせいかうちやうけいてん
寛政更張刑典　二巻

三泰行亜に火附盜賊改等御仕置の記なり。寛政改革の際泰行所に書留めたるものなり。

くわんせいしんせい
寛政新政　二册

寛政年間の諸法政書類を輯錄したるものなり。種種沙汰書、書留類數十種を雜收す。

くわんせいせんぐうものがたり
寛政遷宮物語　三巻　荒木田末偶(スエトモ)

本書は表題の『遷宮物語』によりて該題下に解題す

くわんせいちやうしんしよかふ
寛政重修諸家譜　一千五百三十五巻

堀田　正敦

國主領主以下凡そ諸臣拜謁以上に至るまでの諸家の本支分流を詳にし專ら『寛永譜』を祖述したるもの。初め參政幕命を受けて寛永諸譜續集の編に從ひしが、中途にして稍體例を變更したり。其の凡例中に曰く『寛永系圖は清和源氏、平氏、藤原氏、諸氏を四部に分つと雖し、今、姓氏錄に從ひ皇別を始めとし、神別之れにつぎ、諸諸之れにつぐ。其の皇別神別等の中に於ては、分流おほきを始めとす。たとへば皇別は清和源氏を始めとし、宇多、村上等の源氏を列ね、平氏桓氏に及ぶ。其の餘皆此の例なり。假

高惟宗の時出所定かならず。豐臣氏の頃、何れの別といひ難きものは、暫し神別の下に收む。新家劄、高、張三氏の事は皆異國の姓にして本朝に於て賜りしものにあらず、依りて其の家傳を記して諸藩の下に於けり。張氏は拾芥抄に張の宿禰見ゆれども、其の出所また定かならず、故に三氏の下に附す。諸々姓氏詳ならざるを未勘と名け、諸氏の下に置けり。これまた寛永の例に倣ふ所なり」と撰輯の主意概該の大略を知るべし。材料の選擇を嚴にし、文辭を平易簡明にして幕府二百年間の治績の梗概を示す。寛政十一年己未(一四五九)業を始めて文化九年壬申(一四七二)稿を脱す。實に十四年間の編輯なり。幕府參政堀田攝津守正敦、奏者番豐前守正穀等旨を受け屢代弘賢以下凡そ五十餘人をして編輯せしめたるものなり。

◎堀田正敦の傳は「干城錄」の下にあり。

くわんせいいきうき　關西關記　本 十二卷

嘉林院義種の頃より、天正年間に至るまで、尾予、大内、大友、毛利等關西に割據して累年戰爭したることを記したるものなり。

くわんせいひかうろく　寛政比考錄　本 七十四册

寛政年度の比考錄にして、幕府評定所より引繼ぎ內閣文庫に保存せるものなり。

くわんせいひろく　寛政祕錄　本 十卷

寛政年間に於ける朝野の雜事を記す。卷一儒佛神三教の事並三昇國政の事、王法新王政道民の心に聽する事、遠州相眞の城主振州雜波の城を望む事、天下の諸侯田沼が權威に恐る、事、白川賢主田沼が遠謀を推察の事等より、卷十松平伊豆守殿入席器量の事、中山楓門百官の罪を改め定め給ふ事、中山大納言殿白川少將殿泰平を謠ひ給ふ事等の目に至る十卷一册に寫傳せり。

くわんせきぶんらうし　觀迹聞老志　本 二十八卷　佐久間義和

一名「奥羽觀迹聞老志」。

くわんぜもとのりさうしよもくろく　觀世元規藏書目錄　本 一卷

和書二百九十部の目を上げたるのみ。類を分たず、刊寫本を示さず、著者を記さる略目なり。

くわんそ　欵藪　一卷　森川　世貴

漢土古人の書畫法帖に用ひたる落款文句を輯めたるもの。寛政十一年己未(版本には未巳十二月とあれど、これは誤りなるべし)奥田元繼の序、翌庚申(一四六〇)木村孔恭の跋あり。弘化二年乙巳(一五〇五)出版す。

◎森川世貴の傳記は「集古浪華帖」の下にあり。

くわんそうひろく　瀧廈祕錄　本 二册　岩崎　常正

草木の栽培育種法を詳記したるものなり。文化十四年丁丑(一四七七)の原稿にかゝる。

◎岩崎常正の傳記は「岩崎瀧園遺稿」の下にあり。

くわんちうそうろく　官中要錄　本 八十四卷　西山　元文

江戸城の由來、町方方位大小名家祿等より筆を起して、萬民雜記に移り寺社由緒、皇統、律令格式、武家、將軍の治革、織田、勝田、豐臣、柴田、北條、德川累代の事等、天明六年丙午(一四八六)までのもの を蒐羅せり。寛政二年庚戌(一四九〇)中秋の漢文序あり。本書は蓍名「官中祕策」と號したりしを後に何人か改題したりと。著者西山元文は寛兵衛と通稱す。對馬宗氏の藩士なり。

くわんちうをしやうでん　寰中和尙傳　本 一卷

肥後萬藏山成道禪寺寰中和尙の傳。僅一枚の漢文にて成れり。「續群書類從」卷二百四十一に收む。

くわんちうき　勸忠記　本 五卷　原田　豐昌

赤穗遺臣の忠不を褒貶したるもの。寶永二年乙酉(一三六五)の自序に、四十七士報讐の大概を記して「余嘉其功爲之筆錄以爲此書其有功者必褒、有罪者必貶、欲勸善懲惡也。故名曰勸忠記云々」とあり。

「古今和歌集」に註を加へたること名の示すが如し。著者の遺說を繼ぎて村田春樹の補考するところなり。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下にあり。

くわんちうひさく　官中祕策　本 八十四卷　西山　元文

此の書は現名「官中要錄」の下に解題したり。

くわんちうもまさものがたり　冠注大和物語　三册　井上　文雄

「大和物語」の全文に詳しき冠注を加へたるものなり。諸書諸說を引きて考說す。嘉永六年癸丑(一五一三)五月五日の自序あり、同年加藤千浪、草野御牧、横山由清、伊能穎則等の校合發行するところにて三册に作れり。

◎井上文雄の傳記は「伊勢の家づと」の下にあり。

くわんちしふ　寛知集　本 三册

日本全國の國郡町村名を、領內別に列記したるものにて、第一册に十七國七十四枚、第二册に十四國百〇七枚、第三册に三十二國八十二枚に寫したり。寛文年中知行高を記す。爲に寛知集と號したるか。

くわんちやうえうしゆくじ　灌頂曜宿事　本 一册　僧　榮然

承和十年癸亥(一五〇三)十二月十三日眞紹授法の灌頂曜宿例より仁平年間までの宿曜の事を記す。著者榮然は慈尊院に住持して大僧都たり。

くわんちろん　官地論　一卷

加賀一向宗徒が主護職富樫氏を滅亡し其の地を押領して私有地となしたる始末を記したるものなり。「反對に「官地論」と名けたるなり。

くわんでんがくき　觀田樂記　一卷　宮地　仲枝

文政元年戊寅(一四七八)七月十三日、武藏國豐島郡王子權現の社頭にて、例行の田樂を觀て其の所作次第等を詳記したるものなり。

◎宮地仲枝は莊藏と稱し水溪と號す。儒を以て高知藩に仕ふ。蔡寬公遺事、御當家年代略記、山田家年代記等を著す。天保十二年辛丑(一五〇一)七十四にて歿す。

くわんてんてきそう　寛天摘要　本 四册　小澤　利喬

此の書の題號、性質、編纂の趣意等は、寛延三年庚午(一四一〇)夏四月の自序に詳悉せり。その全文を掲げむ。「寛明日記七十一卷、萬天日錄六十七卷、非所載如年序朔望恒例之御規式、御法事、日御役替、御加增、初御目見、張御饗之島拜領、養予願、隱居、病死、家督御禮、遺物獻上之類、諸國不作、水火雜等、至繁多矣、故今摘其尤者、錄之而爲一家之珍、以貽孫子也云爾」とあり。題號の「寛天」は「寛明日記」「寛永明曆年間の記」「萬治天和年間の記」の略語なり。

くわんとうはつしうづ　關東八州圖　本 一鋪

相州足柄山の關所以東を關東といひ、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野を八州といふ郡村、城下、宿驛等詳しく表示せり。

くわんとうひやうぢやうでん　關東評定傳　二卷

關東執權、評定衆、引付衆等の略傳なり。第一卷は

くわんとうはつかこくばかめいしやうき　關東八箇國幕下名將記　本 二卷

小田原城主北條氏康、同氏政、同氏直。新田金山城主山內上杉憲政。忍城主成田下總守。介加野城主介加野淡路守。館林城主長尾新五郎。深谷城主深谷左兵衛尉。松枝城主松枝左近大夫。小幡城主小幡上總介。相生城主相生大炊介。赤萩城主里見上總入道。小俣城主淺川相模守。谷城主谷備中守等の事績を新錄したるものなり。

くわんとうはつかこくばかめいしやうき　關東八箇國幕下名將記　本 二卷

くわんとうくわんさいかう　關東關西考　本 一卷　大塚　嘉樹

「東鑑」卷十七なる、以關西三十八箇國地頭職、被寄譲舍弟千幡君、以關東二十八箇國地頭職、並總守護職、被定御長予一幡君」といふに就て考註し、關東は「逢坂の關より東」を謂し、關西は「逢坂の關より西」と訓するの意に歸すべしと論證せり。天明八年戊申(一四四八)の記にかゝる。

◎大塚嘉樹の傳記は「看梧隨筆」の下にあり。

嘉祿元年乙酉(一八八五)執權北條泰時の時より、弘長三年癸亥(一九二三)に至り。第二卷は文永元年甲子(一九二四)より、弘安七年甲申(一九四四)に至る北條時宗の時代に至る。「群書類從」卷四十九、補任部第六に收めたるもあり。

くわんさうへいらんき　關東兵亂記　一卷

關東管領上杉氏累代の戰記なり。上卷は「關東上杉家の事、附り太田道灌最後の事」より、「北條氏康由井濱大鳥居建立の事」に至り。下卷は「河越夜軍の事」より、「鉢輪城合戰」に至れり。

くわんとうわかしふ　關東和歌集　三卷　遠山　北湖

「古今和歌集」より、下「新續古今和歌集」に至る二十一代集、四百二十卷の、每卷頭なる一首づつを抄出編緝したるもの。各卷の秀逸を抽きて、各代各集の代表者として論讃するに便したるものなるべし。各集は敷撰時代と撰者とを記し、各首は題と作者とを記す。元祿十一年戊寅(一六九八)の自序、享保五年庚子(一七二〇)林信充の序、同藤原基明、林信智の跋等あり。

◎遠山北湖の「ことは「水かけぐさ」の下にあり。

くわんのうこほんろく　勸農固本錄　二卷　萬尾　時春

農業上の制法、規約、檢地、租法、相地、種藝、土功、訴訟等の大要を記述したるものなり。享保十年乙巳(一七二五)の作。

◎萬尾時春は丹波の人なり。本書の外に、規矩分等集、井田圖考等の著あり。

くわんのうさく　勸農策　二卷　武元　直平

古今の稅法を比考し財政の困弊を救正すべきことを述べたるもの。蓋し岡山藩の爲めに殊に論述したるものなりといふ。文政年間の事に係る。

くわんのうびし　勸農徵志　一卷　中村　直三

文久二年壬戌(一八六二)堆肥の製造法を詳述したるものなり。

◎中村直三は大和國山邊郡永原村の農なり。夙に農産に心を用ひ、尤も稻種の撰擇に長じたり。明治維新の後、奈良縣令四條隆平始めて聘用して御用掛とし是れより益老農を以て世に知られたり。

くわんのうふみんろく　勸農富民錄　一卷　鹿子木維善

勸農の要旨を論述したるものなり。富民總論、治民、五疾、經界、斂法、地利、悉備、賦貢、民悄、山川、究民等の目に分けて論じたり。文化九年壬申(一八一二)の作なり。

◎鹿子木維善は幸平と稱す、肴名の農功者なり。「座右手鑑」を著し、また後に「藤公遺業記」を著して加藤清正の治水開田の功績を詳にしたりと。

くわんのうわくもん　勸農或問　二卷　藤田　一正

上卷に勸農總論及び侈惰之弊、兼併之弊、力役之弊、橫斂之弊、煩擾之術、除橫斂之術等を論じ、下卷に總論及び煩擾之術、除橫斂之術等を論ず。卽ち治政の弊事を論じ其の矯正法を論じたるものなり。寬政十一年己未(一七九九)七月著。明治二十年丁亥(一八八七)五月「水戸先哲叢書」の中に收刊せり。

◎藤田一正は水戸の藩士にして、子定と字し、幽谷と號す。寬政九年丁巳(一七九七)江戸邸に祇役し、時政を痛論して逮讁し不敬に座して罪せらる。其の事文公の聽くところとなりて罪を許されて復職し、文化五年郡宰に任ぜられ、後文政九年丙戌(一八二六)三月病歿す、年五十三。

くわんのうわくんせう　勸農和訓抄　一卷　加藤　勇魚(イサナ)

農業起原より、四季十二箇月の名稱、土性、耕種、撰種、餘害、備荒、建築、藥法、孝悌の道に至るまで農家必要の事項を示せるものなり。天保年間紀尙秀と共に編纂するところなり。

くわんぱうしふせい　寬保集成　本五十卷

慶長二十年乙卯(一六一五)以來寬保三年癸亥(一七四三)に至る幕府制定に係る條章、布令、勅定所、目付方の例規等、凡そ三千五百五十通を集め八十部に類別したるもの。德川入代將軍吉宗夙に意を政刑に用ひ自ら諸臣と討議して史書の編輯をなし、本書もまた評定所に命じて纂輯せしむる所なり。蓋し幕府條目書中に於て最も完備したるものなりといふ。

くわんぱうづゑ　冠帽圖會　一卷　松岡　辰方

冕冠、寶冠、禮冠、武禮冠、三山冠、御冠、御幞放巾子、以下凡て三十六冠幘の圖會なり。文化三年丙寅(一八〇六)二月の著。其の子舟治眞人行義の跋あり。天保十一年庚子(一八四〇)六月の出版。

◎松岡辰方は有職故實の學者なり。筑後久留米の人、浴鄕と稱し、梅軒と號す。嘯保已一の門人なり。著書甚だ多く、本書の外に、裝束織文圖會、女官裝束圖會、裝束圖抄、十二單着用圖、官位相當圖圖、武田小笠原略系圖、式飾重花粧略記、武家裝束皆具略記、服着用圖、服忌便覽、手纏腹帶圖式、貞須豹文書色目考、令式服色圖考、冠圖、位階便覽、親王諸王考、續門跡譜、凉暗愚抄、盛化門院御葬送抄、御火屋之圖、一橋殿淮槪宣下之次第等あり。天保十四年癸卯(一八四三)五月歿す、年七十七。

くわんぱうてんげんろく　寬保轉元錄　本八卷

寬保元年辛酉(一七四一)六月二十一日以下の德川將軍家の出入雜事日記なり。延享二年德川家重將軍となる準備の事等を記す。八卷一册に寫傳し、來に安永九年庚子九月轉任の次第を附錄として掲ぐ

くわんぱうひやくしゆ　寬保百首　一卷　白　主

寬保元年辛酉(一七四一)、濕尾に遊び其の地、及び歸路に於て當年知人の勞百韻を集め更に自己の漫吟數十を加へて出版したるものなり。

くわんぱうべん　冠帽辨　本一卷　上田　光秋

冠帽の制度沿革等を記せり。推古天皇の朝に定められたる冠位十二階、孝德天皇の朝の七色十三階の冠、同十九階の冠制、天智天皇の二十二階の冠制、天武天皇の爵位改號、文武天皇の位階制、其の他衣服令の說、上代冠子の圖、唐冠、老掛、高冠子、金冠子、立烏帽子、折烏帽子、風折烏帽子の事等を述べたり。寬保十年庚辰(一七四〇)五月の著作にて、義後の門人にて和學に精しく特係る。

◎上田光秋は多田義俊の門人にて和學に精しく特に強識の聞えあり。

くわんぱうりつ　寬保律　本一卷

寬保年中の諸法律を輯錄す。目安裏書、初判の事、裁許繪圖裏書加印の事等より、詮議之內早速及び白狀候者之事、御仕置仕形の事等に至る百〇四條あり。今內務省の寫本に依る。

くわんぱうろく　寬保錄　本九册

寬保元年辛酉(一七四一)正月より、同三年十二月に至る幕府の日記なり。

くわんぱくけうたあはせ　關白家歌合　本一卷

保安二年辛丑(一一二一)九月十三日、山月、野風、庭露、蟲聲の題にて、合せたる歌合なり。前左衞門佐基俊の判にかゝる。

くわんぱくないだいじんけうたあはせ　關白內大臣家歌合　本一卷

貞治五年丙午(一三六六)十二月二十日當座五十番歌合なり。關白師嗣、關白師良其の他凡て二十三名の作にて、新中納言爲秀卿の判、衆議判詞を加へたるものなり。

くわんぱくごじふばんうたあはせ　關白家五十番歌合　本一卷

くわんぱくけごじふばんうたあはせ　關白內大臣家歌合　本一卷

天文年間より、天正年間に至る國以東に於ける諸戰爭を錄し、併せて諸家の治亂榮枯を記す凡百數十項あり。「關侍傳」に基き、諸書を參考して大成せりといふ。享保十一年丙午(一七二六)の自序あれど、某氏夫人ありて姓名を記さず。二十卷二十册に寫傳す。

くわんぱくさつしうこせんろく　關八州古戰錄　本二十卷

くわんぱんしよじやくかいだいりやく　官板書籍解題略　二卷　樹山　精一

德川幕府に於て反刻したる漢書の解題なり。經史子集の四に分ちて百數十部を列擧す。作者の傳里及び事績源統等をも略記せり。仁孝天皇の天保十五年甲辰(一八四四)の著。弘化四年丁未(一八四七)新刻したるものなり。

くわんひろく
關秘錄 本朝 八卷

裝束、故實、和歌連俳等の事を考證したるものなり。主として源井甯知・新井白石、柏崎眞光の考語を引用し、併せて古記實錄をも引據したり。

くわんぷくさうがき
官服聞書 本朝 一卷　船橋　宣賢

官服の故實、沿革等を記したるもの。年代詳ならず。

◎船橋宣賢（清原宣賢）の傳は「古今和歌集傳授切紙」の下にあり。

くわんぷくざうづ
官服像圖 本朝 一卷　伊勢　貞丈

官服着用の畫像を畫き、其の側に伊勢貞丈、大塚嘉樹、松岡辰方等の考證を附註したるものなり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋隨筆」の下にあり。

くわんぷくづしき
官服圖式 本朝 三卷

裝束異紋、女官裝束、裝束雜圖の三に分けて示したる同着色圖式なり。安永元年壬辰（一四三二）十二月多賀氏中原常政の模寫するところなり。

くわんぷくもんだふ
冠服問答 本朝 一卷　伊勢　貞丈

明和九年壬辰（一四三二）七月冠服故實を問答的に記したるものなり。末に著者と新井邦孝との問答に成れる「邦貞問答」「「軍神問答」等を附錄せり。

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋隨筆」の下にあり。

くわんぷげじやうせうろく
官符解狀抄錄 本朝 二卷

天平勝寶元年己丑（一四〇九）の大神宮雜事記より始めて、逐次元龜年中の兩宮注進狀に至る數十の諸解狀類を輯錄したるものなり。二册に寫傳す。

くわんぷつうき
官武通紀 元治甲子 本朝 十三卷

卷一、二に目標。卷三に公方樣御上洛始末、同卷四、五、六に關下雜集。卷七に浪士集會始末。卷八に薩州始末。卷九、十に長州始末。卷十一、十二に建白集等なり。

くわんぷつうき
官武通紀 文久癸亥 本朝 十二卷

卷一、二に目標。卷三に中川宮樣始末、姉小路卿逢害候始末。水戸中納言樣御辭職始末。一橋中納言樣御辭職始末。卷四に公方樣御上洛始末、御大名不時御出府始末。卷五に足利木像梟首浪人召捕始末、擴夷期限始末。卷六に關下騷擾始末。卷七、八、九に和州騷擾始末。卷十に但州騷擾始末。卷十一に薩州始末、長州始末、建白集等。卷十二に公方樣再御上洛始末、御親兵始末、無慮雜集等なり。

くわんぷつうき
官武通紀 文久癸亥 本朝 十七卷

卷一、二に目標。卷三に中川宮樣始末、姉小路卿逢害候始末。水戸中納言樣御辭職始末。松平春嶽殿御辭職始末。卷四に公方樣御上洛始末、小笠原圖書頭殿御上京始末、御大名不時御出府始末。卷五に足利木像梟首浪人召捕始末、擴夷期限始末。卷六に關下騷擾始末。卷七に長州始末。卷八に薩州始末、建白集等。卷九、十に和州騷擾始末。卷十一に但州騷擾始末。卷十二に薩州始末、長州始末、建白集等。卷十三に無慮雜集等の目より成る。

くわんぷつうき
官武通紀 元治甲子 本朝 十三卷

卷一、二を目標とし、卷三に公方樣御上洛始末、同雜集、六月中潛伏浪人探索始末。卷四、五、六に關下騷擾始末。卷七に長州始末。卷八に薩州始末。卷九、十に長州御征討始末。卷十一、十二に建白集等なり。

くわんぷつうき
官武通紀 文久癸亥 本朝 十七卷

卷一、二に目標。卷三に中川宮樣始末、姉小路卿逢害候始末。水戸中納言樣御辭職始末。松平春嶽殿御辭職始末。卷四に公方樣御上洛始末、小笠原圖書頭殿御上京始末、御大名不時御出府始末。卷五に足利木像梟首浪人召捕始末、擴夷期限始末。卷六に關下騷擾始末。卷七、八、九に和州騷擾始末。卷十に但州騷擾始末。卷十一に薩州始末、長州始末、建白集等。卷十二に公方樣再御上洛始末、御親兵始末、

べからず」云々とあり。本書現在の如何を知るべし

◎宇多天皇は光孝帝の第三皇子。在位十年にして位を皇太子敦仁親王に譲り、朱雀院に居り亭子院と號し、後薙髪して金剛覚と號す、世に寛平法皇と稱し來る。皆て紫宸殿の陰子に倣周以來名賢の像を圖せしめて賢聖の障子といふ。承平元年辛卯(一五九一)崩す御年六十五。

くわんぺいのおんときさいのみやうたあはせ

寛平御時后宮歌合　一卷

春歌二十番、夏歌二十番、秋歌二十番、冬歌二十番、戀歌二十番の歌合なり。讀人は紀友則、源當純、素性、藤原興風、紀有拳、紀貫之、在原棟梁、小野美材、大江千里、藤原管根、是則、敏行等なり。「群書類從」卷百八十、和歌部第三十五に入れたり。

くわんぽんたうだいき

官本當代記　本九册

永祿十一年戊辰(一五六八)より、慶長二十年乙卯(一六一五)に至る德川氏の記なり。

くわんめいえんよるのき

寛明炎餘類記　本五卷

寛永十六年己卯(一六三九)八月十一日の江戸炎上の記と、明曆三年丁酉(一六五七)正月十九日の火事の始末とを記したるものなり。

くわんめいじせきろく

寛明事績錄　本七十卷

寛永元年甲子(一六二四)より、明曆三年丁酉(一六五七)十二月までの政治日錄なり。目錄共十五册に寫傳す。

ぐわんもんしふ

願文集　本一卷

笠置寺住僧修善願文、同八條院三位局願文、笙巖寺住僧善願文、攝津國佛照山堂供養願文其の他の願文類を集錄したるものなり。「續群書類從」八百二十八の卷、釋家部第百十三に入れたり。

くわんらんしふ

觀瀾集　本九卷

著者觀瀾の詩文雜著なり。卷一、卷二、卷三に文。卷四、卷五、卷六に詩。卷七は支機問譚。卷八は烈士報讐錄。卷九は助字雅等なり。

◎三宅緝明は京師の人にして德川幕府の儒者なり。字を用晦といひ觀瀾、又、端山と號し、九十郎と通稱す。少にして淺見絅齋を師とし又江戸に出て木下順庵に學ぶ。文章を以て名を成す。年二十六水戸義公聘して編輯官となし祿二百石を給す。是れより累遷して同史館の總裁となる。自著には中興鑑言、觀瀾談餘、烈士報讐錄あり。享保三年戊戌(一七一八)十一月、七十八にて歿す。

くわんりひつご

官吏必讀　本一卷

諸御入用立方、諸帳面、諸届伺、御回米、算法、勘定向出役場所心得、地方公事方並の他等、享保年間に於ける地方諸務の定例を記したるものなり。

くわんろくにつき

寛六日記　本一卷　遊佐新右衞門

本書は一名「遊佐日記」といふ題名の下に解題せり

くんいんほせい

捃印補正　三卷　細合　離

萬治年中に刊行せられたる「和漢印選」の誤謬を是正し、且、印章の傍に釋文を附したるものなり。寛政十二年庚申(一七六〇)木村孔恭の跋を附し、享和二年壬戌(一八〇二)版となる。三卷中一卷は補遺と稱し、文化七年庚午(一八一〇)出版す。

◎細合離は一名を方明、字を龍玉通稱を八郎左衞門といひ、斗南、學半齋、太乙眞人等の號あり。平安の人、儒を以て大阪に住す兼て書家の名あり。初め祖徠の學說を奉じ、後自ら一家を成す。著す所は本書の外に、周易說統、詩說統、書說統、孝經闡旨、論語啓發、三經二義、詩問、百家詩話鈔、淡水集、濟勝具、樂府節律、書山集、三逸稿、選唐鼎來、南遊草、南遊獨詠、北遊草、東遊草、小草詩筐、神風集、後神風集、學半齋文集等あり。申御門天皇の享保三年戊戌(一七一八)十一月、七十八にて歿す。

ぐんえうおぼえがき

軍要覺書　本一卷

軍法軍配之分、智略武略計策の分、手組手分手賦之分、平城山城平山城執出附城附り犬走武者走之事、陣取陣城之分附り蹴出外張猿燻之事、大物見中物見小外侯分、大合戰小追合之分、衆合戰の大要を記せり。往々圖畫を插入す。

ぐんかんかんせん

軍艦奸戰　本二卷

敵軍の不意討を豫防し、敵軍を不意討するの方法を記したるもの。書名奸の義は不意の意なりと釋す。上卷に伏奸之大法、伏奸品法、奸勢見立法、奸之出立法、奸備組法、奸相圖之法、奸之制法、奸之働法、奸引勢法、奸勢戰功法を記し。下卷に敵奸有無知法、敵奸防法、野伏奸法、待伏奸法、透渡奸法、地中奸法、裏奸之法等を述べたり。

ぐんかんきよくえうしふ

軍艦極要集　本二卷

一番鐘、二番鐘、場中之高名、組討之高名其の他軍陣高名に關する要事を記述せり。編年詳ならず。

ぐんきういちりうしよ

軍弓一流書　本一卷

弓術故實の傳書なり。卷頭に此の書の傳來あり、曰く「抑傳聞軍弓之始處、八幡太郎源義家朝臣奥安部貞任御進發前九年後三年已上十二年之間以工夫述作、彼是八十一箇條之所撰出歟、其後諺永建武代々之士將傳之得其名、其後彼一卷所破龍覓八幡社頭也、應永之比左有在夢想之告、畠山左近將監持益、窺從拜見之、陶田三郎左衞門尉就秋傳之、其後文明年中當來庄和田成貴傳之」云々とあり。

ぐんきかうざうろく

軍器考增註　本一卷　伊勢　貞丈

據城布陣の法より、攻守進退の術に至るまで兵陣

衆討衆込之分、大奸小姦之分附り地下奸之事、見崩裏崩友崩開崩之分、小返守返總返之分、馬入乘込乘切之分、備之分、軍之役者分附り六衆行之事、武者分、高名之分附り實衆疑衆之事、足輕かくる上鐵砲かくるといふ分、後詰加勢之分、見せばた守旗之分、取くさる吸付付入之分、城攻之時之調、雜之調等二十三綱數十目を略說す。

くんえうじぎひご

訓幼字義批語　本六册　松宮　俊仍

訓幼字義の全編を通じて、評論したるものなり。一一本文を擧げて、自家の評論を下せり。

◎松宮俊仍の傳は「學論」の下にあり。

ぐんえきおさだめ

軍役御定　本一卷

德川幕府の定めたる武家從軍の制規なり。卽ち二百石武士以上十萬石の諸侯に到るまで各、侍・甲持・草履取、小荷駄鎖持・口付、挾箱を始として馬上、旗、弓、鐵砲の數等を配當したるものなり。末に「右軍役也定旗甲鐵砲馬具諸色人數、可相嗜、若軍役不足之族有之者急度可爲曲事右軍役之外其の身の嗜次第召連者可爲忠節者也慶安二年己丑(一六四九)十月」と記す。

くんえつしふれいしゆんくわ

訓閱集麗春花　本三卷

弓術の故實口傳諸注意を記したるものなり。足踏といふ事、胴構といふ事等より、まへきれの矢の事、うかぶ矢の事等に至る數十條を記す。

ぐんかんきよくえうしふ

軍艦極要集　本二卷

一番鐘、二番鐘、場中之高名、組討之高名其の他軍陣高名に關する要事を記述せり。編年詳ならず。

ぐんきういちりうしよ

軍弓一流書　本一卷

弓術故實の傳書なり。卷頭に此の書の傳來あり、曰く「抑傳聞軍弓之始處、八幡太郎源義家朝臣奥安部貞任御進發前九年後三年已上十二年之間以工夫述作、彼是八十一箇條之所撰出歟、其後諺永建武代々之士將傳之得其名、其後彼一卷所破龍覓八幡社頭也、應永之比左有在夢想之告、畠山左近將監持益、窺從拜見之、陶田三郎左衞門尉就秋傳之、其後文明年中當來庄和田成貴傳之」云々とあり。

ぐんきかうざうろく

軍器考增註　本一卷　伊勢　貞丈

據城布陣の法より、攻守進退の術に至るまで兵陣

新井白石の「本朝軍器考」中の誤謬を正し、闕漏を増補したるものなり。

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

ぐんきかうほせい

軍器考補正 寫十二卷 土肥 經平

新井白石の著「本朝軍器考」を補正したるものなり。各種門を分ち、毎卷目錄を掲げたり。明和六年己丑(一七六九)の著。

◎土肥經平の傳記は「甲冑威毛色目」の下に掲ぐ。

ぐんきせいさくべん

軍器製作辨 四卷

安達正寛の著「諺文兵御用」二卷と、松岡牡鹿輔の撰「本朝軍器攷圖後編玉箒」二卷とを合刻して今の名としたるもの。甲は兵法を論じ、乙は濃尾二箇國内なる神社所藏の武器を圖説したるものなり。文化九年壬申(一八一二)の出版にかゝる。

ぐんきてきそうせう

軍器摘要抄 寫四卷

安永六年丁酉(一七七七)二月二十八日の序あり。曰く「此の軍器摘要抄てふものは、新井筑後守君美が撰める軍器考に漏れたる説、またはあげても有るべき事、或は多きが中には誤れる事らの有るを、あらためさせ給ひて、其要をのみあげさせ給ふ所なり。しかりとはまうせど、なを御未定の御事なれば、御草稿をあつめ置き奉るのみ」とあり。書中の大概を知るべし。今見るところは伴直方の天保六年乙未(一八三五)十一月廿九日の寫本なり。著者の何人たるかを記さゝるは惜むべきなり。四卷一册に寫傳す。

ぐんきるゐかん

群記類鑑 寫五卷 野宮 定基

公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に、群記類鑑と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。此の祭記部水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には「群記類鑑、公事に關する類集なり。難波宗建の「考閒錄」に云々と云ふ記は公事部類なり、故中納言定基卿の類聚なり、祭記部出來、其の餘不成して終れり。水戸へ見せらる故に彼の光圀禮儀類典を作らるゝなり」云々といへり。「群書一覽」には

ぐんきろんべん

軍記論辨 寫一卷 磯野茂兵衛

ぐんこうどうもくろく

君公御藏目錄 寫二卷

櫃箱長持等器物の部合によりて順序排列し、凡そ一千餘部を收む。享和三年癸亥(一八〇三)六月、島居藤右衛門、山路喜市郎等と共に改定編纂する所なり。二卷一册に寫傳す。

ぐんさうづ

軍裝圖 寫一卷

諸種の旗幟、陣羽織、武具等を彩色圖したるものなり。何時何人の作なるかを詳にせず。

くんしふしふ

捃拾集 三卷 僧 海雲

著者の詩集にして、內題には「海雲禪師捃拾集」として、侍者箇中の編纂するところなり。長短凡て二百餘首あり。別に陽錄一卷あり、文化十三年丙子(一八一六)侍者瑞芳の編輯附加するところなり。凡て三卷三册に刊行せらる。

◎海雲の傳は「金城旅稿」の下にあり。

くんしふるゐせう

薫蕉類抄 二卷 藤原 定長

諸家薫物の諸方を記載したるもの。上卷に梅花、荷葉、侍從、菊花、落葉、黑方、坎方、薫衣香、增損化度寺、薄衣香、百和香、令人懷香、浴湯香、潤面脂、甲煎、延齡師衣香、香粉、燒香、印香、供養香、金剛頂經香、觀世音菩薩智滿香等を述べ、下卷に和合時節、煎甘葛、炮甲香、麝香、薫絹、薫後斤定、合篩、和香次第、合和、合春、理日數、諸香等を記す。「群書類從」卷三百五十八、遊戲部第一に收めたり。編述の年月詳ならず。

◎藤原定長は、幼より才名あり、叔父俊成に子として養はれ、中務少輔に任ぜらる。丹青の技を好み、又和歌に長じたり。後、俊成の子定家生るゝに及び、剃髮して寂蓮法師と號し、世を遁げて專ら和歌を嗜む。時の歌人顯昭と友たり。定家も夙に其の詠歌に敬服したりといふ。建仁二年壬戌(一二〇二)七月二十日入寂す。

ぐんじやうき

郡上記 寫三卷

濃州郡上は金森兵部少輔基近の采地なるが、寶曆年間定免檢見の事より百姓の强訴に及び、基近遂に采地を公收せられたる始末を記したるものなり

くんじゆせう

捃聚鈔 二卷

淨土眞宗の開祖親鸞上人が北越東關に於ける行化の蹟を記したる書にして、中御門天皇の享保二十一年丙辰(一七三六)に成れり。著者の名を記さず

ぐんしゆろくじせん

軍須六事箋 一卷 山脇 正準

兵具に關する諸說を抄錄したるものなり。通計六十五條、凡そ一千〇十八種あり。安政六年己未(一八五九)の自序ありて、同年發行す。

◎山脇正準のことは「譯海叢誌」の下にあり。

ぐんしよいちらん

群書一覽 六卷 尾崎 雅嘉

我が國書を類別列擧して、各編目大意等を記したるもの。卽ち國書の解題書なり。蓋し著者が三十年來渉獵したる國書中其の記憶に存するものに就きて紹介したる者なれば、敢て撰擇綱羅したるにあらず、卷一國史類に四十三種、神書類に百廿八、雜史類に五十三、卷二記錄類に五十一、有職類に百〇九、氏族類に五十六、字書類に四十二、往來類に十一、法帖類に七十。卷三物語類に百十四、草子類に三十七、日記類に十四、和文類に九、紀行類に二十八。卷四撰集類に八十九。卷五歌類に三十八、和歌雜類に二十三、撰歌類に二十二、歌學類に百二十五、醫書類に三十、教訓類に二十四、管絃類に二十五。卷六地理類に二十四、雜書類に四十六。雜書類に三十九、隨筆類に四十六。群書類從。以上六卷三十四類一千七百五十二種を掲げたり。內、版本一千七十七、寫本六百七十五。享和元年辛酉(一八〇一)の著、翌年發行。西村兼文の「續群書一覽」九卷あり。

ぐんしよきき

群書奇事 寫一卷 成島 司直

齊民要術、益部方略記、荊蠻新話、西溪叢話、西陽雜俎、五色線、誠齋雜記、輟耕錄、西京雜記、瑣言雜識、別集、貴耳錄、齊東野語、見聞後錄、茅亭夜話、春渚紀聞、夢溪筆談。以上の諸書中より、數十項奇怪の記に關するものを抄錄す。凡て漢文なり。

◎成島司直の傳記は「琉球錄話」の下にあり。

ぐんしよだいせつ

軍書題說 寫一卷 林 道春

元和元年乙卯(一六一五)の自跋中に「松平越州刺史源定綱公、軍書の編題を表出し、以て余に之れが說解を爲らんことを請ふ。兵は余が知る所にあらざるを以ての故に之れを辭す。然れども請うて止まず、是に於て經書を考へ、粗、記論をなして、間、復議するに已が意を以てす云々」とあり。其の內容と因由との大抵を知るべし。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

ぐんしよばつえい

群書拔英 寫一卷 藤原 隆祐

諸家の雜記中より、供奉、使節、舞人、先驅、扈從、童僕、服飾等の事を抄錄したるものなり。著者藤原隆祐は八條參議隆禪の男なり。

ぐんしよえうらん

和漢群書要覽 寫二十三卷 村井 量令

此の書は「和漢軍書要覽」と同物なり。表題は本書の如く「和漢」を割書にしたるものと二樣ながら行ほれたり。解題は「和漢軍書要覽」によりて「わ」の部に掲げたり。

此の凡例に曰く「此の編は十餘年來澁獵せし書籍中より、群書評論に渉るものを抄略せしものにして、眞僞得失及び替て携帯年代等の分明ならざるもの往々疫明するあり。然るに此の編、得るに隨て抄錄せしかば、新古雅俗相雜り、且、一書にして其の説數卷に散出するものあり。故に今、卷端に總目を擧げ國字を以て分類し毎編の下、卷數紙數を注して捜索に便ならしむ」と。二十三卷中最初三卷は日錄なり。文政十年丁亥(一八二七)稿凡て成る。

◎村井貫令の傳記は「切支丹御退治記」の下に掲ぐ

ぐんしよるゐじゆ

群書類從　五百三十卷　塙　保己一

我が古今の書册を集輯分刻したるものなり。或は二三葉、或は五七葉、或は二三十葉、四五十葉にて成れる小書册の、而かも未だ多く世に單行せられざるものを類聚したる一大叢書なり。其數一千二百七十三種なるを、或は合せ或は分ちて五百三十卷とし、六百三十六册(內一册は目錄)に作る。(近年經濟雜誌社に活刷する所は凡て洋綴十九册)而して收むる所の書册は、神祇、帝王、補任、系譜、傳、官職、律令、公事、裝束、文筆、消息、和歌、連歌、物語、日記、紀行、管絃、蹴鞠、饗宴、遊戯、飲食、合戰、武家、釋家、雜、の二十五類に部門し、左の書數を收めたり。(綴群書類從は其の題名の下に解題す)

神祇部(卷一より卷二十八に至る二十八卷)＝皇太神宮儀式帳、止由氣宮儀式帳、太神宮諸雜事記、神宮雜例集、太神宮例文、內宮長曆送官符、外宮嘉祿山口祭記、貞和御師記、內宮假殿遷宮記、治承公卿勅使記、正應公卿勅使參宮次第、神風抄、古老口實傳、諏訪大明神繪詞、諏訪大明神畫詞、諏訪上社物忌令、諏訪下社物忌令、諏訪神使御頭之記、諏訪旧事記、諏訪大祝職次第、諏訪系圖、諏訪宮神寶事目錄、諏訪社上下宮遷宮次第、諏訪社造營帳、諏訪社假殿遷宮記、諏訪社遷宮記、諏訪社神幸記、諏訪社祭日記、諏訪社頭之圖、諏訪社頭圖、諏訪社頭之圖、諏訪社頭圖、諏訪社頭圖、諏訪社頭

合社歌合、寶治院歌合、建長影供歌合、文永八月十五夜歌合、同亀山殿歌合、建治攝政家歌合、正應卅番歌合、永仁八月十五夜歌合、同當座卅番歌合、正安伊勢新名所歌合、同當座歌合、乾元仙洞歌合、同五月四日歌合、嘉元永福門院歌合、同十八番歌合、元亨外宮北御門歌合、真治新玉津島歌合、天授五百番歌合、應永内裏歌合、寶德仙洞歌合、同百番歌合、康正内裏歌合、文明親長卿家歌合、同江戸歌合、同七月七日七首歌合、同二十一番歌合、同九月盡歌合、同將軍家歌合、同十五番歌合、同殿中十五番歌合、文龜卅六番歌合、大永蟾川親孝家歌合、永祿八月十五夜三首歌合、同秋十五番歌合、文祿後陽成院歌合、近江御息所歌合、源順馬毛名歌合、一條大納言家歌合、西國受領歌合、經平六位家歌合、源大納言師房卿家歌合、播磨守雅房家歌合、祿子内親王家庚申夜歌合、同夏歌合、山家三番歌合、國信卿家歌合、雲居寺結緣經後宴歌合、爲兼卿家歌合、頓阿判卅番歌合、公武歌合、武家歌合、正廣判地下歌合、前十五番歌合、後十五番歌合、時代不同歌合、新時代不同歌合、定定家隆五十番歌合、建長閑窓歌合、弘長卅六人歌合、女房卅六人歌合、御裳濯河歌合、宮河歌合、慈鎭和尚自歌合、知家卿自歌合、後京極殿御自歌合、後鳥羽院御自歌合、定家卿自歌合、家隆卿自歌合、隆祐朝臣自歌合、永福門院御自歌合、慈照院殿御自歌合、慶孝法印自歌合、道堅法師自歌合、豐原統秋自歌合、十市遠忠自歌合、細川高國朝臣自歌合、元久詩歌合、建保詩歌合、建治現存卅六人詩歌合、康永詩歌合、守遍法親王御集、遍昭僧正集、素性法師集、夢窓國師集、慶滋法印集、慶孝法師集、登蓮法師集、後基法師集(稱林葉集)、寂然法師集、寂蓮法師集、俊惠法師集、源好法師集、元可法師集、宗祇法師集、荒木田守武集、荒木田守通集、荒木田守晨集、荒木田守德集、荒木田守建集、荒木田守世集、荒木田守富集、荒木田守武千句、荒木田守武獨吟千句、荒木田守武俳諧發句集、荒木田守武俳諧連歌集、荒木田守武俳諧百韻集、荒木田守武俳諧獨吟百韻集、荒木田守武俳諧獨吟千句、荒木田守武俳諧獨吟二百韻、荒木田守武俳諧獨吟二百韻、荒木田守武俳諧獨吟二百韻

御入講記、同假字記、延德御入講記、和具良半の御法、靈井の御法、萬の御法、魚山の御法、後光嚴院三十三回聖忌記、後土御門院十三回聖忌記、陽祿門院三十三回御忌記、仁和寺諸堂記、廣隆寺來由記、清水寺緣起、醍醐寺緣起、安樂光院記、栃伽藍記、栃修寺緣起、般舟三昧院記、南禪寺記、實聖禪寺造營記、東福紀年錄、萬壽禪寺記、鹿王院記、尊勝寺供養記、法勝寺供養記、無量壽院供養記、法成寺金堂供養記、同藥師堂供養記、東北院供養記、醍醐東寺塔供養記、建武元年東寺塔供養記、相國寺供養記、同塔供養記、大安寺伽藍緣起並流記資財帳、同寬平緣起、藥師寺緣起、東大寺大佛記、同造立供養記、同金銅記文、興福寺緣起、多武峯緣起、同略記、長谷寺緣起、當麻寺緣起、觀心寺緣起實錄帳、山門堂社記、叡岳要記、九院佛閣抄、延曆中堂供養記、天元同供養記、永正同供養記、弘安大講堂供養記、木下川藥師佛緣起、日光山中禪寺私記、讚岐國白峯寺緣起、筑前國聖福寺佛殿記、永正十八年高野山燒失記、近江國金勝寺官符、佛牙舍利記、鹿王院如意寶珠記、二荒山千部會緣起、日光山三月會緣起、慈惠大僧正遺告、阿彌陀院寶物帳、觀世音寺資財帳、左記、右記、鶴岡執行珍祐法印記、發心和歌集、法文百首和歌、〔以上七十九種〕

雜部〔卷四百四十六より卷五百三十に至る八十五卷〕一古語拾遺、日本紀異記、新撰姓氏錄、大鏡裏書、康平記、宇槐雜抄、逢辛故實抄、覺治二年記、永久元年記、醍醐寺雜事記、旭嶺年代記、文保三年記、元弘元年劔璽渡御記、光明寺殘編、關城書裏書、建武記、鳥嶺雜事記、祇園執行日記、醍醐雜抄、快元僧都記、御湯殿上日記、保歷間記、花營三代記、如是院年代記、編記、革命勘文、諸道勘文〔殘闕〕、長寬勘文、法曹類林〔殘闕〕、遐觴抄、代始和抄、禁祕御抄〔一名建曆御記〕、禁拔祕抄、名目抄、世俗淺深秘抄、類聚雜要抄、桃華蘂葉、弘安禮節、二判問答、三內口訣、六月大嘗次第、大嘗御裝束間事、大嘗雜事、嘉祿二年六月大嘗次第、建長六年十二月大嘗次第、十七箇條、清行朝臣意見十二箇條、文時卿封事三箇條、寬平御遺誡、九條殿遺誡、道賢上人冥途記、文明一統記、樵談治要、乳母草紙、身の形見、慈元抄、清少納言枕草紙〔異本〕隆房卿艷詞、長明方丈記、頓阿十樂記、類聚雜例、高倉院昇遐記、四條院御葬禮記、龜山院御葬禮記、伏見院御中陰記、後光嚴院御佛事記、後小松院崩御記、山の霞、山吹記、後奈良院御拾骨記、新待賢門院七々忌御願文、鹿苑院歿葬記、同追善記、鹿苑院殿を悼る辭、常德殿院殿逝記、萬松院殿穴太記、總見院殿追善記、朝の雲、宇奈比松、宗祇終焉記、吉事次第、吉事略儀、賀宴位宣旨記、諸陵雜事、文保記、永正記、腦極考、婚記、女御御產部類記、中宮御產部類記、治水二年中宮御產記、春華門院御百日記、延慶四年新院姬宮御行始記、北山女院御入內記、安元御賀記、後成卿九十賀記、稱名院右府七十賀記、清輔朝臣尚齒會記、〔以上百七十八種〕等なり。各書は各題名の下に解題せり。

◎嬉保已二は延享三年丙寅(一七四六)武州兒玉郡保木野村に生れ、姓は萩原、通稱は辰之輔、水母子と號せり。七才のとき明を失し、十歲のとき江戶に出で、雨富管一に就きて絃歌及び絃法を學びたれど成らず。却て文學を好めり。由て師其の好む所に從ひ其友を求め謁書に勵ましむ。是より師家を去りて一小屋に住し日夜那典を講究し、學業日に進み聲名大に揚り遂に勾當に任ぜられ檢校所を創設し總檢校に進む。諸家の記錄雜書の漸く遺沒し行くを嘆じ大に海內を搜索し、種類の如何に係はらず、古書と云へば、必ず之を購買し、懸く校訂して以て上梓せり。「群書類從」是れなり。此の他皇親諱略、花咲松、掛庭諱略、螢蠅抄、鶴林拾葉、

武家名目鈔、史料、耳食勞筆、水月文藻、松山集等を著す。仁孝天皇の文政四年辛巳(一八二一)九月、年七十六にて歿せり。

くんしんか　君臣歌　本一卷　細井　知愼

從來のいろは歌は、無意を示したるものにて、小學の最初に課するに、其の性質上より如何と慮り、自ら此の君臣歌を作り四十七文字に衝突なきを撰べるなりといふ。其の歌は「さみまくら、おやこいもせに、えとむれぬ、ねほりたうへて、すゑしげる、あめつちさかゆ、よをわびそ、ふれのろなは」なり。漢字もて記せば「君臣、親兄夫婦に兄弟群れぬ、非聽り田種へて、末繁ゆ、天地榮ゆ、世を勿詫、舟の楫繩」なり。田種への假名を誤り、しげると俗語を用ひ、世なわびそといふべきを世をといひし等は拙劣なり。此歌を記したる次に、此の歌を作れる趣意と各句の解とを掲げたり。これ享保五年庚子(一七二〇)八月十八日の事なり。

◎細井知愼の傳記は「韓使手口錄」の下にあり。

くんしんげんかうろく　君臣言行錄　本八卷　人見　節

德川家康、德川秀忠、德川家光三代間に於ける君臣の嘉言善行を輯錄したるもの。「家忠日記」「東武錄」「武德大成」「岩淵夜話」等の書より多くの私記等を參考して編輯したりといふ。編者は關東學士人見節、同人見沂、同人見洁、關東祕書監人見永等なり。

◎人見節の傳記は「韓使手口錄」の下にあり。

くんしんたうわ　君臣唐話　本一卷

君臣の關係を唱へたる唐話を假名交にて註解したるものなり。本文には一々唐本を附せり。

ぐんじんもんだふ　軍神問答　本一卷　伊勢　貞丈

兵家に祭れる軍神の事を問答的に辨明したるもの なり。安永十年辛丑(一七八一)の奥書あり。

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

ぐんせきそうげん　群籍綜言　五卷　中村　明遠

綜史諸子百家の書を列舉し。各書の淵源、眞僞、梗概等に關する論評を統括したるもの。其の自序中に「余講學之暇竊不自量、遡搜而披沙勞筆而擇金、採摭錯綜變次成編。凡分爲五卷、名曰群籍綜言。唯是舉二菜書之最可論者一而紀之。尙辨說之可及、遺漏不爲少矣」云々と云へり。寶曆九年己卯(一七五九)秋八月朔日の自序を附す。

◎中村明遠の傳記は「蘭窓雜錄」の下にあり。

ぐんせんき　軍船記　本一卷

軍船の由來より、諸具の備付、兵器の用法、船艦の操行等を記したるものなり。

くんそく　君則　本五卷

吉備勞烈公光政の嘉言善行を集錄したるものなり。其の言行能く聖賢の書意に適して君たる人の則ともなるべしとの意より君則と名けたりといふ

くんだいくわんいん　君臺官印　一卷

我が邦の書畫を三等に分ちて其の印章を列舉模刻したるものなり。卷末に「君臺觀左右帳」を載せたるより題名としたり。

くんだいくわんさいうちやうき　君臺觀左右帳記　一折

茶器に關する傳書なり。數十箇條內外貴品を擧げて記せり。卷末に永正八年辛未(一五一一)七月十六日眞相の奥書あり、予光堂松翁に授けるものなり。明治十七年博物館に於て植刻す。

ぐんだんもくきやう　軍檀目鏡　本一卷　楠　正成

著者の軍法書なり。記載最も簡古にして、卷末に「軍檀目錄者、神中祕軍功一の守、建武二年(一二九五)八月日正成」と書して華押あり。今見るところは文化十一年甲戌(一八一四)夏五月、小田原城主從四位下大久保加賀守藤原忠眞謄寫祕藏せるものに、文政九年濱松城主水野忠邦の跋したるを、天保七年丙申(一八三六)當井忠英の寫本せるものによるなり。

◎楠正成は河內の人、左大臣諸兄の後なり。世々金剛山の西に居る。小字を多聞といふ。長じて兵衛尉と爲る。元弘元年辛未(一三三一)後醍醐天皇、笠置

に北條高時の兵を避け給ふとき、徴されて行在に詣り、鞠躬盡瘁に殉ぜんことを誓ひ奉る。是れより赤坂に城き、千劔破に城き巧戰奇兵途に帝を兵庫に迎護し、前驅して京師に入れまつる。建武元年功を以て檢非違使左衛門尉を授けられ、河内守を兼れ、攝河泉の守護と爲り、河内大夫判官と稱し、專で記錄所寄人と爲る。延元元年足利尊氏謀を以て方り、新田義貞、結城宗廣等とこれを攻め、後また尊氏、直義等の大兵水陸並び上るに會し、議、朝廷の納るゝところとならず、途に攝津の湊川に戰死するに至る。是に於て、千正行を、櫻井驛に戒め、長じて國に殉じ、死あつて他なきを敎へ、勉めて河内に還らしむ。時に新田義貞三萬を以て尊氏の水軍にあたり、正成手兵七百を率ひて湊川に陣し、直義の陸軍五十萬と稱するにあたる。時に胸背敵を受け、最早事の成るべからざるを知り、弟正季と俱に軍中に突入し、最後の血戰十餘合に及び、遂に湊川の民舍に入りて兄弟相刺して死す。宗族十六人、從士五十餘人悉くこれに死す。時に延元元年丙子(一九九六)五月なり。正成年四十三。帝追悼して已まず、正三位左近衛中將を贈り給ふ。今上天皇正一位を贈り、湊川神社を別格官幣社に列し給ふ。

ぐんちうこじつ
軍中故實　和一卷

武器着用の事より、陣形戰謀の事に至る。但殘闕なり。「續群書類從」卷七百〇五武家部五十一に收む。

ぐんちうひつけい
軍中必携　和六卷

ぐんばふきえふしふ
軍法義藥集　和六卷

卷二に一本鎗可心懸の上二百三十條、卷二に其の下百二十條、卷三に武者詞の事百五十條、卷四に軍用の事八十條、卷五に物頭番奉行兼々可心得兵法の上二百四十七條、卷六に其の下二百五十一條を略說す。

ぐんばふこうじやしよ
軍法功者書　二卷　小笠原勝三

元和三年の自敍に「我が家の小子高遠に馳せて適從する所を知らず。故に群書の要語を採取し、蕞聞嘉言を綴り、其の旨を述得にし、其の詞を淺近にし、以て之れを輔錄し、名けて功者書といふ。卽ち功者關を拔くの義にとり、二三子をして遠邇高卑の道を知らしむるなり云々」とあり。其の大概を知るべし。一名を「武士道功者書」といふ。

◎小笠原勝三は昨雲と號す。小笠原左近將監貞正に從て兵法を學び藤原惺窩に就て文學を修め博覽强記を以て稱せらる。別に「諸家評定記」の著あり。

ぐんばふごくひでん
軍法極祕傳　七卷　竹中　重治

軍法故實を詳記したるもの。嘗て關白秀次近江中納言たりし時、命じて撰述せしめたるものなりといふ。卷後に「右は古軍法取捨び抜書して上聞に達し奉るべきの旨上書に就て斯の如し。已上竹中半兵衛判」とあり。慶安二年己丑(一六四九)刊本あり。

◎竹中重治は半兵衛と字す。美濃の人、軍略家を以て知らる。初め父遠江守と共に齋藤龍興に屬し、後織田信長に往きて秀吉に隸して軍務に參畫す。秀吉其の智慮を知て腹心となし、重治亦其の識量に服して赤心を盡す。爾來、諸所の軍事に於て功績著しく上下敬重す。天正七年己卯(一五七九)六月十三日卒、山營中に病卒す、年三十六。

ぐんばふふしんもんだふ
軍法不審問答　和二卷　荻生　茂卿

軍法上の不審につき荻生茂卿が門人岡田宮汎の問に答へたる往復書なり。凡て十條あり。岡田宮汎は守山の藩士にして徂徠の門人なり。彦愛兼山と號し後剃髮して逃軒と號す。寬延三年庚午(一七五〇)沒す。

◎荻生茂卿の傳記は「譚園祕錄」の下に揭ぐ。

ぐんばふ

六十日に分排し、正月より十二月に至る草木の季節を記したるものなり。

◎北野鞠場の傳記は「秋野七草考」の下にあり。

ぐんばふきえふしふ
軍法義藥集　和六卷

卷二に一本鎗可心懸の上二百三十條、卷二に其の下百二十條、卷三に武者詞の事百五十條、卷四に軍用の事八十條、卷五に物頭番奉行兼々可心得兵法の上二百四十七條、卷六に其の下二百五十一條を略說す。

ぐんばふこうじやしよ
軍法功者書　二卷　小笠原勝三

元和三年の自敍に「我が家の小子高遠に馳せて適從する所を知らず。故に群書の要語を採取し、蕞聞嘉言を綴り、其の旨を述得にし、其の詞を淺近にし、以て之れを輔錄し、名けて功者書といふ。卽ち功者關を拔くの義にとり、二三子をして遠邇高卑の道を知らしむるなり云々」とあり。其の大概を知るべし。一名を「武士道功者書」といふ。

◎小笠原勝三は昨雲と號す。小笠原左近將監貞正に從て兵法を學び藤原惺窩に就て文學を修め博覽强記を以て稱せらる。別に「諸家評定記」の著あり。

ぐんばふごくひでん
軍法極祕傳　七卷　竹中　重治

軍法故實を詳記したるもの。嘗て關白秀次近江中納言たりし時、命じて撰述せしめたるものなりといふ。卷後に「右は古軍法取捨び抜書して上聞に達し奉るべきの旨上書に就て斯の如し。已上竹中半兵衛判」とあり。慶安二年己丑(一六四九)刊本あり。

◎竹中重治は半兵衛と字す。美濃の人、軍略家を以て知らる。初め父遠江守と共に齋藤龍興に屬し、後織田信長に往きて秀吉に隸して軍務に參畫す。秀吉其の智慮を知て腹心となし、重治亦其の識量に服して赤心を盡す。爾來、諸所の軍事に於て功績著しく上下敬重す。天正七年己卯(一五七九)六月十三日卒、山營中に病卒す、年三十六。

ぐんばふふしんもんだふ
軍法不審問答　和二卷　荻生　茂卿

軍法上の不審につき荻生茂卿が門人岡田宮汎の問に答へたる往復書なり。凡て十條あり。岡田宮汎は守山の藩士にして徂徠の門人なり。彦愛兼山と號し後剃髮して逃軒と號す。寬延三年庚午(一七五〇)沒す。

◎荻生茂卿の傳記は「譚園祕錄」の下に揭ぐ。

ぐんばふりやくかうぎ
軍防令講義　入卷　栗原　信充

「令義解」中なる軍防令を講解詳註したるものなり

◎栗原信充の傳記は「鞍鐙新書」の下にあり。

ぐんはうれき
群芳暦　一卷　北野　鞠塢

古事記、萬葉集、詩經、本草綱目其の他の諸書にある草木の漢名、和名及び俗稱等を正して一年三百

ぐんはう
軍器戰法等を說明す。其の要目を示せば、卷一を火藥編。卷二を火技編(甲火技資料、乙發火料製造、丙彈種)。卷三を戰略編(甲川兵法、乙三兵　射法、丙三兵軍行の經度、丁接戰通法)。卷四に(接戰通法中大砲軍及び編兵(甲第非矢部歩隊、乙第非矢部騎隊、丙三軍障法、丁三兵各地用法)。卷五に(編兵中戊備兵陣地戰法、己圍里接戰、庚河戰)。卷六に(辛外戰堡障を築備す、壬外營通令)等にして細目數十あり。何時何人の編なるかを知らざれど、安政三年丙辰(一八五一)以後の作ならざる事は反證あり。

ぐんばい
軍配　和一卷

甲冑弓馬出陣の用意諸件、及び出陣備陣の時の膳部等を略記す。末に「七月二十八日春信判」とあり。

ぐんばいはうづ
軍敗方希圖　和一卷

敗軍の時の配膳上の希圖。小笠原流の食禮故實なり。服の骨法の事、以下武家故實數十條を附載す。

ぐんぱふりやうかうぎ
軍防令講義　入卷　栗原　信充

「令義解」中なる軍防令を講解詳註したるものなり

◎栗原信充の傳記は「鞍鐙新書」の下にあり。

ぐんぱふれき
群芳暦　一卷　北野　鞠塢

古事記、萬葉集、詩經、本草綱目其の他の諸書にある草木の漢名、和名及び俗稱等を正して一年三百

ぐんぴんのこゝがき
軍陣之聞書　和一卷

文明七年乙未(一四七五)軍中の武具、用法、出入等に關する武法なり。寬文十二年壬子(一六七二)中川昌可の奥書に「右此一卷者從小笠原備前入道宗信、同持長相傳、多賀豐後守高忠、上原豐前守高家相續口授之書也。外見可被禁世漏者也」とあり。「續群書類從」卷七百〇五、武家部第五十一に收めたり。

ぐんてんしゝ
郡典私志　和二冊　中村平左衛門

筑前福岡領の制度に係るものを編輯す。田畠の事、本高並に分米の事、物成の事、本免の事、四ツ高の事、以下數十條、二冊に富傳す。明治二十一年福岡縣企救郡長より、獻本するところによる。

くんてんふくど
訓點復古　二卷

我が訓讀の、てにをはに基き、假名文を以て、漢文訓譯點の事を辨正したるものなり。其の用意一齋點を駁したるが如し。天保六年乙未(一八三五)著者の凡例、丸山信、男鐸の序及び新井文饒の跋あり

◎日尾瑜は儒學者なり。字を德光、號を荊山、又、至誠堂といふ。寬政元年己酉(一七八九)武藏秩父郡日尾村に生る。幼より書を讀み、又、文を屬す。里人神童を以て稱す。長ずるに從て江戸に出で、龜田興に仕ふ。博聞精考、樂、大に通み、名、頗る陽ゆ。著書數十部あり。安政六年己未(一八五九)八月十二日年七十一にて病歿す、江戸谷中本通寺に葬れり。

ぐんぱい
軍配　和一卷

甲冑弓馬出陣の用意諸件、及び出陣備陣の時の膳部等を略記す。末に「七月二十八日春信判」とあり。

ぐんぱいはうづ
軍敗方希圖　和一卷

敗軍の時の配膳上の希圖。小笠原流の食禮故實なり。服の骨法の事、以下武家故實數十條を附載す。

ぐんぱふ

ぐんぱふふしんもんだふ
軍法不審問答　和二卷　荻生　茂卿

軍法上の不審につき荻生茂卿が門人岡田宮汎の問に答へたる往復書なり。凡て十條あり。岡田宮汎は守山の藩士にして徂徠の門人なり。彦愛兼山と號し後剃髮して逃軒と號す。寬延三年庚午(一七五〇)沒す。

◎荻生茂卿の傳記は「譚園祕錄」の下に揭ぐ。

ぐんぱふりやうかうぎ
軍防令講義　入卷　栗原　信充

「令義解」中なる軍防令を講解詳註したるものなり

◎栗原信充の傳記は「鞍鐙新書」の下にあり。

ぐんぱふれき
群芳暦　一卷　北野　鞠塢

古事記、萬葉集、詩經、本草綱目其の他の諸書にある草木の漢名、和名及び俗稱等を正して一年三百

ぐんぴんのこゝがき
軍陣之聞書　和一卷

文明七年乙未(一四七五)軍中の武具、用法、出入等に關する武法なり。寬文十二年壬子(一六七二)中川昌可の奥書に「右此一卷者從小笠原備前入道宗信、同持長相傳、多賀豐後守高忠、上原豐前守高家相續口授之書也。外見可被禁世漏者也」とあり。「續群書類從」卷七百〇五、武家部第五十一に收めたり。

ぐんてんしゝ
郡典私志　和二冊　中村平左衛門

筑前福岡領の制度に係るものを編輯す。田畠の事、本高並に分米の事、物成の事、本免の事、四ツ高の事、以下數十條、二冊に富傳す。明治二十一年福岡縣企救郡長より、獻本するところによる。

くんてんふくど
訓點復古　二卷

我が訓讀の、てにをはに基き、假名文を以て、漢文訓譯點の事を辨正したるものなり。其の用意一齋點を駁したるが如し。天保六年乙未(一八三五)著者の凡例、丸山信、男鐸の序及び新井文饒の跋あり

◎日尾瑜は儒學者なり。字を德光、號を荊山、又、至誠堂といふ。寬政元年己酉(一七八九)武藏秩父郡日尾村に生る。幼より書を讀み、又、文を屬す。里人神童を以て稱す。長ずるに從て江戸に出で、龜田興に仕ふ。博聞精考、樂、大に通み、名、頗る陽ゆ。著書數十部あり。安政六年己未(一八五九)八月十二日年七十一にて病歿す、江戸谷中本通寺に葬れり

ぐんようごころえのき
軍用心得之記　寫二巻　覧　正職
名題所表の内容を供ふ。著者が嘗て某兵學者に紙して記し置きたるを、多賀三太夫常政といふもの、著者の孫清正に請うて謄寫したる由、明和二年乙酉(一七六五)の奥書にあり。著者覚正職は勘左衛門と通稱し、軍職故事に通じたり。

ぐんようだいにやたまのまき
軍用第二矢玉巻　寫一巻
弓、鐵砲の二器を戰場に用ふるに於て其の利害を論じたるものなり。凡そ三十五箇條より成る。著者年代等詳ならず。

ぐんれいげんしよき
軍令嚴書記　寫一巻
徳川將軍の軍令條々を集錄したるもの。相州御進發の節御軍令條々、爲京勝御征伐會津御發向之節御軍令條々、大阪裏御進發之節御軍令條、御上洛供奉中の御法令條々、御上洛に付御書付之事條々、就御上洛絹布着用御法度覺、將軍家御代々御上洛之記(慶長九年甲辰家康の上京より、寛永十一年甲戌家光の上京に至る)等なり。

ぐんれいせう
軍禮抄　寫一巻　伊勢　貞丈
軍禮の法式一切を詳説したるものなり。安永六年丁酉(一七七七)の奥書あり。
◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

ぐんれいのうちぬきがき
軍禮書中抜書　寫一巻
軍禮書中より、鋪革之事、鞭之事の二箇條を抄出考説したる數枚の寫本なり。

け

けいあんえどかがみ
慶安江戸鑑　一巻
慶安年中江戸に於ける武家の諸官衙、列侯、諸役人等の交名所領等を列記したるものなり。

けいあんおふれがき
慶安御觸書　一巻
慶安二年己丑(一六四九)幕府が諸國の代官に與へたる政十三年庚寅(一六五〇)岩村藩に於て出版し領内へ頒配したるものなり。

けいあんぐわんねんほつけはつかうき
慶安元年法華八講記　寫一冊　冷泉　爲景
慶安元年戊子(一六四八)徳川家康三十三回忌に付きて法華八講を催したる時の記なり。即ち日光に於ける祭禮の儀式より千部經執行の事、禁裏より法華經下賜の事、其の他等を詳錄す。

けいあんげんぶんき
慶安見聞記　寫五巻
慶安四年辛卯(一六五一)由井正雪、丸橋忠彌等謀反を企てたることの始末を記したり。「慶安太平記」の原本なるべしといふ。天和二年壬戌(一六八二)なる自序あれど、其の作者を詳にせず。

けいあんげんろくかんのき
慶安元祿間記　寫四冊
慶安四年辛卯(一六五一)より、元祿十二年己卯(一七〇三)に至る日記なり。何人のと云ふことを知らざれど、旗下家人の噴嘩始末等を記すもの多し。

けいあんししふ
桂庵詩集　一巻　木村　俊篤
著者の詩集にして、寛政二年庚戌の自序あり。並年出版す。門人田代允懐の編輯する所なり。
◎木村俊篤は平安の人にして、彦基と稱し桂庵と號す。著書は本書の外に、忠經精解、百樂集等あり。

けいあんぜんひろく
慶安前祕錄　寫十二巻
由井正雪が祖先の來由より、正雪生出のことまでを詳しく記したり。世に流布せる「慶安太平記」の前編と相似たり。

けいあんたいへいき
慶安太平記　五巻

慶安四年辛卯(一六五一)由井正雪、丸橋忠彌等謀反を企てたる時の顛末を記したるものにて、就中正雪の一生を最も詳錄して弘く世に流布せり。

けいあんちうおそばしうでうもく
慶安中御側衆條目　寫一冊
慶安四年辛卯(一六五一)十二月二十八日將軍昵近の侍役員へ示したる訓誡條目なり。

けいあんにねんごさんけいにつき
慶安二年御參詣日記　寫二冊
慶安二年己丑(一六四九)四月、徳川家綱日光へ參詣したる事の始末を記せり。

けいあんぶかん
慶安武鑑　一巻
大名一萬石以上のもの、姓名、官位、石高等を列記したるものにて、慶安四年辛卯(一六五一)五月出版するところなり。

けいあんよねんえどまんぶわうふくしよ
慶安四年江戸駿府往復書　一巻　浮島　正房
由井正雪の謀反に關して江城執政者と駿府在城衆と往復したる書狀數通を集めたるものなり。慶安四年辛卯(一六五一)七月二十三日の書より、同九月二十二日の狀に終る。
◎浮島正房は後に慶平といふ。徳川氏の臣たり。享保十七年壬子(一七三二)駿府在番の時の記錄中より摘出して此の編を成せりといふ。

けいあんよねんえどまんぶわうふくしよ
慶安四年江戸駿府往復書　一巻　浮島　正房
慶安四年辛卯(一六五一)由井正雪、丸橋忠彌等謀反を企てたる時の顛末を記したるものにて、就中正雪の一生を最も詳錄して弘く世に流布せり。

けいあんろく
慶安錄　寫十二冊
慶安元年戊子(一六四八)より、同四年に至る記錄なり。武家の法政事實を主と記せり。

けいゐぶんりうしふ
涇渭分流集　一巻　僧　了譽
淨土宗の教義に就て、善光寺の眞處といふ僧が「三心具不生の義を主唱せしを、僧慈觀が問難應答せしが、更に斯の著者が評論して、三心(至誠心、深心、回向發願心)具足すれば、必らず淨土に往生することを得る旨を述べて、淨土宗的傳の教意を記したるものなり。應永六年己卯(一四〇五九)の著作に係る。
◎了譽の傳は「釋淨土二藏義」の下に在り。

けいいんしふ
桂陰集　二巻　渡　忠秋
著者の歌集なり。數十首あり。慶應三年源包智の跋中に「師のみたまには、此の道の此のかみにおはする八田大人に見せまゐらせけるに、陰たかき園の桂の花の香はと諷ひ添へて返したまはりけるを、いとうれしう思ひたまふるまゝに、やがて其のころほへを摘みとり、桂陰と名けて、源実夫、藤原信行、平千胤、源有顆、源花洲等にはかり、かりにさくら木にやどして社友に頒ちぬ」云々とあり。元治元年甲子(一八六四)三月三日松浦道輔の跋もあり。明治二年出版せ。
◎渡忠秋は近江の人にして、通稱新三郎と云ひ、京に出で香川景樹に學び、後、江戸に住し宮内省に官たり。楊園また桂陰と號す。夙に皇國の古道を尊び、桂園の門人となる。又雅頌の餘風を慕ひ、山水の情況を愛して、吟出するところ多し。著書には天草管見錄、歌史、須磨記後案、讀史有感集、かた絲、嵯峨志、先入抄、妍哉抄等あり。明治十四年辛巳(一八八一)歿す、年七十。

けいうんしふるゐだい
桂雲集類題　六巻　望月　兼友
著者の家集「慶澤軸藻」に世の詠み歌をも混へて類題としたるもの。もと「慶澤軸藻」と號けたりしを、集中の月の歌の「よしやふけ秋の草木のあらし山、月の桂で雲にしをる」といふ歌を、飛鳥井雅章いたく褒賞したりとて今の名に改めたりと。天明年中著者の百回忌にあたりて有賀長收といふもの校正出版す。
◎望月兼友の傳は「慶澤軸藻」の下にあり。

けいうんはふいんしふ
慶運法印集　一巻　僧　慶運
著者の家集。春夏秋冬戀雜の分ちて凡そ二百數十首を掲ぐ。「雜書類從」巻二百六十六、和歌部第百二十一、家集部三十九にも入れたり。
◎慶運は僧淨辨の子にして和歌を善くし法印に叙せらる。後光嚴院「新千載和歌集」を撰せしめらるに方り慶運の歌四首を入れらる。慶運喜びて獲麟藤原爲定に謝す。後、頓阿の歌同集に十餘首入れらると聞きて大に怒ばず私に己が歌を刪除せりといふ。

けいうんはふしひやくしゆ
慶雲法師百首 ㊀一巻 僧 慶雲

立春「けふしこそ嵐にまやく篠のはの、深山の霞む春は來にけり」より、神祇「伏て思ひ起て祈るも君が代を、よるひる守る神や知るらん」に至る百首なり。延徳三年癸巳(一三七三)九月十五日寫本の奥書あり。「續群書類從」卷三百九十五、和歌部第三十に入れたり。

けいうんもんだふ
溪雲問答 ㊀二巻 中院 通茂

著者の歌學に關する雜說を門人松井幸隆の筆記したるものなり。通茂は溪雲院と號す。故に書名に冠したり。

◎中院通茂は權大納言通純の子にして官内大臣に至れり。夙に和歌を好みて遂に此の道に長ず。嘗て德川幕府に幽居せられしことありしも逃懶の詠の爲めに赦されて歸京したりとさへ傳ふ。著書は別に「色紙形奥書」あり。水戸光圀と同時代の人なり。

けいえいやわ
形影夜話 二巻 杉田 玄伯

醫家の用心に關することを記したる隨筆なり。享和二年壬戌(一八〇二)君夫人の產所に宿直して、徒然なるまゝに、鏡に向ひ我が影法師と共に問答したる事に託して、假名文に書き綴れり。著者時に年七十なりきと。文化六年己巳(一八〇九)男杉田勁序を附して、翌年刻成す。

◎杉田玄伯の傳記は「後見草」の下にあり。

けいえんぐうき
嚴燕偶記 ㊀一巻 增島 固

著者の漢文隨筆。其の小序に曰く、「余頃患目聲、乞暇進句、頤發閑暇、偶思疲昔所見聞、命筆隨面錄、時適初夏、杜鵑日夜鳴叫不止、因名以嚴燕偶記、嚴燕杜鵑蓋名也。文化乙丑(一八〇五)五月初に、致思堂主人識」とあり。同年友人鳴司直の跋あり。

◎增島固の傳記は「讀易小言」の下にあり。

けいえんしふ
桂園集 一巻 香川 景樹

著者桂園の歌集。春夏秋冬戀雜に分ちて數百首を取む。文政十一年戊子(一八二八)平清樹の序ありて編輯の由來を記す。天保十一年庚子(一八四〇)出版せる細字横綴の小本なり。

◎香川景樹の傳記は「桂園一枝」の下に出せり。

けいえんだん
藝苑談 一巻 清田 絢

文藝修養上の要件を說き、かねて青年者の輕薄に馳することを戒めたるものなり。明和五年戊子(一七四八)江村綏の序あり。

◎清田絢の傳記は「孔雀樓集」の下にあり。

けいえんちくふ
桂園竹譜 ㊀五巻 岡村 遜

橘の品類を集めて圖說したるものなり。年月を明記せざれども、是れまた文政十一年戊子(一八二八)以後の作なるべし。

◎岡村遜の傳記は「桂園竹譜」の下にあり。

けいえんぐうき
嚴燕偶記 ㊀一巻 增島 固

著者の漢文隨筆。其の小序に曰く、「余頃患目聲、乞暇進句、頤發閑暇、偶思疲昔所見聞、命筆隨面錄、時適初夏、杜鵑日夜鳴叫不止、因名以嚴燕偶記、嚴燕杜鵑蓋名也。文化乙丑(一八〇五)五月初に、致思堂主人識」とあり。同年友人鳴司直の跋あり。

◎增島固の傳記は「讀易小言」の下にあり。

けいえんしふ
桂園集 一巻 香川 景樹

著者桂園の歌集。春夏秋冬戀雜に分ちて數百首を取む。文政十一年戊子(一八二八)平清樹の序ありて編輯の由來を記す。天保十一年庚子(一八四〇)出版せる細字横綴の小本なり。

◎香川景樹の傳記は「桂園一枝」の下に出せり。

けいえんだん
藝苑談 一巻 清田 絢

文藝修養上の要件を說き、かねて青年者の輕薄に馳することを戒めたるものなり。明和五年戊子(一七四八)江村綏の序あり。

◎清田絢の傳記は「孔雀樓集」の下にあり。

けいえんしふ
桂園集 一巻 香川 景樹

著者桂園の歌集。春夏秋冬戀雜に分ちて數百首を取む。文政十一年戊子(一八二八)平清樹の序ありて編輯の由來を記す。天保十一年庚子(一八四〇)出版せる細字横綴の小本なり。

◎香川景樹の傳記は「桂園一枝」の下に出せり。

けいえんいつし
桂園一枝 二巻 香川 景樹

著者の詠歌を春夏秋冬戀雜等に排列して凡を數百首を輯めたり。光格天皇の文政十一年戊子(一八二八)編輯せられたる「桂園一枝拾遺」二巻あり。次に解題す。

◎香川景樹は桂園、又、東攜亭と號す。明和五年戊子(一七六八)周防島取に生る。荒井鎭之助と稱す。幼より頴敏にして歌文書籍を好み、儒を堀南湖に、歌を清水浜臣に學び、後京師に遊學し終に香川景柄の養子となり、寛政八年丙辰(一七九六)家を繼ぐ。晩年居を岡崎に定めて大に門人を集め、歌學の講筵を張る。來學するもの益多く、其の歌風は古今後撰等に取れり。著書は數百首あり。著者の歿後嘉永二年己酉(一八四九)門人小澤蘆庵等の編輯、同年七月平忠秋の序あり。明治二十五年活刷せらる。

◎香川景樹の傳記は「桂園一枝」の下にあり。

けいえんいつししふいさいひやう
桂園一枝拾遺再評 一巻 仲田 顯忠

小林歌城の「桂園一枝拾遺評」を更に評して辯護し是正したるものなり。「桂園叢書」第三集中にあり。

◎仲田顯忠は江戸の人。通稱を藤右衛門といひて海野遊翁の門人なり。晩年心を景樹に寄せ、「桂の落葉(初編は天保十四年十二月に、二編は嘉永三年に著す)」を著したることあり。小林歌城とは友人なりきと。

けいえんいつししふいひやう
桂園一枝拾遺評 一巻 小林 歌城(カジヤウ)

「桂園一枝拾遺」を評したること名の如し、例へば「のどかなる人の心をしるべにて、ばるもや空に立ちかへるらん」の「やは」の下にあるべきなりとやうに指評す。嘉永六年癸丑(一八五三)十二月十四日の著。「桂園叢書」の第一集中にあり。

◎小林歌城の傳は「歌城歌集」の下にあり。

けいえんいぶん
桂園遺文 ㊀二巻 香川 景樹

著者の遺文、卽ち歌學に關する批話評論など教科の材料にもと思ひて、時にふれ記し置きたるものを後に清水濱光といへる人が安政六年己未(一八五九)といふに編輯し、翌萬延元年庚申の年新鐫す。

◎香川景樹の傳記は「桂園一枝」の下にあり。

けいえんきつふ
桂園橘譜 ㊀一巻 岡村 遜

けいえんりやくき
慶延略記 ㊀六册

慶長十年乙卯(一六〇五)より、延寶八年庚申(一六八〇)に至る法政日記なり。第一册に慶長十年より寛永十七年まで、第二に同十八年より明暦元年まで、第三に同二年より萬治三年まで、第四に寛文元年より同十年まで、第五に同十一年より延寶五年まで、第六に同六年より同八年までを掲ぐ。年月日に隨ひて幕府の要事を記錄せり。

けいえんろく
藝苑錄 二巻 滕 繼文

古今事物の紀原事實等を考證したるもので、書名は陶淵明の歸去來辭に、「園日涉以成趣」の語に基けり。卷一國號、地名、官名等の目より卷十二、天狗、狗神等の目に至る凡て百數十項、漢文にて記す。由來北山、岡本士普の序あり。文化四年丁卯(一八〇七)十二月出版。

◎村瀨之熙は京師の儒者。君績と字し、嘉右衛門と稱し、棲宇、又、神州等の號あり、土岐中書とも稱せり。幼より詩を善くし、又武梅龍に從て古學を主張し、又、暇に乘じて書籍を學ぶ。晉て秋田侯の爲めに聘せられ賓師の待遇を受け、後致仕して京に還り子弟を敎授す。著書には、論語集義、學庸集義、周易拾象稿、萬象一旨、楓樹詩鈔、楸亭集等あり。文政元年戊寅(一八一八)二月二十三日歿す、享年七十餘なりと。

けいおうじつかぜつく
慶應十家絕句 二巻 內田 脩

當年の詩人、大沼枕山、小野湖山、佐藤牧山、村上嶺洲、依田百川、鷲津毅堂、鈴木松塘、長谷川比溪、關雪江、依錦溪の十家の絕句小詩百餘首を編輯したり。首に明和六年己丑(一七六九)柚木太芝の序を、末に同年伊藤聖謨の跋を附したり。「文豹一斑」の中に收む。

◎清田絢の傳は「孔雀樓集」の下にあり。

るものなり。慶應二年丙寅(一八六六)長谷川昆溪の序あり、同三年版行す。著者内田俶は武蔵の人、公均と號し、弁吉郎と稱す。

けいかうゆてん
瓊港諺典　木四卷　松宮　俊仍

唐土の商船、長崎來着の時の往復書なり。原文譯文共に併せ錄す。故に内題には「和漢寄文」とあり。享保十一年丙午(一七二六)五月長崎瀛章撰の序あり
◎松宮俊仍の傳記は「學論」の下に見るべし。

けいかくしんそくしやうぎ
警覺心續生義　一卷　僧　實詮

眞言宗教義の一端に就て記述したるもの。端書に云く「有客問眞言大師住心論及寶鑰等於第九十住心交際、引守護經等、以證釋迦菩薩掌、油麻諸佛警覺、入密成佛之義。然他家學人皆疑、斥之、亦密學者論其所警覺者階位與端紛転」と、是れ本書の由て起りし所以なり。享保五年庚子(一七二〇)「紅爐一唾編」と合梓せられたり。
◎實詮は眞言宗の僧にして別に「紅爐一唾編」の著あれど未だ其の詳を得ず。

けいがくぶんかう
經學文衡　三卷　伊藤　長胤

主張の古義に遵ひ、經の義を醇ぬるために、宋元明諸儒の述作中、其の經義を裨助すべきものを蒐集したるもの。卷一に、胡直の「太極圖說」より、胡一桂の「易文言辨」に至る六編。卷二に田汝成の「詩序」より、林希逸の「廣爽齋十辨」に至る七編。卷三に呂大圭の「春秋五論」より、唐順之の「論晉趙盾」に至る五編を收め、編毎に著者自家の按を加へたり。享保十九年甲寅(一七三四)伊藤長衡の序あり。同年平安に出版す。
◎伊藤長胤の傳は「蟠桃小錄」の下にあり。

けいかさふだん
桑下雜談　五卷　陳　珍齋

天神靈石、老婦知氣、女子有勇、天狗授術、病惡名醫〔以上卷一の目錄〕以下二十目、世の雜談を假名書せり。自序、及び寶暦五年乙亥(一七五五)菅原好榮の序あり。同年發行す。

けいがしやしんさう
慶賀寫眞草　二卷　川原　慶賀

我が草類を集めて寫生したるもの。其の中長崎來泊の洋人シーボルドの囑に應じて寫し出でたるもの多しと。天保七年丙申(一八三六)上梓す。
◎川原慶賀は肥前國長崎の人にして繪事の能者なりきといふ。

けいかんだうそうひつ
敬簡堂叢筆　木一卷

著者の假名圖筆なり。殊に內外古今の雜記を抄出せり。

けいかんろく
繫閒錄　木二十四卷　大野　忠夫

武具服器を考說圖解したるもの。二百八十五部の書を引用して、七百二箇條を擧げたり。序目一册を添へ二十五册に寫傳す。文政二年己卯(一八一九)秋九月、門人園幡の士遠藤思忠の序あり。
◎大野忠夫は文化十三年丙子(一八一六)六月二十九日痢死したるものなりといふ。

けいぎたいい
經義大意　一卷　八田　知紀

學問の要とする所は經義を明らむるに在りとて和漢經義の大要を辨明し、湯武禪讓の事などを論じ、皇道と佛教とが君臣の大義に於て大に異なる所あるよしを論斷せり。元治元年甲子(一八六四)菅原好榮の序文あり。
◎八田知紀は薩鹿兒島の藩士。通稱を喜左衛門、號を桃岡といふ。香川景樹の流を掛て和學を研究し、兼ねて經學を講ず。維新の際國事に盡し、後宮內省文學御用掛となる。明治六年九月二日七十五にて歿す。同廿六年八月特旨を以て從五位を贈らる。著書には古今集註補、その外草、經義大意、小門の汐干、都鳥集、白雲日記、桃岡家訓、桃岡雜記等あり。

けいぎよくわかしふ
瓊玉和歌集　木十卷　宗尊親王

鎌倉將軍宗尊親王の家集なり。卷上下、夏、秋上下、冬、戀上下、雜上下と排序す。文永元年甲子(一九二四)十二月九日眞觀といふもの仰を奉して撰集したる由を記せり。
◎宗尊親王は後嵯峨帝の第二子にして、寛元二年親王となり、建長四年四月鎌倉に至りて征夷大將軍となる。文永二年中務卿に任じ一品に敍せらる。同年北條時宗の爲めに京師に還り六波羅に居らしめらる。後剃髮して行證と號す。夙に和歌を好み樞

大納言爲家に就て學ぶ。本書瓊玉和歌集は卽ち其の集なり。文永十一年甲戌(一九三四)七月、三十三にて薨ぜらる。

けいぎよしゆひんつもく
鯨魚種品圖目　木一卷

鯨類十一種の圖を載せたるものにして、初めに艇、劒、銛の三圖あり。斯の書は南紀熊野浦漁者太地某の所藏せるものにて、享保初年の編纂なりと傳ふ。

けいぎよせんゑづき
鯨漁船繪解　木一卷

名の示せる如く鯨漁船の圖解を載せたる書なり。著者の氏名及び年月は未だ詳ならず。

けいくわんさん
刑科彙纂　木三册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、年度は不詳なり。

けいくわんしき
慶寛私記　木二卷

慶長五年庚子(一六〇〇)より、寛政十二年庚申(一七九二)に至る凡そ二百五年間の略日記なり。年月日の順に繫けて、法政に關する要件を記錄す。上卷に慶長五年より、享保元年四月まで、下卷に同五月より寛政十二年十二月までを掲ぐ。

けいくわんまんぴつ
桂館漫筆　一卷　原　瑜

經緯道學に關する著者の漢文漫錄なり。寶暦年間「桂館野乘」と共に公にせらる。
◎原瑜の傳記は「過庭紀談」の下に出づ。

けいくわんやじやう
桂館野乘　一卷　原　瑜

歷史上の事實に關し明君賢士等の事迹を記したる隨筆なり。漢文にて記せり。寶暦九年己卯(一七五九)著者本敎書の序あり。
◎原瑜の傳記は「過庭紀談」の下に出づ。

けいげいせいづ
鯨鯢正圖　木一卷

鯨類十一種の圖を載せ、解說はあるものとなきものとあり。終りに網、標、銛の圖說をも載せたり。享保六年辛丑(一七二一)の著作に係る。著者の本名明ならず。只、學人松芝子」と記せり。

けいけつるかい
經穴彙解　八卷　原　昌克

俞穴の誤謬を訂し、諸書に考徵して、經穴諸法を辨註せり。卷一に折量分寸法、頭面部、項頸部。卷二に肩部、背腰部、卷三に胸部、腹部、側脇部。卷四に手部。卷五に足部。卷六に經脈流注部等を詳論す。享和三年癸亥(一八〇三)の自序、文化四年丁卯(一八〇七)丹波元簡の序等あり。
◎原昌克の傳記は「醫事小言」の下にあり。

けいけつさんえう
經穴纂要　五卷　小坂　元祐

卷一の手大陰肺經、牛陽明大腸經、足陽明胃經、足大陰脾經、手少陰心經等より、卷五の頭上諸脈に至る凡て三十五項より成る醫學書なり。文化七年庚午(一八一〇)秋七月の自序を附す。著者小阪元祐は號昇と字す。鵜山の侍醫たり。

けいけつみつごしふ
經穴密語集　三卷　岡本　爲竹

漢醫家に傳襲せる奇經八脈の事を詳細に解說したるものにして往々圖解をも加へたり。正德五年乙未(一七一五)の版行に係れり。
◎岡本爲竹の傳は「醫學講談發端辨」の下にあり。

けいげんいかう
桂源遺稿　二卷　源　興文

著者の詩集。上卷を凌霄閣集として、五言律詩四十六、五言排律二、七言律詩四十九、五言絕句四十二、七言絕句八十八首。下卷を蕉夢庵集として、蕉夢庵記附五言絕句十五、蕉夢庵說、五言律詩三十六、五言排律四、七言律詩二十八、七言排律一、五言絕句二十三、七言絕句九十七首を收む。享和元年辛酉(一八〇一)柴邦彥の序、同年李順の跋あり。孫從五位源立之子綏の編輯するところなり。著者源興文は子華と號し、桂源老侯と稱せり。

けいげんき
慶元記　木二十卷

慶長元年丙申(一五九六)より元和三年丁巳(一六一七)に至る德川氏の軍事記錄なり。殊に大阪役前後の事情に詳なり。

けいげんぐんえうろく
慶元軍要錄　八卷　津田　明馨
慶長元和間の實戰に於ける軍方職法を論述したるもの。試に二卷の目錄を擧ぐれば、卷一に兵學須知論、制將編、將吏編、兵士編。卷二に甲冑要法編、甲を取て高組に掛る事並に圖、四牛差物寸法の事、揣の絲の事、甲冑着用論、甲冑利害の論、甲冑着用の歌、保倍の事、並に圖式、旗制法の事、並に圖、旗差の者具足の圖並差樣の事、惟幕制法の事並に圖、幕串の事並に圖、幕幅重樣の圖等より、卷八武功論に終れり。文久元年辛酉(二五二一)林學齋の序あり、次に鬼一法眼の肖像といふ臨模三枚を掲げ、同二年壬戌著者共の由を記す。
◎津田明馨は高崎の人にして、重誠と稱す。此の書は男眞太郎明常の校して文久三年新鐫す。

けいげんこもんじょ
慶元古文書　三十卷
官　攝
慶長元和間に於ける諸家の古文書を輯錄したるものにして一名を『諸家感狀記』といふ。其の數凡そ七百餘通あり。『續史籍集覽』の中に收めたり。

けいげんしふいたいせい
慶元拾遺大成　本朝二十五卷
大阪冬夏兩陣の始末を旨と記せり。第一卷太閤政所淀君の事より、第二十五卷後陽成院崩御の事、後水尾帝卽位の事等に至る。第一卷の末に、岡部忠秋の『雜波戰記』、大道寺友山の『落穗集』等に漏れたるものを拾集したる由を記せり。

けいげんつがん
慶元通鑑　本朝一册
慶長三年戊戌(二二五八)より、元和二年丙辰(二二七六)に至る德川氏の記事なり。最初秀吉薨去、大老中老五奉行の事等より、上杉景勝の野心、石田三成の顚末、家康薨去、日光山に移葬の事等を記す。

けいこうきぶん
慶弘紀聞　十卷　安田　照矩
後水尾天皇の慶長五年庚子(二二六〇)より、孝明天皇の弘化三年丙午(二二〇六)に至る十三代二百四十七年間の記なり。故に從來『十三朝紀聞』と呼びたりしを、近年今の名に改めたり。階錄三卷にて弘化三年五月に續きて文久二年壬戌(二二二)の事に至れり。同年冒名者の序、及び安政三年西浦德風の後敍あり。著者安田照矩は「今日抄」と稱して弘化三年の事に至れり。同年冒名者の序、及び安政三年西浦德風の後敍あり。著者安田照矩は和泉樣と稱せり。

けいこうしふ
鷄口集　二卷　醉古堂撫風
自作の序文を編輯したるものなり。延曆十一年(或は二十一年ともいふ)姓眞勢朝臣を賜はる。夙に文武の業を嗜み兼ねて書法音樂等に精し。弘仁十年敕を奉じ藤原冬嗣、良岑安世等と『日本後紀』を監修す。同十二年從三位中納言となり、後累遷して正三位に進み右近衞大將に任ぜられ大納言となる。本書『經國集』は淳和帝の敕を奉じ東宮學士滋野貞主等と共に撰するところなり。天長七年庚戌(一四九

我が神代の大要を略記したるもの。其の例言に曰く「世の學をなすもの多くは唯漢籍を讀て皇典を讀まず、是れを以て上世神皇の道を知らざるもの亦少からず。今神代の大要、外國來往の概略を錄し、以て纂錄稽古の階梯となす。仍て題して稽古要略と云ふ。其の漢文を用ふるものは、儒流の人或は我が古言を見ることを欲せざる故なり」と。安政三年丙辰(二五一六)出版せらる。
◎碧川好尙の傳は『神武治革考』の下にあり。

けいこくしふ
經國集　本朝六卷　良峯　安世
上天皇より下庶民の子女に至る諸家の詩賦策等を集めたるもの。もと二十卷なりしが、いつしか佚失して、今世に遺るところは卷一賦十七首。卷十詩九、樂府五十九。卷十一詩十、雜詠五十六。卷十三詩十二、雜詠四十七。卷十四詩十三、雜詠五十三。卷二十策下二十六首等なりといふ。本書の編纂には滋野貞世、南淵弘貞、菅原清公、安野文繼、安倍吉人等預る。天長四年丁未(一四八七)敕を奉じて作るところなり。『群書類從』卷百二十五、文筆部、第四に收めたり。
◎眞峯安世は桓武天皇の皇子なり。延曆十一年(或は二十一年ともいふ)姓眞勢朝臣を賜はる。夙に文武の業を嗜み兼ねて書法音樂等に精し。弘仁十年敕を奉じ藤原冬嗣、良岑安世等と『日本後紀』を監修す。同十二年從三位中納言となり、後累遷して正三位に進み右近衞大將に任ぜられ大納言となる。本書『經國集』は淳和帝の敕を奉じ東宮學士滋野貞主等と共に撰するところなり。天長七年庚戌(一四九

○七月、四十六にて薨ず。

けいこくほんぎ
經國本義　三卷　三木　廣隆
殖産興業に關する著述なり。驛傳荷物賃目の事、農業人夫所作の定限、土質改良の事、作物肥培の事、移民勸農の事、度量權衡の事、其の他田制祿法の古例等を記す。文政年間の作なるを歿後、卽ち慶應二年丙寅(二五二六)に至りて門人山田勝理等が著者の遺稿として編輯するところなり。
◎三木廣隆は甲斐國の人にして、吉田家門下の神道家なり。

けいこさつぺん
稽古雜編　一卷　仁井田好古
周尺編、井田編の二編より成る。經史中より抄出して評論を加へたるものなり。
◎仁井田好古は伯信と字し南陽と號す。紀州の儒者なり、論語古傳、周禮圖說、毛詩補傳、紀伊國續風土記等を著す。嘉永三年庚戌(二五一〇)七十九にて歿せり。

けいこひゃくしゅ
經語百首　本朝一卷　北村　季文
經書の語句を題に詠出せる和歌なり。例せば、學而時習之の題にうすき氷とけにし日より朝な〳〵、つめども盡きぬ水の深井に、有朋自遠方來の題に、「白雲の八重山越えてくる人は、心のみちの通ふなりけり」、人不知而不慍の題に、「わか爲めの春をたのしむ聲すなり、聞く人またぬ溪の鶯」等の如し。

天保十三年壬寅(二五〇二)の自跋、同四年林檉宇の序あり。
◎北村季文は江戸の歌人にして、通稱を平吉といひ、再昌院と號せり。幼より博覽強記にして、漢學に精しく、季吟以後中興と稱す。文政八年法眼に敍せられ、天保九年法印となる。晉て『續朝年中行事』二卷を著し、幕府に進めて賞を受けしことあり。また『梅花百首』を著せり。嘉永三年庚戌(二五一〇)二月九日、七十三歲にて歿せり。

けいざいえうりゃく
經濟要略　本朝四卷
經濟上の要件を說示す。佐藤信淵の『經濟要錄』七卷の中、第二第三、第四、第五の四卷中より抄出して評釋增減を加へたるものなり。著作の年月は記されど或は天保年間のものならべしといふ。

けいざいえうりゃく
經濟要略　本朝二册　佐藤　信淵
經世上殖産興業に關する切要事件を記したるもの。總論及び創業、開物、富國、垂統の四編より成る。文政五年壬午(二四八二)著者上總の冬吉村にありて、門人橋本延壽の爲に、先哲叢談遺漏等に六十五卷、及び『經濟總錄』六十卷中より抄出したるものなりといふ。
◎佐藤信淵の傳記は『經濟要錄』七卷の下に出でたり。

けいざいさんえう
經濟纂要　本朝二十卷　青木　敦書
我が邦物產の原因、並に採取法等を辨明したるもの。其の綱を擧ぐれば、卷一總論、創業編。卷二開物編。卷三金銀、金銀、金器。藥石、雜石、礦器、造石、硝鹽、固石、礦礫、土器。卷四百穀、諸菜、蔬實、醞造、諸糕、諸絲、衣服。卷五染料、藥物、脂膏、諸紙、漆蒔、材木、雜器、漆器、筵席、名產、雜產。卷六漁撈倒魚、家禽、野畜、家獸水獸、製調、脂膏、皮革、羽毛、骨角、藥物、玩物、雜產。卷七富國等なり。文政十年丁亥(二四八七)の著。安政六年己未(二五一九)始めて活版に附し、明治九年丙子(二五三六)再版す。
◎佐藤信淵は有名なる經濟家なり。後桃園天皇の安永二年癸巳(二四三三)正月出羽國雄勝部西馬音內前郷に生る。家、世々醫を業とし、農政の學を修めしより、傳へて信淵に及び、五世二百餘年にして、家學を大成せり。通稱は百祐、字は元海、椿園、龍蹇、蒿松齋等の號あり。幼にして江戸に出で、宇田川氏に從ひ、關學究理の說を學び、兼て經史を涉獵せり。夙くより四方の志あり、到處、氣候を驗し、土性を辨じ力を農產に竭し講論に遊びて治水殖產海防等の策を呈し、皆偉績を奏さゝるは無かりき。孝明天皇の嘉永三年庚戌(二五一〇)正月六日江戸に歿せり、年八十二。

けいざいこほんろん
經濟困本論　本朝一卷
勤農の法策に就きて詳述したるものなり。年代詳ならず。著者は上總國山邊郡某農夫なりといへど、其の姓名を詳にせず。

唐以來に於ける經濟的治術に關する事實制度等を輯錄考證したるもの。前集、續集、後集、の三より成りて、前集には田畝、區地、丈量、其の他の事を記し、續集には十二分野、開荒田法、均賦、古今錢貨、上中戶之徙、貯穀救饑、其の他の數十項を掲げ、後集には十干、十二支、生肖、三十六禽、六甲、五子、以辰名、曆法、一里、十一長、稻品、夏稅、秋苗、其の他の事項幾多を載せたり。而して前集は元文元年丙辰(一三九六)に、後集は同三年三月に、續集は同十一月に作らる。

◎青木敦書の傳記は「邑陽漫錄」の下にあり。

けいざいしふい

經濟拾遺 卷三卷　熊澤　伯繼

經濟的治術を假名書にしたるものなり。凡そ二十條よりなる。卷首に「治國平天下の別卷、和漢に通ずべからず、古今に渉るべからず、今を救ふ活法なり。其の人を待て行はるべし。故に秘して傳へず」と云へり。本書は一名を「大學或問」といふ。

◎熊澤伯繼の傳記は「孝經外傳或問」の下にあり。

けいざいじふさんろん

經濟十三論 卷一卷　井上　潛

治國政術に關し十三目を擧げて論じたるもの。立教、尚賢、納諫、服制、建都、制祿、擇官、內政、勸農、禁游、貴穀、防夷、兵備等なり。全編漢文にて記す。

◎井上潛は字を仲龍といひ、四明狂客、又、佩弦園と號す。越後の人にして戶口氏を稱したりしが、東都に出で井上閑峰に學びて文章に長じ、遂に其の養嗣となり、井上を冒し、養父に繼ぎて岡山侯の儒官となり、晩年世子の侍讀となり寵眷を受けたり。著書は經濟十三論の外、論語鈔解、孝經鈔解、經義諮說、稗田野史、牛渚唱和集、大東食貨志、佩弦園文集、四明小稿等あり。文政二年己卯(一八一九)二月二十一日歿す、享年九十有七。

けいざいしょ

刑罪書 卷一軸

德川時代の火罪、磔刑、梟首、穴晒等の仕樣手續、及び其れに要する役人の數、費用の額等をば委しく記明したるものにして、往々書圖を以て示せり。司獄上考古の資料となすべし。

けいさいしんぶんちうふろく

敬齋箴分註附錄 一卷　山崎　嘉

張敬夫の「主一箴」を讀み、其の意義を作り、齋壁に書して自警に供したるもの。此の箴は凡て十章より成り、首章より六章までに持敬の目を云ひ、七章は前六章を結びて事に從ふといふもの、必事ある意を明かし、八章九章には不敬の害を言ひ、十章には全編を總括して、訓誡を盡せり。本書は朱子以下數儒の集め分註附錄して作れるものなり。此の箴は凡て十章より成

◎佐藤坦の傳は「愛日樓文錄」の下にあり。

けいさいせんせいぶんしふ

細齋先生文集 卷二冊　淺見　安正

著者の詩、文、和歌等を雜輯したるものなり。編纂の年時を知らず。

◎淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

けいさいだいひろく

刑罪大祕錄 卷一卷

德川氏時代の刑罪法を圖說したるものなり。牢問の圖、拷問の圖、海老責の圖、敲仕方の圖等より、御仕置者御樣等御入高に至る十九條あり。

けいさいていえう

經濟提要 一卷　佐藤　信淵

農政の基本、富國の計、國勢擴張の秘策等を論ぜり。精しく版圖を製し、審に氣候を察して、明に土性を辨ずるの三事、水戶を平げ、農業を誘ひ、山澤を開き、河海を理め、百工を興し、商賈を轉ずるの六要等を述べ、更に萬貨轉輸の事を論ず。文政十一年戊子(一八二八)薩州の重臣猪飼央の爲めに著し與ふるところなりといふ。

◎佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

けいさいひしよ

經濟祕書 卷一卷　佐藤　信淵

復古法概言、理財法大意とし、國土を經營して財

貨を殖し、人民を救ふべきことを略論したるものなり。弘化四年丁未(一八四七)正月の作にかゝる。

◎佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下を見よ。

けいざいべん

經濟辨 卷一卷　松平　定信

救急說、清國說、歸士者用論等を說述したるもの也

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下に掲ぐ。

けいざいもんだふひろく

經濟問答祕錄 三十卷　庄司　考祺

國家經濟の要事に就きて答論したるもの。全編を、經濟要論、學校考、法令考、國用考、田賦考、倉道部、海港部、正權考、武備考、刑法考等に分ち論ぜり。就中刑法考は專ら漢土の事蹟を集錄したるものなり。天保四年己巳(一八三三)の作にかゝる。著者庄司考祺は肥前の人なり。

けいざいろく

經濟錄 十卷　太宰　純

我が國經濟の一般を論じたるもの。卷一經濟總論。卷二禮樂。卷三官職。卷四天文、律曆、地理。卷五食貨。卷六祭祀、學政。卷七章服、儀仗、武備。卷八法令刑罰。卷十無爲易道等より成る。引證するところは多く支那歷代の事績に係れり。享保十四年己酉(一七二九)著作す。

◎太宰純は有名なる儒者にて信濃の人なり。字を德夫、通稱を彌衞門といひ、紫芝園等の號あり。少時父に從て江戶に出で、稍長して出石侯に仕へ、後辭任して徂徠の門に學び大に古學を研究す。徂徠殁してはその業を擴充して名大に著る。天文、律曆、算數、經濟、音韻、書法、醫法、佛學等を研究して最も博識なり。又最も實行を重じ直言を以て時弊を論ず。天下皆其の人物に敬服す。著すところは本書の外に經濟錄拾遺、群書雜抄、詩論、文論、獨語古訓、論語外傳、孔子家語增註、易道撥亂、周易反正、詩書古傳、朱子詩傳祥言、產語、易占要略、獨語、春秋三家異同、春秋擬題例、老子特解、修刪何彌陀經、和讀要領、二王外紀、和漢帝王年表、聖學問答、六經略說、徘品通考、親族正名、春秋曆條諸、正誣斥非、辨道書、鬼婚傳、國宇書、新撰庶詩、六體集、紫芝園文集等あり。延享四年丁卯(一七四七)五月晦日、六十八にて歿す。

けいざんこうおんしいか

景山公御詩歌 卷一卷　德川　齊昭

文政天保嘉永間の詠作にかゝる詩歌數百首を收む各首當時の事情を記して序とせり。

◎德川齊昭の傳記は「食菜錄」の下にあり。

けいざんこきき

慧山古規 卷一卷

慧日山東福禪寺行令規法なり。開祖聖一國師の遺法なり、施餓鬼文に至る十五條の古規を記せり。

けいざんしふ

桂山集 二卷　川井　立牧

著者の詠草を集めたるなり。末に春曙百首を附し、前に自序を添へたり。寶曆年中に、男立齋の出版したるものなり。

◎川井立牧は浪華の人にして桂山と號す。有賀長伯に學び、和歌を以て世に知らる。本書「桂山集」は其の家集なり。

けいざんせんせいふじんげん

景山先生不盡言 卷四卷　屈(クツ)　正超

人君の修養、漢土文學の修業法を總說したるものなり。四卷書き續けにして殆ど段落なく、諸書の次第方法等を說けり。

◎屈正超は儒學者にして、字を君振、號を景山といふ。屈杏庵の兒孫にして、家世々藝藩の儒臣たり。

げいし

鯨志 一卷　山瀨　春政

鯨の種類を列擧し、其の形狀性質等を記したるもの。寶曆八年戊寅(一七五八)の著作に係る。

◎山瀨春政は紀伊の人にして、通稱を梶取屋治右衞門といひ、號を如水軒といふ。稻若水の門人にて、物産に精しく醫術藥舖等を業とせり。

げいしうついつくしまかつせんしよもつ

藝州嚴島合戰書物 卷一冊

嚴島に於ける毛利氏と陶氏との合戰記なり。天文の末大內義隆に屬し、山陰山陽の數國を切り取りて藝州吉田城に住せる毛利元就が、其の主大內義隆を亡ぼして嚴島に遁れたる陶尾張守全姜を討滅したる顚末を記したるものなり。

げいしかう

鯨史稾 卷三卷　大槻　清準

鯨魚に關する諸件を集錄せるものなり。卽ち鯨の名稱品類の區別を始じめ、產地、捕鯨の器械、納屋の裝置、漁船捕鯨の狀況等をば圖を添へて說明せり。當業者の參考に供すべし。

◎大槻清準は略して準といひ、字を平泉、號を子繩翁と稱す。奧州磐井郡山目村の人なり。幼にして志村東藏に從學し、後ち昌平黌に入りて柴野、古賀、尾藤三博士の敎授を受け、苦學數年にして同舍長に擢らる。漸く經濟吏務に通じ、藩の儒員となるに及び周旋して途に學館養賢堂を建設し庶務を開きて資途に充つ。藩其の功を稱して祿三百石を與へ番頭の班に列す。養賢堂の學頭たる事、實に數十年なりき。著すところ、別に鯨海游志、漫遊隨錄、講堂小志等あり。嘉永三年庚戌(一八五〇)正月十七日、七十八にて歿す。

けいしさうがくいん

經史莊嚴音　一卷　僧　文雄

經史諸書の字音を正したるもの。通論、點發字等を附錄とし、寶曆四年甲戌(一七六四)龍公美の序を附したる稀珍書なり。

◎文雄の傳記は「古今插圖問合圖」の下にあり。

けいしよふ

繼志集　初一卷　伊王野資興

自家祖先來の盛衰變遷を記したるもの。祖先の偉功を稱し、家門の英名を揭ぐるを以て、孝は善く人の志を繼ぐといふ語に基きて繼志集と名く。寬文十三年癸丑(一六七三)武陽田叔璞といふ人の漢文序あり。

◎伊王野資興は奈須興一宗隆の後裔にして、資直の子なり。

けいしやうせつ

聚僻詳說　初三冊　太田　元貞

易經繫辭傳を註解詳說したるものなり。本文より一字下げて按語を附し註釋す。

◎太田元貞の傳は「周易詳說」の下にあり。

けいしじゆんらんしふ

京師巡覽集　十五卷　僧　大愚

著者が京都巡覽の時詠出せる詩文を編輯したるもの。卷一に擾情四十句、平安城吟八百句を揭げ、卷二園韓神より卷十五靜原山に至る四百〇七箇所、四百三十七首、文二首歟一首等なり。寬文十三年癸丑(一六七三)の自跋、及び僧大愚の序あり。

けいじたふもん

聚僻答問　一卷　一堂

易經繫辭傳につき、問に答へて詳說したるものなり。著者の口授を、南紀高島正邦の筆記して、假名書にしたるものなり。嘉永七年甲寅(一八五四)の版なり。

けいじつぶんかうろく

頤目文耕錄　初十卷

大岡出雲等寶曆七年丁丑(一七五七)に至る間に、王祭禮之節、御目付宮城謀前守を呵事並宮城當寅の年御役願差出候事、附松平右近將監裁斷の事より、鄙十卷頃目世上愚痴の辨に至る諸侯の雜事を記し、十卷一册に寫す。明治八年內務省の寫本するところなり。

けいしばくろん

經史博論　四卷　伊藤　長胤

經史に關する著者の論文六十餘編を輯め、更に之れを、述經旨、辨史綱、崇聖賢、論天人の四部に分てり。經書を論し、人物を評し、古制を講し、性理道德を談ずる等の類あり。寶永七年庚寅(一七一〇)に成る。

◎伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下に出せり。

けいじやうげんごしゆくわつようづ

形狀言語尾活用圖　一卷　梅園　春男

形狀言語尾の變化に五種あることを論じて表示したるものなり。元治元年甲子(一八六四)の作。木居豐穎、錦織景徵、櫻井花滿等の序を附し、明治七年甲戌(一八七四)出版す。

◎梅園春男は明治二十四年辛卯(一八九一)十一月二十日歿す、年七十四。

げいしやめしだされふかきつけ

藝者被召出書附　初一册

延寶八年庚申(一六八〇)より、正德三年癸巳(一七一三)に至る間に、新に召し出されたる、儒醫、神道、天文等に關する人々の姓名石高等を記したり。

けいしよえうごかい

經書要語解　初一卷　林　道春

四書五經及び諸子の書中より、其の要語を抄集して平假名文の解釋を附したるものなり。著者の奧書あれど年月を記さず。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

けいしよしゆくわせうかう

奚所須寫小稿　一卷　竹村　算

著者の詩集にして、其の師林逃齋の撰輯するところなり。百餘首あり。天保十二年辛丑(一八四一)林鞭宇の序、同壬寅友人安積信の序、その他韓人の序等あり。

◎竹村算は江戶の人にして字は伯實、通稱は海藏、號を悔齋といふ。林逃齋の門に學び、詩を以て顯る。性豁落不羈、風に棄侯に仕へ、藩政の橫恣を憤り遂に自殺す、時に年三十六。後三十年にして逃齋此の詩集を發行す。

けいしろんえん

經史論苑　一卷　伊藤　長胤

經史に關する學論にて、治經八論、讀史五論、品士四歎、續大學辨、師說等の目を收めたり。安永八年己亥(一七七九)五月十七日、伊藤喜湖の序あり。

◎伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下にあり。

けいしんそうる

聲籟叢策　初十四卷

諸家の家訓、壁書、制詞、願書、敎諭、申渡等訓誡に關する書類を叢集したるものなり。主として德川氏時代のものにて數百條あり。十四卷四册に寫傳せり。

けいずるき

桂葉記　初一卷

長雅の「桂葉記」の中より儒藥の事數枚を抄出したるものなりといふ。

けいせいがくろん

經世學論　二卷　鈴木　善敎

附言中に「古今の學を論次し、聖人の敎萬世を經て人倫に切に、時務に急なることを述べて此の書を編せり」といへり。卷の上に總論、文、經學。卷の下に史學、文章、詩歌、小學、時務等の目を立て、論述す。安政三年丙辰(一八五六)の自序、同四年井上秀後の跋、高松緯如の跋等あり。同年出版す。

◎鈴木善敎は江戶の處士にして、叔德と字し、德之助と稱し、益堂と號せり。本書の外に「三河雜記」の著あり。

けいせいきよきじけんしさつせう

府志縣志等より抄錄せしものにして、參考の一助となるべし。

經正居記事府縣志雜抄　初一卷

けいせいしやうねんねんしふ

瓊齋社友年々集　二卷　野之口正武

編者瓊齋社友、及び先輩の和歌を四季雜等に類聚したるもの、賀茂眞淵、村田春海、野之口隆正、堀延年、植手隈、河合淇雅、香坂保明、藤原美知等以下數十人凡て一千餘首を集めたり。此の集殊に繼歌を省きて取らざりしは、初學者の謬本に充てたればなりといへり。當時に有難き心がけなり。嘉永元年戊申(一八四八)八月の編者の凡例、弘化四年樓申續書具集の序、父隆正の跋あり、嘉永二年十二月出版す。著者野之口正武は野之口隆正の子にして、正太郎と稱し、瓊齋と號す。

けいせいひさく

經世秘策　初二卷　本多　利明

殖產礦業、運輸等經世當國の策を講ぜり。第一燔礦の條に、巖石噴礁を破碎して水陸の行路を開くべき事其の他。第二諸金の條に、鑛山業を興し、金貨濫出を防ぎ、家屋に石柱銅瓦を用ふべきこと其の他。第三船舶の條に、產物の運漕交換其の他。第四に屬島の開業に關する事等を論述せり。寬政年間の作なり。

◎本多利明の傳記は「西域物語」の下にあり。

けいせいぶんぺんせう

經世文編抄　二十卷　齋藤　正謙

清書「經世文編」八十卷中より、其の事項の我が國に切要なるものを撰びて抄出し、且每編の末に評語を附したるものなり。嘉永元年戊申(一八五〇)八月の編。

◎齋藤正謙の傳記は「伊勢國司記略」の下にあり。

けいせきはうこし

經籍訪古志　初三册　海保　元備

宋元傳來の古本、朝鮮傳來の刊本、又は我が慶長以前の古寫本等を蒐する家々社寺を詳にしたるもの

なり。小島宝素、丹波藏庭等の追次編輯したるを、元備は主として文章を批評したりといふ。安政三年丙辰(二五一六)の自序あり。

◎海保元備は南總武射郡北清村の人。儒を以て知らる。別名を紹之、字を卿老、又春農、通稱を章之助といひ、漁村、儒經盧等の號あり。夙に學を好み句讀な父恭齋に受け、年二十四の時江戸に出で柳河劉と共に太田錦城の門に學び業大に進む。諸侯の爲に招聘せられ、後幕府醫員直舍の儒學となして處士を教授せしむ。慶應三年丙寅(二五二六)九月十八日病歿す、年六十九。

けいせつよわ

螢雪傳話　五卷　香月　啓益

天地の開闢、蚩尤の運行、地震の事、萬物雖長の事、耳目手足左右強弱の事等を問答體に記したる隨筆なり。享保十一年丙午(二三八六)の序あり。

◎香月啓益の傳記は「牛山活套」の下にあり。

けいちうふじひやくしゆ

契沖富士百首　一卷　僧　契沖

著者が富士山を詠み出でたる百首和歌なり。今見るところは其の自筆を模寫して石に刻し以て世に行へるものなり。

◎契沖の傳記は「萬葉代匠記」の下に出す。

けいぢりんえう

輕重倫要　寫二卷

享保寛政間に於ける諸法政書留伺届指令書類を輯錄したるものなり。

けいちやういらいおつだひしよ

慶長以來御手傳書　寫一册

慶長十一年丙午(二二六六)江戸城の普請に於ける諸大名の手傳より、文化二年乙丑(二四六五)東海道筋川普請に於ける諸手傳等を記す。

けいちやうえどづ

慶長江戸圖　寫一折

卷端の圖考に、此の圖は慶長十三年戊申(二二六八)の作なるべきことを考證せり。城外諸屋敷を記したる小圖なり。

けいちやうえどづかう

慶長江戸圖考　寫一卷　中神　守節

先著「慶長年中江戸圖」につきて考證したるもの也

◎中神守節の傳は「慶長年中江戸圖」の下にあり。

けいちやうかざぐんき

慶長加賀軍記　寫一册

慶長五年庚子(二二六〇)關原陣の前、金澤の城主羽柴利長味方として出馬し、同國大聖寺の城に籠在の山口玄蕃頭を攻討したる始末を記し、更に關原陣の來由より、利長子孫加增所繁等までを記す。

けいちやうぐんき

慶長記　寫三卷　板坂　卜齋

德川家康に關する日記。享保六年辰丑(二三八一)某の序あり。「卜齋日記」と同書にして、多少前後錯雜の差異あり。內閣文庫に特別書として所藏せり。

◎板坂卜齋の傳記は「板坂記」の下にあり。

けうちやうぐんき

慶長軍記　寫本十九卷　植木　悅

慶長の軍事を、故老に聞き、雜記に見て、編輯せる軍記なり。關白豐臣秀吉御治世事より、內府公儒佛二教崇敬事に至る數十項あり。即ち文祿年中より慶長十九年甲寅(二二七四)の事實に至り、就中關ケ原戰爭を詳悉し、他は頗る略記なり。寛文八年戊申(二三二八)の自序を附す。今見るところは十九卷四册に寫傳し、外に追加一册を添へたり。

◎植木悅は東林山人と號す。著書は本書の外に、「職原鈔引事大全」あり。

けいちやうぐんきふろく

慶長軍記附錄　二卷

上卷は豐臣家の崇性事績及び當時諸侯諸士の分限石高等を詳記し、下卷に德川家康の年譜及び關八州領有時分に於ける諸士の分限等を掲げたり。本書は前掲「慶長軍記」と云ふもの十九卷に附錄したること本文を見て知らる。

けいちやうけんもんしふ

慶長見聞集　寫本十卷　三浦　茂信

古今風俗の變遷、當時の偉績奇功、其の他和歌寓言等の教誡の資たるべきものを集む。最初「見聞集」を本名としたれば同書の下に詳解す。

けいちやうけんもんしよ

慶長見聞書　五卷

慶長二年丁酉(二二五七)正月秀吉の伏見築城の事に起り、元和元年乙卯(二二七五)大阪役の始末に終る雜錄なり。但し慶長六年以下元和元年に至る十五年間の事實は後人の附加したるものなるべしといふ。

けいちやうけんもんしよろうぶん

慶長見聞書漏分　寫一卷

慶長十一年丙午(二二六六)より、同十九年に至る記事にして「慶長見聞記」の遺漏を補へる意にて漏分とは名けたるなるべし。中神守節の校正するところなり。

けいちやうけんもんろくあんし

慶長見聞錄案紙　寫二卷

慶長六年辛丑(二二六一)より、同十六年に至る見聞日記なり。上卷には六年より十年までを記し、下卷には十一年より十六年までを錄す。これまた中神守節の校正するところなり。

けいちやうじふくねんおほさかごぢんかきぬき

慶長十九年大阪御陣書拔　寫一卷

名の示す如く、慶長十九年甲寅(二二七四)大阪陣の記中より、其の要を拔書したるものなり。主として任官に關する人員統計的の事を記せり。

けいちやうじふくねんき

慶長十九年記　寫一卷

一名「諸士平談」と同物なり。同書の下に其の性質を知るべし。

けいちやうじふさんねんがらはふらくせんく

慶長十三年柏柄法樂千句　寫一卷　肇如

慶長十三年丙申(二二六八)十月十四日、鎌倉雀柄天神の宮前に於て、羽柴越前守正宗が興行せる千句にして、乘如の獨吟なり。

けいちやうじふねんき

慶長十年記　寫一卷　中臣　祐範

慶長十年乙巳(二二六五)の記に、併せて元和五年己未(二二七九)の記をも掲げたり。

◎中臣祐範は大和國奈良春日の正預從四位上にして、「元和五年記」を書きたる時は歳七十八なりき。

けいちやうじふねんごさんだいごきやうれつ

慶長十年御參內御行列　寫一卷

慶長十年乙巳(二二六五)四月二十八日、東都新御所より德川秀忠參內する時の行列を表記したるものなり。

けいちやうじふねんき

慶長十九年記　寫一卷　中神　守節

卷上は石田三成異圖の事より關原合戰に及び、卷下に三成召捕られ諸將恩賞の事より、秀忠將軍宣下の事に及べり。

けいちやうせうろく

慶長小錄　寫一册　林　信篤

德川家康時代の戰場記事の家傳せるものを抄錄して將軍家へ書き上げたるものなり。抄錄の一通毎に姓名時日を記したり。

◎林信篤の傳記は「鳳岡林學士集」の下に出す。

けいちやうせんしゆ

慶長千首　寫一卷

慶長十年乙巳(二二六五)九月十六日御當坐普通千首の集。後陽成天皇、知仁親王、素然、實條、雅庶、光廣、通村等以下凡て三十六人の詠歌なり。

けいちやうたいへいき

慶長太平記　寫五十一卷　宮川　敬壽

卷一豐臣秀吉成立の來由より、卷四十六大阪古戰場の事等に至る。四十七卷以下は附錄にて慶長六年辛丑(二二六一)正月朔日より、同十九年七月二十五日に至る日次記なり。著者宮川敬壽は何求と號す。いまその詳傳を得ず。

けいちやうちうぐわいでん

慶長中外傳　寫十六卷　堀田　麥水

卷一發言慶長三傑、關原陣總論、石田三成素性、亂起庚子之年、太閤微賤大志等より、卷六十六塙團右衛門前傳、同後傳、秀頼護臣各勇、關雷忽變外記、難城明敵關東等に至る凡て三百七十箇條を記したるものなり。

◎堀田麥水は加賀の俳家。番國の門に學びて暮柳舍と號せり。其の著すところには南島變、越の白浪、書目北花、琉球屬和錄、三洲奇談、及び本書慶長中外傳等あり。天明二年壬寅(二四四二)十月十四日歿す。享年未だ詳ならず。

けいちやうちうすんぷえづ
慶長中駿府繪圖　冊一鋪
駿府城の略圖なり。『駿府城圖』の中より略製したるものなるべし。

けいちやうちようはんかう
慶長敕版考　冊一卷　近藤　守重
錦繡緞、勸學文、日本書紀、四書、長恨歌、琵琶行、陰虛本病、皇朝事實類苑、享保救賜書、本朝世紀等の大略を記したるものなり。
◎近藤守重の傳は『右文故事』の下にあり。

けいちやうちらんき
慶長治亂記　冊一卷
慶長三年戊戌(一二五八)正月十日より、同四年十二月二十四日までの治亂略記錄なり。

けいちやうにつき
慶長日記　冊五卷
慶長元年丙申(一二五六)正月より、元和元年乙卯(一二七五)十二月に至る二十箇年間に於ける德川氏の要件記事なり。

けいちやうねんおうえどづ
慶長年中江戶古圖　冊一鋪
東は後の常盤橋を限り、西は城を限り、南は後の大名小路を限り、北は神田橋を限りて圖したる地圖なり。慶長は後陽成、後水尾兩朝の年號にして、紀元二千二百五十六年より、同七十五年(七月十三日元和と改元あり)に至れり。

けいちやうねんおうえどづ
慶長年中江戶圖　冊一卷　中神　守節
卷首に慶長年間の江戶略地圖を掲げ、次に委しき地圖の考證を記したり。著作の年月は乙亥仲秋とあるのみにて詳ならず。
◎中神守節は順次郎と通稱し、梅龍園と號す。江戶の儒者にして幕府學問所勤番組頭たり。其の著書には本書の外に、慶長江戶圖考、隅田川考、新編武藏風土記等あり。

けいちやうねんおうき
慶長年中記　冊一卷
本書は一名『板坂記』といふ。該題下に解題せり。

けいちやうのき
慶長之記　冊一册
慶長元和年中なる德川家康の事を主として記したり。諸國騷擾の事、毛利家の盛衰、關原陣以後諸大名の盛衰、秀賴との面會、駿坂不和の原因、秀賴の隱謀、家康の興起等を記す。

けいちやうまんぢおぼえがき
慶長萬治覺書　冊一卷
慶長十五年庚戌(一二一〇)より、萬治四年辛丑(一六三一)九月に至る凡そ五十年間に於ける、幕府及び侯家の雜記事なり。土井家臣の覺書なりといふ。

けいてう

けいちん
繼塵記　冊一卷　藤原　實任
嘉元四年丙午(一九六六)九月十二日に於ける龜山法皇灌頂堂營作給簽供養其の他の記事なり。餘編殘闕のものなるべし。
◎藤原實任は正二位權中納言文章博士たり。建武五年戊寅(一九九八)十二月三日七十五歲にて薨せり。著書は本書の外に、『實任卿改元定記』あり。

けいちん
繼塵記　冊一卷　藤原　親長
藤原實任卿の記『繼塵記』中よりの抄出にて、其の據るところは、弘安十年丁亥(一九四七)十月十一日。永仁六年七月、正安三年正月二月、文保二年正月三月、嘉元四年丙午(一九六六)九月等なり。
◎藤原親長の傳記は『賀茂祭雜用料』の下にあり。

けいてうてんえう
京兆典要　冊一卷
京師內裏の事より、以下同都の雜事を輯錄す。寶曆十一年辛巳(一七六一)の奧書あり、一名を『平安城隨筆』また『都賀雜要』といふ。

けいてきあんにちようきうはふ
啓廸庵日用灸法　冊一卷　啓廸庵
尺寸定法、髮際定法、大椎定法、焚灸日等より、人體各部の灸點所を記載したるものなり。

けいてきしふ
啓廸集　八卷　曲直瀨道三
著者の方書。最も正親町院の御覽にも入りたるものなりと。天龍寺策彥の序を附して發行す。
◎曲直瀨道三の傳は『醫學天正記』の下に掲ぐ。

けいてんこくめいかう
經典穀名考　三卷　山田　文靜
古書籍記等に據りて、穀類の名稱誤謬を考訂したるものなり。文政十年丁亥(一八四七)著す。
◎山田文靜の傳記は『國字致種說』の下にあり。

けいでんせいご
經傳正誤　冊一卷
經傳の音訓を摘抄是正したるもの。易經十六條、書經十四條、詩經十六條、禮記三十二條、周禮儀禮共に十四條、論語十條、學庸共に七條、孟子五條、諸子三十二條、左傳二十九條、公穀傳二卷、爾雅六條等を正したり。

けいてんだいせつ
經典題說　一卷　林　道春
經書數部の名を列擧して各書の大意を紹介したるもの。『日本書籍考』と合刻して行はる。
◎林道春の傳記は『羅山文集』の下に掲ぐ。

けいてんよし
經典餘師　十卷　溪　世尊
四書の本文に俗解を附し、更に讀方を假名にて頭書せり。初學者の素讀と講解とに供へたるなり。卷一に大學、卷二、卷三、卷四、卷五に論語、卷六、卷七、卷八、卷九に孟子、卷十に中庸を收めたり。天明元年の序あり。
◎溪世尊は士達と字し、百年と號し、亭名を玉藻亭と云ふ。

けいてんよし
經典餘師　一卷　齋田　東城
前揭の『經典餘師』は四書、本書は五經の『家訓』と記せり。南宋朱熹の子弟を敎へたる『家訓』に據りて假名を附し、講解を與へたるものなり。文政元年戊寅(一八一八)覺齋河世尊の序を附せり。

けいとくへん
稽德編　冊十四卷　深田　正韶
德川將軍家及び三家等の言行諸德を錄したるもの。其の自序に曰く「我が神祖、偃を撥し正に反し、皇家の傾覆を安じ、衆庶の陷溺を救ひ、以て天壤無究の太平を開く。此れより以來文化大に開け、武德日に著れ、明君上に出で、賢相下に起り、化を施し治を輔くるもの歷々乘るに遑あらざるなり。然れども一言の美、其の行を識るに足らず、一行の善、其の德を察し難し。言行一致始終一貫、而して後益其の全德を信ず。是に於て博く府庫の藏を求め、旁ら家牒の閥を搜り、收錄採輯して以て稽德編となす。凡て十一纂、曰く神祖、曰く吉德公、曰く大猷公、曰く敬公、曰く南龍公、曰く西山公、曰く會津侯、曰く備前侯、曰く肥後侯、曰く米澤侯なり」云々とあり。文化四年丁卯(一八〇七)編輯す。本書はもと三十卷なりしも、闕けて十四卷を遺せるなり。
◎深田正韶のことは『小倉百首略解』の下にあり。

げいにくてうみばう
鯨肉調味方　一卷
墨皮、山の皮、片皮、テイラ、三合、落し、立羽、ヲ子、背の內皮、耳、簪子、皮身、切出し、赤身、鹽赤身、胸の身、小骨先、廻し、大網、耳ご、眼の玉、潮吹、其の他數十項、鯨の全身につきて料理調味方を詳細に說明したるものなり。天保三年壬辰(一八四二)仲春の上梓に係る。

けいばき
競馬記　冊一卷
競馬故實の傳書なり。正安二年庚子(一二九六〇)七月四日の奧書以下三四の奧書あり。

けいばくでんせう
競馬口傳抄　冊一卷
競馬故實の書にして、曆應二年己卯(一二九九九)六月七日、從二位藤原朝臣傳授の奧書以下、應永、永正、正保、延寶等の諸家の奧書あり。

けいはつろく
啓發錄　一卷　西塚　思齋

けいばひき

競馬祕記　一巻　賀茂　久朝

競馬故實に關する傳書なり。嘉祿二年丙戌〔一八八六〕高階仲國の奥書以下諸家の奥書あり。

けいはふげんれい

刑法元例　一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる刑法元例にして、年度は不詳なり。

げいはんめいしょうかう

鹿藩名勝考　三巻　鼓川山人

薩摩國名義、鹿島名義、鹿府八景、詩歌仙巖圖、十六景記、鹿島郡神社、薩摩郡神社、名所、高城郡可愛山陵、神社、名物、伊佐郡、阿多郡の名所、社寺等より、大隅國の名義、〔鹿島の封內〕琉球の事實、其の他等、上中下三巻に、同藩の地誌大略を記せり。寛政七年乙卯〔一四五五〕の自序あり。著者は轟小路鼓川山人とのみ記して、氏名を擧げず。轟小路は鹿島の地名なり。

げいびかうぎでん

藝備孝義傳　三十五巻　賴　惟寛

明曆三年丁酉〔一三一七〕より、寛政三年辛亥〔一四五一〕六月に至る、藝備の封域中にて、孝子、順孫、忠臣、義婦の賞賜を得たるもの凡そ二百二十餘人の事績を詳錄したるものなり。材料は里正注進の郡吏檢察の狀を參して最も確實を期したり。文を木とし、郡吏檢察等をも入れて最も縝密を期したり。し、記事は圖像等をも入れて最も縝密を期したり。寛政九年丁巳〔一四五七〕賴惟寛、及び弟、惟柔の序あり。全部は初編八、二編八、三編十七、拾遺一巻より成れり。

◎賴惟寛は安藝國竹原の人。山陽の叔父にして杏坪の兄なり。子秋また伯梁と字し、獨太郎と稱し、春水、霞崖、拙巢、和亭等の號あり。夙く經術に通じ、又詩賦入木の技に長ぜり。年十九の時は既に大阪に在りて諸生を敎授す。時に諸名家の圖體混沌社と名くる詩社に入りて詩藻と稱せられたり。後、蒸學を棄て、洛陽に歸し、當年の名士尾藤二洲、古賀精里、中井竹山、西山拙齋、菅茶山等と往來研鑽し遂に深奥に達せり。後本藩の儒員となり、更に江戸に世子の侍講となり、途に祿三百石を受く。在江戸の時昌平黌に程朱の學を講じたる事もありきと。著書には負劍志、師友志、一得錄、在津紀事、竹原文集、春水遺稿、及び本書藝備孝義傳等あり。文化十三年丙子〔一四七六〕二月十九日、七十一にて歿す。

げいびこぐんし

藝備國郡志　二巻　黑川　玄逸

上巻に安藝、下巻に備後を揭げ、共に其の建置沿革より、郡名、形勝、風俗、城池、苑囿、山川、土產、寺院、祠廟、古蹟、陵墓、人品、拾史等に部門を分ち。〔兩國の間、郡門自ら異同あり〕寛文三年癸卯〔一六六三〕林鵞峯の序あり。

げいほぐ

藝備國內六郡。法眼黑川道祐案住有年、自洛展來往藝備、而詳知其風土、山川、寺社、烹蹤、人物、土貢。今拔從郡君之世子、僑居東武、陪侍之暇、倣大明一統志標題、而編者安藝備後六郡之事、所見所聞之外、參攷務記、以附錄之、不日而成編。就余求是正、余粗見其大概、則殆如藝備之地可以嘉瀋、可以感瀋」といふ。二巻一册に作れり。

◎黑川玄逸の傳記は『雍州府志』の下にあり。

けいほいはい

瓊浦遺珮　二巻　太田　覃

諸家の詩文、手書、和解物等を編輯したるものなり

◎太田覃の傳記は『南歐叢書』の下にあり。

けいほき

瓊浦記事　一冊

嘉永七年甲寅〔一八五一四〕、西洋紀元千八百四十四年、大貌利泥亞王國の軍船ッエンストルの總督ヤーメステイルリンギと長崎奉行水野筑後守、御目付永井岩之丞と、我が長崎に會見し、大日本帝國政府の命を請ひて、薪水食糧等船中必要の品を辨じ、又は破船修覆の爲め肥前長崎、松前箱館との兩港に大貌利泥亞の船の碇泊を免すに就ての條約始末を記錄したるものなり。今見るところは明治十年內務省の謄寫せるものにかゝる。

けいほぐうひつ

瓊浦偶筆　七冊　平澤　元愷

安永三年甲午〔一四三四〕八月、長崎唐人屋敷に於ての應接始末其の他の事を自記したる漢文の記

り。瓊浦は長崎の別名、故に名とせり。

◎平澤元愷の傳記は『華陽皮相』の下にあり。

けいほしふ

瓊浦集　二巻　中島　廣足

長崎人の詠歌數百首を輯錄したるもの。長崎は最初深江の浦といへりしを、やゝ後に瓊浦と名けたるより、本書の題名とせり。中に京阪其の他の人の歌あるは多く長崎に遊び、若くは官事にて同地に滯在したる人の詠めるものなりといふ。天保十一年庚子〔一八四〇〕編輯す。

◎中島廣足は肥後の和學者にして熊本藩に仕へたり。名を春臣、通稱を太郎といひ、櫻園、黃日、蛙鳴等の號あり。本居大平の門人なり。著書には詞の玉緒補遺、玉藻叢の小篠、詞の八衢補遺、雅言類聚、不知考、肥後國巡地考、歷木辨、水江物語、うなゐのすさび、樺島浜風記、金海山話記、東海日記、玉岡山花宴記、觀海人戲場長歌、園船入津長歌、檜垣翁家集補註、くさ〴〵の物語、櫻のくち葉、相良日記、野坂の浦つと、海人のくにつ、片絲、背燭談、盤夫の說、磨足辨、なやらひ、頭椎劍、蝦考、上古嫁娶辨、同階錄、夜の夢、鳥飼翁物語、はしの山ふみ、玉の浦歌合、つくし歌、きさゝせの差別、波瓦比波瓦閉の辨、佐嘉日記、筑紫路日記、しのすだれ、竹島燈志の考、櫻園雜錄、同答問書、櫻園文集、同長歌集、同歌集、櫻園雜錄、同答問書、櫻園文集、同長歌集、同歌集、同隨筆等あり。文久四年甲子〔一八五二〕正月二十一日、五十一歲にて歿せり。

けいみやくづせつ

經脈圖說　八巻　夏井　透玄

けいもうちうふづかい

啓蒙蟲譜圖解　一巻　前田　利保

蟲類を列擧して圖說したること名の表すが如し。天保十二年辛丑〔一八四一〕の著。

◎前田利保は菅原氏。越中富山の藩主たり。淡路守と稱し、萬香亭と號す。夙に和學を好み、又博物を研究す。詞の大網、松の一葉、花ひとをり、菅廟奉納雜歌集、物品區錄、本草通書、啓蒙介譜圖解等の著あり。

けいもうちうふづかい

啓蒙介譜圖解　一巻　前田　利保

介類を綱雜列擧して和漢名を附したるもの。圖繪は一も之れを用ひず。本書は著者の眞蹟なる山與書あり。

◎前田利保の傳記は『啓蒙蟲譜圖解』の下に出す。

けいもうしふ

啓蒙集　八巻

蟄に關する一切諸法を記したるものなり。巻一四佛の事、蟄仕初の事、蟄渡り初、蟄白尾の事等より、巻八蟄相提の事といふ最後に至る凡そ二百數十項より成る。

けいもうしふ

漢醫法經脈、元氣、營衛等の說より、經絡の全體に就て詳說圖考したるものなり。諸家の說を取捨し、滑張二氏の說を評駁して、遂に此の書を大成せり。北山藩安の序あり、八巻七册に版行す。著者夏井透玄の傳は詳ならず。

けいめいせう

桂明抄　一巻　賀茂　久朝

三日月、夕月夜、上絃月、望月、不知夜月、立待月、居待月、臥待月、二十日月、下絃月、有明月等のゆはれを略說したるもの。巻尾に「此小册依室町殿仰所令註進候也。誹諧普蔭庇鏡秀命書々文安五年戊辰〔一四四八〕七月日和歌所署老法印在判」と書類從〔巻四百五十七、和歌部第九十二にあり。

けいもうかいふづかい

啓蒙介譜圖解　一巻　前田　利保

介類を綱雜列擧して和漢名を附したるもの。圖繪は一も之れを用ひず。本書は著者の眞蹟なる山與書あり。

◎前田利保の傳記は『啓蒙蟲譜圖解』の下に出す。

けいもうしふ

啓蒙集　八巻

蟄に關する一切諸法を記したるものなり。巻一四佛の事、蟄仕初の事、蟄渡り初、蟄白尾の事等より、巻八蟄相提の事といふ最後に至る凡そ二百數十項より成る。

けいやうき

迎陽記　七巻　菅原　秀長

巻一貞治三年甲辰〔一三六四〕の圖事。巻二明德三年壬申〔一三九二〕相國寺供養記。巻三、巻四改元定。巻五年號勘文。巻六應安四年辛亥〔一三七一〕御讓位の記。巻七應永八年辛巳〔一四〇六〕の記等なり。

◎菅原秀長の傳記は『相國寺供養記』の下にあり。

けいやうぶんしふ

迎陽文集　三巻　菅原　秀長

著者の雜文集なり。寛永七年庚午〔一六三〇〕藝林學士菅爲通の奥書に、秀長卿自筆の書に依て寫本する由あり。

◎菅原秀長の傳記は『相國寺供養記』の下にあり。

けいゆうきじゆつ

京遊紀述　一巻　篠本　廉

安永五年丙申〔一七七六〕著者京師に寓して、其の

間の遊覧に係る記事なり。如意峯、遊鳥縄寺、自方廣寺至高峯寺、遊東山諸刹、城北遊、遊小鞍山、遊三雄山、遊磯峨、再遊磯峨、遊就安寺、遊松峰、將軍塚、遊山崎、伏見観桃花、仁和寺観櫻花、大堰泛舟、遊叡山、以上諸編の漢文なり。安永六年冬十月井上金峨の序を附す。

◎篠本廉は江戸の人。字を子温と云ひ。號を竹堂といふ。初め新齋と號せり。井上金峨に學びて文章を善くし、又書法に巧なり。宋代々幕府に仕へたり。著書は本書の外に、江戸春遊記、三王外紀纘、朝野聞見錄、天明聞記、北槎異聞、竹堂文抄等あり。文化六年己巳(一八〇九)九月五日六十七にて歿す。

けいゆうべつし

京遊別志 一卷 細合 離

遊法輪寺記、過萬道晩投西林記、訪男山錄樓房記の三編、十餘首の詩を收めたる紀行なり。天明二年壬寅(一七八二)遊勘の序、翌三年伊藤桑吉の序、翌年嚴垣彦明の序等あり。

◎細合離の傳記は「摺印補正」の下にあり。

けいようせう

螢蠅抄 六卷 塙 保己一

開化天皇の十九年壬寅(五二二)より、應永十五年戊子(一四〇八)に至る外寇の事績に關することを抄出したるもの。螢蠅の名に就きては自序中に云へることあり。「此は螢火の耀く神、五月蠅なす惡しき神の爭にて、えみしらの此の國に寇なす事ありとも、やがて神風に吹き破られて、遂に盛ひなからん理を世人に知らせんとて云々」と。六卷中最後の一卷は記其のまゝの抄出にて附錄としたり。

文政八年乙酉(一八二五)二月靜寛堂の序あり。

◎塙保己一の傳記は「群書類從」の下に出でたり。

けいらくはつめい

經絡發明 一卷 菊池 玄藏

人身經絡の布置を說き、筋肉の伸縮、血液循環の方序等を說明圖示したるものなり。寶曆三年癸酉(一七五三)に作り、同年刊行す。著者菊池玄藏は字を周之といひ東雒と號す。

けいりうき

慶隆記 一冊 伊東 玄伯

美濃郡上の城主遠藤但馬守慶隆の記なり。天文十九年庚戌(一五五〇)より、寛永九年壬申(一六三二)に至る一世間の戰攻錄なり。櫻井玄登と共に編するところなり。

◎伊東玄伯は遠藤但馬守の臣なり。本書の外に「遠藤家譜」二卷を著せり。

けいりんいはうせう

桂林遺芳抄 一卷

卷首に「儒門繼塵目錄」として學問料事、入學古書事、文章得業生事、課試宣旨事、當氏二年策例事、問頭博士事、問頭題者兼行例事、其の他十數條を掲げて順次說明したるもの。「儒門繼塵事、昔日文明年中、予逢二大藥之時、纔に遊二得家珍之文籍一、成二立門業之再興一以來、當氏儒流子」今在者二三家也。偏假二有名一而無レ實、頃既及二暮齒一、憊抱二愁於此道一之間、最在二子兒孫之后世一陵遲一也。仍乃蒐二歲三祭之正月一至二九夏之五月一所レ成抄出及二多帖一矣。爰復探二看少年楊歷之一鈔一、寔爲二九牛一毛一耳。既一卷裡以用捨二增刊一、重編二此一册一已一百餘丁也、纔堪爲二五册一也、吁吾命雖レ不レ在レ于レ茲者何有レ成二此道一之藝一哉。且可レ爲二蹉跌之千金一者莫レ出二書厨之一篇一幸名」之曰。桂林遺芳鈔一卒矣。于時永正第十二戊乙亥(一五一五)中夏十又二日雒下了、五更臣權中納言兼大藏卿菅原朝臣和長上レ序」とあり。「群書類從」卷四百九十六、雜部五十二に入れたり。

◎東坊城和長は藤原氏、參議大藏卿長淸の子なり。文明十一年己亥(一四七九)文章得業生に補せられ、十四年對策及第す。明應五年丙辰(一四九六)大內記に任ぜられ、後、歷官して、權大納言正二位に至り、氏の長者となる。其の間歧翁紹碩に參禪して戒を受くること二度、宗風、揔竹等の稱名あり。享祿二年己丑(一五二九)十二月二十日、七十歲にて薨ぜり。

けいりんきうへいしやうろく

鷄林求聘詳錄 一冊 八卷

延享三年丙寅(一七四六)德川將軍代替りに就きて朝鮮より賀使來聘し、更に幕府より返禮使を立てたる事、同五年信使來朝の始末等を詳記す。本書は其の聘事に關係したる人の作なるべし。

けいりんししふ

桂林詩集 六卷 三繩(ナハ) 惟直

著者の詩集。卷一に五言古詩十七、七言古詩十八。卷二に五言律詩百二十四、五言排律九。卷三に七言律詩八十八。卷四に七言絶句百十一、七言絶句七十。卷五に五言絶句百十一首。以上五百七十六首を收む。享和元年辛酉(一八〇一)六二藤忠成、瀧川利雅の序、山維棋の跋等あり。同年六卷三冊に發行す。

◎三繩惟直は江戸の儒者にして、濕齋と字し、準蹤と稱し、桂林と號す。安達清河に學びて詩を善くせり。著書は本書の外に、桂林文集、詩學解蔽、正始餘音等あり。文化五年戊辰(一八〇八)正月二十八日歿せり、年六十五。築地本願寺中に葬る。

けいりんししふ

桂林集 一卷 源 直朝

直朝の家集を其の師三光院實澄の撰したるものにて、自ら序文を添へたり。「掬桑拾葉集」にも出づ。著者源直朝は月庵と號す。三光院實澄の門人なり。

けいりんしふえふ

鷄林拾葉 八册 塙 保己一

朝鮮國の事績を國史古記錄より摘抄拾集したるものなり。文政六年癸未(一八二三)林韑、秦鼎等の序あり。

◎塙保己一の傳記は「群書類從」の下にあり。

けいりんじやうめい

雞林情盟 一卷 三宅 邦

文化八年辛未(一八一一)韓人李太華、金淸山等來聘の時、唱和筆談したるものを編輯したるなり。文化九年右羽林大將軍藤原璟の序、同年門人篠山萬編の跋あり。

律詩八十八。卷四に七言律詩八十七。卷五に五言絶句五十二、七言絶句七十。卷六に七言絶句百十一首。以上五百七十六首を收む。享和元年辛酉(一八〇一)六二藤忠成、瀧川利雅の序、山維棋の跋等あり。同年六卷三冊に發行す。

◎三繩惟直は江戸の儒者にして、濕齋と字し、準蹤と稱し、桂林と號す。安達清河に學びて詩を善くせり。著書は本書の外に、桂林文集、詩學解蔽、正始餘音等あり。文化五年戊辰(一八〇八)正月二十八日歿せり、年六十五。築地本願寺中に葬る。

けいりんしふ

桂林集 一卷 源 直朝

直朝の家集を其の師三光院實澄の撰したるものにて、自ら序文を添へたり。「掬桑拾葉集」にも出づ。著者源直朝は月庵と號す。三光院實澄の門人なり。

けいりんしふえふ

鷄林拾葉 八册 塙 保己一

朝鮮國の事績を國史古記錄より摘抄拾集したるものなり。文政六年癸未(一八二三)林韑、秦鼎等の序あり。

◎塙保己一の傳記は「群書類從」の下にあり。

けいりんじやうめい

雞林情盟 一卷 三宅 邦

文化八年辛未(一八一一)韓人李太華、金淸山等來聘の時、唱和筆談したるものを編輯したるなり。文化九年右羽林大將軍藤原璟の序、同年門人篠山萬編の跋あり。

◎三宅邦の傳記は「橘園遺文初集」の下にあり。

けいりんしやうわしふ

鷄林唱和集 十五卷

正德元年辛卯(一七一一)韓使來聘、大阪より江戸に往來して十餘月を費す、其の間到る處に文人雅客相延て唱和したるものを輯收す。東兵、東部、浪華、播州、補遺等に部類せり。京都書肆松柏堂と奎文館とが編輯發行するところなり。同正德二年松崎祐之の序あり、序目ともに十六册に發兌す。

けいりんてきえふ

藝林摘葉 一卷 井良純

漢字音義の訛謬を訂正して、初學の讀書に便したるものなり。編述の年時明ならず。著者井良純は子綱と號せり。

けいりんまんろく

桂林漫錄 二卷 桂川 中良

著者の隨筆。上卷に石敢當、金澤文庫、扶桑木、韓人詠歌、琉人詠歌、倭繪師、朝鮮瘦鞭、鐵塔婆、燕澤碑、玉筆和尚、筆用集、新撰字鏡、不他字類抄、萬多親王、淳和寺繪馬、古印等の事、下卷に古甲冑、瓦偶人、古刀、八德古鈴、東鏡跋、足利學校、鬼一法眼の事等の說話評論を掲げたり。寛政十二年庚申(一八〇〇)源忠道、及び法眼甫周の傳を附して同年出版す。「百家說林」卷三にも刷入せり。

◎桂川中真(或は森島姓を稱す)は字を、甫筑、又廢臣といひ、桂林と號す。醫學に通じ、兼ねて小說、狂歌等に意を得たり。平賀源内に從ひて蘇鐵萬編の跋あり。

けいりんらいへいしやうろく

鷄林來聘詳錄 一冊 十卷

延享五年戊辰(一七四八)朝鮮聘使來朝の時の始末を詳記したるもの。卷一に三使發足日限、對州へ着並火災の事、同屋出帆、大阪へ着並火災の事、東部着並上使、登營の式法。卷二に御城にて饗應の式、西丸登營御禮の式。卷三に登營行列。卷四に書簡並箱の圖、御老中へ書翰の事、進物の品物、馬毛付。卷五に老中へ進物、布特參人數、三使自分獻上、老中へ自分進物、御暇、御返翰並進物、諸官へ被下候物品等にて、十卷の中、下五卷は後編にして、其の目を擧ぐれば、卷一に朝鮮國王姓名、三使以下姓名、入數總計、朝鮮國年號、馬一件。卷二に御贈答の鞍鐙畊繪並繪樣、同屏風の繪並筆者、同筆子畊繪、同大車畊繪。卷三に幡の圖、衣裳の圖、諸旗諸樂器

貸の圖。卷四に三使御饗應の獻立、上々官冠官迄同斷。卷五に軍官以下下官まで同斷、曲馬の節御菓子破下候事等なり。延享五年戊辰六月の記にして、凡て十卷十冊に寫せり。

けいれいばつすゐ　刑例抜萃　本朝　八十六冊

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せるものにして、寬政年度より、文久年度に至る。

けいろくき　慶祿記　本朝　三十七卷

慶長元祿間の法政雜事を輯錄したるものなり。卷一前々武家諸法度より、卷三十七諸官位御禮物之品に至る百餘項あり。三十七卷二十三冊に寫傳す。

けいろくしふ　鷄肋集　本朝　一卷　僧　古桂

著者古桂の詩集なり。年代詳ならず。著者古桂は洛東建仁寺內なる清住院住職なり。

けいろくづかん　系祿圖鑑　四卷

大名、官吏等の家紋、姓名、武器、知行、住居等を圖鑑したるものなり。元祿十五年壬午(一三六二)の出版にかゝる。

けいろくるゐじ　鷄肋類字　本朝　四冊　高田　與清

親元日記、乘穗錄、玉勝間、好古日錄、唐物語等の日記隨筆歌集繪起史書等凡そ四十九種の書中より、其の類字(「意」「衣」「異本」「異國の類」)を擧げ、いろは順に排列したるもの。著者類字を作ること二十餘年にして稿を成すこと千五百餘卷、其の窓稿中より抄出して此の書を成せるもの、如し。

◎高田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

げいわうせいしろく　藝王姓氏錄　一卷　清水　正熾

天保年間に於ける槍術家の姓名錄にして、畿內より順次に各國百四十餘箇處の槍手を列擧し、頭に各流派を記せり。安政六年己未(一八五九)の作。著者清水正熾は字を子嚮といふ。

けうかいしよ　教解書　本朝　一卷

薩中村藩の士庶に示せる論書教令なり。天保五年甲午(一八四四)記したるものなるべし。

げうかいりつぎかうじゆつ　教誡律儀講述　二卷　僧　戀淑

唐の南山の道宣律師の「教誡律儀」を漢文にて講述したる書なり。而して「教誡律儀」は佛教比丘の遊行すべき日常の行儀作法六百四十五條を規定したる者なり。正德四年甲午(一三七四)の撰述に係る。

げうかうかわ　堯孝歌話　本朝　一卷

古今の實例を擧げて、和歌の詠作に關する諸法を說示せるものにて、一名を「東野州聞書」といへり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下にあり。

げうかうさんじつしゆわか　堯孝三十首和歌　本朝　一卷　僧　堯孝

初春霞の「朝霞たなびきそめて久方の、空に神世の春を知らるゝより、雜社頭祝「いのりこし道もさかへてわが君の、わが神がきをあふぐかしこさ」に至る三十首なり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下にあり。

げうかうじふばんうたあはせ　堯孝十番歌合　本朝　一卷　僧　堯孝

遠山朝雪の題にてよめる自歌十番歌合なり。各首判詞あり。卷末に殘菊の長歌一編を收めたり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下にあり。

げうかうはふいんにつき　堯孝法印日記　本朝　一卷　僧　堯孝

文安三年丙寅(一四〇六)正月一日の詠歌より、同四月二十八日に至る詠歌日記なり。「群書類從」卷三百二十五、日記部第六に收めたり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下を見よ。

げうかうはふいんひやくしゆ　堯孝法印百首　本朝　一卷　僧　堯孝

春二十、夏十五、秋二十、冬十五、戀二十、雜十首より成る。「群書類從」卷三百九十五、和歌部第三十に收めたり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下にあり。

げうかうほうもんよくしゆ　堯孝奉敕百首　本朝　一卷　僧　堯孝

永享五年癸丑(一四三三)九月二十一日、綸旨ありて和歌百首を召させられたる時上りたるものなり。卷二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀二十首、雜十首あり。

◎堯孝の傳記は「伊勢紀行」の下にあり。

げうがふざつき　校合雜記　本朝　二十卷

此の書は主として幕府時代に於ける諸將士の遺蹟逸事を輯錄したるものなり。著者は「小花和源五右衛門」と記せり。

げうきじこくせう　教機時國鈔　一卷　僧　日蓮

日蓮宗の教義に就て述べたるもの。卽ち日蓮宗の見解に據りて、佛陀の說かれし教法、教を傳ふべき機根、佛教を弘むべき時、佛教を弘むべき國、教法流布の前後の五箇條を立てゝ、日本は法華經の弘まるべき國、其人民は、この經を開持すべき機根にして、且つ斯經の弘まるべき時に際會せる事等を述べたり。著作の年代を記さず。「錄內」第二十六卷、「續圓藏經」第帙第十卷に收めたる假字交り文也。

◎日蓮の傳は「開目鈔」の下に在り。

げうぎやうしんしやう　教行信證　六卷　僧　親鸞

淨土眞宗の開宗根本の書なり。教、行、信、證、眞佛土、化身土の六科を分ちて、廣く該宗の教相法義を說き明し、科毎に卷を異にせり。元仁元年甲申(一二二四)の作にして、其題には「顯淨土教行證文類」と云ひ、後世略して教行證、教行信證文類、廣文類、本書或は本書と稱す。

本書を註釋せるもの頗る多し。中にて、主なるものを擧ぐれば、釋存覺の「六要鈔」十卷、憑益の「本典一滴錄」十六卷、憑雲の「本典光融錄」四十卷、快存の「本典私考」三十卷、月溪觀信の「本典樞要」十二卷、播州智通の「本典樹心鈔」十三卷、播州智通の「本典一滴錄」十六卷、憑雲亥智の「本典光融錄」四十卷、快存の「本典私考」三十卷、月溪觀信の「本典樞要」十二卷、播州智通の「本典樹心鈔」十三卷、播州智通の「本典一滴錄」十六卷、憑雲

淡草寺に奴僕集まり主人の評論せし事、遁世僧精霊に出舎ひし事、鉢坊主身の上懺悔せし事等あり。寛暦二年壬申(一七五二)の作。武蔵國多摩郡青柳の老圃伊藤単朴の發行したるものなり。

◎山本好阿の傳は「檀下手談義」の下にあり。

けうくんせう

教訓抄 十卷 狛 朝葛

歌舞音樂に關する口傳物語を集錄せるもの。前五卷は歌舞口傳にして、公事曲、五大曲、二十二中曲、他家舞曲、及び高麗曲あり。後五卷は管絃口傳にして、舞曲源、管絃、舞兒樂、打物、及び記錄等あり。第八、九、十等の尼に、「寫本云天福元年(一二九三)七月以自筆令寫之在判、正六位上行左近衛將監狛宿禰近眞撰」と記せり。

◎狛朝葛は狛宿禰と稱し、唐樂舞師なり。別著に「續教訓抄」あり。

けうくんせう

教訓抄 一卷

管絃類の風調故實等を記したるもの。「續群書類從」卷五百二十九、管絃部第三に入れたり。

けうくんにちようがくそく

教訓日用學則 三卷 僧 靈潭

學問、人心、利慾、名聞、五倫等に就きて詳說したるもの。寛政六年甲寅(一七九四)法孫比丘性堪の序によれば、著者晩年肥前伊萬里西岡某の爲め、鄙言に此の書を著して、面命に換へんとしたるものなりといふ。

◎靈潭は越中の人、新屋明光寺の開祖なり。初め臥雲の徒となり、破門せられて、風潭に學び、後、許されて臥雲に歸したりといふ。

けうくんはなしぐさ

教訓噺艸 四卷

綸を交へて教訓的雜話を綴れり。第一に笄下駄之辨、扇之得失、和美鳥九官白鸚之辨。第二に鵜養鶴之示、鏡藥鏡之辨、黃楊櫛之辨。第三にて打栗に易行道を示、櫻の葉花、橿花蜀黍に無常を示、猫と鼠之論。第四に犬身之掴を虎に語、多葉粉盆一器之論、つれづれ草を勸ふ等の諷的雜話より成れる一書なり。天明二年壬寅(一七八二)無標庵の序あり。同年京都にて出版す。著者河久露宿は豐後國臼杵城下唐人町の人なり。

けうくんはるのひより

教訓春日和 一卷

開帳萬日の事に託して、父母の恩を知らしめ、身を修め家を齊ふる一助とせんとて作りたりといふ。綸を入れ假名書にせる兒女の讀本なり。天明二年壬寅(一七九二)金閶齋の小序あり。卷末上河正揚の記に、「此の書は予が友布施翁河守中井の二氏と共に書集められし」云々といへり。

けうくんひやくものがたり

教訓百物語 一卷

俗間に傳ふる狐狸の談、地獄、極樂、河童、首拔等の事を擧げ、一々人間當面の事實にあて、說明したるもの。彼の無文の荼娼が淚りに怪談を唱へて、兒女を長惡せしむるものと大に異れり。往々狂歌を插入する所、また讀者の興味を促すべし。裏題には「教訓挿入百物語」ともせり。文化十二年乙亥(一八一五)浪華にて出版す。

けうしようし

喬松子 四卷 大高坂季明

學者教戒の論述にして、卷一に喩俗文、論學者、卷二に喩兵文、論將士、黃祥門。卷三に河澄、伊魯、桃吉、林芳。卷四に竣英公、桂淑言、存發說、性說、道說等の十餘編淡文にて記せり。元祿十六年癸未(一七〇三)肥州の序中に、「此書首卷所陳據祥氏之語也多矣。第二卷黃祥門自論經傳之義以後、章句漸繁宿大華、皆造自家言語。第三卷自論禮樂文章以後、文之精神、詞之波瀾悉盡發於此。至第四卷乃眞爲學問之蘊奧師傳之祕訣。讀者其可忽乎哉」といへり。もと元祿八年乙亥(一六九五)上下二卷次子矩明の爲めに作り與へたるを、孫婿叔評註を加へ四册として刊行せり。

◎大高坂季明の傳は「芝山會稿」の下にあり。

けうすゐくわんしふ

遨翠館集 五卷 伊藤 緝

著者の詩集。卷一に五言古詩二十二首。七言古詩七首。卷二に五言律詩百二十五首、五言排律五首。卷三に七言律詩百三十五首。卷四に五言絕句七十八首。七言絕句六十一首。卷五に七言絕句八十七首、附錄に山寺草三十四首、海寺草三十一首。總計六百八十五首を收む。男桑吉の雌校するところにして、天明二年壬寅(一七八二)江村北海の序あり。

◎伊藤緝は平安の人にして、越前侯の儒者たり。若夏と字し、莊治郎と稱し、錦里また風陽と號す。溫性沈着、侯家に仕ふること愼重にして、殆んど四十年、退食休暇の日、家に家學を傳ふと雖も、筆を執るもの一外敢て敎ふることなし。もと學を家庭に受けて、第江村北海、清田儆叟と共に著れ、目して伊藤氏の三珠樹と稱せられたり。安永元年壬辰(一七七二)三月九日、六十三にて歿す。私諡して文格先生と號せり。京都大雲院に葬る。

げうそへん

翹楚編 一册 荻戸(ノキド) 太華

上杉彌正大弼治憲の治績嘉言善行等を集錄したるものなり。寛政元年己酉(一七八九)十一月の自序、及び細井德民、神保簡等の序あり。

◎荻戸太華は上杉鷹山の老臣にして源鵬と稱し、字を士雲と云ひ、九郎兵衛と稱す。太華は其の號なり。著書は別に「雪度編」五卷「子愛編」二卷あり。

げうだいくしふ

曉臺句集 二卷 加藤 曉臺

著者の俳句集なり。門人凱央の編輯にして、文化六年己巳(一八〇九)出版せらる。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◎加藤曉臺の傳は「秋の日」の下にあり。

げうだいしうえんき

曉臺終焉記 一卷 曲江亭桃睡

加藤曉臺の終焉を記したる文にて、末に門人知人の追悼文句を載せたり。寛政五年癸丑(一七九三)門人凱央の編する所なり。原名を「落梅花」といふ。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

けうひろく

敎匪錄 一卷

佛敎、耶蘇敎、回々敎等の外敎史を敍し、其の最民を誘惑して宗旨を國內に布くことを論じたり。釋迦紀略、耶蘇紀略、摩哈麥紀略、金田時貞記の四編に分ち金編漢文にて記す。其の佛敎を敍して、これを評論せる條に曰く、「入佛道者、有慢無聊不平而隱此者、其惡雖異其爲害一也、欽墓而歸此者、其怪誕契舍于其意、故託此以行姦、無所不至矣、借此而御口者、知天堂地獄之說、而不知君父之情實、其本性已喪矣、隱此者於綱常倫理爲假設、故曰其害一也」云々とあり。其の見識文章等の一斑を見るべし。今明治八年內務省の謄寫せる所によるに著者の名を詳にせざるは惜むべきなり。

げうぶうしふ

曉風集 八卷 僧 端九

唐の三體詩の詳細なる註解なり。卽ち釋天隱及び斐季昌等の古註を擧げ、更に著者の補註を加へたり。然れども七言絕句に止まりて其の他に及ばざるは惜むべし。最初に出でたる杜常の華清宮の詩にある曉風殘月入華清の句より命題せしものならん歟。

◎端九は愚仁中の學僧にして、梅庵、萬里居士、漆桶居士等の號あり。初め萬年寺に住職たりきと。

げきかんれい

外記勘例 一卷

古來辛酉歲に行はるゝところの勘申例を記載したるものにて、延喜元年辛酉(一五六一)の例より、天和元年辛酉(一六八一)の例に至る。元文六年辛酉(一七四一)正月二十三日筆錄する所なり。

げきごしんやく

劇語箴譯 一卷

演劇脚本等に用ふる語句を分類列擧して略解を附したるものなり。

げきじやうろく

擊壤錄 四卷 木內 倫

德川家康の言行事歷を中心として、上は往々織田豐臣の事に溯り、下はまた近世諸賢の事に及びて集錄したるもの。蓋し野史家乘の滋潤雜駁なる中より摘抄したるなり。嘉永七年甲寅(一八五四)片山達の序、同六年の自跋を附す。明治五年出版。著者木內倫は讃岐の人、字を仲和といひ、龍山と號す。

げきまつりごとぶるゐ

外記政部類 二卷

外記政に關する雜事を、古來の諸記錄中より部類したるものなり。二卷一册に寫傳す。

げぐうかろくさんねんやまぐちまつりのき
外宮嘉祿三年山口祭記　一卷

後堀河天皇の嘉祿三年丁亥〔一八八七〕十月同祭禮の記なり。『群書類從』卷六、神祇部に入れたり。

げぐうぎしきちやう
外宮儀式帳　寫三册　石崎　文雅

太神宮儀式並に禰宜内人物忌等凡て年中行事の事を掲げたり。卷末に「寛政十一年己未〔一四五九〕正月二十日成業」と記せり。

◎石崎文雅の傳は『日本紀纂斷』の下にあり。

げぐうきたごもんうたあはせ
外宮北御門歌合　一卷

元亨元年辛酉〔一九八一〕冬落葉、冬月、朝雪、不逢戀、待戀、恨戀、山家松、懷舊夢、神祇、等の題にて催せる歌合なり。作者は同宮禰宜、權禰宜十八名より成る。『群書類從』卷第二百〇五、和歌部第六十にあり。

げぐうごしんぱうき
外宮御神寶記　寫一卷　度會　重常

裏題の示せる如く伊勢外宮の神寶を列載したるもの。慶安二年己丑〔二三〇九〕寶永六年己丑〔二三六九〕等の寫本奥書あり。『續群書類從』卷五、神祇部第四にあり。

げぐうこらくわんさいてんしき
外宮子良館祭典式　寫二册　度會　益弘

伊勢外宮内なる子良館にて執り行へる年中の祭典式及び調度の事を記し、一々插圖して說明せり。

◎度會益弘は延寶天和比の人にして伊勢神宮の神職たり。著書は別に『外宮直會院勘文』一卷あり。

げぐうこらくわんぶんたい
外宮神官文體　寫一卷

同神職神官等より、朝廷へ上るところの注進狀其の他の諸書式を集錄す。

げぐうしんじちよりやく
外宮神事著略　寫一卷

伊勢外宮に於ける正月元日より、十二月除夜に至る年中行事、儀式古例等を順序に記したるもの。寶保六年辛丑〔二三八一〕九月の記に係る。

◎度會常彰は伊勢太神宮の神職たり。著書には『日本國風』、齋居道、神道明辨、藝林珠璣、及び本書外宮神事著略等あり。

げぐうこらくわんさいてんしき
外宮子良館奉仕來歷　寫一卷

後北御門天皇の文明十八年丙午〔一四八六〕より、後柏原天皇の永正十年癸酉〔一五一三〕に至る同館の憑記なり。文祿、承應、寛文、元祿、天明等歷年の諸奥書あり。『續群書類從』卷十九神祇部、第十九に收めたり。

げぐうこらくわんぶんたい
外宮子良館雜記　寫一卷

後北御門天皇の文明十八年丙午〔一四八六〕より、後柏原天皇の永正十年癸酉〔一五一三〕に至る同館の憑記なり。文祿、承應、寛文、元祿、天明等歷年の諸奥書あり。『續群書類從』卷十九神祇部、第十九に收めたり。

げぐうぎしきちやう
外宮儀式帳　寫三册　石崎　文雅

太神宮儀式並に禰宜内人物忌等凡て年中行事の事を掲げたり。卷末に「寛政十一年己未〔一四五九〕正月二十日成業」と記せり。

◎石崎文雅の傳は『日本紀纂斷』の下にあり。

げぐうきたごもんうたあはせ
外宮北御門歌合　一卷

元亨元年辛酉〔一九八一〕冬落葉、冬月、朝雪、不逢戀、待戀、恨戀、山家松、懷舊夢、神祇、等の題にて催せる歌合なり。作者は同宮禰宜、權禰宜十八名より成る。『群書類從』卷第二百〇五、和歌部第六十にあり。

げぐうごしんぱうき
外宮御神寶記　寫一卷　度會　重常

裏題の示せる如く伊勢外宮の神寶を列載したるもの。慶安二年己丑〔二三〇九〕寶永六年己丑〔二三六九〕等の寫本奥書あり。『續群書類從』卷五、神祇部第四にあり。

げぐうごしんぱうよみあはせちやう
外宮御神寶讀合帳　寫一卷

外宮神寶調査書なり。明和七年庚寅〔二四三〇〕度會神主家敎の奥書あり。

げぐうせんぐうごじんぱうよみあはせちやう
外宮遷宮御神寶讀合帳　寫一卷

前に解題せる『外宮遷宮御神寶讀合帳』と同物にて表題は二樣に行れたり。

げぐうせんぐうほうしらいれき
外宮遷宮奉仕來歷　寫一卷

雄略天皇の二十二年戊午〔一一三八〕の遷宮より、順德天皇の建曆元年辛未〔一二一一〕の遷宮に至る奉仕來歷を記したるもの。慶安三年庚寅〔二三一〇〕正禰宜の奥書に、此遷御奉仕來歷如舊本不遂一字書寫校合畢」とあり。『續群書類從』卷六神祇部、第六に入れたり。

げぐうせんぐうよみあはせちやう
外宮遷宮讀合帳　寫一卷

前に解題せる「外宮遷宮御神寶讀合帳」と同物にて表題は二樣に行れたり。

げぐうなほらひねんかんぶん
外宮直會院勘文　寫一卷　度會　延經

天和二年壬戌〔一三四二〕の自跋に、「古昔直會院の殿けは祭祀奏聞の爲にして其の闕する所甚多し。今や僅に一字を遺すのみにして墓礎を知るものなし。滿彥神主之れを修復するの志あり、不幸にして病で卒す。予其の言の遂げざるを悲み、終に古記をあつめ以て辨證し、勒して勘文一章となし、方位制度をして明ならしむ」と、以て其の内容事情等を

知るべし。

◎度會延經の傳記は「伊勢國神名帳考證」の下に出でたり。

げくわんぜう
下官抄　寫一卷

版本「定家卿假名遣」の別本にて、一名を「下官集」ともいへり。『群書一覽』に「三條院臨定家卿書一帖」と記せるものとほゞ同じ。書中に「嫉文字事」といふ一條あり、その中には假名遣のことを論述したり。「定家卿假名遣」と參照すべし。

げごんきやうたんげんきはつきせう
華嚴經探玄記發揮鈔　十卷　僧　普寂

華嚴經を解釋したる唐の賢首大師法藏の「探玄記」を更に註解したるものにして、後桃園天皇の安永三年甲午〔一四三四〕の著作に係れり。

◎普寂は高僧なり。伊勢桑名郡增田村に生る。幼より佛乘を好み、長するに從ひて禎山、鳳潭等に就て俱舍唯識、華嚴の諸經を學び、自ら大藏經を閱して最も心を華嚴に寄す。又尾州八事山高巖和上に從て菩薩戒、八齋戒を受け、精進堅固に念佛三昧を修練す。更に義燈律師及義土人等に從て戒を受け、盛宏、支門、快存等に就て台敎其の他の諸雜義を質し、一般佛敎の奥理に通じ又實行の德望る。後江戶目黑長泉院に住りて諸佛敎の講莚を開き旁ら著書に從ひ、本書の外に起信論義記要訣、俱舍論要解、義林章纂註、勝鬘經顯宗鈔、唯識論略疏、唯識論述記纂解、三聚戒辨要、四敎儀詮要、梵網經摘要、法界無差別論疏示珠鈔等を著す。安永十年辛丑〔二四一二〕十月入寂す、年七十五。

げごんごけうしやうくわんちう
華嚴五敎章冠註　十卷　僧　觀應

華嚴宗敎義の綱要を敍述したる唐の賢首大師法藏の「華嚴五敎章」に、詳細なる征註を加へたるもの。而して其の註解の多くは、凝然の「五敎章通路記」を抄錄し、間々義苑疏、折薪記、集成記、指事記、纂釋等の文を摘錄せる處あり。東山天皇の寶永二年乙酉〔一三六五〕に成れり。

◎觀應は京都の智積院「眞言宗」に寓せしことありと云へども、その傳は未だ詳ならず。著書には本書の外、「補忘記」二卷、「西谷名目頭書」四卷等あり。

げごんごけうしやうけんもん
華嚴五敎章見聞　十卷　僧　普一

華嚴宗敎義の綱要を敍述したる「華嚴五敎章」「唐法藏の作」の註解にして平易なる漢文にて詳に講述す。寬正七年丙戌〔一二二六〕弟子支音の筆記補修するところなり。著者普一は東大寺戒壇院に住したることあり。

げごんしうしゆしやうぎせう
華嚴宗種性義抄　寫一卷　僧　親圓

此の書は華嚴宗の一性皆成說を論じたるものにて、法相宗の五性各別說に相對せるなり。後一條天皇の寬仁三年己未〔一六七九〕の末書あり。著者親圓は東大寺の僧なり。

けさいろく
蟻財錄　寫一卷　並木　五瓶

狂言作者の口傳祕事等を記したるもの。其の日を祭くれば作者の差別、假名物語作者連名、淨瑠璃作者、歌舞妓作者連名、作者大體法式祕傳、看板文字數口傳、割番壓場數下給附並に双方對句、東西段書曲文、三部狂言替り有、狂言竪横の筋有り、四季見物人情差別、狂言場行止合、古人上手作者金言、作者請取役場心得、役者出合役場心得、役者出合甲乙附方、役割番附位上下、表入紋看板古今替り有、作者支配心得、作者番附居所善惡、江戶番附居所蔑增、襲題綺看板書樣、一夜附狂言書樣口傳、役者甲乙納樣口傳、作者出勤仕樣口傳等なり。享和元年辛酉〔二四六一〕入我亭我入の奥書あり。

◎並木五瓶は狂言作者。大阪の人にして並木正三の門人なり。明和年中江戶に出でて演劇上創治する所多し。文化五年戊辰〔二四六八〕江戶に歿す。

けさものがたり
袈裟物語　五卷

源渡の妻袈裟女に關する物語なり。卷一袈裟御前出生並に遠藤武者盛遠溺死の事、左衞門尉源渡後夫と成り並に盛遠歸京の事等より、卷五文覺上人雖行佛道成就の事に至る。寬政九年丁巳〔二四五七〕の出版にかゝる。

げすのちゑ
げすの智慧　一册

俳諧の集なり。編者及び、編輯の年時等を詳にせず。

げだいがくもん
漢土外題學問　一卷
四書、五經、二十一史、其の他子集等につきて、其の大略を記述したるもの。學者の便りたるべきものにはあらざれど、其の大略をば一通り知ることを得べし。安永九年庚子(一七八〇)三月、西村居行といふもの、略序あり、同年京都にて、小冊子に版刻せり。

けちえんくわんちやうざつき
結緣灌頂雜記　二卷　僧　眞海
足利義詮十三回忌の灌頂と、足利義滿三十三回忌の灌頂とを合せ記したるものなり。著者眞海は權僧正たり。

げつあんをしやうごろく
月庵和尙語錄　二卷　僧　興樹
但州大明禪寺の開山月庵和尙の言行を筆錄したるものなり。上堂、法語、拈香、下火、讚語、頌古、偈頌、道號の八編に分けて記述せり。

けつぎくわんそうしよ
闕疑館叢書　十六冊
元祿享保間の御勘定所定書を輯錄したるもの。上四冊に、御勘定所勘方等之部、御代官語入用拜借等之部、御城米破船之節吟味之部、諸役所定書並御切米御扶持方渡方等之部、諸國御關米等之部、御應場之部、寺社御修復金之部、雜之部等凡て百十八條を收め、下二冊に、御勘定所掟並御料理請事取計等之部、御取箇一件並夫食貸等之部、檢地條目並知行割新田一件之部、諸國堤川除御普請並濱代地地等之部等凡て六十三條を載せたり。

けつぎせうおきてふ
決疑鈔直牒　十卷　僧　了譽
應永三年丙子(一〇五六)卯月二十三日、著者了譽聖冏五十六歲の時の記なり。今見るところは明治十七年十卷五冊に發行したるものなり。
◎了譽の傳記は「釋淨土二藏義」の下にあり。

けつぎひやうこき
闕疑兵庫記　二卷　江島　爲信
文武、君臣、大將守道、玉璽、其の他の數十目より成れる武訓様のもの。もと楠公の自記と傳ふる「楠兵庫記」の其の眞筆ならざるを破して疑文刪除して玉當を拾へりといふ。書名は論語の「多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤」といふによりて名けたり。寬文七年丁未(一六三七)に刊行す。著者江島爲信は日向國の人なり。

けつくしやうかう
獍狗傷考　一卷　原　昌克
風犬の人を害したる時の療法を主と論述したるもの。其の總目を擧ぐれば、論、治法、藥方、灸法、刺法、禁忌、治驗、附錄に蝮蛇諸蟲咬、鼠咬等あり。全編漢文にて記す。安永十年辛丑(一七八一)戸崎允明、天明三年癸卯(一七八三)立原萬の序、文政三年庚辰(一八二〇)水田莊の跋あり。
◎原昌克の傳記は「醫事小言」の下にあり。

げつくわうゐんさまこしふ
月光院樣御集　四卷　月　光　院
此の書は一名「聖玉集」といふ題下に解題せり。

げつけいうんかくねたみうたあはせ
月卿雲客妬歌合　一卷
一名「建保二年九月歌合」の下に解題せり。「月卿雲客妬歌合」の名は「建保三年歌合」の別名にもあり。

げつけいわかしふ
月詣倭歌集　四卷　賀茂　重保
壽永元年壬寅(一一八二)當時の歌人の作を撰集したるもの。世は猶、平氏の盛なる時にしありたれば、其の一族の歌多く入りたり。清水濱臣の標註、橘千蔭の序、平春海の跋を添へたり。

けつごくかう
決獄考　一卷　新井　君美
疑獄に關する判決考論なり。卽ち夫を殺したりとて父兄を被告として起訴したる婦人の罪否に就き、和漢の道德的古例を引きて論じたるものなり。
◎新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

げつしうをしやうろく
月舟和尙錄　三卷　僧　月舟
同和尙の語錄にして、侍者圓秦等の編するところなり。住東山建仁禪寺、永正七年庚午(一五一〇)再住東山建仁禪寺、大永二年壬午(一五二二)和尙十八住東山建仁禪寺等の法語垂示數十編を收む。

◎月舟(諱桂)の傳記は「洛陽智恩寺松陰硯銘」の下にあり。

けつしふのまき
決拾之卷　一卷
決は弓掛、拾は韘の事にて、本書は其の故實を記したるものなり。但々三枚に寫して、「弓術秘傳書」の中に收めたり。

けつしよくつとめかた
闕職勤方　一冊
賀茂神社の闕職勤方のことにて新宮以下の社司氏人中より上りたる口訣書なり。こと享保元年丙申(一七一六)十月十二日より同十二月二十八日のことにかゝる。

けつしよとりはからひ
闕所取計　一冊
人民の闕所に關する書類なり。幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。嘉永五年壬子(一八五二)のものにかゝる。

けつじろく
結耗錄　三卷　松岡　玄達
張其章の事、矮雞銀の事、年忌の事等より井戸茶碗の事、湛祝の歌の事、高巖の事に至る一百二十項の隨筆。考證的のもの多し。「續略」に、劉備性好結毛、有人以髭牛尾與備者、因手自結之」とあり。書名は之れに取りしものなるべし。寬曆九年己卯(一六二九)秋八月葛陵、高峻の序あり、文政八年己酉(一八二五)三五に出版す。
◎松岡玄達の傳記は「櫻品」の下にあり。

げつせいしふ
月清集　四卷　藤原　良經
著者の名集なり。月清の名は、「式部史生秋篠月清」といふ著者の名にとれり。
◎藤原良經の傳記は「殿記」の下にあり。

げつせんじゆんぜんじげじゆ
月泉洵禪師偈頌　一卷
著者の偈頌を輯集したるものにて、二百三十餘首を收めたり。著者禪洵は月泉と號す。

げつだいひやくしゆ
月題百首　一卷　僧　立詮
月題の詩百首を撰輯したるもの。廣賢、卜幽、立詮、立英、伯元、友元、格以下杏仙其の他數十家の作にかゝる。林尚陽軒、讀耕齋が、題を撰びて、春雪、春信、その他門生等に詠作せしめたるものなり。寬文十二年壬子(一六七二)正月十五日編者立詮の跋あり。著者立詮は別に「和漢十題雜詠」の著あり。いまその詳傳を得ず。

げつだうけんもんしふ
月堂見聞集　廿九卷　本島　知辰
著者月堂の見聞雜錄なり。元祿十年丁丑(一七〇七)より、享保十九年甲寅(一七三四)に至る凡そ三十八箇年間に於ける、朝儀政法天變地異、其の他國中に於ける物價の高低、衣服調度、時好の推移等に至るまで細大共に記せり。材料の多くは其の實檢に得たるものなれば資永享保間の世態風來事の研究には好箇の資料たるべしといふ。一名を「圃野隨筆」と稱せり。著者本島知辰は字を梅子といひ、月堂と號す。

げつたんぜんじしんくわじやうろく
月潭禪師心華剩錄　五卷　僧　月潭
著者の法語偈文等を編輯したるもの。卷一に示衆、小參、法語、偈頌。卷二に小佛事、願疏。卷三に願疏、自讚、書啓。卷四に序跋、記。卷五に銘、說、疏、祭文等を收め、末に直指月潭の行狀を揭ぐ。寶永七年庚寅(一七一〇)の自序あり。享保六年辛丑(一七二一)出版す。
◎月潭のことは「禪悅集」の下にあり。

けつちせう
決智抄　一卷　僧　存覺
法華と念佛との優劣を對辨したるものにして「眞宗法要」第十四卷に收めらる。著作の年月詳ならず。
◎存覺の傳は「六要鈔」の下に在り。

けつぢやうわうじやうしふ
決定往生集　一卷　僧　珍海
念佛淨土の教義を述べたるもの。卽ち一切の衆生に皆成佛の種子ありとも、佛法發心等の緣なければ、此の性獨り解脫すること能はず。然るに稱名念佛する人は、能く成佛の因緣具足し、決定して淨土に

生れ、菩提を極むることを得と説きたり。崇徳天皇の保延五年己未(一一七九)の撰述に係れり。

◎珍海の傳は『倶舎論明眼鈔』の下に在り。

けつてきちやくようはうくでん
闕腋着用方口傳　本一巻
大塚　嘉樹

闕腋の着用次第を記述したるものなり。天明二年壬寅(一七四二)自らの奥書あり。

◎大塚嘉樹の傳記は『指南闕準』の下にあり。

けつぱうきよべつしふ
結髪居別集　本四巻　稲生　宣義

巻の一に奇南香、淡把姑、西國米、落花生、蘆薈菜、番椒、藤。巻の二に著草、含歓草、千年薑、吉祥草、錦繍草、接續草、地錦、苺。巻の三に婆羅樹。落葉松、様楽花、蕃千花、胡枝花、蔓陀羅花。巻の四に香魚、鰊魚、海鰻、沙噀、吉天子、玃猴、拂菻狗、果下馬等を漢文にて考説せり。正徳四年甲午(一七一四)正月二十日室直清の序あり。四巻一冊に寫傳す。

◎稲生宣義の傳記は『庶物類纂』の下にあり。

けつぱうづかい
結方圖解　本一巻

此の書は有らゆる紐の結び方を記して詳に圖解せり。小笠原流と和するものなりといふ。

けつぽくもんじかう
鍥木文字考　一巻　鶴峰　戊申

河内國枚岡泡輪神社所蔵の神代文字「土筒に彫り付けたる」アナイチ」四十七字の事を考説せり。天保九年戊戌(一八三八)古川鼎の序、佐藤忠淵の跋等あり。一名を「神代文字點畫考」といふ。

◎鶴峯戊申の傳は『神階錄』の下にあり。

けつまくへん
抉膜編　一巻　僧　寶巖

淨土眞宗の教意安心に就て、支伽の「彈妄釋疑編」を論難反駁して、自著「歸命本願訣」を辯護し、益々功存等の三業歸命の説を破斥したるものなり。光格天皇の寛政元年己酉(一七八九)九月の著作に係る。

◎寶巖のことは『歸命本願訣』の下にあり。

けつめきかう
毛野紀行　本一巻　清水　長年

天明八年戊申(一七八八)五月十日江戸を立ちて、十三日、日光に着し、廿四日自宅に歸るまでの記なり。歸路足利學校に過り、學校所蔵の經籍略と地圖とを寫し來りて添へたり。

◎清水長年の傳記は『熱海紀行』の下にあり。

げばふだ
下馬札　本一軸

禁門其の他下馬札の古筆蹟を寫せるもの。禁門勘解由小路発三位資忠卿眞蹟、六門下馬錦小路極腐鼠肝同佐竹甲斐守源重成書、其の他數箇、元弘三年癸酉(一九九三)龍門等の下馬、元享四年甲子(一九八四)のもあり、寧樂所目絵、藏人所目録あり。皆自宇に模寫せり。

げふえうしふ
業要集　本三巻　扇谷　定繼

文政元年戊寅(一八一八)の自序あり。「予野州の山中に生れ、稚うして此藥の家に仕へ、後其持休める株に代り、夫を勤め、是を繼の命をうけて跡を相続し、年を經、文化の末に至り、家藥の起立以來の書を公廳に泰る事あり、其文の餘を綴らんと思ひ立、同志の人々補助し、享保以來文化に至るまでの時宜を探り求めて、終に札葉事略成り、會所に及び、組々の備となる、其要用の本文を數き書して、其書より成來り、成行末を愚考し添置けり云々といへり。年次に隨て雜事を記し、横綴三冊に細書して一帙に納む。

けぶきぐさ
毛吹草　本五冊　松江　維舟

俳諧の集なり。正保二年乙酉(一六四五)二月の編輯にかゝる。

◎松江維舟の傳記は『犬子集』の下にあり。

けぶきつるが
毛吹追加　三冊　松江　維舟

著者の俳諧集なり。正保四年丁亥(一六四七)三月の編輯にかゝる。

◎松江維舟の傳記は『犬子集』の下にあり。

けふなんしふ
狭衣集　四巻　藤　忠休

著者の詩文集也。巻一、巻二に詩あり。巻三、巻四に文を收む。文化二年乙丑(一八〇五)杉浦安定、服元立、根經世、龍勢甄純、石永貞、加藤景範等の序跋あり。著者藤忠休は武州の人にして字を明夫といふ。

けふのほそぬの
けふの細布　四冊　荻野　安靜

著者の俳諧集にして、明暦三年丁酉(一六五七)三月の編にかゝる。

◎荻野安靜は京都の俳人にして、似空軒と號す。松永貞徳の門人なり。著書は歸諺集、如意寶珠、及びけふの細布等なり。延寶四年丙辰(一六七六)歿す。

けふのむかし
けふのむかし　一冊　未　拙

著者の俳句集にて、元祿十二年己卯(一六九九)の編輯にかゝる。

◎未拙のことは『おくれ毛』の下にあり。

けみやうじゐ
假名字彙　一巻　松浦　久信

最初に假名附格の辨を掲げ、和訓五十字五行配當圖を示し、以下水火木金土各性適合の名字を撰び、更に金性火性両性の文字、通號の文字、編號の文字、片假名以呂波毘敷圖、毘敷吉岡圖等を表出せり。

◎松浦久信の傳記は『家相祕傳集』の下にあり。

けらいおさがめさしひかへうかがひれい
家來御咎差扣伺例　本一巻

家來御咎被仰付候節、主人遠扣、伺の有無、並に御裁許濟、御用番樣へ始末共に御屆無之御例、且落着之儀計御屆之御並等を記載したるものなり。享和二年壬戌(一八〇二)十月下院、中村藤吾の本に就て謄寫せる由を記せり。

げんいうゐんさまおへやすみにつき
嚴有院樣御部屋住日記　本一冊

德川四代將軍家綱、寛永十八年辛巳(一六四一)九月朔日出誕して以來、慶安三年庚寅(一六五〇)十二月二十六日に至る部屋住中の日記なり。侍役の筆錄にかゝる。

げんいうゐんさまたんじやうき
嚴有院樣御誕生記　本一巻

德川四代將軍嚴有院家綱が誕生の記事なり。禁中よりの進物、公家衆の下向、諸大名の獻品等を列擧せり。寛永十八年辛巳(一六四一)九月の事なり。

げんいうゐんさまみよのき
嚴有院樣御代之記　本一巻

德川四代將軍家綱の治世中、正月元日より十二月晦日に至る年中の大小事を筆錄す。延寶八年庚申(一六八〇)五月八日薨去す、本書は其の葬送日記なり。外に御法事日錄、御堂供養日錄、御法事階錄、一周御忌日錄七回御忌日記、二十一回御忌日記、等を併せ六冊に寫傳せり。

げんいうゐんどのさんくわいごきしんにつき
嚴有院殿三回御忌辰日記　本一巻

天和二年壬戌(一六八二)五月八日、故德川四代將軍嚴有院家綱の三回忌にあたり、東叡山に於て法會を執行したる時の顚末を記したるものなり。

げんいうこうふ
嚴有公譜　本一巻

德川四代將軍嚴有院德川家綱一生間の年譜なり。

げんうんかう
幻雲稿　本一巻

著者の絶句詩集にして、收むる所凡て數百首あり。

けんえいぐわんねんうたあはせ
建永元年歌合　本一巻

建永元年丙寅(一二〇六)七月二十五日三十番歌合にして、一に「卿相侍臣歌合」といふ。樂議判なり。

けんえいぐわんねんのき
建永元年記　本一巻

土御門天皇の建永元年丙寅(一二〇六)八月十三日より、同十二月十四日に至る記事なり。攝政作文事、左大辨公定卿配流宇佐渡國事、其の他のことをも記せる公邊の日記なり。

けんえいにねんみおやのやしろうたあはせ
建永二年御祖社歌合　本一巻

建永二年丁卯(一八六七)十四番歌合にて、源通具等の詠なり。

けんゑんいへん

讃園遺編 卷二十卷　荻生　茂卿

著者の雑説を門人等の筆記したるもの。鄙語俚言より、古戯、雑事に至るまで、数十百項、假名文に雑記せり。二十巻を、仁義禮智信の五冊に寫傳し、内閣文庫に、特別書として所藏す。末に天保中屋代輪池翁と十巻宛分寫したる旨奥書の奥書あり。

◉荻生茂卿の傳記は「讃園秘錄」の下にあり。

けんゑんじつぴつ

讃園十筆 卷十卷　荻生　茂卿

著者の漢文隨筆なり。經學、道義、文武、藝術、故實等に渉りて博く破錄せり。著作の年月詳ならず。

◉荻生茂卿の傳記は「讃園秘錄」の下にあり。

けんゑんずゐひつ

讃園隨筆 五卷　荻生　茂卿

道徳の理義、訓詁の考等を記せる漢文隨筆なり。正徳四年甲午(一七一四)春正月、勝概園の序を附して出版す。

◉荻生茂卿の傳記は「讃園秘錄」の下に見よ。

けんゑんだんよ

讃園談餘 卷六卷　荻生　茂卿

先づ我が國の神道はもろこしの神道なりとて、祭政の一項を掲げ、以下禮文、學術、道義、風俗其の他の事數十項を漢文にて雑記したるものなり。

◉荻生茂卿の傳記は「讃園秘錄」の下に見よ。

けんゑんひろく

讃園秘錄 卷二十卷　荻生　茂卿

兵制、軍機、戰略、陣所、武器等に至るまで詳明に論述したるもの。卷一制賦。卷二兵制。卷三職制並選兵。卷四編伍。卷五悪令將吏之禁令、賞功。卷六行軍、候探、烽燧、狼煙。卷七營地、營築、營制、營規。卷八陣法上。卷九陣法下。卷十教旗上。卷十一教旗下。卷十二戰略上。卷十三戰略下。卷十四戰略下。卷十五城制上。卷十六城制下。卷十七守法上。卷十八守法下。卷二十水法。及び附錄等あり。

◉荻生茂卿は江戸の鴻儒なり。名を雙松、通稱を總右衛門といひ、徂徠、讃園、赤城翁等は其の號なり。姓、物部なるより略して物と稱す。年十四の時父の講所に從ひて經學を研究し、十二年にして江戸に歸り叔父覩の家を繼ぎて博士となり、之れより洛陽の學を講ず。又柳澤氏に仕へて儒官となり、累進して祿五百石を受く。其の學に於ては一朝潜學を棄てゝ復古學を主張し大に門戸を張る。安藤東野、山縣周南、服部南郭、平野金華の徒、從ひ學び弟子大に進み名聲海内に數き、貴賤上下爭うて業を受け、遂に海内の文學爲めに一變するに至る。又將軍綱吉の爲めに經史を講じ、同吉宗の命に由りて六論衍義に句讀を附したる事あり。著書には辨道、辨名、論語徵、大學解、中庸解、孟子刪、明詩絶句解、四家詩、同外書、讃園十筆、讃園隨筆、讃園談餘、明律考、度量考、射書類聚解、西洋火攻神器解、吳子國字解、素書國字解、明律國字解、紀功新書抄、文變、讀荀子、讀韓非子、讀呂氏春秋、譯則、譯文筌蹄、譯筌後編、孟浪之編、草堂客話、經子史要覽、南留別志、答問書、讀答問書、葬禮考、蒲文考、樂制考、樂律編、幽閑譯抄、琴學大意抄、廣樂悲譜、明十三省考定圖、太平策、經濟總論、蘐園寓錄、古文矩、文訣、韻纂、唐後詩、絶句解、同拾遺、和漢俗材、皇朝正聲、詩語自在抄、詩語苑、徂徠集、答子考、晏子考、樂語聖言、非地解、讃園集、文考、論語辨書等あり。享保十三年戊申(一七二八)正月、六十三にて歿す。

けんゑんろくかう

讃園錄稿 二卷　宇佐美　惠

徂徠社中の詩を類聚したるもの。宇秀緯、高維磬、西嶽侯、平堯質、釋慧岩、太宰純、應正長、田眞鴨、于之鑾、秋以正、木實門、服元喬等を首として作者を以て類聚す。享保十二年丁未(一七二七)平安仲の序を附す。著者宇佐美惠の傳は「輔儒編」の下にあり。

げんおうぐわんねんしやけちうしんじやう

元應元年社家注進狀 卷一卷

後醍醐天皇の元應元年己未(一九七九)比叡社司の注進狀なり。小比叡社神主從四位下祝部宿禰擧昌、從四位下祝部宿禰昌宗、祠官從四位下祝部宿禰道眞。同大社神主前大藏大輔從四位上祝部宿禰成久、從四位上祝部宿禰延長、祠官正四位下祝部宿禰貞等の連署注進するところ。「續群書類從」卷五十二、神祇部第五十二に入れたり。

けんかいろん

顯戒論 三卷　僧　最澄

大乘佛教の戒法に就て論述したる書なり。初め嵯峨天皇の弘仁十年己亥(八一四九)最澄奏して、大乘圓頓の戒壇を叡山に建てんことを請ふ。然るに南都の諸僧綱等亦表を上りて、痛く之れに反對せしに因り、最澄斯論を作りて、彼れの抗議を反駁したり。卽ち、開雲顯月編、開顯三寺所有國編、開顯文殊上座編、開顯大乘大僧戒編、開顯授大乘戒爲大僧編の五編、五十八條の細目あり。每條佛經の文を引證して南都諸僧綱の奏議を論駁せり。翌弘仁十一年の製作にして「續群書類從」第六輯に收められる。

註釋には「顯戒論開蹤記」四冊「圓耳律師眞流」あり。

◉最澄の傳は「守護國界章」の下に在り。

けんかいろんえんぎ

顯戒論緣起 一卷　僧　最澄

弘仁十二年辛丑(八一一)史記宮に上る所の書なり。其の序に曰く、顯戒論者、影響對奏、爲顯圓珠、山家所造也、今斯緣起者、捨其新文、示顯戒田者也、若讐此文、恐偏執者、將斷聖化、此故名緣起」云々とあり。上下二卷の中、下卷一卷は夙に闕本せり。享保元年丙申(一七一六)殘一卷を開版す。

◉最澄の傳記は「守護國界章」の下にあり。

げんかうしやくしよ

元亨釋書 三十卷　僧　師錬

推古天皇以來元亨年中に至る七百餘年間に於ける我が國佛教の略史なり。僧傳の實傳及び概評より、外教渡來始末等を記す。著者の用意篤し「春秋」、「史記」に擬して作れるなり。著者曾て鎌倉建長寺に到りて、唐僧一山といふに會したる時、談たまたま我が名僧の事に及びしも著者我が僧傳に聞くしして、唐僧の間に對して答へ兒きを得ざりしより、大に之れを恥とし、奮起して本書の編纂を企て、遂に十數年を經て完成したるにて記す。書成りて元亨二年壬戌(一九八二)後醍醐天皇の御覽に供へ奉る。其の撰ぐる所は、卷一、卷二に傳智十八篇解。卷三、四、五に篇解(八十五人)。卷六、七、八に淨禮(三十八)。卷九、十、十一、十二に感進(百十一人)。忍行(十四人)。卷十三に明戒。卷十四に樞輿(十九人)。卷十五に方應(九人)。卷十六に力遊(二十九人)、雜愿。卷十七、十八、十九に雜類(百人)。卷二十以下二十六に至る資治表。卷二十七、二十八、二十九、三十に志略例、智通論等拾異(二十人)を載せたり。然して、本書僧傳は凝然の該書は寛永板本を原とし、昌平本、及び元亨釋書作なるを、師錬の剽竊したる由「碧山日錄」に見えたり。本書は「國史大系」の第十四卷にも收入せり。細目、元亨釋書人名索引を附して搜索に便したり。

◉師錬の傳記は「海藏略詠」の下にあり。

げんかうしやくしよびかう

元亨釋書備考 三十卷

此の書は師錬の「元亨釋書」に漢文にて入注したるものなり。字義、出據等を明にす。

げんかうしやくしよるゐじ

元亨釋書類字 卷一卷

師錬の「元亨釋書」を讀むもの、衆に供せんため、書中に記載せる事項を精細に索出し、之れをいろは分けにして其の所在の卷數丁數等を指示したるものなり。

げんかうしやくしよわげ

元亨釋書和解 廿三卷　僧　惠空

師錬の「元亨釋書」(漢文)を假名書に譯解したるもの。今日普通に行はるゝものは多く此の本なり。元和三年丁巳(一六一七)の出版にかゝる。

◉惠空の傳は「實語教童子教諺解」の下にあり。

げんかうしやうみやうじのつづ

元亨稱名寺圖 卷一鋪

武州久良岐郡金澤稱名寺の古圖にて、造作の記裏面にあり、「元亨三年癸亥(一九八三)二月二十四日、鞆靡師極樂寺長老忍公大德、答法多寶寺長老俊海律師唱相講答」と記したり。寬政五年癸丑(一七九三)四月裝標丸の裏書あり。

げんかうだいそうづでん

元杲大僧都自傳 卷一卷

僧　元杲

元杲僧都一生の事歷を自記したるもの「續群書類從」卷二百十四、傳部第二十五にあり。

◉元杲は江州石山寺に住す。長德元年乙未(一〇九五)二月示寂せり、年八十五。

げんかうでんき

兼好傳記 一卷　倉田　松益

自序には「兼好傳記拔萃鈔」と標せり。卷端に下部系圖「知證揃記」と同じくして、大系圖と異りたる揭

げ、傳には、諸書と、諸歌とを引きて、其の年代住所等を考證せり。貞享二年乙丑(一六八五)の自序あり。石井山四郎源義行といふ人の跋を掲げたり。

けんかうはふししふ

兼好法師集　一巻　僧　兼好

最初「石山に詣づとて曙に逢坂を越えしに」といふ題なる「雲の色にわかれもゆくかあふさかの、せきぢの花の明ぼの、空」といふより、最後の「春のこゝろ哀傷」といふ「歸りこゝわかれなさても歎く哉、西にてかつはいのるものから」といふに終る。凡て二百八十六首、類別なく掲げたり。「群書類從」巻二百六十九、和歌部百二十四にも收めたり。

◎兼好の傳は「徒然草」の下に在り。

けんかうはふしものみぐるま

兼好法師物見車　一巻　近松門左衛門

寶永三年丙戌(一七〇六)五月、大阪竹本筑後掾が座にて、始めて興行したる脚本なり。赤穂義士復讐に關する事實を仕組みたれば、本書は「赤穂太平記」と共に忠臣藏の源流といふべし。

◎近松門左衛門の傳記は「國姓爺合戰」の下にあり

げんかうみんぶしやうづちやう

元亨民部省圖帳　一巻

元亨年間に於ける民部省の圖帳を抄錄せしものにして、東海道及び畿內中數箇國の、田地租稅寺田社地等の事を記せり。其の偽書なることは「前後風土記概論」に詳なり。

げんかうよねんいはしみづぎやうかうぎやうれつ

元亨四年石清水行幸行列　一巻

後醍醐天皇の元亨四年甲子(一九八四)三月廿三日石清水八幡宮へ行幸遊ばされたる時の行列記事なり。「續群書類從」巻八十四、帝王部第三に收む。

げんかうよねんねんぢうぎやうじ

元亨四年中行事　一巻　賀茂　在實

後醍醐天皇の元亨四年甲子(一九八四)一月より十二月に至る朝廷の年中行事を記したるもの。「續群書類從」巻二百五十五、公事部第八に收めたり。賀茂在實等の編するところなり。

げんかうろく

建槩錄　一冊　三十七册　河野　逸

德川將軍の戰蹟及び內外藩の諸侯、其の他の家系軍功の傳記なり。悉く漢文にて記す。建は字書に「興建通」、槩は、縮也、弓衣也、甲衣也、受箙器也」とあり。「禮樂記」に、「倒載干戈、包之以虎皮、名之曰建櫜」とあり。書名は之れに取りたるものにて、兵器を包みて復用ひず、世の泰平に歸したる意なるべし。著者河野逸は淡路の人にして、「富田屋嘉兵衛傳」の別著あり。

げんかうろくしふしやく

言行錄輯釋　四巻　近藤　元隆

宋朱文公の輯錄せる「八朝名臣言行錄」二十四巻中より、制度文物の徵し難きものを考出し、又本文に訂正註解したるものなり。文政二年己卯(一八二九)の自序あり。

◎近藤元隆は字を正公、通稱を大作、號を甘棠軒といふ。江戸の儒者にして忍藩に仕ふ。著書には皇朝典故分類、文海蠡測、甘棠軒雜記等あり。文政八年乙酉(一八二五)十一月十七日、三十三にて病歿す。

げんがく

原學　一巻　帆足　萬里

詩書禮樂周易春秋等の事につきて論辨したる漢文の斷簡なり。

◎帆足萬里の傳は「原敎」の下に出す。

けんかだうきんぷ

兼葭堂琴譜　一巻　木村　孔恭

上古琴論、五音統論、禮樂序、撫琴轉絃歌を始め琴之象形、上古琴賦、聽琴賦、鼓琴詞、其の他あらゆる琴に關する要事を編錄せり。皆漢文なり。今兼葭堂琴譜と刻せる罫紙に寫本せるは、蓋し其の原稿にはあらざるか。

◎木村孔恭の傳記は「一角纂考」の下にあり。

けんかだうざつろく

兼葭堂雜錄　五巻　曉　鐘成

筆蹟、繪卷物、法帖、書翰、其の他珍器寶物の圖、または遠近古今の奇談異話等を記載す。一代二代兼葭堂に貯へたる往復狀其の他の內より撰出編輯したるものなり。凡そ九十餘種を出す。安政三年丙辰(一八五六)編者の序あり。詳に編輯の由來を敍せり、同六年出版す。

◎曉鐘成の傳は「雲錦隨筆」の下にあり。

けんかだうふけんしせう

兼葭堂府縣志抄　本朝一巻　木村　孔恭

祥符縣志等府志等二十有餘の諸府縣志より物產に關する諸件を抄錄したるものにして、動植鑛物の產出地及び其の形狀效用等を記せり。著作の年月未だ詳ならず。

◎木村孔恭の傳記は「一角纂考」の下にあり。

げんかはふししふ

元可法師集　本朝一巻　橘　公義

著者の家集なり。卷頭秋冬戀雜に分ち凡て二百數十首を收めたり。世を遁れて高野に住し、元可法師と號したる事ありしより集の名とす。歌中應安年中の歌あり、時代稍降すべし。「群書類從」巻二百七十、和歌部第百二十五にも入れたり。

けんかふしんろん

劍甲新論　二巻　鈴木　鐸

劍甲機械維長弩方戰衣等の時勢と事實とに適切なる批評して說明したるもの。凡例中の一項に、「古來より戰衣の得失を論ずる者、未だ皆て野服を用ふるに如すと言ふ者なし。固て新論といふ」といへり。上の卷に、「劍刀總說」より「製作」に至る二十六條、下の卷に、「甲冑總論」より「火砲」に至る十八條と雜具一條、陣具十八條と、馬具十九條とをあげ、附錄に加藤清正の軍制を掲げたり。嘉永六年癸丑(一八五三)十月十八日の自序、翌七年森藺の序等あり。孝明天皇の慶應元年乙丑(一八六五)出版す。

◎鈴木鐸の傳記は「名君鑑鑑」の下にあり。

げんかよのん

絃歌餘韻　二巻

伊勢國人が寶曆七年丁丑(一七五七)元旦に、其の國君に上りたる。元旦詩を集錄したるもの。元旦詩を集錄したるもの。元旦詩を集錄したるもの

水翁春望、山路秋行の題にて、詩は太政大臣眞經、大納言眞輔、中納言資賢以下、歌は前上總介藤原家隆、左衛門督源通光、前大僧正慈圓以下、凡て三十八番の詩歌合なり。『群書類從』卷二百二十三、和歌部第七十八にあり。

けんきうづでんちやう

建久圖田帳　一卷

建久年間、島津家に存するところのものにして、鹿兒島藩の圖田帳なり。明治十四年內務省の謄寫したるものによる。

けんきうにねんきうにつき

建久二年祈雨日記　一卷

建久二年辛亥(一一九一)五月七日より、七日間醍醐寺に於て請觀音經の祈雨供養をしたる日時の記なり。『續群書類從』卷七百二十七、釋家部第十二にあり。

けんきうはちねんひやくしゆうたあはせ

建久八年百首歌合　一卷

僧　慈圓

後鳥羽天皇の建久八年丁巳(一一九七)の百首和歌に、家集の抄を附したるものなり。

◎慈圓の傳記は『拾玉集』の下に揭ぐ。

けんぎおういあん

見宜翁醫按　一卷

松下　見林

其の師赤松正溫見宜堂翁の醫按を雜記したるものなり。天和三年癸亥(一六八三)の記錄歷九年己卯(一六八九)の出版。

◎松下見林の傳記は『異稱日本傳』の下にあり。

けんぎおうのでん

見宜翁傳　一卷

松下　見林

明曆三年丁酉(一六五七)に歿したる醫家赤松正溫見宜堂(著者の師)の詳傳なり。漢文にて記す。

◎松下見林の傳記は『異稱日本傳』の下にあり。

けんきじそう

元龜字叢　一卷

日、月、肉、人、言、木、火、土、金、水、白、風、雨、目、耳、鼻、舌、身、久、骨、手、足、鳥、广、虍、心、豸、牛、馬、羊、龜、魚の三十二部に分ちて類集したる辭彙なり。奥書に據れば、元龜二年辛未(一五七一)二月五日、二代目宗珠藏主五十六歲にて書き畢りたる由見ゆ。

げんきぐんいんせう

源義辨引抄　二十卷　和田　以悅

三光院實澄の源氏物語講義を筆記したるものなり卷首に同本書讀方に傳あり。

◎和田以悅の傳は『遺逸集』の下にあり。

けんきやう

見鏡　一卷

犬追物法式二百七十七箇條を記せり。『見鏡』の名は、此の抄を披見すれば、鏡を見るが如く明らかなる意に基けりといふ。明應二年癸丑(一四九三)十二月、佐々木長綱の束記あり。

◎小笠原元長のことは『犬追物日記』の下にあり。

けんきやうじん

鉗狂人　一卷

本居　宣長

業齋の『街口發』を破したる書なり。著者卷首に、「いづこのいかなる人にかあらん近き比街口發といふ書を著して漫りに大御國の古へを賤しめおとして、かけまくもいともかしこき皇統をさへに憚りもなくあらぬすぢに論じ奉れるなど、ひとへに狂人の言なり。故に今之れを辨じて名づくること斯の如し」と云へり。『漢書』『刑法志』なる髡鉗の義にとれるか。鉗は鐵を以て物を束ぬる義あれば、狂人を縛するの意なるべし。光格天皇の天明五年乙巳(一七八五)十二月の著。

◎本居宣長の傳記は『古事記傳』の下に揭ぐ。

げんきよくわかしふ

玄玉和歌集　七卷

後成、慈圓、定家、家隆、俊惠、有家、道因、顯昭以下同時代歌人の作を集めたるもの。卷一神祇歌に四十三首、卷二天地歌春夏六十四。卷三天地歌秋冬雜二百四十一。卷四時節歌春夏四十六。卷五時節歌秋冬六十四。卷六草樹歌春夏百八十七。卷七草樹歌秋冬七十八、凡て七百三十三首より成る。自序によれば千首以上十二卷なりし由なれば八卷以下は闕け失したるなるべし。『群書類從』卷百四十九、和歌部第四にも收めたり。同書には延慶三年庚戌(一三一〇)書寫の奥書あり。

げんきよしゆうろん

言語四種論　一卷

鈴木　朖

晉人の言語に、體の詞、てにをは、形狀の詞、作用の詞の四種ある事を論述したるものなり。文政七年甲申(一八二四)出版す。

◎鈴木朖の傳は『源氏物語玉小櫛補遺』の下にあり

けんきんびちう

獻芹微衷　本一卷　松本　胤親

外交に就て可否を述べたるもの。最初我が邦の外國往來船の不完全にして、古昔の制に倣ざる事、其の操練等にも熟すべき事を述べ、紅毛來船の沿革を敍し、幸太夫の話に內外事情の警戒を要すべき事より、最後に、魯國、英國等へ公然交易を許して彼等の勝を破るべき事國家の長策也と述べたり。卷末に「獻芹愚裏稿成之後書慨八首」の詩を揭ぐ。

けんきんろく

獻芹錄　本一卷　細井　德民

根本三箇條、枝葉四箇條、華實五箇條、都合十二箇條を立て、一國の經濟治政の要道を述べ、以て人君たるもの、教訓に供せしもの。和文にて綴る。

◎細井德民の傳は『詩經毛鄭異同考』の下に出す。

けんくやうちくでん

犬狗養畜傳　一卷　曉　鐘成

飼養法、病犬治療、犬咬傷速法等、犬に關する諸件を記し載せたり。著作の年月未だ詳ならず。

◎曉鐘成の傳は『雲錦隨筆』の下にあり。

けんぐわいしろうるり

見外自宇瑠璃　五卷　倉藥齋鈍草子

元龜元年庚午(一五七〇)に至る三十年間に於ける德川幕府の大小事件を記す。前項に解題せる『元寬日記』とは自ら別物なり。

げんけいかんき

元慶間記　本一卷

元龜元年庚午(一五七〇)二月二日、織田信長江越退治として進發の事より、慶長五年庚子(一六〇〇)五月七日長束大藏、增田右衞門尉等が內府へ誓詞の條々に至る。元慶間の武家要事を略記したるものなり。

げんけう

原敎　本一卷　帆足　萬里

人倫敎化の本原を明かにせんとて、神儒道釋及び諸敎の大旨異同等を辨明論評したるものなり。漢文にて記す。

◎帆立萬里は文簡と號す。豐後日出の儒者たり。夙に脇愚山に學び、又京師に皆川淇園に學ぶ。晚年三浦梅園、廣瀨淡窓と併せて經術文章の三傑人と稱せらる。著書十餘敦に仕へて治績あり。著書には假字考、修辭通、原學、原敎、原名、窮理通、四書標註、五經標註、荀子標註、國語標註、非樓叢間、西崦遺稿、入學新編、東潛夾論、雜學餘稿等あり。嘉永五年壬子(一八五二)七十五にて歿す。

けんげうけいづならびにしきもく

檢校系圖並式目　本一卷

檢校の起元由來を述べ、歷代數十の檢校を列舉し、更に其の鎭守の事、官位次第、法次第、年中儀式、一

宗六派の分、公事批判の次第、科行次第等を詳記せり。寛永十一年甲戌(一六三四)及び延享五年戊辰(一七四八)等の奥書あり。

けんけうるゐてん

憲教類典 写 百五十四巻 近藤 守重

慶長以下寛政の初年に至る徳川幕府の諸政法、諸書付等を類輯したるものなり。

◎近藤守重の傳記は「右文故事」の下に出づ。

げんけやぶさめのき

源家流鏑馬記 写 一巻

同故實を條書したるものにて、「弓術秘傳書」の中に收む。

けんげんへん

建元彙編 写 四巻 古賀 煜

建元の典故を彙集して每條考語を附したるもの。巻一には和漢年號の頭字を四聲韻字に排して索引に便したり。文化八年辛未(一八一一)の自序に、炎漢より以還、建元、日に多く、徒て遁げ易からず。杳寂のもの策に相望む。唐宋諸儒固より嘗て之れを病み、輒ち書を成し、後人の考覈に備ふるもの一にして足らず、予猶其の掛漏多きを病み、乃ち正史に原本し、旁ら雑書稗説外爽の志を考へ、以て一書を撰す」云々と云へり。

◎古賀煜は精里の子なり。字を季曄、通稱を小太郎、號を侗庵と云ふ。幼より沈默にして最も學を嗜み、日夜精研す。文化十一年遂に徳川幕府に擢られて父と共に御儒者となり、兩番の上に班せらるる。弘化四年丁未(一八四七)年六十にて病歿す。

けんけんしろく

獻賢支仕錄 写 一巻

始めて徳川氏の世となりて、内外諸種の獻上物あり、それにつけても民庶の疾苦を思ひ、又賢人側に奉侍して武將の裏面を知るを得、支配奉行、正路を得、奉公上の要務を心得べき事等を錄載したるものなり。

げんげんしふ

玄々集 一巻 僧 能因

圓融院、花山法皇の御製を始め、凡そ百六十餘首を集む。巻首に漢文の自序あり。曰く「和歌者本朝之風俗也。源流起二於神代一、雅詠盛二于人世一。是以延喜御宇之時、紀貫之奉レ敕、芟二亦三百六十首一。其外撰集之家、往々有レ之。今予所レ撰者、永延以來寛德以往編作也。不レ知二當時之褒貶一、只憶二前後之治汲一之故也。上自二王后一、下至二士女一。粗擢二其門之上科一。聊敍二此道之中興一而已」と、以て其の意を知るべし。「群書類從」巻百五十八、和歌部第十三にもあり。同書には巻名を橘永愷といふ。夙に文章生となり、肥後進士と稱す。藤原長能に就て和歌を學び髪を剃りて能因と號し攝津古曾部に居り、朝夕和歌を事とし、遂に其の奥を極め、一般歌人の尊崇するところとなる。此の書には本書の外に歌枕、八十島記等あり。生卒の年月を詳にせず。

げんげんしふ

元々集 八巻 北畠 親房

我が邦開闢説より、伊勢大神宮の由來、地祇の出生、神器傳受の事等を記述す。「日本書紀」以下、正史野乘諸書等に據りて撰述したるものなりといふ。承應二年癸巳(一六五三)二月出版す。巻八に寶龜二年辛亥(一四三一)なる阿倍東人の歿あるは、由來誤りたりと。同一巻は寶暦三年癸酉(一七五三)山本悉證歿を附し「元元集補闕」として傳寫單行のものあり。

◎北畠親房の傳記は「神皇正統記」の下に出す。

げんげんしやうわしふ

元元唱和集 二巻 僧 元政

明人虎林既白山人陳元贇(歸化人)と筆者と交遊して共に其の詩を和韻し次韻したるを筆錄せるなり。多くは題下に序引を附して、其の事情を説明せり。寛文二年壬寅(一六六二)に認めたる兩人の敍文あり。

◎元政の傳記は「扶桑隱逸傳」の下にあり。

げんげんてい

言元梯 一巻 大石 千引

五十音順にあらゆる國語の語源を出し、其の訓義を解き明かしたるものなり。文政十三年庚寅(一八三〇)に成り、天保五年甲午(一八三四)に版行せられたり。

◎大石千引は、江戸蠣殻町に住して湯屋を業とし、和學者を以て知らるる名を真見といひ屋號と號す。家の號を野の舍といふ。少より和歌和文を好み加藤千蔭に就て學ぶ。著すところに言元梯、大鏡鏡廻

抄、榮華物語抄等あり。天保五年甲午(一八三四)九月十三日歿す、年六十五。

けんげんにねんうたあはせ

乾元二年歌合 写 一巻

乾元二年癸卯(一九六三)五月四日の三十番歌合にて梁醍判なり。本書式は「乾元二年三十番歌合」とも表題せり。

げんげんはふげんしふ

源賢法眼集 一巻 僧 源賢

著者の家集。「小山田の水のこごりのうちとけて、今朝は蛙もゆるに鳴なり」より、「さゞれ石の上行水のあさましく、さら〳〵まらにとけぬ君かなに至る五十一首より成る。「群書類從」巻二百六十五、和歌部第百二十にあり。

◎源賢は鎭守府將軍源滿仲の子なり。僧源信に師事して佛法を學び多田法眼と號す。平生和歌を嗜み本集の外に「樹下集」二十巻の著あり。

けんけんろく

獻暄錄 写 六巻 山本 格安

和漢の雜話を隨筆したるもの。十四門に類排し全編漢文にて記す。

◎山本格安は通稱を伊兵衛といふ。天野信景の門に出でて博覽なる國學者なり。著すところは本書の外に雜石雜錄、齊東談、部書雜說、南柯夢談等あり。寶暦比の人なりといふ。

げんご

玄語 写 三冊 三浦 安貞

陰陽、天地、宇宙、方位、轉移動、形理、天地、絵賞、言動、說施、人道、天命等を解したるもの。漢文にて述べ、又割註を加へたり。東京帝國大學圖書館に貴重本として所藏す。

◎三浦安貞の傳は「五月雨抄」の下にあり。

げんこうきりやく

元寇記略 二巻 大橋 順

元寇蠭蜀の顚末を記したる漢文の略史なり。筆を文應元年庚申(一九二〇)に起して正安三年辛丑(一九二一)に至る四十餘年間、當時の情狀を巨細記錄し、巻尾に元寇年表を掲げたり。嘉永六年癸丑(一八五三)七月十二日、四十七周道と字し、調庵と號す。早く經史諸子に渉り、殊に詩文に長ず。宇都宮藩主戸田氏に仕へたり。嘉永癸丑以來撰夷の說を主張して、幕府の主義に強抗し、遂に捕へられて獄に下さる。其の身體羸弱すること永く保たず歿す。門洲、又、湖庵と號し、藤九郎と通稱す。大阪の儒者。家學を以て名を知る。享保中懷德書院の助教となり、後召されて津輕侯に仕へ、大に東北地方の風を改む。元文四年致仕して大阪にかへり、また懷德書院の教授となる。著書には、外人の親近すべからざるを極論せるなり。

げんこうにつきうらがき

元弘日記裏書 写 一巻

元弘元年辛未(一九九一)以下同三年、建武元年、同二年、延元元年以下同四年、興國元年庚辰(一三〇〇)に至る間の大要記事を漢文にて記す。奥書に、「右元弘日記裏書五枚、寛文七年(一六六七)秋八月、以弘文院林學士本寫之」とあり。

げんこうねんみゆきはじめしだい

元弘四年御幸始次第 写 一巻

後醍醐天皇の元弘四年甲戌(一九九四)正月二十九日の行幸記事。「續群書類從」巻八十六、帝王部第五に入れたり。

げんごがげんかい

源語雅言解 写 十二巻 菅原 種文

本書はその改名「雅語纂解」の題下に解題したり。

げんごし

源語詁 写 四巻 五井 純禎

源氏物語の中にて難解の詞句を抜き出で、部門を分ちているは順に排列し、おの〳〵翻詁を加へたるものなり。

◎五井純禎は予祥と字し、門洲、又、湖庵と號し、藤九郎と通稱す。大阪の儒者。家學を以て名を知る。享保中懷德書院の助教となり、後召されて津輕侯に仕へ、大に東北地方の風を改む。元文四年致仕して大阪にかへり、また懷德書院の教授となる。著書には、史訪、萬葉集詁、勢語通、古今通、譜語、名語、兵論、新題百首等の著あり。寶暦十二年壬午(一七六二)三月十七日、六十六にて歿す。

げんごしんしやく

源語新釋 写 三十二冊 賀茂 眞淵

源氏物語の最初より順序に句節を抜出して字解句解旁々には評論をも下したるなり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下にあり。

けんごたいほうせん
見語大鵬撰 ㊥十七巻
近世叡幸の臣妾が主家を弑逆風靡したる大憝の始末を記せる實錄なり。巻一前田家略傳より、巻十七日吉三王を加州に祭る瀧船の事に至る。

げんごだんきん
源語断錦 ㊥十巻 川上 靜庵
源氏物語の中の熟語を抄出したるもの。天地、時令、人倫、人事、器財、服食、草木、鳥獣等に類別して作文家の資料に供したるなり。
◎川上靜庵は浪華の人にして、靜安遯叟と號し、また臨江齋と號せり。

げんごてい
源語梯 三巻
源氏物語の中の詞句を抜き出でて天地、時候、人倫、支體、生植、氣形、服食、器財、人事、慮閲等に分類しているは順に、各註釋したるもの。此の書は五井純祖の「源語詁」を其のまゝ印行せるを、中井竹山これを辨じて附刻せり。

げんごひけつ
源語祕訣 ㊥一巻 一條 兼良
源氏物語の中の難點十五箇條を抄出して註釋したるもの。卽ち桐壺の巻にて源氏の服有無の事。夕顔の巻にて揚名のすけの事、侍童指貫を着る事。花宴の巻にて紙もほと〳〵舞出ぬべき事。葵の巻にて大將かりの直身の事、ねのこみつがひとつの事、さるもじいま一せ給へ〻の事。椙の巻にてとのゐのふくろの事。明石の巻にてま、なきの事。澪標の巻にて、若君のたすき引ゆひ給へる事。乙女の巻にてをしかひもとある事。玉鬘の巻にて水島の陸に惑へる事。初音の巻にて高市子の事。蝴蝶の巻にてひのよそひの事。藤裏葉の巻にて朝日比の月の事。松風の巻にてかつらの院の事等なり。永正十七年庚辰〔一三二〇〕の寫本を、延寶八年庚申〔一六八〇〕に寫本したるもの。「群書類從」巻三百十九にもあり。
◎一條兼良は「歌林良材集」の下に傳ず。

げんこへん
原古編 六巻 賴 惟柔
天說、鬼神、人物、命、姓、心、仁、仁義禮智、五常、道、一貫、道統、聖、爲學、小大學、知行、存養持敬、治教、王道、王霸等の二十說につき、更に百餘則に分ちて論述したるものなり。漢文にて記す。寛政二年庚戌〔一七九〇〕の自序あり。
◎賴惟柔は安藝國竹原の人。山陽の叔父春水の弟なり。千祺と字し、萬四郎と稱し、杏坪と號す。經學に精しく又詩作書法に巧なり。兄春水と共に藝藩の儒員となり、大に藩の學制等を改む。後郡令に任ぜられて亦大に治績を著せり。天保五年甲午〔一八三四〕五月朔日歿す、年七十有九。

けんこんべんせつ
乾坤辨說 一巻 僧 兼藏
葡萄牙人の著したる天文書を譯述したるもの。著述講述して肥前の儒醫向非元升に筆記せしめたるなり。明曆二年丙申〔一六五六〕の著。
◎西吉太夫の傳は「諸國土産書」の下にあり。

げんこんろく
原根錄 ㊥三巻 玉木 正英
巻上、巻中に三種神器の事。巻下に神籬磐境の傳、鹽土翁の事等を說明したるもの。奥書に「天兒屋命五十五傳、垂加翁社正傳從一位權大納言公通卿直授玉木正英謹書」として花押を加へたり。
◎玉木正英の傳は「玉木集」の下に掲ぐ。

けんさいうすはなさくら
兼藏うすはなさくら ㊥一巻 僧 兼藏
歌文に用ふべき詞のよしあし取捨を論じたる短編なり。例へば「紅の梅、飛梅、冬梅、などつゞけたるよろしからず候。花の雲、花の雪不宜候。花の白雲、花の白雪なるべし」とやうに記せり。明曆元年壬子〔一六五二〕慈雲院殿の命によりて記す由を奥書す。
◎兼藏の傳は「兼藏雜談」の下にあり。

けんさいこうどくぎんせんく
兼藏公獨吟千句 ㊥一巻 僧 兼藏
明曆三年甲寅〔一六五四〕二月十日以下の千句なり。「續群書類從」より抄出したるものなり。
◎兼藏の傳は「兼藏雜談」の下にあり。

けんさいざつだん
兼藏雜談 一巻 僧 兼藏
和歌に關する雜事雜評を記したるもの。例へば「賀

茂の祭の時は齋院神館にて、庭に薦を敷て二葉の葵を枕にして髮給ふなり。忘めや葵を草にの歌は不盡に面白き心を忘めやと證めり」等以下數十項を掲げ、更に中古諸家の歌を引き出でて評材とせり。「群書類從」巻二百九十九、和歌部第百五十四雜十九にも收入せり。
◎兼藏は俗姓猪苗代、明應年代の歌學者にして法橋たり。本書の外に、兼藏うすはなざくら、兼藏公獨吟千句、及び若草記等の著あり。

けんさいざつろく
研齋雜錄 ㊥二十三冊 小柴 研齋
著者の見聞を雜錄し、また諸家の雜記を謄寫抄出等より成れる隨筆なり。其の二十三冊中に、他の書を收載せるものを示せば、竹窗雜談、右史圖、望遠雜錄、戊戌夢物語、御年譜、奈智皿之、浪合記、浪合記同略、浪合記草盛、御紋考、信濃宮傳、御實記、俳家奇人談拔書、温知政要、大内夢物語、武尾問答、雲樂見聞拔書、赤穗實記、玉露叢、地方大成等なり。各書は其の名の下に解題せり。著者小柴研齋の傳は詳ならざれども、別に「見聞雜記」の著あり。

けんさらへすまひづゑ
拳會角力圖繪 二巻 吾 雀
打拳の諸法を說明會したるもの。行司演香の事、我指の善惡を見る事、行司仕樣の事、六ヶ敷拳打心得の事等より、庄屋拳、盡拳、突拳等に至る三十餘項あり。文化五年戊辰〔一八〇八〕の自序を附す。義派と共に編するところにして、畫工松好齋その他の補助あり。著者吾雀は浪華の人なり。

けんさんひさくぬきがき
兼山祕策拔書 ㊥一巻
「兼山麗澤祕策」八巻の中、寛永年中より享保比に及べる、大工作料、諸口銀、小物成等の沿革、及び加州藩の政績に關する案新助の手記とを拔萃したるものなり。

けんさんれいたくひさく
兼山麗澤祕策 ㊥八巻 室 直清
著者の書牘文を雜錄したるもの。政事、幕官、旗下、士庶の評論、執政令書の寫、幕中の細事、國内の祕事等なども記せり。其の多くは加賀藩士に贈りたるものなり。兼山麗澤の名は、著者晩年加州藩士青地蔵人等の兄弟に嘱して號せしめたるものなれば、取て本書の名とせりといふ。此の書は卽同氏等の編するところなり。一名を「鳩巣手軸」とも云ふ。
◎室直清の傳記は「駿臺雜話」の下にあり。

げんし
原子 二巻 原 公遜
上巻に神道、古道、先王、天地、禮樂、鬼神、管丞相。下巻に幾道、論兵、利法、性理、有名、有敎、賞貶、周書。以上十五條の漢文論述なり。而して、本書二巻は外編とせり。著者原公遜は淡路の人にして、飛卿と稱す。

げんしいつさうし
源氏一統志 十七巻 馬場 信意
表題の裏に記せるごとく鎌倉右幕下一世間の細大事績を記錄したるもの。もと「盛長日記」てふ寫本を、紫肆山岡友貞といふもの、請によりて是正改題したる山信意の跋に見えたり。正德二年壬辰〔一七一二〕の輯錄にかゝる。
◎馬場信意の傳記は「尭經記判註」の下にあり。

けんしういかう
嶸州遺稿 三巻 岡井 嶸州
著者の詩集。巻一に五言古詩二十、七言古詩十六、五言律詩四十九、五言排律六。巻二に七言律詩六十二首。巻三に五言絶句六十、七言絶句九十二首を收む。明和六年己丑〔一七六九〕十一月の序あり。姓名を記さず、讀府圖書の印を捺せり。三巻一册に版す。
◎岡井嶸州は、徂徠門の儒學者にて、讀岐侯の記室たり。名を孝先、通稱を郡太夫、字を仲錫といふ。嶸州は其の號なり。

げんしうたかがみ
源氏歌鑑 一巻
源氏物語の中なる詠歌凡て七百九十餘首を抄出編輯したるものなり。順を逐ひて各擬詠者の名を附したり。寫傳のものは單に「源氏物語歌」といへり。

けんしうおよしんしまつ
建州女眞始末 ㊥一巻 荻生 觀
明朝第二代成祖皇帝が、永樂元年〔我が應永十年〕

救を以て奴兒干の野人女直を招諭來朝せしめたる事より、第十七代思宗皇帝の崇禎十七年(我が正保元年)明建州を亡ぼして一統したるまでを記せり。跋中に「德廟實命博士物觀、記建州始末、裒不日而成、賞諸徂徠先生、先生一見曰有未盡事情也、塗抹改竄以授之、觀、喜以爲始得眞面目、乃淨書以進之、大憾德廟之旨云」とあり。

◎荻生觀の傳は「七經孟子考文補遺」の下にあり。

げんしかいてい
檢使階梯 本朝 一卷 岡本 長之

檢使に關する法規諸要件を編錄す。檢使に付品々心得方の事、檢使の徹に付御進書並伺濟等の事、檢使先口書並見分書並請書付類案文の事、行倒死人一件、縊死並水死人の事、自滅人一件、相對死一件、打擲疵受人殺一件、病死人一件、出火並燒死人馬共外見分一件、博奕打盜賊共外召捕一件、御林野火入一件、捨子迷子一件、闕所田畑家財等見分一件、放馬一件、場所熟談一件等の十六條を收む。天保六年乙未(二四九五)仲夏の自序あり。著者自ら檢使の役に服して、其の餘暇に編輯するところなれば事實の確實なる事は知るべきなり。

げんじかうもく
源氏綱目 九卷 和田 以悅

源氏物語 全卷の綱要を概括紹介したるものなり。萬治二年己亥(二三一九)の自序に、「光源氏の物語六十帖は、事ひろきにより、何處に何わざのありと暗に知り難し。此の故に今卷々を分ちて其の中の事とも、殘らずしるし、又、連歌に用ふべき詞と歌とを加へ侍り、次に昔より書ける繪に、人の辭のほど、裝束の色しな誤り多し。されば繪に書くべき所の詞を載せ、繪を入れ華ぬ。それを見れば一部の大概を知る事、掌の綱にあるが如くなれば、名けて源氏綱目といふ云々」と。卷首には此の物語の作者、發起、時代、文法、大意等を論究せり。

◎和田以悅の傳は「道遙集」の下にあり。

げんじくもがくれ
源氏雲隱 六卷

源氏物語の中、名あつて實なき雲隱の卷を補作し、更に巢守、櫻人、法の師、ひはりこ、やつはし、合せて六卷に抄出して六十帖に充したるものなり。康平元年戊戌(一〇一八)其他の奥書あれど確ならず

げんじくもがくれのせう
源氏雲隱抄 三卷 淺井 了意

前項に解題せる「源氏雲隱」六卷を註釋したるものなり。延寶五年丁巳(二三七)版刻に附す。

◎淺井了意の傳記は「東海道名所記」の下を見よ。

げんじぐわいでん
源氏外傳 本朝 五卷 熊澤 伯繼

源氏物語の全編を概括して評論したるもの。歷史的に上古の遺風を知るに必要なること、文學として貴重なること、俗人をして讀み向はしめ易く漸く其の趣意を知らしめて矯風の料たるべく、人若なして永く此の書を繼ぎ讀ましめて治國の道交際上の人情を知るべしとて賞讚せり。或は云ふ著者某婦人の依囑によりて本書を作り成せりと。享保五年庚子寫了の奥書等あり。

◎熊澤伯繼の傳記は「學經外傳或問」の下にあり。

げんしけんがんもく
玄旨軒眼目 一卷 僧 盤珪

禪宗の玄義を通俗に講話したるもの。寬延二年己巳(二四〇九)及び寶曆十二年壬午(二四二二)筆寫取の奥書あり。「禪林叢書」第一編中に收めたり。

◎盤珪は播州龍野の人。夙に京師松尾寺、妙心寺等に入りて佛教を學び、又細國興福寺の庵中に禪を修す。後漢濃に遊歷し、又備前神谷の弟子となりて永琢といふ。禪學を以て名聲漸く著れ、丸龜城主爲めに播州網干に龍門寺を建て、居らしむ。大洲侯加藤泰興も爲めに如法寺を建立し、赤穗城主も興福寺を興して之れに引く。其の智德を慕ふもの益多し。後江戸に出でて天祥寺を創立し遂に茲に寂す。時に元祿六年癸酉(二三五三)なり。禪師の敕號を諡らる。

げんしこうろく
言志後錄 一卷 佐藤 坦

學理學則を說き、修身成道の要を切述したるもの。最初文政戊子の作なる、「此學吾人一生負擔、當斃而後已」從固無窮奮鬪之上善無」盡云々」の項より凡そ二百五十五條を述ぶ。言志錄、言志晚錄、言志錄と合して言志四錄と稱す」併せ見るべし。弘化三年丙午(二五〇六)完刻。

◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文詩」の下にあり。

げんじこかがみ
源氏小鑑 三卷 藤原 長親

「源氏物語」一部の大意を易述したるもの。最初に物語發起の事、進獻の事、卷數の事等を掲げたり。本書は勝定院嚢持へ進したるものなりといふ。

◎藤原長親は花山院と稱す。後村上、後龜山の二帝に仕へ、歷任して元中二年右大臣に至り從一位に進む。致仕して後は明魏又は耕雲と號し專ら和歌を嗜む。「耕雲口傳」を著して和歌を學ぶものに便す。「摘題和歌集」、及び「家集千首」等あり。還江國槇谷耕雲寺に入寂す。

げんじさごろもうたあはせ
源氏狹衣歌合 一卷

左源氏、右狹衣の百番歌合なり。作者は六條院以下數十家。「群書類從」卷三百十三、物語部第八にあり

げんししふ
言志集 一卷 松平 定信

著者の歌集。春の部、あふぐそよのどかに出る日の光、くもらぬ御代の春を迎へて」より、冬の部の「仰げなに道はさまん〳〵ありとある、なかにかしこき大和言の葉に至る百八十三首を掲げたり。「樂翁公遺書」中に收めらる。

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下にあり。

げんししやうこ
源氏掌故 本朝 四卷 有賀 長伯

源氏物語の中にて、後世の引例等に用ひらるゝ歌、詞等の著しき文句を拔抄したるもの。往々引用したる近作の和歌どもを列出せり。

◎有賀長伯の傳記は「歌枕秋の寢覺」の下にあり。

げんじたいがいせう
源氏大概抄 一卷

源氏物語全編五十四帖の大意を概括して簡單に明したるものなり。著者年時共に詳ならず。

げんしだうしせう
研志堂詩鈔 二卷 正墻 圭

著者の詩集にして、廣瀨、淡窗、草場珮川、阿閑九皐、後藤松陰、草場船山、篠崎訥堂、恒遠和等の評點あり。安政五年戊午(二五一八)藤森大雅の序、同年元年辛酉(二五二一)出版す。著者正墻圭は固幡の人にして、朝華、研志堂と號す。

げんしてつろく
言志晚錄 一卷 佐藤 坦

卷首の自題に「余今年齡將二八衰」耳目未」玉太衰何其幸也。一息存、學匪」可」廢。單記成」編、呼曰」言錄」嘉永辛亥夏五月」とあり。本書に示す所凡て三百三十條。嘉永七年甲寅(二五一四)出版。言志錄、言志後錄等と併見すべし。

◎佐藤坦の傳は「愛日樓文詩」の下にあり。

げんじときよごきやうれつしよ
劒璽渡御御行列書 本朝 一卷

劒璽渡御行列の次第を順圖したること其の名の示すが如し。

げんじときよのき
劒璽渡御記 一卷

元弘元年辛未(一九九一)十月六日、後醍醐天皇六波羅より劒璽を土御門の內裡に渡し奉られし時の記事なり。

げんじなんによしやうぞくせう
源氏男女裝束抄 三卷 僧 宗碩

源氏物語の中の人物に要する衣裳の名稱、及び雜染の定式等を詳に記したるもの。位袍、雜袍、禁色、晴裝等の四季の色目等を分ちて說明せり。今見るところは壺井義知の訂補したるものにて義知の享保二年丁酉(二三七七)の跋に「源氏男女裝束抄は連歌師宗碩翁の修輯するところなり。其の注する所を視れば、多く花鳥餘情に本づき間々亦河海、細流、異花の說を用ゐる。是れ碩翁が管見の大概を抄して來だ詳ならざるなり。故に訂補を加ふと云へり。寬政十二年庚申(二四六〇)刊本となる。三卷の中一卷は附錄にして四季の衣の色々、同裏着色々、同小褂色々、單衣の事、打ぎぬの事、袴の事、しびらたづもの〳〵事、扇の事、かざみの事、胡曹抄衣の色色の事、藻鹽草衣の色々の事等を掲ぐ、奥書に「女官飾抄、胡曹抄、藻鹽草之拔萃者、渡邊康映後附也、又少補且所々加證頭」畢。壺安著」とあり。蓋し月村齋宗碩の「源氏男女裝束抄」に、壺井義知の訂正首書したるものに、渡邊康映が更に附錄して補ひしものなり。「源氏物語裝束抄附錄」と題し渡邊康映の名を以て單行の版本もあり。今見るところ全編壺井鵜翁(義知)の名にて刊行せるもあり。

◎宗碩の傳は「被撰名所和歌抄」の下にあり。

げんじにつくわんせう
源氏二十卷抄 二十卷 里村 紹巴

此の書は本名「源氏物語紹巴抄」の下に解題せり。

げんじねんきかう　源氏年紀考　本一巻　本居宣長

源氏物語の中なる源氏の君、其の他の年齢年立等を正す。諸書の誤れるを論證考訂したるものなり。末に「源氏物語年紀圖説」一巻を附録す。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下にあり。

げんしはふいんをいためることば　玄旨法印をいためることば　一巻

玄旨法印細川幽齋を悼める一編の文なり。慶長十五年庚戌(一六一〇)記したるもの。僅數枚より成る。"群書類從"巻五百二十二、雜部七十七に收む。

げんしはふいんわかうしょ　玄旨法印和歌注書　本一巻　細川　幽齋

古人の和歌を抄出して各首頭書に釋註したるもの。即ち人麿の歌二十三、家持二十五。業輔二、公忠二、躬宮女御二、兼盛二十五、貫之十七、伊勢五、赤人十四、頼基三、重之二十一、源順十四、元輔六、元眞十一、仲文一、忠見二、中務五、凡て百七十八首を掲げたり。

◎細川幽齋の傳は「伊勢物語闕疑抄」の下にあり。

げんしばんろく　言志晩錄　一巻　佐藤　坦

學理學則を説き修身成道の要を切述したるもの。「爲學要在一心字、把心以治心、謂之謂聖學」云々の章より、凡て三十三條を示す。言志錄、言志後錄、言志耋錄等併せ見るべし。弘化三年丙午(一八四六)出版。

◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文詩」の下にあり。

げんじひとびとのこころくらべ　源氏人々の心くらべ　一巻

源氏物語の中のそこにかなる事柄を抜き出でて、甲乙當時の心意を比較したるもの。例せば「桐壺の更衣、限りとてまかで給ひける。御門の御心の中と、紫の上いまはとて、五戒さづけ給ひけん源氏の御心の中と、いづれ猶心ぐるしかりけむ」等の如し。凡そ十數條あり。「群書類從」巻三百十四、物語部第九に收めたり。

げんじひゃくえい　限時百詠　二巻

清田君錦、皆川伯恭、富士谷仲達以上三名の百首詩集なり。一名「三先生一夜百詠」とも云ふ。寶暦十一年辛巳(一七六一)八月二十五日三人會合、時間を定めて内閣文庫に保存せるものにして、文政年度より、嘉永年度に至る。

げんじものがたり　源氏物語　五十四巻　紫　式部

一簡の皇子源氏の君といふ隠者を主人公として、之れに紫の上といふ佳人を配し、其の來歴關係を骨子として作り成せる一種の物語なり。或は事實醍醐、朱雀、村上の三朝に渉りて、關係者宮中の人人に准據せるところあり、諷刺的に物したりなど稱すれども必ずしも然るべからず。一條天皇の寛弘二年乙巳(一〇〇五)より後一條天皇の萬壽二年乙丑(一〇二五)に至る宮仕へ中の作なりとも、或は宮仕前寂居中の作なるべしとも云ふ。五十四帖の名は、桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石、みをつくし、蓬生、關屋、絵合、松風、薄雲、朝顔、乙女、玉鬘、初子、蝴蝶、螢、常夏、篝火、野分、御幸、藤袴、眞柱、梅枝、藤裏葉、若菜、柏木、横笛、鈴蟲、夕霧、御法、まぼろし、雲隠、匂宮、紅梅、竹河、橋姫、椎本、總角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋なり。皆巻中の歌句若くは言詞によりて名けらる。本書は我が邦文學上の至寶として古來盛に弄ばれたれば評論又註釋したるもの頗る多し。中にも安藤爲章は其の著「紫文七論」の中に本書の文辭を評して曰く、此の物語の中、和歌並に詞ともに、萬葉、古今、伊勢物語、宇津保、竹取などの古體を離れて、しかもおほどかに、易らかに、優しく、凡そ我が國の風流をつくしたれば、見る人をして倦むことを知らざらしむ。誠に日本文の上なきものなり。全編は宮貴濶潤の氣象にして、宮樣の文章なれども、中に山林出世あり、市井田家あり、貧困哀傷あり、閨情風

景は巻ごとに見えて、情を寫し景を語ること、面のあたり其の人に對ひ、其の所に遊ぶが如し。全體に傳にして又自ら序の體あり、跋あり、記あり、書ありて、諸體備り、「中略」論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、粗より細に入り、俗より雅に趨き、繁より簡に歸し、波瀾頓挫照應伏案などいふもろこしの文法自ら具はれり。其の氣脈は悠暢として寛裕に、其の文勢は圓滑にして婉曲なり。之れを漢文にて見れば、史記莊子韓柳歐蘇にひとしかるべし」と云へり、過賞にあらざるべし。註釋評論の書は左に列擧すべし。

本書の註釋、評論、抄出、年表等に關する書頗る多し。列擧すれば、紫寂法師の「紫明抄」、行阿法師の「源中最祕抄」、四辻善成の「河海抄」、長慶天皇の「仙源抄」及び「源氏小鑑」、藤原伊行の「源氏奥入」、藤原定家の「奥入追加註」、源光行の「水源抄」、安居法印の「源氏物語表白」、一條兼良の「花鳥餘情」、同「源氏物語年立」、同「源氏物語和祕抄」、同「源語祕訣」、宗祇法師の「不審抄出」、同「帚木別註」、牡丹花肖柏の「弄花抄」、同「一葉抄」、西三條公條の「細流抄」、西三條實澄の「明星抄」、九條禪閤稙通の「孟津抄」、林宗二の「林逸抄」、里村紹巴の「源氏紹巴抄」、里村昌休の「休聞抄」、中院通勝の「岷江入楚」、一華堂切臨の「源氏辨引抄」、同「源氏綱目」、能登永閑の「萬水一露」、淺井了意の「源氏雲隠抄」、熊澤了介の「源氏外傳」、同「紫女物語」、北村季吟の「湖月抄」、北村湖春の「源氏物語忍草」、立圃の「十帖源氏」、同「をさな源氏」、契沖阿闍梨の「源註拾遺」、安藤爲章の「紫女七論」、五井純祐の「源語詰」、有賀長伯の「源氏掌故」、多賀釣醉子の「紫文蟹の噂」、壺井鶚翁の「源氏物語紹巴抄」、川上靜庵の「源語斷錦」、後水尾院の「源氏男女裝束抄」、川上靜庵の「源語斷錦」、後水尾院の「源氏物語伏屋の塵」、山本春正の「源氏物語絵入」、藤原宇萬伎の「雨夜物語だみごと」、賀茂眞淵の「源語新釋」、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」、同「紫文要領」、同「源氏年紀考」、同「源氏鈴の色音」、「榎並隆達の「源氏物語魔袋」、藤原廣道の「源氏物語評釋」、同「源氏物語玉小櫛補遺」、石川雅望の「源注拾遺」、北尾紅翠齋の「雅俗源語纂解」、北尾紅翠齋の「源氏物語名寄圖考」、同「紫文消息」、同「紫文聚錦」、同「源氏物語評釋」の二書は註解の書として、「源氏物語一部連歌可用詞」本一巻

源氏物語の中より、連歌に用ふべき詞句をあまねく抄出したるものなり。

げんじものがたりえいり　源氏物語絵入　六十巻　山本　春正

源氏物語の本文に圏點を加へ、句點を入れ、更に傍註を施したるもの。宇治十帖の末に「山路の露」

一巻を附し、外に「系圖」一巻、「目安」二巻、「引歌」一巻を添へ、若菜の巻を上下に分ちて部合六十巻とす。慶安比(二千三百十年代)の出版なり。

◎山本春正は通稱を二郎兵衛といひ法橋舟木と稱す。木下長嘯の門に入りて和歌を學ぶ。本書に施したる圈點の如きは松永貞德より聞得たるものなりといふ。本書の外「古今類句」を著す。天和二年壬戌(二三四二)九月八日、七十八にて歿し、玉鳴院と法號す。

げんじものがたりおくいり

源氏物語奥入　一卷　藤原　定家

源氏物語の中に引用せる故事、歌文の原形出所等を每卷の順序に編纂したるもの。奥書に曰く「此愚本ハ數多傳手跡五本、抽ニ彼是一用ニ捨短所及琢磨之者ニ未及ニ九牛之一毛ニ非蛙之淺才寧及哉。只可ニ和ニ朝弄ニ。纔雖ニ有ニ勘加事ニ又是不ニ足ニ。未ニ及ニ部得ニ以前後ニ不慮事ニ。此本披ニ露於華夷遐邇ニ門々戸戸書寫預ニ誹謗ニ。雖ニ後悔ニ無ニ益ニ。懲ニ前事ニ。卷奥所注付ニ雜案ニ。切出爲ニ別紙ニ之間、歌等多切失ニ。旁難ニ盡ニ恥辱ニ之外無ニ他ニ。向後可ニ停ニ止他見ニ矣。非ニ人染ニ門明靜ニ。秋南光雄」、とあり。「群書類從」卷三百十五、物語部第九にあり。

◎藤原定家の傳記は「拾遺愚草」の下にあり。

げんじものがたりきやうえんせう

源氏物語竟宴抄　寫一卷　三條西公條

永祿三年庚申(二五六〇)仲冬、源氏の講を開きたる時の竟宴日記なり。「續群書類從」卷五百二十、物語部第二十にあり。

◎三條西公條の傳は「稱名院集」の下にあり。

げんじものがたりけいづ

源氏物語系圖　一卷

源氏物語の中に顯はれたる人物各箇の系圖なり。末に系圖に入らざる人名百二十餘、及び無名者十三人とを掲出す。附錄には卷々の次第、源氏數本の事等を記す。

げんじものがたりけいづ

源氏物語系圖　寫一卷

源氏物語の中の人物の系圖なりと稱して附錄なし。長享二年戊申(二四八八)三月遠藤實隆の跋あり。曰く「光源氏物語系圖といふもの何れの代に出來、誰人のしわざといふ事を知らず、異説へ雜し。定めて展轉書寫の間區々にして是非を辨へ難し。仍歌書の傳說を抄錄し、花鳥餘情、細流抄、明星抄、孟津抄等を始め、堀江入楚等も參酌して、註解論證最も精細なり。親切に傍書頭註をも加へて、後學に便すること至大なり。宜なり明治の今日に至るまで、最も學者の稱贊を受けて、最も廣く世に行はるゝことや。卷首には、此の物語と、此の作者とに關する事項を論辨して、殆んど漏すところなし。寶元天皇の延寶元年癸丑(二三三三)出版す。近年活版に作りて行へるもあり。

◎北村季吟は通稱を久助、號を拾穗軒また湖月亭といふ。近江國野澤部の人にして、初め醫を業とし盧庵と稱したり、夙に國學を嗜み、また安原貞室、松永貞德に從て俳諧に長す。後幕府に召され歌學所に補せられて再昌院法印に敍せられ祿五百石を受く。著書には枕草紙春曙抄、伊勢物語拾穗抄、萬葉集拾穗抄、百人一首拾穗抄、歌仙拾穗抄、源氏物語湖月抄、土佐日記抄、大和物語抄、徒然草吟和抄、同文段抄、女郎花物語、八代集抄、和歌圍之抄、增補匿林抄、和漢朗詠集註、古今數端抄、疏儀莊記、次韻經、假字列女傳、六々私抄、三物記、十會集、二十會集、岩つゝじ、水かしわ、埋木、歌仙發句、山の井、續山の井、師走月夜、新續犬筑波集、いなご集、七十二物尹、諸國獨吟、續連珠、室咲百韵、犬千句、俳諧合、雨吟集、銀河百首追考等あり。皆文學上に貴重せらる。寶永二年乙酉(二三六五)六月十五日、八十二にて歿す。

げんじものがたりこげつせう

源氏物語湖月抄　六十卷　北村　季吟

源氏物語の註釋にて、細かに言語文字を解釋し、廣く和漢書佛書等に渉りて、本文に引用せる故事古語を抄錄し、又是非を辨へ、異説を併記せり。卷々におきて、一人々々の頭書に附せり。「湖月抄」といへり。一名を「源氏二十卷抄」ともいふ。それは二十卷に抄出したればなり。

◎黒村紹巴は南都の人。本姓松村氏。歌を以て世に知らる。臨江齋、又、牛醒子等の號あり。周桂に從て連歌を研究し遂に其の妙に達し、貴賤の人々爭うて師事するに至り、法眼に敍せらる。豐太閤秀吉の殊寵を受け宅地を與られし事さへあり。慶長七年(或はいふ五年)壬寅(二二六二)四月十二日、七十九歳にて歿せり。

げんじものがたりすゞのいろね

源氏物語新釋　寫二十五册　賀茂　眞淵

源氏物語の全編を詳釋したるもの。逐條に一句若くは數句を摘出して、諸書に據り諸説に參して考釋を施書せり。第一册の最初に總考ありて、「當卷の作者紫式部なる一の律詩に賦したり。卷末に「右一册自金澤文庫出」とあり、正應四年辛卯(一九五一)の作者を詳にせざるは惜むべきなり。

げんじものがたりしのぶぐさ

源氏物語忍艸　五卷　北村　春湖

源氏物語卷々の大體を講説したるもの。小鑑十帖源氏などは優雅に過ぎてくもりたる鏡の如き不明の心地すればとてこれを著し、菜に與ふと云ふ。成島司直の序にも「忍草といへるは、詞の華を飾らず、事の蹟をもあなぐり求めず、只卷々の大意を、耳近き詞もて、見む人の心にさとしやすからむをのみ旨としぬれば、物語よむ輩の、先此の文より分け入らむに、山口の道まどふべき此上やあるべきと云へり。寫本の卷末に著者の歌あり、「かたみともいはましものを忍ぶ草、ものはぬべきわがみなりせば」と云ふ題名の出版なるべし。卷一に明石の卷までを、卷二に御幸までを、卷三に若菜の卷までを、卷四に總角まで、卷五を以て夢浮橋まで終れり。昌成の跋あり。

◎北村湖春は季吟の長子なり。和歌を善くするを以て歌學所に召されて花果院法眼と號す。元祿十年丁丑(二三五七)正月十五日、年五十にて歿せり。

げんじものがたりしんしやく

源氏物語新釋　寫二十五册　賀茂　眞淵

源氏物語の全編を詳釋したるもの。逐條に一句若くは數句を摘出して、諸書に據り諸説に參して考釋を施書せり。第一册の最初に總考ありて、「當卷

一册印行せり」本書の成立に關する總ての疑問を解釋し、第廿四册の終りには「これは早くより、仰ごとたうべつれば、とし月にしるしもてきて、寶曆八の年(二四一八)の四月そ、いつそまり四の卷までなはり、それが中に、やんごとなき御おほしのことなき書しも多かれど、わざとあらはし記し侍らず、ここ物には其の由書けるもあり、寶菱眞淵」と記せり。廿五册中一册は別記にして、漏れたることを補ひ略せることを詳にせり。

◎賀菱眞淵の傳記は「冠辭考」の下にあり。

げんじものがたりすゞのいろね

源氏物語新釋　寫七册　本居　宣長

最初二卷に源氏物語の大體に關する總論を掲げ、以下卷々の難句を摘出して註釋考證し、更に諸家の説をも評論是非したるなり。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下に掲ぐ。

げんじものがたりせうはせう

源氏物語紹巴抄　廿卷　里村　紹巴

源氏物語の中の疑義を註解したるもの。卷首に「そのかみの心たづねてみだれたる、すぢときわくる玉のをぐしぞ」といへる歌にて其性質の諸抄を正誤せること、題名の此により出でしこと等を知るべし。卷一にすべて物語書の事、此の物語作者の事、紫式部が事、作れる故由、作れる時世、此の物語の名の事、准據、くさ〴〵の事、註釋、引歌、湖月抄、大旨。卷の二大旨。卷の三敎正年立の圖、及び每卷の年立、人物の年立。卷の四は主として「湖月抄」の誤りを正し、卷の五以下「湖月抄」其の他諸註の誤れることを正し、且、所々に註す。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下に掲ぐ。

げんじものがたりたまのをぐしほい

源氏物語玉小櫛補遺　二卷　鈴木　朖

本居宣長の「源氏物語玉能小櫛」の誤りを正し、遺

れるを補へること親切なり。文政四年辛巳(一八二四一八月なる醉月園森嘉基の序を附して發行す。

◎鈴木朖は字を叔清、通稱を常介、號を離屋といふ。尾張の藩儒にして明倫堂の教授たり。後れて本居宣長に和學を學び和漢の學共に長ぜり。天保八年丁酉(一八三七)六月六日歿す、年七十四。

げんじものがたりちどりせう

源氏物語千鳥抄 **一卷**

源氏物語の講義筆記なり。無名氏が應永二十六年己亥(一四一九)の歳に曰く、「昔四辻の儀同三司、光源氏の物語講談の席を開かれて、至德三年丙寅(一三八六)の秋より、嘉慶二年戊辰(一三八八)に至るまで五十四帖の祕説を述べさせ給ひしに、相承の末座に列りて一日といへども怠ることなかりき。後に又おぼつかなきふしぐを尋ね奉りて記置ける雙紙二帖あり、名けて千鳥といふ。三十し二年身を放たずして九十一歳の齢に及べり」云々とあり。惜むらくは筆記者の名を記さゞるを。『續群書類從』卷五百十六の上下、物語部第十六にも收む

げんじものがたりさしたて

源氏物語年立 **二卷** **一條 兼良**

源氏の君の年代に關することを主として、毎卷中の年立を記したるものなり。上卷は桐壺の卷より槇柱の卷に至り、下卷は梅ヶ枝より夢浮橋に至る。

◎一條兼良の傳記は『歌林良材集』の下に揭ぐ。

げんじものがたりなよせづ

源氏物語名寄圖 **一卷**

源氏物語の中なる人物を網羅して一人一覽表に圖せり。本書を說明したるものに、清水濱臣の『源氏物語名寄圖考』あり。次に解題す。

げんじものがたりなよせづかうへん

源氏物語名寄圖考 **一折** **清水 濱臣**

此の書は『源氏物語名寄圖』に解釋說明を施して童蒙の爲めにしたるものなり。

◎清水濱臣の傳記は『伊勢物語添註』の下に出づ。

げんじものがたりねんきづせつ

源氏物語年紀圖說 **一卷** **本居 宣長**

源氏物語の中なる諸人物の年立を圖說したるもの。『源氏年紀考』の卷尾に附錄せらる。

◎本居宣長の傳記は『古事記傳』の下に出づ。

げんじものがたりのうた

源氏物語歌 **一卷**

此の書は刊本『源氏歌鑑』と同物異名なれば該書名の下に解題したり。

げんじものがたりひきうた

源氏物語引歌 **一卷**

源氏物語の中の引歌に、各其の原歌の全首を取り出でて編輯したるもの。奥書に「此の物語の引歌、是れ只三が一にもあらず、今悉く書き加ふべけれど、とても斯る事ばかりにて、正しき傳へなくばひ有るべきにもあられば、只彼の大本のかたことを所々けづりなし侍る」とて小册子に作れり。

げんじものがたりひやうしやく

源氏物語評釋 **九卷** **萩原 廣道**

源氏物語の本文に註釋と批評したるもの。首卷二册に總論と凡例とを揭げて、題號、作者、時世、稱號、歌川意趣向、及び註釋、引歌、准據、卷名、人名、紀年、系圖、頭書評釋、本文評註等の概論を述べ、本文は桐壺より末摘花に至る六卷。最も詳しく最も明らかに註釋批評せり。第七卷紅葉賀以下著者の稿本はありと聞けど未だ世に公にせられざるは遺憾なり。別に『源氏物語語釋』一卷、『源氏物語餘釋』一卷あり。共に本文に頭書すべき考論評註なるも餘白なきまゝに別卷に作れるなり。但し兩卷は共に夕顔の卷に終れり。盛し評釋も夕顔までなりしを近年に至りて若紫と末摘花とだけ追刊せられたるなり。本書は不完ながら源氏評釋中の巨擘として參考せらる。嘉永七年甲寅(一八五一四)正月三日の自敘を附す。

◎萩原廣道は備前岡山の人にして大阪に寓居し、和學者を以て知らる。通稱を鹿左衛門又鹿藏といひ、霞沼、出石居、鹿鳴草舍、蕊園等の數號あり。大國隆正の門人なり。常に著述に從ひ、本學提綱、玉匣補註、心の種、業山の栞、古言譯解、佈聞文集、佳吉物語松風抄、小夜時雨、手樹道波係辭辨、遺文集覽、西戎音譯字論、百首異見摘評、萬葉集略解補遺、玉篋草紙、蕊の塵、柿の落葉、栞の葉わけ等あり。就中本書『源氏物語評釋』は最も得意に詳釋したるものなりといふ。文久三年癸亥(一八六三)五十一にて病歿す。

げんじものがたりふせやのちり

源氏物語伏屋塵 **一卷** **後水尾 院**

源氏物語中の難問につきて考證說明し給へるもの。桐壺のみかど、藏人所の壺すゐる事、帚木の卷に侍るかたの一少將の事、在五中將に比する事、ひたやこもりの事、揭名介の事、きりかけだつもの、事、とのゐもの、ふくろは夜のきもの、事、みつがひとつの事等の數箇條なり。安永三年甲午(一七四三)四月五日、伊勢貞丈の寫本による。

◎後水尾院の御傳は『一字御抄』の下に出せり。

げんじものがたりへうはく

源氏物語表白 **一卷** **僧 聖覺**

源氏物語桐壺の卷より、夢の浮橋に至るまで毎卷の名をたち入れて作りたる文なり。著者紫式部盧構小說を作りし爲めに地獄に墮落したりといふ俗傳說により、其の救濟佛會の時に作りたるものなるべしといふ。文の結尾に「南無西方極樂彌陀善逝希くは狂言綺語の誤りを飜して紫式部が六趣苦患を救ひ給へ、南無當來の導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の緣として之れを弄ばむ人を、安養淨刹に迎へ給へ」と云へり。俗佛者の所爲たること知るべし。

◎聖覺の傳は『大原談義聞書抄』の下にあり。

げんじものがたりめやす

源氏物語目安 **七卷**

源氏物語の全編中より、各語を摘出していろは順に排し註釋したるものなり。一名を『爪印』と云ふ。

げんじものがたりわひせう

源氏物語和祕抄 **一卷** **一條 兼良**

源氏物語の中なる特殊の調句を抜き出でて解釋したるもの。奥書に「右一帖者前關白相國一條殿爲初心者御制作也」とあり。寶德元年己巳(一四一九)霜月なる著者の假名跋あり。『續群書類從』百十八の末、物語部第十八にも收めたり。

◎一條兼良の傳は『歌林良材集』の下を見よ。

げんしやうかんき

元正間記 **二十卷**

元祿正德間の記にして、江戸の大事件を記す。元正間記とは云へど、事は多く元祿年中の事に係る。今見るところは內務省の寫本にて、二十卷二册に寫傳す。

げんじやうきじ

原城紀事 **二十卷** **河北 重喜**

寬永年間に於ける肥前國耶蘇教騷亂の顚末を詳記したる書にして、漢文に成れり。全部を前編四卷、本編十六卷に分ち、天教之害上中下、天教之禁、以上前編)原城興廢、天草紀略、草賊圖不軌、有馬之亂、賊圍當岡、幕議賊據原城、諸將圍城、元日攻城、信綱計略、賊夜斬官營、原城陷、死傷名氏、幸澤始末、松倉始末、富力始末(以上後編)等の題目ありて毎卷に一編を載せたり。

◎河北重喜は肥前の儒者。字を儀卿といふ。溫山、春風樓等は其の號なり。島原藩主に仕へて參政となる。著書は別に『溫山文』三卷あり。古賀精里、賴襄、龜井魯、大槻磐溪等の序跋を附して行はる。

げんじやうしやうじめいしんくわんぶくかうしやう

賢聖障子名臣冠服考證 **二卷**

宇多天皇の賢て作らしめ給ひたる賢聖障子なる屛風以來漢土の名臣の衣冠服色等を說明考證したること名の示すが如し。林信敬等の編述したるものなり。

げんじやうどけうぎやうしやうもんるゐ

顯淨土敎行證文類 **六卷** **僧 親鸞**

此の書は『敎行信證』といふ題名の下に解題したり

げんじやうどでんかいろん

顯淨土傳戒論 **一卷** **僧 了譽**

淨土宗に相承せる圓頓戒法の系脈、旨義等を論述したる書なり。卽ち、圓頓菩薩戒に元と天台宗に相傳せし戒法なれども、淨土宗祖源空、叡山の叡空より之れを傳受し、金剛寶戒章等を作りて弘布しければ、淨土宗が斯の戒法の嫡流なること、及び一向念佛の徒も此の圓頓戒を修して菩支なきこと等を述べたり。後小松天皇の至德四年丁卯(一三八七)の著作に係る。

◎了譽の傳は『釋淨土二藏義』の下に在り。

げんじやうどでんかいろんしき

顯淨土傳戒論私記 **一卷** **僧 全長**

前項に出でたる「顯淨土傳戒論」の註解なり。卽ち、原書の文句を摘出して之れに解釋を加へたるもの

東山天皇の寶永二年乙酉(一三六五)に成れり。

◎全長は淨土宗の僧にして、紀伊國名高浦原念寺に住せし人なり。著書には本書の外に「以呂波字考錄」「顯淨土傳戒論補註」等あり。

けんじやうどでんかいろんほちう　顯淨土傳戒論補註　二卷　僧　全長

前書と同じく「顯淨土傳戒論」の註解にして、原文と註釋とを並べ出し、間々解釋を「私記」に讓りて本書に省ける處あり。中御門天皇の享保二年丁酉(一三七七)の著作に係る。

◎全長の傳記は「顯淨土傳戒論私記」の下に出す。

けんしやうやし　賢相野史　本四卷　原三右衞門

大炊頭土井利勝の言行を集錄したるものなり。文化二年乙丑(一四六五)に認めたる漢文自敍あり。

◎原三右衞門は幕府旗下の步兵なり。父瑜嘗て土井氏に仕へたることありしを以て此の著ありと。

けんじゆありまぢのき　兼壽有馬路記　一卷

九月十五日都を出でて十六日攝州有馬の湯本に著し、十月朔日都に歸りしまでの日記にて自家の和歌、連歌等をも掲げたり。著者年代共に詳ならず、真享四年丁卯(一三四七)無名氏の寫本校合の奥書あるのみ。

げんじゆくしふ　儼塾集　十卷　森　尙謙

著者の詩文集。卷一より卷六に至る文。卷七より卷十に至る文。自己の奥書あり、曰く「此の書世に廣むる存念なし。先師の子孫、及び門弟に形見に遣なり。父母先師の大恩に依り、學問し文を綴りたれば其の大恩を暫し殘し置きぬ。上木は模寫の勞を省けるのみ」と。同四年正倪院大僧正藻覽の跋、元祿十一年戊寅(一三五八)の自序、寶永三年丙戌(一三六六)木下元容の序等あり。

◎森尙謙は攝津の人にして水戸の儒官たり。字は利涉、通稱は彙之輔、號は儼塾、又、不染居士といふ

浪華の人羅佳道祐、京都の松永昌易等に就きて深く經義を究め、更に江戸に出でて林羅山、木下順庵等に學び、遂に水戸義公の爲めに聘せられて國史の編纂に與り、又しばゝ時政の得失を論ず。護法資治論、實境研滴等の著あり。享保六年辛丑(一三一一)三月十三日年六十九にて病歿、沼津の墓誌を作る。

げんじゆくりやうこしふ　蚖縮凉鼓集　一卷

假名遣の書にて、じ、ぢ、ず、づの區別を說きたるものなり。其の音を含めるさゝじみ、ちぢみ、すゝみ、つづみの語によりて書を撰せり。元祿八年乙亥(一三五五)の作、同年出版す。

けんしゆろく　建殊錄　一卷　僧　全長

名醫吉益東洞の治驗實蹟を輯錄したるもの。全國の宿痾難病を治療したる著名の功驗數十を錄し、附錄に長州の儒者鵜殿と治驗を論じたる往復論書を掲げたり。寶曆十三年癸未(一四三三)門人敬甫の輯錄するところなり。別に「續建殊錄」一卷あり。文政五年壬午(一四八二)の出版たり。

◎嚴恭は醫者なり。敬甫と字す。寶曆比の人にして名醫吉益東洞の門人たり。

けんしゆんもんゐんほくめんうたあはせ　建春門院北面歌合　一卷

嘉應二年庚寅(一八三〇)十月十六日、園路落葉、水鳥近馴、臨期遂約戀の題にて公通、俊成、實定、重家、隆季、清輔等以下十餘名の歌合なり。「群書類從」卷百八十六、和歌部第四十一に入れたり。

けんしよ　劍緒　本二卷

神器讓渡劍以下諸寶劍の由來沿革等を詳論したるものなり。

げんしやうわうじやうでん　現證往生傳　三卷　僧　桂鳳

念佛修行の人の傳を輯めたるものにして、年代は寬文年間より元文年間に至り、僧俗人、法師、尼衆、信士、信女、童女の六に分ち、合計七十五人の傳あり。大率淨土宗鎭四派の人なり。元文四年己未(一四九九)の著述に係れり。

◎桂鳳は淨土宗の僧にして、泉州法行寺に住せしといふ。

げんしろく　言志錄　一卷　佐藤　坦

學理學則を說きて修身成道の要を切述したる漢文なり。最初文化癸酉五月念六日の錄稿に天地間の事古往今來陰陽晝夜日月代明、四時錯行其の數皆前定たる事を論じ、末梢に、數理の循環無窮なることを說く。弘化三年丙午(一五〇六)完刻す。別に言志後錄、言志晚錄、言志續錄等あり。併せ見るべし。

◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文詩」の下にあり。

げんじろんぎ　源氏論義　一卷

源氏物語の中の雜袭十六箇條を討論したるもの。伏見天皇東宮の御時、弘安二年己卯(一九三九)十月六日、源具顯の列によりて、康能朝臣、兼行朝臣、定成、爲方と、併從雅有、藤藤朝臣、長賴朝臣、具顯との八人が研究するところなり。寬文元年辛丑(一三二一)出版せらる。

けんしんいちだいき　謙信一代記　本一卷

上杉謙信の幼時より、天正六年戊寅(一三三八)三月十三日の卒去に至るまで軍事の概略、出世の顚末等を記したるものなり。

けんしんき　謙信記　本一卷

上杉謙信の成長より一生の文武事歷を記して天正六年戊寅(一三三八)三月十三日、四十九歲を期して死去せるまでの大略を記せり。

けんしんぐんき　謙信軍記　本一卷

上杉謙信の生誕より、天正六年戊寅(一三三八)三月十三日四十九歲を期して死去するまでの一生事歷なり。「續群書類從」卷六百三十六、合戰部第六十六にもあり。

げんじんらいこうかう　元人來寇考　本一卷　大草　公弼

文安以來弘安に至るまで、元人來寇に關する、防禦追討等の事實を諸書より抄錄したるものなり。

◎大草公弼は大次郎と通稱し、德夫と字し、野木瓜と號す。江戶の和學者なり。

げんすゐひつじやう　縣水筆乘　本二冊　木下　俊夫

天保以下の作にかゝる著者の和歌、詩、和文、漢文、論說等を雜載したるものなり。退思館と刻せる罫紙に寫して、尙餘白多き等より見れば、これ、著者の原稿なるべき。

けんぜんがく　健全學　六冊　杉田　曠

生理學の書なり。英書を、蒼閱人の譯註したるものを、著者更に國語を以て譯出したるものなり。天地間萬物の生活を論ず。機生機諸元質の論、食物及び消食機の論等より、氣候身體に關係あるを論ず、前編諸條の應用を論ず等十五編に分ち論ぜり。文久三年癸亥(一五二三)五月二十二日の凡例あり。

◎杉田曠は德太郎と稱し、後、玄端と改め、充輔と字す。泰嶽、屠卯、櫻所、鷗雲居、雲谷寮、精勤書屋等の號あり。天保五年、年十七、若州侯の藩醫杉田立卿に就きて蘭學醫術を學び、遂に請はれて猶子となり、實子成卿の養弟となる。それより杉田玄端と稱せり。弘化二年分家し、翌三年宗家を繼ぎ、文久二年家督を相續して知行百九十石を賜り、幕府に召されて、開成所教授職御儒者格となり、翌三年外國方樞文御用掛勤を命ぜられ、慶應元年外國奉行支配翻譯御用頭取に轉じ、明治維新の後、駿河國へ移住し陸軍學校教授方となり、又陸軍附屬醫師頭取となり、後、江戶に歸りて病院を設け、明治十三年學士會々員に擧れ、二十二年已丑(一五四九)七月十日麻布永坂町自邸に病歿す。年七十二。著書は本書の外に、嘗て「地學正宗」八冊を翻譯したるとありて

げんそんさんじふろくにんしいか　現存三十六人詩歌　本一卷　藤原　資宣

げんせ～そんじゃ　げんそん
の跋明陳状連ねて…

前博陸、藤亞相、九條前内相、沙彌眞覺以下現存三十六人の詩歌なり。奥書あり、「此の詩歌者、建治二年(一二七六)春壬三月、關東相州時宗、所被結構之屏風詩歌也。圖作者伊信入道、詩者藤中納言資宣撰之、歌者右大辨入道眞觀撰之也、以當世能書令書色紙形云々」とあり。

◎藤原資宣のことは「仁部記」の下を見よ。

げんそんわか

現存和歌 *巻一巻

信實朝臣、從三位行能以下百九十七人の和歌八百五十首を、類聚したるもの。建長二年庚戌(一二五〇)の撰なる由、寛文九年己酉(一六六九)二月二十九日吉保の奥書にあり。

げんそんわかろくでふ

現存和歌六帖 一巻

信實、行能、爲家、等當年名家の歌數百を集めたるもの。建長元年己酉(一二四九)十二月の奥書あり。「群書類從」卷百五十、和歌部第五にあり。

けんだいたうざしき

兼題當座留 *巻一巻

寛政十二年庚申(一七八〇)正月十二日の兼題當座の詩歌より、同十二月二十二日の兼題當座等に至る、詩歌凡數百首あり。

けんたいろく

獻替錄 八巻 荻原 裕

唐宋書中より、建白奏議文の時事に痛切なるものを輯錄したるなり。最初「呂海頭王安石狀」より、「文天祥上端宗書」に至る三十餘編を收む。文久二年壬戌(一八六二)の著。

◎荻原裕は、初、公寛、後、好問と字し、英助と稱し、西皐と號す。幼より鏡敏にして、學を好み、長ずるに隨ひて經子文章に通ぜり。中年の頃、伊藤圓令治藩に聘せられ、久松定法に仕へて藩政藩學を革むるもの多し。三年の後東京に歸り、明治五年といふに、陸軍省に奉職し、遂に修史局一等協修に任ず。廢局の後は、私塾を張りて徒を敎へ、また學習院、高等師範學校等に講師たり。著書には、東坡外傳、丹碧類稿、女訓、諸子大意、四子左氏傳講義、顯承逃略、古本大學講義、虛字註解等あり。又、官命により、蒐集編輯す。病に臨みて、蒐遺琉球始末、善隣始末等を編輯す。明治三十一年戊戌(一八九八)二月十九日歿す。年七十。谷中共同墓地に葬れり。

現當記 *巻一巻

念佛の利益を示さんとて「現當二世の御祈願には念佛をもつて最上とする事」と云ふに筆を起して大神宮等の御託宣及び歷代祈願の實驗ありし事績などを記せり。

けんたうわかしふ

兼當和歌集 *巻三巻

當代諸家の兼題探題の和歌を集む。上卷は元禄十三年庚辰(一七〇〇)八月十五日より、同十五年八月十五日に至り、中卷は同十六年正月十八日より、同十一月十二日に至り、下卷は同十七年正月十八日より、寶永二年乙酉(一七〇五)二月六日に至る。凡そ數百首あり。

けんたふせう

賢答抄 *巻一巻 二條 良基

著者の歌學の上に就て人の問に答へたるもの百餘項を雜記す。歌學の傳書として寫記せり。

◎二條良基の傳記は「菟玖波集」の下にあり。

けんちいつけん

檢地一件 *巻一巻 江坂 正恭

新田檢地に關する條目を輯錄したるものなり。安永五年丙申(一七七六)初冬十七日思ひ出しに隨て書きつられ、家の小童に敎る由、自ら奥書せり。今見るところは文化十三年丙子(一八一六)の寫本にかゝる。

◎江坂正恭は孫三郎と稱し、評定所御勘定吟味役なり。本書の外に「碧闌軌範」の著あり。

げんぢうあんはいかいうやむやのせき

幻住庵俳諧有也無也關 一巻 松尾 芭蕉

本書は一名「俳諧有也無也關」の下に解題せり。

げんちうさいひせう

源中最祕抄 二巻 僧 行阿

源氏物語の中の故事、引用等に關することを抄出說示せるもの。例へば桐壺の卷にては、大掖災葬事、高麗人來朝並鴻臚館事、大藏卿藏人勤理髮事。

帚木の卷にては、たちろきといふ事、ひゝちゐたりといふ事、中河の事、衣のをとなひさやかに、はらくときこえてといふ事等なり。奥書に「源中最祕抄者、光源氏物語先覺行阿法師所撰述也。種々異說明水原之閑論、包羅和漢典籍之蒼事、可レ謂レ勁矣。依レ今古命二妄夷一繁雜二撮取其典要一以便二後學之覽覩一仍録二和歌二章一以擬二歌語一云。ひとりとならひに染めなす紫の、色を見ながらわく人やなき。そふかき君が心の源を、うつす水ぐきありもたえせし耕雲山人朗魂」とあり。「群書類從」卷三百十六、物語部十にも收めたり。

◎行阿のことは「假名文字遣」の下にあり。

げんちうしふい

源氏拾遺 八巻 僧 慶融

源氏物語の各卷の大意概註なり。諸註釋書の誤謬を訂し、遺漏を拾ひ、從て他書を訂論して其の取捨をも示し、自己の拾遺意見をも發揮せり。元祿九年丙子(一六九六)七月十九日の著者の奥書には「右源註拾遺七卷一號湖月抄之次矣、卒爾註惡意以備二他日校考一也」とあり。八卷の內一卷は大意たり。總て小本二册に作らる。

◎契沖の傳記は「萬葉代匠記」の下に出す。

げんぢうはつらん

權重換亂 *巻一巻 山田 正珍

唐代諸儒の說によりて物氏の度量衡說を正誤したるものなり。

◎山田正珍は、宗俊と字し、圖南と號す。德川幕府の醫官たり。山本北山に從て儒學を學び、又父の醫術を受け、漸く和漢大小の書に通ず。著書には骨度辨誤、傷寒論集成、傷寒檢證、金匱檢証、內外經古傳、桑韓筆語、敗鼓絲、備用方、新論、天命辨等あり。天明七年丁未(一七八七)七月十九日歿す。年五十七にて江戸に歿す。

けんぢうへうじゆん

權重標準 *巻一巻

量衡の標準を論ず。藥劑處方者の爲めに記したるもの。卷首に「本邦の度量衡四方一換、治を施すに於て妨なしといへども、只醫藥を和合するに至ては方劑の分量、古今の標旗を知らずんば不可なり。云々とて、比較論證せり。

けんちうみつかん

顯註密勘 八巻 慶融

「古今和歌集」の註釋なり。顯昭の註に定家の拠を加へて編輯したるより書名は得たるなり。著者慶融は藤原爲家の長子。俗從(爲相)、大夫(爲守)等の兄にして比叡山に入りて律師たり。

げんぢきじ

元治記事 *巻十七册

孝明天皇の元治年間に於ける德川幕府の法政事實を輯錄したるものなり。

けんぢぐわんねんせつしやうけたあはせ

建治元年攝政家歌合 *巻一巻

建治元年乙亥(一二七五)九月十三夜七十番歌合にして、藤原光俊の判なり。

けんぢぐわんねんせつしやうしきろく

攝政小錄 四巻 青山 延壽

著者一族延光、延之及び延壽の詩文を輯錄したるもの。其の目を云へば、卷一伯兄延光の文十五

げんぢぐわんねんだいじょうかんしきじ

建治元年大嘗會式次第 一巻 藤原 光俊

建治元年乙亥(一二七五)十一月の大嘗會に關する式次第を記せり。

げんぢさんねんき

建治三年記 *巻一巻

建治三年丁丑(一二七七)正月一日より、十二月二十七日に至る公家の略日記なり。

げんぢさんねんていちうにつき

建治三年丁丑日記 一巻 三善 康有

建治三年丁丑(一二七七)正月より同十二月に至る朝廷に於ける大要日記なり。「群書類從」卷四百二十一、武家部第二十二にあり。

げんちせうろく

壎篪小錄 四巻 青山 延壽

首、仲兄〔延昌〕の文十一首。卷二叔兄〔延之〕の文十三首、延齡の文十五首。卷三伯兄の詩一百五首、仲兄の詩六十二首。卷四叔兄の詩九十七首、延齡の詩九十五首等なり。嘉永五年壬子〔一八五二〕藤田東湖の自筆序を附す。盖し頌徳の名は兄弟和樂の意より興へたるなるべし。

◎宵山延齡は延于の子にして、延光の末弟なり。鐵槍、また鐵槍齋と號す。鐵槍集、英哲年齡便覽その他の數著あり。現に東京市麹町區四番町に居す。

けんちざっかう

檢地獨行 本一卷

檢地に關する大略の規定を記したるものなり。當時の帳謄振及び一二實例等をも示せり。

げんぢひろくせう

元治祕錄抄 本十五卷

嘉永年間以下、元治年中の政治的事實を輯錄したるもの。卷一勢州御新敎書、國司諸大名建白、水戸前中納言殿上書、亞墨利加使節道中筋江戸町中御觸並御料理獻立拜領物、使節逗留官人相書、亞亞國地圖地名等より、卷十五德筑前侯一橋卿へ差出書、尾州熱田大宮投文、幕府御請書、松井將監密書、松平美濃守上京之次第等に至る。

げんぢぶかん

元治武鑑 五卷

元治現在の武家目錄なり。各系譜、家紋、所領、役柄、主從、其の他等を詳錄す。元治二年乙丑〔一八六五〕に作らる。

けんちぶたばぐさ

檢地二葉草 本一册 江坂 正春

享保年間に於ける檢地條目より、其の方法を詳述す。安永五年丙申〔一七七六〕の編輯にかゝる。

けんちやうさんねんえいぐうたあはせ

建長三年影供歌合 本一卷

建長三年辛亥〔一九一一〕九月十三夜樂議判の歌合にして、二百十番あり。

げんぢゆめものがたり

元治夢物語 五卷 馬場 文英

元治元年甲子〔一八六四〕の外交始末より、江戸の騷亂、京都の戰爭等を、實地の見聞に據て記載したる詳細歷史なり。一眠の夢に託して同年中秋二十六日の夜記して中村哲敬に贈るところなり。五卷小本五册に作る片假名交り文なり。

けんちよかう

獻芹考 本一卷

延享五年戊辰〔一七四八〕秋七月二十日の自序あり。軍に從ひ蝦夷嶋にありて起草するところなりといふ。本書は一に「山崎清朴雜著」とも云ふ。

◎澁井孝德の傳記は「國史」の下にあり。

けんちよかう

玄猪考 本一卷 澁井 孝德

嚴重亥の子等の名義に關する考證を、其の大要「古今要覽稿」の中より抄出したるものなり。

◎屋代弘賢の傳記は「古今要覽稿」の下にあり。

けんぢよものがたり

賢女物語 五卷 滿 女

婦女の風俗が漸々浮薄に流れ行くを救はんために、女子の心得及び古代賢女の善行を敍述したる通俗和文の敎訓書なり。親孝、婦孝、夫節等の部を分ち凡て三十箇條あり。序文末に「洛下芳菊軒菜毋滿書焉」と題す。寛文九年己酉歲〔一六六九〕に版刻せらる。

けんていひつき

謙亭筆記 本一卷 小宮山昌世

公家武將の評說、文學和歌の事、有職故實、其の他の雜說を記せる隨筆なり。謙亭は著者の號、故に名とせり。

◎小宮山昌世の傳は「享保通鑑」の下にあり。

けんていみやくせつ

顯貞脈說 本三卷 山崎 清朴

古來諸家の諸脈說を擧げて評論したる小册子なり。文化五年戊辰〔一八〇八〕秋七月二十日の自序あり。軍に從ひ蝦夷嶋にありて起草するところなりといふ。本書は一に「山崎清朴雜著」とも云ふ。

けんでんどくだんき

見田獨斷記 一卷 光矩

見田敷引の事に關する論述なり。元祿十三年庚辰〔一七〇〇〕八月の作。

けんでんめいめいろく

顯傳明名錄 本十一卷 藤本 常次

古今顯著なる人名を蒐聚し、其の頭字によりて類排列記したるものなり。正德元年辛卯〔一七一一〕の奥書を附せり。

◎藤本〔また笠原、皇山ともいふ〕常次は了固、貧山、呑舟軒、晉齋、幻々齋、如幻齋、遯哭堂等の數號あり。松永貞德の門人にして俳諧を善くし又小說を善くす。著書は本書の外に色道大鑑、雨巴庵言、類聚名傳抄等あり。就中色道大鑑は全國六十餘州の花街を歷遊し、三十餘年を積みて成れる十八卷の大部なり。寶永元年甲申〔一七〇四〕六月二十一日、七十七にて歿す。

げんどうはうげん

玄同放言 二卷 瀧澤 馬琴

著者の隨筆。夜學の抄錄より抜き出でて讀書の餘論に成れりとぞ。記紀以下一百九十種の參考書目を列擧せり。例せば天の部に蛭兒蓮雌、星隕如雨、鳴呼物語、雷魚雷鷗雷鳥並に異形雷獸の圖等なり。文政元年戊寅〔一八一八〕自記の玄同放言雌略を卷首に掲げ、次に男宗伯の序を添へ、前に鵬齋の漢文序あり。「百家說林」卷二にも其の上集を收めたり。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

げんどうひつき

玄桐筆記 本一卷 井上 玄桐

此の書は別名「井上玄桐筆記」の下に解題せり。

げんさくにねんさうぐうげんぶくのき

元德二年東宮御元服記 本一卷

後醍醐天皇の元德二年庚午〔一九九〇〕に於ける後光嚴院御元服の記。「續群書類從」卷二百九十六、公事部第四十九に入れたり。

けんにんぐわんねんいはしみづしやうたあはせ

建仁元年石清水社歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕十五番歌合にして、慈圓等の詠出するところなり。

けんにんぐわんねんえいぐうたあはせ

建仁元年影供歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕八月三日の百八番歌合にして、藤原俊成の判なり。

けんにんぐわんねんくまのさんみゆきのき

建仁元年熊野山御幸記 本一卷

土御門天皇の建仁元年辛酉〔一八六一〕十月熊野山御幸の記。「續群書類從」卷八十七、帝王部六にあり。

けんにんぐわんねんじふごやうたあはせ

建仁元年十五夜歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕五十番歌合にして、藤原俊成の判なり。

けんにんぐわんねんしんぐうたあはせ

建仁元年新宮歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕二月二十九日の三十六番歌合にして、藤原俊成の判なり。

けんにんぐわんねんせんどうごじふしゆ

建仁元年仙洞五十首 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕九月十三夜樂議判の歌合にして、二百十番あり。

けんにんぐわんねんだいりうたあはせ

建仁元年內裏歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕の內裏歌合なり。尙同年中の歌合書にては、二月光若歌合、二月二十九日新宮撰歌合、三月晉日內裏歌合、八月三日影供歌合、八月十五夜五十番歌合、九月十三夜戀十五首歌合、十二月八幡歌合等あれど、今々別に解題せず。

けんにんぐわんねんたいりうたあはせ

建仁元年內裏歌合 本一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕の內裏歌合なり。尙同年中の歌合書にては、二月光若歌合、二月二十九日新宮撰歌合、三月晉日內裏歌合、八月三日影供歌合、八月十五夜五十番歌合、九月十三夜戀十五首歌合、十二月八幡歌合等あれど、今々別に解題せず。

けんにんさんねんうたあはせ

建仁三年歌合 本一卷

建仁三年癸亥〔一八六三〕閏九月十九日の十八番歌合なり。一に「內裏歌合」といふ。藤原定家の判也。

けんにんにねんみなせうたあはせ

建仁二年水無瀨歌合 本一卷

建仁二年壬戌〔一八六二〕六月、六番歌合にして、一に「水無瀨釣殿當座六首歌合」といへり。後鳥羽天皇の御判なり。

げんにんろんべんもう

原人論便蒙 一卷 僧 廣澗

此の書は「原人論」を和譯したること其の題名の示したるが如し。明治十五年活刷に附す。

けんばうたあはせ

建保歌合 本一卷

建保元年癸酉(一八七三)七月二日の歌合なり。尚同年の歌合には七月十七日の松尾社歌合、八月七日の内裏歌合、八月十六日の建保歌合、同九月十三夜の仙洞歌合、同月三度歌合、同九月盡日歌合。同二年五月十日内裏歌合、七月内裏歌合、八月十六日の秋十五題亂歌合、九月五日の内裏歌合、八日の名所撰歌合、二十五日の月卿雲客歌合。三年六月二日建保歌合、十六日の仙洞歌合、十八日の和歌所歌合、七月五日の八幡宮撰歌合、八月十一日の建保歌合、二十一日の内裏歌合、九月九日の撰歌合、十九日の仙洞歌合、二十九日の月卿雲客歌合。四年六月九日の内裏百番歌合、八月二十二日の四十五番歌合、二十四日の四十二番歌合。五年四月二十一日の北野宮歌合、七月一日内裏歌合、九月前關白家歌合、十月十六日の内裏歌合三題、十七日、十八日の同歌合、十九日四十番歌合、十一月四日内裏歌合、二十一日同歌合。六年二月二十七日内裏五題歌合、五月晦日内々歌合。七年二月十一日の歌合、二月十二日の歌合等あり、今一々解題せず。

けんぱうたあはせ

建保歌合　一巻

建保四年丙子(一八七六)閏六月九日の百番歌合にして、藤原定家の判なり。

けんぱうぐわんねんしいかあはせ

建保元年詩歌合　一巻　藤原　範時

本書は一名を「建保内裏詩歌合」といふ。該題下に解題せり。

けんぱうごねんじふいちにちうたあはせ

建保五年十一月歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)十一月四日の五十六番歌合にして、衆議判なり。

けんぱうごねんじふぐわつうたあはせ

建保五年十月歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)十月十九日の敕判四十番歌合なり。一名を「四十番歌合」といふ。

けんぱうさんねんごしちにちみそぎのき

建保三年後七日御修法記　一巻

建保三年乙亥(一八七五)七月後修法の事を記したること名の示すが如し。「續群書類從」巻七百二十二、釋家部第七に入れたり。

けんぱうしちねんにぐわつじふいちにちうたあはせ

建保七年二月十一日歌合　一巻

順徳天皇の御製、藤原光經等の詠にかゝる當座三十番の歌合なり。

けんぱうしちねんにぐわつじふにちうたあはせ

建保七年二月十二日歌合　一巻

順徳天皇の御製、藤原篤宗の詠等にかゝる當座二十四番の歌合なり。

けんぱうしょくにんうたあはせ

職人歌合　一巻

建保二年(一八七四)九月、東北院に會合したる人々職人十二番歌合なり。題は月と戀となり。或は一軸に作れるもあり。「群書類從」巻五百〇二、雜部第五十七には「東北院職人歌合」として收めたり。

けんぱうたいしんせんき

大祀神饌記　一巻　家敎

順徳天皇の建保の比、命ありて大嘗會神膳の事を記錄し和字に認めて上りたるものなり。

けんぱうごねんうだいしやうけうたあはせ

建保五年右大將家歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)八月十五夜右大將家に於ける藤原家隆等の八番歌合なり。

けんぱうごねんさきのくわんぱくけうたあはせ

建保五年前關白家歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)前關白家の歌合にして、藤原定家判三十番歌合なり。

けんぱうごねんしぐわつうたあはせ

建保五年四月歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)四月二十日の十五番歌合にして、順徳天皇の御製、僧行意等の詠なり。

けんぱうごねんじふいちにちうたあはせ

建保五年十一月歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)十一月四日の五十六番歌合にして、衆議判なり。

けんぱうごねんじふぐわつうたあはせ

建保五年十月歌合　一巻

建保五年丁丑(一八七七)十月十九日の敕判四十番歌合なり。一名を「四十番歌合」といふ。

けんぱうさんねんうたあはせ

建保三年歌合　一巻

建保三年乙亥(一八七五)十一月四日の五十六番歌合にして、一に「月卿雲客妬歌合」ともいへり。順徳天皇の御製、藤原雅經等の詠もあり。

けんぱうさんねんごしちにちみそぎのき

建保三年後七日御修法記　一巻

建保三年乙亥(一八七五)七月後修法の事を記したること名の示すが如し。「續群書類從」巻七百二十二、釋家部第七に入れたり。

けんぱうしちねんにぐわつじふいちにちうたあはせ

建保七年二月十一日歌合　一巻

順徳天皇の御製、藤原光經等の詠にかゝる當座三十番の歌合なり。

けんぱうしちねんにぐわつじふにちうたあはせ

建保七年二月十二日歌合　一巻

順徳天皇の御製、藤原篤宗の詠等にかゝる當座二十四番の歌合なり。

けんぱうしょくにんうたあはせ

職人歌合　一巻

順徳天皇の建保二年甲戌(一八七四)九月、東北院に會合したる人々職人十二番歌合なり。題は月と戀となり。或は一軸に作れるもあり。「群書類從」巻五百〇二、雜部第五十七には「東北院職人歌合」として收めたり。

けんぱうたいしんせんき

大祀神饌記　一巻　家敎

順徳天皇の建保の比、命ありて大嘗會神膳の事を記錄し和字に認めて上りたるものなり。

けんぱうだいりしいかあはせ

建保内裏詩歌合　一巻　藤原　範時

建保元年癸酉(一八七三)二月二十六日の詩歌合にして、詩は藤原範時等、歌は藤原範基等の詠ずる所なり。一に「建保元年詩歌合」といふ。

けんぱうにねんくぐわつうたあはせ

建保二年九月歌合　一巻

建保二年甲戌(一八七四)九月晦日の三十番歌合にして、藤原家隆の所判なり。一名を「月卿雲客妬歌合」といふ。

けんぱうにねんしちぐわつうたあはせ

建保二年七月歌合　一巻

建保二年甲戌(一八七四)七月二日、當座二十六番の歌合なり。順徳天皇の御製、藤原家衡等の詠あり。一名を「禁裏歌合」といふ。

けんぱうにねんはちぐわつうたあはせ

建保二年八月歌合　一巻

建保二年甲戌(一八七四)八月十六日の歌合にして、七十五番あり。藤原定家の所判なり。

けんぱうひやくしゆ

建保百首　一巻　藤原　定家

「建保百首」は順徳院の御時、月花の題を事寄りたれば、著名なる名所に據りて、各百首の歌を上れとの命によりて、京極黄門が題を撰びて、御製を始め一千二百首を得たりといふ。時に建保三年乙亥(一八七五)の事なるより、世に「建保百首」といへるなり。今茲に解題せるは、右の歌集中、定家の詠に係る百首のみを抄出したるものなり。何人かの所讀によつて抄出せられたるものなるべし。

◎藤原定家の傳記は「拾遺愚草」の下にあり。

けんぱうひやくしゆうたあはせ

建保百番歌合　一巻

本書は雜書類從本により、表題「百番歌合」といふ題下に解題せり。

けんぱうみたびうたあはせ

建保三箇度歌合　三巻

建保三年乙亥(一八七五)六月二日の衆議判四十番歌合と、同四年閏六月九日の藤原定家判百番歌合と、同五年十一月四日の衆議判五十六番とを合輯したるものなり。

けんぱうめいしよさんびやくしゆせう

名所三百首抄　四巻　里村　昌叱

建保(一八七五)内裏御會にて催せられたる名所百首の作者中、順徳院、定家、家隆、三人の歌を集め、毛利元就の需に依て里村紹巴と共に註釋したるものなり。

◎里村昌叱は京師の歌人なり。細川高國の家人里村昌久の男にして名は仍景、葉庵と號す。里村紹巴と連歌に於て名を齊うし連歌七名人の一たり。豐太閤に召されて祿若干を受く。慶長八年癸卯(二

二六三)七月二十四日、年六十五にて歿せり。

けんぱうめいしよわかさんびやくしゆひせう

名所和歌三百首秘抄　六巻　里村　紹巴

建保名所百首和歌　一巻

建保三年乙亥(一八七五)十月二十四日内裏御會の百首なり。春の部「音羽川」より「末の松山」に至る二十首。夏の部「大井川」より「松浦」に至る十首。秋の部「初瀬山」より「阿武隈川」に至る二十首。冬の部「清瀧」より「鏡山」に至る十首。戀の部「伏見」より「名取川」に至る二十首。雜の部「吉野」より「三津濱」に至る二十首の名所歌なり。

順徳天皇の建保(一八七三―一八七八)年中の名所和歌三百首に抄註したるものなり。

◎里村紹巴の傳は「源氏物語紹巴抄」の下にあり。

けんぱうよねんうたあはせ

建保四年歌合　二巻

建保四年丙子(一八七六)八月二十二日の當座四十五番歌合一巻と、同二十四日の當座四十二番歌合とを合す、共に衆議判なり。

けんぱうよねんはちぐわつにじふにちうたあはせ

建保四年八月廿二日歌合　一巻

順徳天皇の建保四年丙子(一八七六)八月二十二日の當座四十五番歌合にして衆議判なり。同二十四日の當座四十二番歌合と合せて一冊に作れり。

けんばうよねんはちぐわつにじふよつかうたあはせ
建保四年八月廿四日歌合　本一卷
順徳天皇の建保四年丙子(一二一六)八月二十四日の衆議判、當座四十二番歌合なり。

けんばうろくねんはちぐわつちうでんごくわい
建保六年八月中殿御會　本一卷　藤原　道家
順徳院の建保六年戊寅(一二一八)八月、中殿の御會に侍して、右大臣正二位藤原道家以下家長、家實、基良、家隆、雅經、保季、知家、範時、範宗、爲家、行能、頼資、信實、光經、康光、定家等の應製詠月久明の和歌集なり。今見ゝところは上の人々の歌、凡て十數首に過ざるが、卷末には、作者として、三十一人の姓名年齢を列舉し、延寶七年己未(一六七九)二月二十九日林鵞峰の跋文あり。本書の由來に關係あれば、今其の全文を擧ぐ。「右御製之外三十一人、但定輔卿、有雅卿、公賴卿、定嗣卿、資雅朝臣、有像無歌、未詳其故、三十一人年齢、及其所生、並家號、考建保六年公卿補任、諸家系圖、作者部類等記之。傳聞藤原信實、以畫顯名於一世、列建保六年八月中殿會末、受道家之旨、直圖公卿裝束像、故其年齢面體、無差謬之者、倭歌皆道家親筆也、九條殿累世傳以爲家寶、不妄示人、先年安藝指遣源綱晟、以爲九條家姻族故、懇望道猶野縫殿永納、就彼家寫之、正本皇綱哉、副本自藏焉、永納與徐有世交之好、故模其副本贈之、乃加寫其倭歌、且所考勘如右」とあり。
◉藤原道家の傳記は「玉葉」の下に出でたり。

けんばふじふしちでう
憲法十七條　本一卷　聖德太子
推古天皇の十二年甲子(一二〇四)夏四月聖德太子親筆の憲法十七條に訓點を附して別册としたるものなり。
◉聖德太子は用明帝の第一子にして厩戸皇子と稱す。幼時既に異風あり、長ずるに從て智德益容る。帝之れを重愛して宮南の上殿に居く、故に上宮太子とも號す。太子夙に佛教を好み、日夜研究して遂に其の宗旨に歸依し大臣馬子と共に其の弘布を謀る。中臣勝海、物部守屋を討ちて寺を建て、四天王の像を安置す。推古天皇太子となし萬機を攝し馬子と共に佛教を興隆せしむ。太子高麗僧慧慈に師事して五戒を受け自ら勝鬘經、法華經を講ず。十五年奏請して大禮小野妹子を隋に遣し法華經の全部を求め位十二階を定め、十二年憲法十七條を制定す。十四年敕に由りて勝鬘經、法華經義疏」、「維摩經義疏」、「法華經義しむ。佛教興隆に於ける功勞實に少からず。薨ずるところには「勝鬘經義疏」、「維摩經義疏」、「法華經義疏」等あり。二十九年辛巳(六二一)二月、年四十九にて薨ず。

けんばふるゐ
憲法部類　本六冊
享保以下安永九年庚午(一七七〇)に至る諸法令を編輯したるものなり。御役番組付褒子、家督、縁組、婚姻等の事より、金銀錢、宮參、七五三祝、髪置、袴着、帯直、前髪執、元服、養子、隱居、相續、末期養子、跡式、遺領、分知、養女等の事より、諸役人の勤方、諸役人の心得、諸役人の格式、諸役人の交際、諸役人の禮儀、諸役人の服裝、諸役人の家族、諸役人の住居、諸役人の職務、諸役人の進退、諸役人の賞罰、諸役人の病氣、諸役人の死去、諸役人の葬儀、諸役人の遺領、諸役人の相續、諸役人の隱居、諸役人の養子、諸役人の跡式、諸役人の分知、諸役人の末期養子

源平盛衰記、平家物語等に漏れたる當代の事實言行等を拾遺したるもの。凡て五十條より成る。天保六年乙未(一八四九五)の自序を附す。

◎藤井高尚の傳記は「淺瀬のしるべ」の下にあり。

げんぺいせいするき
源平盛衰記　四十八卷

二條院の照保年中より、安德天皇の壽永に至る凡そ二十餘年間に於ける源平盛衰の事實を百數十項に分けて詳敍したるもの。鎌倉時代の歴史體文學として歴史上にも亦文學上にも貴ばるゝところなり。著者に就き諸通には保元物語、平治物語と共に兵家大納言時長の作なりと稱すれども、其の說の確實ならざることは既に學者間の定說なり。由て著者は未詳とせり。

げんぺいせいするきせいめいせう
源平盛衰記姓名抄　寫三册

水戸の「參考源平盛衰記」の中より、其の姓名に關する部分を抄出したるものなり。姓名毎に標題に抄出して早見に便せり。卷十五より始まりて、卷四十七に終る。

げんへいたいへいき
源平太平記　二十二卷

此の書は源平盛衰記の中より、朝儀故事等を省略して、合戰に關する事のみを抄出したるものなり。

げんぺいたいへいきひやうばん
源平太平記評判　二十卷

此の書は源平太平記に評註を加へ、且合戰の事實、將士の景圖等を記入せり。

げんぺいやしまだんのうらかつせんのえんぎ
源平屋島段之浦合戰之緣起　寫一卷
僧　龍衛

安德天皇の壽永三年甲辰(一八四四)三月二十九日に於ける源平屋島楯の浦同合戰の次第を略記したるものなり。著者龍衛は南面山の僧なり。

げんぽくまんせう
硯北漫抄　寫一卷

唐宋人の詩句を摘出して評釋したるもの。中には本邦人のもあり。林和靖の梅花詩より、李白、陶淵明、蘇東坡等の詩句に及べり。評釋假名交り文にて記し、往々諸家の和歌發句等と比論す。今、萬治二年己亥(一六五九)安藝國廣島の人、唯菜といへるもの、書寫本に據る。

げんぽしふ
玄圃集　五卷
久川　資衡

著者の詩集。山重好の編輯するところなり。明和四年丁亥(一七六七)松平秀雲、同五年龍公美等の序あり。書誌學の撰したる資衡の傳を附す。

◎久川資衡は京都の儒者にして大江姓なり。字を穗圭通稱を勘貫、號を玄圃と云ふ。東師草廬の門に入りて儒を學び又詩と書とを善くす。著書に友詩玉振集、問合早學問、學寮學範、唐詩紳、書家異語、古琴圖彙其の他等あり。光格天皇の寛政年中七十歲にて歿したりと。

げんぽんしふ
元本集　寫三卷
篤好

我が國の古事を考說したるもの。其の目を擧ぐれば、天卷に開闢編、天神化現論、國常立尊、天御中主、高皇產靈、神皇產靈、天鏡尊、天萬尊、沫浪尊、地卷に天瓊矛、三種神器、十種神寶、心御柱、寶鏡開始。人卷に神籬建立編、神國要道編、內宮鎭座編、外宮遷座編等なり。一々古文を擧げて自按を低書割註す。享保元年丙申(一七三六)十二月既望の草稿。

げんみかくごのこと
檢見覺悟之事　寫一卷
信當

弓馬故實の書にて、犬追物檢見の式法を記し、卷末に天文十五年丙午(一五〇六)七月十一日宗勝に見する由信當の奥書あり。「弓馬叢書」の中に收む。

げんみきがき
檢見聞書　寫一卷

犬追物檢見に關する法式書にて、都合百二十箇條を略說せり。紙數九枚に寫傳す。「弓馬叢書」の中に收む。

げんみこじつ
檢見故實　寫一卷
小笠原與元

射手檢見の故實を略記したるものにて、應永二十五年戊戌(一四〇七八)與元の日授を筆記せる由奥書あり、道親、與元連名す。「弓馬叢書」の中に收む。「續群書類從」卷六百七十四。武家部第二十に收めたる同名のものと略同じ。

げんみつにけうろん
顯密二敎論　二卷
僧　空海

眞言宗の顯密二敎の敎判を說明したるもの。卽ち眞言宗は秘密敎にして深勝、他の諸宗は顯露敎にして淺劣なる旨を論ぜり。凡そ眞言宗に於て、釋迦一代の說法を判別するに、十住心と顯密二敎と二種の敎判あり。空海の著書中「十住心論」及び「祕藏寶鑰」は前者を說明し、本書は其の後者に屬し、流暢なる漢文より成れり。本書著作の年代未詳。

本書の註釋書類は甚だ多く、二敎論顯密鏡鈔六卷(濟遷作)、二敎論手鏡鈔三卷(道範作)、二敎論鈔二十卷(宥快作)、二敎論研叅鈔十三卷(杲寶作)、二敎論指光鈔五卷(賴瑜作)、二敎論略解五卷(聲蘊作)、二敎論裨梁四卷(等空作)、二敎論張祕錄一册(戒定作)、二敎論溫知編三册(超槩作)等あり。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

げんみやうでうでう
檢見條々　寫一卷
足利　義久

犬追物檢見に關する法式故實を詳說したるものなり。表題下に「常德院殿御筆」とあり。

◎足利義久は鎌倉管領持氏の長子にして、幼名を賢王丸といひ、加冠の後太郎と改む。父持氏、執事上杉憲實と隙を構へて自殺するに方り、義久も兵に圍まれて報國寺(或はいふ安永寺)に自殺せり。時に年二十八。

げんみやうでうでう
檢見條々　寫一卷
多賀　高忠

弓馬故實の書にて、犬追物檢見の條々を記述して、壬生の官長者へ傳ふるところなりといふ。「弓馬叢集」の中に收む。

◎多賀高忠の傳は「當流開書」の下にあり。

げんみやうせう
顯名鈔　一卷
僧　存覺

淨土眞宗の宗義に就て彌陀名號の利益功德の事を述べ顯したるものにして、「眞宗法要」第十九卷に收めらる。著作の年月未だ詳ならず。

◎存覺の傳は「六要鈔」の下にあり。

げんみやざた
檢見矢沙汰　寫一卷
小倉　實澄

弓馬故實の書にて、犬追物檢見矢沙汰の事を詳論す。文明十八年丙午(一四八六)正月二十日の作なる事末記によつて明なり。最後に文明七年六月十日細川家馬場に於て見物したる犬追物の記を掲げたり。「弓馬雜纂」の中に收む。

◎小倉實澄は「小倉將監實澄詩草」の下に傳す。

げんみんしりやく
元明史略　四卷
後藤　世鈞

其の名の如く元明二代の歷史なり。漢文にて記す。曾先之の「十八史略」の續編に充つべきもの體裁亦殆んど相同じ。寬曆元年辛未(一六三一)に成り、後享和三年癸亥(一八〇三)京都の人藤原正臣之れを增補せり。

◎後藤世鈞は守中と字し芝山、また竹風と號す。世高松侯の儒官たり。芝山は夙に侯命によりて江戶に出で林檜岡の塾に學び、後昌平黌に入りて遂に名を著す。後、國に還りて州學と講道館を起す。著す所には本書の外に音韻五經、左傳古寄字音釋、和漢年鑑、職原抄考識、看賊小錄、幸輔唱和、當調百首、玉藻詩乘、讀州學子傳、芝山集等あり。三君に歷仕すること三十餘年、遂に天明二年壬寅(一七八二)四月三日、六十二歲にて歿す。

げんみんしんしよぐわじんめいろく
元明清書畫人名錄　二卷
彭城(ホウジヤウ)　眞淵

元明清人三千餘名を、いろは順に列擧して、其字號書畫品等を記す。安永六年丁酉(一七七七)浪華星文堂野弘篤の凡例、同年河曲合離の序あり。

◎彭城眞淵は尾張(或は伊勢といふ)の人にして平安に住したる有名の畫伯なり。號を蓬洲また八仙堂、或は八堂といひ、百川と字す。畫は元明の古蹟を模寫して、其の妙に達し、主張して元人の畫格を興せり。また書畫の鑑識に富み、かれて古調の和歌並に俳諧を善くす。賀茂眞淵と同名なるを以て、世人動もすれば之を混じて一人となすは非なり。寬曆三年癸酉(一七八三)八月二十五日、五十六歲にて歿せり。

げんむしきもくせう
建武式目抄　寫一卷　僧　是圓

此の書は建武三年丙子(一九九六)十一月七日に作られたる「建武式目抄」に、眞惠と共に抄釋を加へたるものなり。

◎是圓のことは「建武令」の下にあり。

けんむにぬんけちえんくわんちやうき
建武二年結縁灌頂記　本 一巻
建武二年乙亥(一九九五)九月後京極の三回忌にあたりて執行せる灌頂會の記。「續群書類從」卷七百五十四、釋家部第三十九に收めたり。

けんむねんかんのき
建武年間記　一巻
本領安堵、當知行地安堵、非職科望當知行地被充行他人、朝恩地等混亂、領家地頭所務、綸旨違行、不遵行敕裁致濫妨、諸國諸庄、闕狼藉國司主護注進事、其の他十數項雜訴裁決等のことまで錄す。「群書類從」卷四百五十五、雜部第十にあり。

けんむねんおうぎやうじ
建武年中行事　三巻　後醍醐天皇
朝廷官府の故事典例を記し給へるもの。「百數の中、はた年の春秋を送り迎へて、今もかつみるうちのことどもは、變遷なかるべきにもあらぬを、今更に書きつけんも珍らしからぬ心地すれど、なりにふれ時につけたる大やけごとども、行末の鏡まではなくとも、自ら又其の世には斯くこそありけれなどやうの、物語りの便りにはなりなんかし」と書き起して優長なる雅文に物せられたり。應永十三年丙戌(一四〇六)の奥書に「此年中行事者後醍醐院製作也。彼宸筆正本無銘只被ㇾ號ㇾ御秘抄ㇾ歟。然而暫所ㇾ加ㇾ外題ㇾ也」云々と。又、壺井鶴翁校正刊本していへらく、「後醍醐帝の製作にして、建武の比同帝復位の後、北畠一位准后入道論命を奉じて修撰す。官府の故事を採り、諸曹の遺例を撫び、用捨を審察し、古今を商量して書成り畢りぬ。寔に公事政要の龜鑑に供ふべき書なり」云々と。以て其の大要を知るべし。「群書類從」卷八十五、公事部第七にも收めたり。
◎後醍醐天皇の御傳は「禁裏政要」の下にあり。

けんむねんおうぎやうじりやくげ
建武年中行事略解　本 五巻　谷村　光義
後醍醐天皇の「建武年中行事」に頭書し、且和語の解し難きものに漢字を加へたるもの。享保十七年壬子(一三九二)に記せる壺井義知の序は能く原書曰く「建武年中行事は、後醍醐前帝の品一位源准后入道後王の綸命を奉じ立の聖びたりといふ。其の人の物語に託して作りたるもの。官府の故事を採り諸曹の遺例を撫び、用捨を審察し、古今を商量して書既に成る。實に公事政要の龜鑑に備ふべき書なり」云々と。同享保十七年四月出版す。
◎谷村光義は石清水神社の社司にして擔部と稱す。壺井義知の門人なり。本書は其の師の訂正を經たるものなりといふ。

けんむものがたり
幻夢物語　本 一巻
佛教的因緣物語なり。都大原の奥に幻夢と名くる僧侶ありて一心三觀の碧流を伺ひ、四教五時の配

けんもんいろく
檢名錄　本 四巻
此の書は動物、植物、鑛物の漢名を記し、いろは分けにして檢閱に便せり。作者の名を記さず。

けんもんいかう
縣門遺稿　五巻　清水　濱臣
縣居門諸家の歌文遺稿を校正編輯したるもの。第一集に、村田春郷集。第二集に小野古道集、荷田在滿家歌合「眞淵翁判」、縣居家歌合兼題當座歌「眞淵

けんもんりやう
建武令　本 一巻　僧　是圓
最初に「鎌倉如元可爲柳營歟、可爲他所否事」を論じ、次に「政道之事」十七條を論詮す。遠く延喜天曆の德化を追ひ、近く義時、泰時の行狀を以て近代の師となし、萬人歸迎の政道を施し、四海安全の基を立てんことを望みて言上せる由、建武三年丙子(一九九六)十一月七日、是圓、眞惠の末記にあり。
◎是圓は俗名を道昭といふ。本書の外に「建武式目抄」の著あり。

げんめい
原名　本 一巻　帆足　萬里
彝倫の敎を述つるには名を明かにせざる可からずとて、天帝、鬼神、仁義、忠信、孝恕、讒諛、慈惠、善惡、性情等數十字の形象意義を解剖說明したるものなり。漢文により記す。
◎帆足萬里の傳記は「原敎」の下に出す。

(633)
けんもん

翁評」、村田春道別業集會當座歌「眞淵翁評」。第三集に筑波子集、杉田日記「清水濱臣」。第四集に摘取魚彦集、白猿物語「荷田在滿」。第五集に雜まりて記「平巷海」、香取日記「橘千蔭」等を收む。文化八年辛未(一八〇七)七月、校正者濱臣のはしがき、及び序文あり。
◎清水濱臣の傳は「伊勢物語添註」の下にあり。

けんもんぐんせう
見聞軍抄　八巻
鎌倉時代、このかた慶長十九年甲寅(一六一四)比に至る戰話雜說を記したるもの、自序中に「江戸の側に老悴の翁あり、徒然の餘りにや見聞し事を書集めたる草紙三十二册あり。之れを見聞抄と號す。我徒友なれば彼翁が屋内に入て此の文を披見するに、東照宮武州御打入のこのかた、江戶繁昌の事を專に書きたり。此の内に古への合戰、今慶長十九年までの軍を記す。予これを拾ひ出し、八册に集め一部となし、見聞軍抄と名付く」云々とあり。

けんもんざつき
見聞雜記　本 一巻
應仁二年戊子(一四六八)より、文明十年戊戌(一四七八)に至る雜見雜聞の記なり。卷末殘闕として、「續群書類從」卷八百七十二、雜部第二十三に收む。

けんもんざつき
見聞雜記　本 五十册　小柴　研齋
著者の見聞を雜記し、併せて諸種の雜記をも收載したるもの。其の五十册中に他書を收載せるは、はなもけ草、覺明日記抄、柳營故諺記、天草覺書、御行幸記、太田道灌自記、老人雜話、忠臣記、介石記、小夜聞書、幽齋道記、當時珍說要緣錄、故諺記、方丈記、新令句解、以貫小傳、御遣狀御寶蹟入百箇條、落穗集考、關乃秋風、室町殿日記、御轉任御任槪之譯、外山の記等なり。各書は其の名の下に解題せり。第五十册に收めたる「外山の記」の末には、研齋が天保四年癸巳(一八四三)十一月十九日の奥書あり。
◎小柴研齋のことは「研齋雜錄」の下に見よ。

けんもんざつろく
見聞雜錄　本 三册　難波　宗建
德川の家記中より大阪籠城諸士の雜記等を抄出集錄したるものなり。
◎難波宗建の傳は「難波宗建卿記」の下にあり。

けんもんしふ
見聞集　本 十卷　三浦　茂信
古今風俗の變遷當時の儀式等の故實を記したるもの。其の他和歌富貴の資となるべき者を集錄す。自序に「武陽豐島の傍に翁あり、我永祿八年に生れ、慶長十九年まで、世の變代を數ふるに、帝王三代、改元五度、新に武將に仰り給ふ事十一代、予見聞きしよしなき事を記し侍るなり」とあり。本書は後に他の類名の書に混同せざらむため「慶長見聞集」といへり。
◎三浦茂信の傳は「そゝろ物語」の下にあり。

けんもんしよ
見聞書　本 五巻　小須賀信之
永祿三年庚申(一五六〇)より、元和二年丙辰(一六一六)に至る五十七年間の見聞事實を記したるものなり。
◎小須賀信之は藤原氏九兵衛と稱す、伊勢の人にして代々戰功の譽れあり、生れて八十餘年關戰に艱難したりとて其の見聞を筆記したるなり。

けんもんしよかもん
見聞諸家紋　一巻
源義家のを最初として凡そ數百の家紋を圖集す。足利將軍時代評定所に於て調査したるものなりといふ。天文八年己亥(一五三九)佐々木秀勝の奥書あり。「群書類從」卷四百二十四、武家部第二十五に入れたり。

けんもんひだんせう
見聞祕談抄　本 一册
酒井忠清の盛衰功罪の事を記せり。蓋し「德川一統志」より抄出したるものなるべしといふ。部合十三箇條より成る。

けんもんひつき
見聞筆記　本 一巻
天正文祿比の物語雜說等を隨筆したるものなり。卷の半は我が典故を集錄す。

けんもんろく
縣間錄　本 二十五卷　大野　一貫
武器兵法に關する故實論詮なり。甲冑之卷、甲冑名所之卷、甲冑着法之卷の三大部に分ち、數百項を設け甲冑刀槍等あらゆる武器の種類、形狀、製法等を

圖說して、其の利害得失を論評し、終りに其の着川法をも詳說せり。男一德の間に應じて、一貫が口述せしなれば、懸問錄とは名づけたるなるべし。仁孝天皇の文政二年己卯(一八二九)遠藤忠恕といふもの、序あり。

◎大野一貫の傳記は「弓式辨」の下にあり。

げんよにつき　玄與日記　本一卷　玄與

文祿五年丙申(一五九六)七月十日、薩州鹿兒島より、近衛左大臣信輔歸洛の時、玄與供奉の命を受けて上洛したる時の自らの奥書に「右一册玄與上洛の道すがら、又京都のことゞもを書記し侍るもの也」とあり。著者玄與は黑齋と號せり。

げんらいき　建來記　本一卷　藤原時房

文和五年丙申(一三五六)三月二十八日なる改元式の記事なり。

◎藤原時房は內大臣顯房の子。累進して內大臣從一位に進む。長祿元年丁丑(一四五七)十一月六十四歲にて薨ぜり。

けんりうかんしんあそんちづせうしつ　乾隆刊淸會典地圖抄出　本一軸

淸國乾隆中の刊本「淸會典」所載の地圖を抄出したるものなり。大淸皇輿全圖、盛京全圖、吉林黑龍江全圖、喀爾喀四部落全圖等淸國は勿論、琉球、朝鮮、對馬等に至る圖までを擧げたり。抄出者及び其の年月等を記さず。

けんりうなんじゆんき　乾隆南巡記　本一卷

淸國乾隆帝が其の二十七年(我が寶曆十二年)江南、浙江の二省へ巡狩したる時の始末を、彼國來舶人より聞書きしたるものなり。著者は林菜にして長崎の通譯官なり。

けんりうをしやうごろく　顯令和尙語錄　本二卷　僧　顯令

萬治三年庚子(一六六〇)以後、著者一生の語錄なり。門人通瑛、正意、通惠等の編錄するところなり。

けんりやうはふご　顯令法語　本一卷　僧　顯令

著者の詩偈法語を輯錄したるものなれば、「顯令和尙語錄」と併せ見るべし。

げんりやくかいげんさだめのき　元曆改元定記　本一卷

後鳥羽天皇の元曆元年甲辰(一八四四)四月十六日の改元定記なり。「續群書類從」卷二百八十七、公事部第四十に入れたり。

けんりやくさんねんせんどううたあはせ　建曆三年仙洞歌合　本一卷

建曆三年癸酉(一八七三)の仙洞歌合にて、藤原良平其の他の詠なり。

けんりやくだいりうたあはせ　建曆內裏歌合　本一卷

建曆二年壬申(一八七二)二月二十六日の歌合なり。尙同年中には五月二十二日の「五題歌合」あり。

けんりやくにねんさんぐわつにじふにちのせんし　建曆二年三月二十二日宣旨　一卷

順德天皇の建曆二年壬申(一八七二)三月二十二日、藏人民部權少輔藤原資賴の奉施する所なり。「群書類從」卷四百七十四、雜部第二十九に收む。

けんりやくよねんれき　建曆四年曆　本一卷

順德天皇の建曆四年(建保二年)甲戌(一八七四)の略曆なり。「續群書類從」卷九百十二、雜部第六十二に收めたり。

げんりようぎよき　元陵御記　二卷　靈元法皇

靈元法皇山莊御記なり。享保六年辛丑(一三八一)九月二十七日より起りて、同十六年十月十八日の御記に終る。卷端に嘉永元年戊申(一五〇八)伊豫守從五位下源朝臣勝明(板倉)の序あり。事實の大要を記せり。安中藩臣の書寫なり。

◎靈元法皇の御諱は「修學院御幸宸記」の下にあり

けんりんにつろく　鈴林日知錄　本十卷　大草　公明

元龜天正以來の將師事績を輯錄したるもの。德川家康の軍事を主に、其の他諸將士の事績の士林の模範たるべきものを輯成すといふ。安政二年乙卯(一八五五)三月の自序あり。十卷五冊に寫す。

◎大草公明のことは「擁爐偶談」の下に見よ。

けんりんひつけい　鈴林必携　二卷　下曾根信敦

西洋砲術の書に就て、發射の試效、及び器械、彈藥の尺度斤量、長短輕重等を比較表示し、及び築臺の制式、險要殺除川兵等の概略を記載したるもの。初編には上田寛章が嘉永四年辛亥(一八五一)の凡例二編には六年の凡例あり、共に同年の出版。

◎下曾根信敦は通稱金三郎、桂園と號す、後甲斐守に任ぜられ、步兵奉行となる。高島秋帆の門人にて、譯述の書多し。

けんりんるゐさん　鈴林類纂　本一百卷

卷一より卷十二に至る君道。卷十三より卷二十四に至る臣術。卷二十五より卷三十六に至る訓誨。卷三十七より卷四十七に至る策略。卷四十八より卷六十二に至る關戰。卷六十四より卷六十七に至る賞罰。卷六十八より卷七十九に至る器械。卷八十より卷九十四に至る雜。卷九十五より最終卷一百に至る遺訓等より成る。古今の學德功績等を網羅したるものなり。

けんれいいるをくんへうさくびぶん　縣令井戶君表德碑文　一折　佐藤　坦

石見國縣令井戶平左衛門の事歷功績を記したる碑文を石摺となしたるものなり。嘉永二年己酉(一八四九)の作。篆額は淺野長祚の筆になる。

けんれいいるをくんへうさくびぶん　縣令井戶君表德碑文　一折　佐藤　坦

石見國縣令井戶平左衛門の事歷功績を記したる碑文を石摺となしたるものなり。嘉永二年己酉(一八四九)の作。篆額は淺野長祚の筆になる。

◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文詩」の下にあり。

けんれいきかん　縣令規鑑　本一卷

諸御入用立營之事、諸帳面之事、諸屆之事、在陳心得之事、算法之事、御殿並に御勘定所向之事、出役場心得之事等凡て享保年中の代官處務例を輯錄したるものなり。弘化四年丁未(一八四七)六月寫本の奥書あり。

けんれいもんゐんきやうたいふしふ　建禮門院右京大夫集　一卷　右京大夫

農業須要の書にて、檢地、村里、檢見、水利、種藝等を考論す。明治十九年活刷に附して「勸農叢書」の中に收載す。

◎谷本敎の傳記は「地方總論」の下にあり。

けんれいもんゐんうきやうたいふしふ　建禮門院右京大夫集　一卷　右京大夫

卷首に曰く「家の集などいひて歌よむ人こそかきとゞむる事なれ。これはゆめ〳〵さにはあらず。只哀にも悲しくも、何となく忘れがたく覺ゆる事どもの、其のおりく、ふと心に覺えしを、思ひ出らるゝまゝに、我が眼一つに見んとて書きおくなり」となく云へり。「われなくて誰れか哀と水くきの、あともし末の世にのこるとも」といふ歌より、何れも詳しき端書を加へて部合二百數十首あり。「群書類從」卷二百八十、和歌部第百三十六に入れたり。

◎右京大夫のことは「右京大夫家集」の下にあり。

げんろく　鈴錄　本二十卷　荻生　茂卿

一家の兵法を論述せるもの。大綱を擧ぐれば、制賦、兵制、職制、編伍、懸令、行軍、營地、陣法、敎旗、戰法、戰略、城制、守法、攻法、水法、其の他の十數項に就きて詳論せり。享保十二年丁未(一三八七)の自序を載す。

◎荻生茂卿の傳は「護園秘錄」の下に出づ。

げんろくえどえづ　元祿江戶繪圖　一卷

元祿年間の江戶の地圖にして、町名及び諸侯藩吏等の御宅の在處を記入せり。同十四年辛巳(一三六一)の版刻に係る。

げんろくくねんおいののき　元祿九年御祈記　本一卷

元祿九年丙子(一三五六)九月十七日、水院御不例の爲め御祈ありたる時の略日記なり。今見る本には「神宮方書」、「御衣祭記」、「八足寸法記」、「神道名目抄」等を合寫す。

げんろくぐわいしよ　鈴錄外書　本一卷　荻生　茂卿

軍法不審の條々に對して悉に說明詳釋したるものなり。數十項の軍法より成る。

◎荻生茂卿の傳記は「護園秘錄」の下にあり。

げんろくさんねんぶんけんえどづ　元祿三年分間江戶圖　一舖　遠近道印

東は小松川に限り、西は四ッ谷追分に限り、南は品川に限り、北は日暮里に限れる着色圖にて、武家の屋敷を記せること詳なり。一丁四分の積にて、一里は一尺四寸四分の比に圖せり。元祿三年庚午(二三五〇)著したるものなり。

◎遠近道印の傳は『寛文版江戸大繪圖』の下にあり

げんろくじふさんねんえどづ
元祿十三年江戸圖　一鋪　遠近道印

前書『元祿八年分間江戸繪圖』以後、當十三年庚辰(二三六〇)までに地理に變革ありしところを改めて更に版行したるものなり。

◎遠近道印の傳は『寛文版江戸大繪圖』の下にあり

げんろくせんしゆ
元祿千首　本一卷

元祿十四年辛巳(二三六一)九月二十一日に於ける太神宮御法樂千首の集。靈元天皇、邦永親王、基熙、通誠、通茂、淳房、實棐、通躬、爲綱、兵孝、爲久等、都て三十七人の詠歌なり。

げんろくねんぢうぜんこくこくだかしらべ
元祿年中全國石高調　本一卷

名區の示す如く同年代の調査にかゝる全國石高を記したるものなり。

げんろくはちねんぶんけんえどえづ
元祿八年分間江戸繪圖　一鋪　遠近道印

『元祿三年分間江戸圖』を著して後、當八年乙亥(二三五五)までなり、其の變革ありしところを改めて、更に版行したるものなり。

◎遠近道印の傳は『寛文版江戸大繪圖』の下にあり

げんろくばんきやうとのづ
元祿版京都之圖　一鋪

東は大津海道を限り、西は大井川を限り、南は大和海道を限り、北は鞍馬寺貴布禰等の邊を限りて、洛中洛外の地、禁裏、仙洞、本院、新院、二條、淀の御城、公家、武家の屋敷を始め神社佛閣、名所舊蹟を圖し、社寺の領高、開山開基本尊の作者、建立の年歷、本末の鳥居山門及び著名なる社寺の緣起に至るまで、最も詳を悉したるものなり。元祿九年丙子(二三五六)御繪圖所林吉永の刻行するところなり

げんろくぶかん
元祿武鑑　一卷

元祿中幕府諸役人、卽ち大老以下能役者に至る交名記なり。元祿十二年己卯(二三五九)出版の小冊。

げんろん
劒論　本四册

刀劒の由來故實鍛工の姓等を詳論圖說したるものなり。著者年月等を記さず。

げんわぐんき
元和軍記　本二卷

元和元年乙卯(二二七五)正月三日より、江戸大阪夏陣の始末記なり。

げんわじせきろく
元和事績錄　本六卷

元和元年乙卯(二二七五)正月より同九年十二月に至る將軍家の要事、及び江戸の雜件を記載したるものにて、六卷三册に寫傳す。內務省の謄本による

げんわせうせつ
元和小說　本一卷

元和元年乙卯(二二七五)より、同九年に至る間の略日記なり。閏六月二日松平宮內少輔兄左衞門督遺蹟賜備前國、十日青山石見守於伏見切腹、十二日濱口外記改易十六日大阪合戰寧盤等の記載法にて、終始武家に關する記事なり。

げんわせんぽうろく
元和先鉾錄　本二卷　藤堂　高文

大阪夏陣の日次記なり。平塚陣所配排より合戰始末、及び大阪城再營の事に至る。本書內題に『大阪夏御陣覺書』といふ。明和六年己丑(二四二九)尾州侯の命により編輯したる由を記す。

◎藤堂高文は伊勢の人。津藩の國老にして漢學者たり。出雲と通稱し、大樸と號す。天明四年甲辰(二四四四)六十五にて歿せり。

げんわさうかいだうきかう
元和東海道紀行　本一卷

元和七年辛酉(二二八一)九月二十二日、江戶を立ちて、十月四日京都に着したるまでの旅行記なり。和歌なども混入れたり。著者を詳にせず。

げんわにつき
元和日記　本一卷

元和二年丙辰(二二七六)正月より、同九年十二月に至る德川幕府の事を記せる日記なり。

げんわねんろく
元和年錄　本四册

元和元年乙卯(二二七五)七月十三日改元より起筆し、同九年に至る德川氏の記錄なり。

げんわばんえどこゑづ
元和版江戸古繪圖　一鋪

元和二年丙辰(二二七六)改版したるところの江戸圖にて、其の原版は何時何人の作りたるものか知るべからず。

こ

こあつもり
小敦盛　一册

一の谷にて、熊谷直實の爲めに討れたる平敦盛の遺子の履歷を作り成したる小說なり。給入横綴本に作り、表紙に三と記せり。勿論一二もありたるものなるべし。東京帝國大學圖書館に貴重品として所藏せり。

こあつもり
古押譜　六卷　松崎　祐之

上天子より、源平藤橘以下數十姓に至る古華押を集錄し、之れを氏別にして各其の姓名官職系譜年序等を考記す。蓋し京師中なる古刹寺に藏するところの書古券より其の材を得たるものなり。正德五年乙未(二三七五)の自序中に「元老源紀伊州牧君、視事之暇好古不輟、在東日使祐之歷覩四方、搜古圖籍云々」とあり。

◎松崎祐之は丹波の人、世々篠山藩に仕ふ。字を子慶、通稱を多助といひ、閑谷、また甘白と號す。伊藤仁齋に學び、博覽廣通、また文章、書法等に長す。著書は本朝歷史目錄、本朝歷史目錄、膝下問答、山陰雜事、篠山志、刀袋、鏡袋、訓蒙錄治漫筆、史論奇抄、店詩河海、言志集、甘白雜錄、閑谷集等あり。享保二十年乙卯(二三九五)七月九日、六十二歲にて歿す。

こあんしふ
古案集　一卷　森　尹祥

武家より社寺に寄進すべき鳥居水盤燈籠額面其の他の銘文位署を訂したるもの。著者の跋に「棟札燈籠の銘等何故にか儒家の草案にて、久保蟾川ともに其のまゝに讀り書き來れり、儒家何れも博學なるべし。然れども、書札古實の事は家業にはなし。尹祥之れを歎くこと久し。今永府史館の書きぶりに習ひ、悉く之れを示す事此の如し」といへり。

◎森尹祥の傳は『慊堂日歷抄』の下にあり。

こいうちくかうろく
梧右竹耕錄　本一卷

自他の文章詩歌を集錄したるものなり。文政年間のものなるべし。首めに「卷第一」と標したれば續卷あるならんも今は詳にし難し。

こいかう
語意考　一卷　賀茂　眞淵

國語の意味を說明したる書にして、五十音の横音初體用令助の五を分ち、延言約言略言或は轉じ廻らし通ふ言葉、十二月の和訓の意、清濁を通はしいふ例などの事を述べたり。本居宣長の序、及び明和六年己丑(二四二九)二月の自序あり。寛政元年己酉(二四四九)刊行す。

◎賀茂眞淵の傳記は『冠辭考』の下に出づ。

こゐきせんしのぶん
御位記宣旨之文　本一卷

德川四代將軍家綱の位記宣旨文等を收錄す。從三位御位記、大納言宣旨、正二位御位記、征夷大將軍宣旨、右近衞大將宣旨、右馬寮御監宣旨、淳和奨學兩院別當宣旨、源氏長者國宣旨、內大臣宣旨、右近衞大將如舊宣旨、隨身宣旨、牛車國宣旨、右大臣宣

旨、右大將如蔭宣旨等を收め、更に御賜位記、御賜官宣旨等を掲ぐ。

こいしかはしれう

小石川志料　寫六冊　松崎　純庸

江戸小石川なる街巷、山川、橋梁、馬埒、神祉、寺院、墳墓、古蹟、人物、寢善等に關する見聞集なり。著者文化八年辛未(一八一一)の冬、德川幕府より武藏風土記の編輯を命ぜられたる時、其の材料にとて集めたるものなり。

◎松崎純庸は善右衞門と通稱し、西丸御書院番を勤め、武藏風土記編輯方出役たり。

こいだうえんかくかう

古醫道沿革考　寫一冊　井上　賴圀

本邦醫道の傳來沿革等を詳記したるもの。其の師權田直助、「こたびわがおほみくにの、くすしのみちの、かみ代より、いまにつたはりこしゆゑよし、またそのうつりかはりを、とはるるに、こたへはべる」とて、和文假名書に撰びたるに、本文の章節毎に、低書略解し、また所々に傍註をも加へたり。二十行二十七葉の寫本に作れり。本書は淺に、學藝志林上に全部印刷せられたることあり。

◎井上賴圀の傳は「藥石識名」の下にあり。

こいだうぢそく

古醫道治則　一卷　權田　直助

上古神眞の醫道法藥法等を略述したるもの。全編萬葉假名大文字にて記せり。明治三年庚午(一八七〇)井上賴圀翁の跋文を附して出版せり。

◎權田直助は武藏國入間郡毛呂本郷の人。古方醫にして和學に通ぜり。號を名越廼舍といふ。少よりに讀書を勉強し、內外の醫術に精研し又古今の讀書に奮勵す。壯にして幕醫野間廣春院に就て醫を錬り、其の名一時に著はれ、中年以後は治療を門人に、家事を妻子に委ねて專ら著述をなす。即ち詞の經緯圖、詞の玉緒頭注、語學自在、國文句讀考、國文法典辨疑、漢文和讀例、形狀言八衢、同上頭注、てにをは通路頭注、てにをは玉緒問答、語學分類、助字分類、用言分類、みまたのふゆ、心の種、祭典修禮書、葬儀式、醫道百首、醫道百首解、くすしの一言、名越廼舍老後の集等及び古醫道治則略註あり。德川幕府の末年、王政の復古を謀り、往來周旋するところあり。維新の後監察司、知事、大學中博士、從六位皇漢醫道御用掛に任ぜられ、宮司となり、大敎正に昇り皇典講究所の學正となり。明治二十年丁亥(一八八七)六月八日、七十九にて歿せり。

こいだうぢそくりやくちう

古醫道治則略註　一卷　權田　直助

「古醫道治則」を一句一節毎に註解したるもの。慶應年中門人早川緒一、堤常淳、村松榮等の筆錄を附して出版す。是れまた前「古醫道治則」の歿と同じ歿を附して出版す。

◎權田直助の傳は「古醫道治則」の下にあり。

ごいちでうてんわうじき

後一條天皇事記　寫四十五卷　塙　保己一

後一條天皇の御一代の實錄にして、著者が幕府の命により纂輯せし史料中の一部を刊行したるものなり。

◎塙保己一の傳記は「群書類從」の下にあり。

ごいつとうし

御一統誌　寫二卷

德川家康天下統一の事を記せしものにして、朝鮮征伐、大閤薨去等より、會津發向、關ヶ原合戰、大阪征討等の事を記し、家康薨去、神號宣下贈位等の事に終る。凡て三十條項あり。

ごいつぽせんりしふ

後一步千里集　寫四卷　林　信充

蹇に著錄せる「一步千里集」に續きて、自家の詩を輯錄せるもの。寶永二年乙酉(一七〇五)著者の凡例、及び諸家の序あり。

◎林信充の傳記は「麥子十五郎傳」の下にあり。

こいんぶ

古印譜　寫一折

攝津住吉神社の古印、大和法隆寺の古印、大和多武峰談山神社の古印、山城男山八幡宮古印、同樫尾高山寺古印、近江竹生島神社所傳の駿河倉印、足張熱田神宮所傳の勿臣湖白印等を朱捺したるものなり

こうあんかいげんぢやうき

弘安改元定記　寫一卷

建治四年戊寅(一二七八)弘安元年と改元せられたる時の定記なり。「續群書類從」卷二百八十八、公事部第四十一に入れたり。

こうあんかく

弘安格　寫一卷

百官略、書札禮、院中禮節の三類に分ちて當代の格式を記載せり。弘安八年乙酉(一二八五)十二月の筆なり。

こうあんげんじろんぎ

弘安源氏論議　一卷　具　顯

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんじふいちねんいはしみづぎやうかうき

弘安十一年石清水行幸記　寫一卷

弘安十一年戊子(一二八八)正月二十六日、太上天皇後宇多天皇の石清水に行幸遊ばされたる時の次第を記したる當時の記錄なり。

こうあんせんせいいぼくでふ

弘庵先生遺墨帖　二卷　藤森　大雅

著者の楷行草三體の遺墨を版刻したるものなり。草書の末に孝明天皇の安政四年丁巳(一八五七)の日付あり。明治六年癸酉(一八七三)二卷二冊に發行す。

◎藤森大雅の傳記は「如不及齋文鈔」の下にあり。

部第四十一に入れたり。

こうあんかく

弘安格　寫一卷

百官略、書札禮、院中禮節の三類に分ちて當代の格式を記載せり。弘安八年乙酉(一二八五)十二月の筆なり。

こうあんげんじろんぎ

弘安源氏論議　一卷　具　顯

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんじふいちねんいしやうぢきやうかうき

弘安十一年石清水行幸記　寫一卷

弘安十一年戊子(一二八八)正月二十六日、太上天皇後宇多天皇の石清水に行幸遊ばされたる時の次第を記したる當時の記錄なり。

こうあんせんせいいぼくでふ

弘庵先生遺墨帖　二卷　藤森　大雅

著者の楷行草三體の遺墨を版刻したるものなり。草書の末に孝明天皇の安政四年丁巳(一八五七)の日付あり。明治六年癸酉(一八七三)二卷二冊に發行す。

◎藤森大雅の傳記は「如不及齋文鈔」の下にあり。

こうあんぶんかう

弘庵文稿　四卷　天沼　僧

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんぶんかう

弘庵文稿　四卷　天沼　僧

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんぶんかう

弘庵文稿　四卷　天沼　僧

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんぶんかう

弘庵文稿　四卷　天沼　僧

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんぶんかう

弘庵文稿　四卷　天沼　僧

弘安四年辛巳(一二八一)十月、雅有、範藤、長相、具顯、康能、兼行、爲方、定成等の人々數中に集まり、源氏物語に就て各不審二箇條を立て、互に問答論議したるを書記したるもの。記者は其の中の具顯なり。「群書類從」卷三百十七、物語部第十一に收めたり。

こうあんれいせつせう　弘安禮節抄　冊一卷

前項解題せるところの「弘安禮節」中の抄錄なり。抄出の年代と人名とを知らず。

こうおん　後院　冊六卷　伊勢　貞丈

史傳記錄物語隨筆等の諸書を抄出して種々雜多の故實雜話を考證筆錄し、間々著者の私案をも附したり。書名は開卷に後院別當の事を記せるより取りしものならん。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下に出づ。

こうえんわかどくわいはじめ　公宴和歌御會始　冊一卷

明和四年丁亥(一七六七)正月二十四日、梅有佳色の題にて詠める御會始の歌數十首を輯む。御製竝師左大臣、御製講師日野中納言、讀師權大納言、發題田向大納言、講師公明朝臣、題者雅重、永行雅重なり。末に同年正月廿六日の當座御會の歌を收む。

こうおんようじかう　喉音用字考　冊一卷　彌波(トオ)今道

韻鏡の圖によりて、上の喉音三行の位置を考說したるものにて、三行通別、喉音十五轉、聲韻用字考、二卷の差別等をも論ぜり。安永六年丁酉(一七七七)十月の作。

こうがんせう　厚顏抄　冊三卷　僧　契沖

紀記中の和歌を抄出註釋したるもの。卷の一、卷の二に「日本紀」中の和歌、卷の三に「古事記」中の歌五十六首を收め、卷の三に「古事記」の歌五十六首を揭げたり。元祿四年辛未(一六九一)の自序中に、德川光圀の命によりて、本書を撰出したる由あり。

◎契沖の傳記は「萬葉代匠記」の下に出づ。

こうきうごさんたうじつだい　後宮御產當日次第　冊一卷

御產當日の御氣色に依て諸卿醫陰陽師を催すこと、御裝束改の事、禁常御帳を撤すること、諸祈、御加持、祕願、竪殿、御膳其の他の事等を記す。「續群書類從」卷九百九十九、雜部第百四十九に收めたり

こうきうごちやくたいぶるゐき　後宮御着帶部類記　一卷

皇后中宮等御着帶の次第書を集めたるもの。其の中には元永二年(一一七七九)正月五日の顯賴卿記、同師時卿記、康治二年(一一四三)六月二十八日定長卿記、光記、治承二年(一一七八)十一月一日の定嗣卿記、同寬喜二年(一二三〇)二月十一日の有資朝臣記、寬元元年(一二四三)十一月十一日の定嗣卿記、同盤井入道相國記、同醫師經長記等を載せたり。「群書類從」卷五百二十七、雜部第八十二に收めらる。

こうきうりやくでん　後宮略傳　冊一卷

安元二年丙申(一一七六)より、建武四年丁丑(一三三七)まで、建武四年丁丑(一三三七)より元和元年乙卯(一六一五)まで、院號子に至る後宮四十人の略年譜なり。前後散佚して全きものにはあらず。

こうぎこはつど　公儀御法度　冊九卷

德川幕府時代の法度條項を詳記したるものなり。

こうぎむきき　公儀向聞書　冊一卷

寬元天皇の天和三年癸亥(一六八三)前後に於ける拜領裁任、取扱、社寺の事等公儀に關する記錄を集めたるものなり。

こうぎめやすうらがきしよはんとうき　公儀目安裏書初判等記　冊一卷

目安裏書初判の事、裁許給裏書加印の事等、德川時代の裁判、處刑の例、凡そ百箇條を列敘したるものなり。

こうくわかくいん　功過格引　冊一卷

日常行爲の部類を分ち、其の功過を數字的に比較して惡を懲め善を勸め人生の幸福を全うせしめんとする通俗的敎訓書なり。序文中に「此格はもと大唐よりわたりて眞字かきの本なれば、文字なき人の見るべき便よろしからざる故に我が國の言葉にやはらげ假名にて寫し妻子弟妹にまづけ、又は同志の人に公にしぬ」と云へるにてその由來を知るべし。孝順格、和睦格、慈敎格、寬下格、親化格、救濟格、交財格、齊儉格、性行格、敬聖格、存心格、忠義格、親賢格等に就きて各功過の條目を記したり。

こうくわんしき　公館私記　冊一卷

文政二年己卯(一八一九)敕使江戸へ參向の時に於ける接待の式例を記せしものなり。其の事に與りしは間部詮勝なれど、本書は其の人の記なるや否や未だ詳ならず。

こうくわんせうかう　荷完小稿　一卷　春田　鷺

著者の詩文を集めたるもの。序跋なく、また年代詳ならず。

◎春田鷺は江戸の儒者にして詩文に長じたり。羽高と字し、九華また葆眞庵と號し、玄蕤と通稱す。文久二年壬戌(一八六二)二月十一日、五十一にて歿す。

こうくわんだいとうき　弘關大統記　冊十卷

德川氏累代の系圖、及び事績を記し、傳記傳評を附したるもの。初めに系圖及び家康以前代々の事迹を略記し、次に家康の幼時より大阪落陣の事までを委しく記載せり。延寶八年庚申(一六八〇)の自序に三陽雲母山下四城不期子とあれば、著者は參河國の人なるべし。

こうけへんねんていそう　侯家編年提要　冊一卷　岸　賴年

侯家累代の親戚の大略を筆錄す。著者の父師冨營て命を受けて、侯家の世系、履歷等を編輯したるもの。本書は此の書中より、抄出せりといふ。明和二年乙酉(一七六五)十一月既望、軒年の例言あり。次に明和三年丙戌より、天保二年辛卯(一八四九)に至る迄の記事は臣奧平昌方の追加せる由を記す。

こうげんぶるゐ　口言部類　冊一卷

康和三年辛巳(一一〇一)以後に於ける大營會其の他の佛事記錄を集めたるもの。懺悔氣色、安元二年(一一七六)十一月十一日の定嗣卿記、同師時卿記、康治二年(一一四三)六月二十八日定長卿記、同醫師經長記等を載せたり。「群書類從」卷五百二十七、雜部第八十二に收めらる。

こうごうし　鴻鵠志　一卷　吉田　松陰

經傳史子諸書の語句を摘出したるもの。懺悔氣色、最も著者の境遇と意志とを得たるものを編輯せるなり。題言あり、其の全文を示す。「予辛亥歲、始遊江戶、乃石猛者銖、爾後撫摘稍積、甲寅就縛、爲官吏所收入獄、又顚綴而錄之、及其脫免、不得隨諸身、安政丙辰(一八五六)四月、在家囚屋、又有此輯、名爲燕雀安知、用其首語耳、非有襲例也、友人松如爲、改鴻鵠志云、二十一回猛士」といふ。安政己未の末記あり、明治二年出版す。

◎吉田松陰の傳記は「講孟劄記」の下にあり。

こうこくし　輿國史　冊一卷

德川家祖先累代の歷史なり。初じめ遠祖源賴義、義家の事に筆を起し、德川の元祖葵季以下數代を經て家康に至るまでの事迹を記錄し大阪落城の始末に終れり。就中家康に關する記事に精細にして其の他は極めて簡略なり。本書は「三河記」と大同小異のものたり。

こうごにつきさくがはでんぬきがき　公御日記德川傳拔書　冊一卷

榊原式部大輔の日記中より、抄德川氏に關する事項三十條を拔出したるもの。卷末に享保十二年丁未(一七二七)四月二十七日榊原式部大輔臣吉橋利右衞門所持する由を記す。

こうさいかいせつ　浩齋經說　一卷　河又　秀祐

經書に關する著者の雜說なり。弘化四年丁未(一八四七)の自序あり。

◎河又秀祐は浩齋と號す。本書を著したる翌年「安命論」一卷を著す。嘉永比の人なること知らる。

こうさいしふ　公裁集　冊十四册

公裁書類を輯錄したるもの。文政十年丁亥(一八二七)の奧州白川郡松川分彈正神祇葬祭之儀に付伺書に對する公裁書より以下數百條を收載せり。

こうさいずゐひつ　公裁隨筆　冊九卷

德川幕府の司法行政に係る制度實例を集錄したるものなり。天保頃までのものを巨細ともに網羅す。

こうさいでんぶんろく　公裁傳聞錄　冊一卷

元禄寛保間に於ける寨行所等の法書を收錄したるものなり。目安裏書、裁許繪圖裏書之事等より、盧官名乘候者之事、盜人之宿致候者並村役人之事等に至る百數十條を收む。

こうさいひき 公裁祕記 ＊五冊

公裁書類を編集したるもの。取計方、寺社、訴狀糺方、吟味物調方、御年貢諸役取立方、吟味物座席賀地小作、在方取締、公事方御入用立方、御仕置物取計方同心得方、御關所、五街道取締、御朱印其外行逢、高札、御代參諸入用等二百數十條を收錄せり。

こうさいひろく 公裁祕錄 ＊十卷

正德享保元文の頃に制定せられたる幕府公裁の書付文を輯めたるものにして、凡そ百六十餘條あり。蓋し當事者の書き留めしものならべし。

こうさいふくこはふばうぎ 弘濟復古法傍議 ＊一卷 放牛軒

經濟救世の策を講究したるもの。第一銅錢を括り兼て楮幣の諸侯を救ひ北地開墾の財を殷く、第二西洋船數箇を造るの策、第三米穀を括り糴糶を司りて國中食料の增減を知り豐凶を常平して萬姓を救ふ、第四水陸所生の食物組農流を賑はし、其の元を培養し物を殖し價を平くす等凡そ二十一條あり。孝明天皇の安政三年丙辰(二五一六)の作なり。著者放牛軒の姓名を記さず。

こうさいろく 公裁錄 ＊一卷

御年貢諸役等取立方の部、寺社の部、取計方の部に分ち、數十項に記載したるもの。孟子の「無恒産因無恒心」といふ義を敷衍して、民に恒の心を持せしめむるは非ず、田の法を正しくし、貢納の餘を以て儉に父母妻子を養はしむべしと論じ、二四(一)濃州一鼎子といふもの、序あり。著者は山中某とありて伊勢國の人なりといへど其の名を詳にせず。

こうさいろく 公裁錄 ＊一卷

井田貢納の事を詳論したるもの。孟子の「無恒産因無恒心」といふ義を敷衍して、民に恒の心を持せしめむるは非ず、田の法を正しくし、貢納の餘を以て儉に父母妻子を養はしむべしと論じ、二四(一)濃州一鼎子といふもの、序あり。著者は山中某とありて伊勢國の人なりといへど其の名を詳にせず。

こうさいろく 公裁錄 ＊一卷

御年貢諸役等取立方の部、寺社の部、取計方の部に分ち、數十項に記載

甲冥宗祝は勢前と稱す。世々大工棟梁たりきといへど、その詳傳を得ず。

こうしやうじどうく

興聖寺語錄　一卷　僧　道元

天福元年已巳(一二三九)山城宇治に興聖禪寺を建立して、爾來十年間の化道垂誡に關するものを蒐輯したるなり。

◎道元の傳は「正法眼藏」の下にあり。

こうしやうばいほうぜんじいろく

興聖梅峰禪師遺錄　三卷　僧　梅峯

著者の傳頌、法語等を、小師悲響等が編錄するところなり。內題には「白雲梅峯禪師遺錄」と書せり。文化三年丙寅(一八〇六)三冊に版行す。三冊の中一冊は著者の年譜なり。

◎梅峯は寛永十年癸酉(一六三三)攝州大阪城に生る。笠信と諱し、始め禪英、後梅峯と號す。幼より出家に志あり、慈安、洒月、顯禪等に參學し、後ち龍蟠和尙の室に入て法を傳へ、數寺に歷住し、到る處に如夢寫を以て自稱し、晩年白雲山に歸老す。寶永四年丁亥(一七〇七)十一月十九日、世壽七十五、法臘六十五歲にて寂す。

こうしやぼさつでん

興正菩薩傳　一卷

持戒盥正を以て高名なる大和西大寺叡尊律師の略傳。興正菩薩は律師の謚號なり。「群書類從」卷六十九、傳部第六に入れたり。

こうしりれきかう

孔子履歷考　二卷　角田　簡

孔子一生間の事績を考說せること其の名の示せるが如し。文化十一年甲戌(一八一四)同十二年の自序あり。

◎角田簡の傳記は「近世瀧語」の下に出づ。

こうせいいちらん

侯鯖一攬　五冊　龜田　長興

天地、人物、器財、物產の四に分ち、事物の異名を輯めて其の出據を示したるもの。本書は龜田保が補輯して天保十三年壬寅(一八四二)に版行したる也

◎龜田長興の傳記は「善身堂文集」の下に出す。

こうせいきうかくろく

公整嘗格錄　一卷

金澤藩の農政に係る制度令達等を集錄せしものなり。慶長年間より、慶應年中の事に及べり。

こうせいこうのき

公清公記　一卷　德大寺公清

光明天皇の眞和六年庚寅(一三〇一〇)正月以下同五月に至る著者の日錄なり。恐くは殘闕物なるべし。

◎德大寺公清は德大寺實孝の男なり。眞和二年內大臣となり從一位に敍せらる。延文五年庚子(一三〇六)六月薨ず。後の野々宮と號せり。

こうせいせいしゆつかう

孔聖生卒考　一卷　大井　守靜

孔子の生卒に就て考證したること名の如し。宣明曆法により、春秋の選公、哀公、在位の年月を推し、大小氣節を考へて公羊、穀梁、左氏三傳の異同を論辨したるなり。延寶六年戊午(一六七八)の自序跋あり。天和元年辛酉(一六八一)山田訥齋の序を附して發行す。

◎大井守靜は「蟻亭閑言」の下に傳す。

こうせいひせう

公政祕抄　一卷

天明年間に於ける德川幕下諸役府の觸書廻狀等の寫したる集錄したるものなり。

こうぜんごころろん

興禪護國論　三卷　僧　榮西

臨濟宗の教義及び傳燈の事に就て令法久住門、鎭護國家門、世人決疑門、古德證誡門、宗派血脈門、興披增信門、大綱勸參門、建立支目門、大圓說話門、回向發願門の十門を分ちて說述せり。榮西の傳を敍したる或人の序文中に、「既而弘教外別傳最上乘宗、然南都北嶺諸師頗有二偏執者一仍諍且訴、於是撰二論三卷一號二經論文一排之目曰二興禪護國論一、以奏勅可、由」是得二菩宗流一布於天下一也」と云へり。以て本書の由來を知るべし。安永七年戊戌(一七七八)三月、建仁寺の東陵之れを校刻し、「鐫刷譯經」第帙第八にも收めらる。

◎榮西は有名の禪僧なり。夙く父に從ひて佛舍の頌を誓ひ、長ずるに從ひて靜心、千命、基好、顯意等に就きて經律等を學び、仁安三年宋に遊び建久二年歸朝して大に禪道を唱へ、衆徒の非難を排して

眞乘を發揮す。建久六年博多に聖福寺を建つ。元久三年京師の天變に際し將に遂れんとして時下の利否を論じ却て有司の監護を得て布敎するを得るに至る。建永元年敕により東大寺の幹事となり、建保元年僧正に擢ぜらる。夙くより大藏を閱讀すること三たびに及び佛乘の奧旨を極め、布敎講說隨て眞理を明にす。著書は一代經論總釋、日本佛法中興願文、不二門論、三部經開題及び興禪護國論等あり。建保三年乙亥(一二一五)七月五日、七十五にて京に入寂す。

こうぜんさいいつぴやくしせう

鴻漸齋一百詩鈔　一卷　大槻　清崇

著者の鴻漸齋詩集なり。凡て一百首を撰ず。嘉永六年癸丑(一八五三)の自敍あり。

◎大槻清崇は字を士廣、號を磐溪、平次と通稱す。稍長して昌平黌に學び、後仙臺藩の侍講となりて江戶に住す。夙に西洋の砲術を修めて其の奧に達したり。嘉永六年來使ペルリ來朝の際盛んに開國說を主張し、明治戊辰の役藩のために謀る所ありて獄に下され既にして赦されたり。爾來江戶に來往し文壇の老將として一世の推重する所となれり。本書の外に孟子約解、古經文祝、近古史談、靈靜閣詩文集、奇文欣賞等の著あり。明治十一年戊寅(一八七八)歿す、年七十八。

こうそくけんおぼえがき

恒足軒覺書　一卷　岩田恒足軒

此の書は本名を「大新田開書」といふ。よつて該書名の下に解題せり。

こうそんがうたんき

公孫隆誕記　一卷

德川十代將軍家治誕生の時の記錄なり。日次的に著帶より誕生までの諸儀式を記せり。

こうだうくわんき

弘道館記　一卷　德川　齊昭

德川齊昭の自撰自書の「弘道館記」を縱書習字本に仕立たるものなり。明治十五年壬午(一八八二)の出版にかゝる。

◎德川齊昭の傳記は「食菜錄」の下にあり。

こうだうくわんき

弘道館記　一折　藤田　彪

水戶弘山公所撰の「弘道館記」を楷書して、習字臨本としたるものなり。嘉永三年庚戌(一八五〇)筆者東湖の奧書あり。

◎藤田彪の傳記は「弘道館記述義」の下にあり。

こうだうくわんきじゆつぎ

弘道館記述義　二卷　藤田　彪

水戶の藩黌弘道館の記を數衍述義したるもの。本文の一節一章につき一字を下げて詳しく漢文にて說けり。慶應二年丙寅(一八六六)新鐫せらる。本述義の要旨として內藤耻叟氏の講ぜられたるもの、大日本中學會第一學級(明治二十九年發行)講義錄中にあり。

◎藤田彪は常陸國水戶藩の人、字は藏卿、東湖と號す。彧之助と通稱し、後誠之進と改む。弱冠の時讀書を好ます專ら武術を練修したりしが、一朝感ずる所ありて刻苦書を讀み、學業大に進む。人となり棄邁にして、慷慨の氣象に富みたり。初め藩主武公に仕へ、更に復た烈公の知遇を受け、大に獻替匡弼する所ありたり。其の人に接するにや常に時事の非なるを憤り、慷慨扼腕屢ぐに淚を以てしたりと云ふ。安政二年乙卯(一八五五)震災のために江戶の藩邸に歿せり。享年五十。本書の外に「回天詩史」の著あり。

こうだのぬんくわんちやうき

後宇多院灌頂記　一卷

藤原　實任

後二條天皇の嘉元四年丙午(一九六六)九月、後宇多上皇の御猷に係る灌頂の記事なり。

◎藤原實任の傳記は「職歷記」の下に出す。

こうだのぬんごくわんちやうき

後宇多院御灌頂記　一卷　隆　長

後二條天皇の德治三年戊申(一九六八)正月、東寺西院に於ける後宇多院御受戒の次第を記したるものなり。「群書類從」卷四百二十七、釋家部第三に收められる。著者隆長は從三位中納言たり。

こうたんれきはふ

興疇曆法　一折十七卷

卷一、二、三、に曆法。卷の四に日躔表、卷の五より九まで月離表。卷の十より十五まで五星表、卷の十六、十七に交食表を收む以上十七卷一帙に入れ、內閣文庫に特別書として所藏せり。

こうちうやくはう　口中藥方　本一卷

口中諸部の痛患に用ゆべき漢法諸劑を略記したる小册子なり。

ごうちばなみ　柒打花見　一册　野々口立圃

著者の俳諧集なり。編輯の年月は詳ならず。著者野野口立圃の傳記は「なさな源氏」の下にあり。

こうちやういはふるねへん　弘長遮法類編　二卷　僧　靈鳳

淨土眞宗の開祖親鸞聖人の法語を類聚したるものにして、凡べて四十八箇條あり。享保十六年辛亥（一七三九）九月の著作。著者靈鳳は智功と字す。

こうちやうき　弘長記　本一卷

龜山天皇の弘長元年辛酉（一二六一）三浦若狹前司泰村の弟律師良賢が、父泰村滅亡の後に一脈譜代を辭らひて鎌倉に入り、相州一家を討たんとする計畫の最初より、其の顚末を記したるもの。享和元年辛酉（一八〇一）源弘賢の奥書あり。「續群書類從」卷八百七十三、雜部第二十三に入れたり。

こうちやうにねんうたあはせ　弘長二年歌合　本一卷

弘長二年壬戌（一二六二）九月の十八番歌合なり。宗尊親王等の詠あり。一名を「三十六人大歌合」といへり。

こうちやうひやくしゆ　弘長百首　一卷

弘長年中の百首歌集にして、卷二十首、雜二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、戀二十首、雜二十首、作者は常盤井實氏、藤原基家、藤原家長、藤原爲家、藤原爲氏、藤原行家、藤原雅經等なり、凡て七百首あり。歌の他の撰集に出でたるものは其の集名を頭書せり。「群書類從」卷百七十二、和歌部第二十七に收む。

こうぎんくわいしふ　紅塵灰集　本一卷　後土御門院

後土御門院の御製歌を集めたるものなり。

◎御土御門院は後花園帝の禪を受けて卽位す。御在位中應仁の長亂ありて宮殿灰燼に歸す。在位三十六年にして明應九年庚申（一四九九）五十九にて崩し賜ふ。

こうていかんざつしよ　公程閑暇雜書　本三卷　淺川傳右衞門

著者時代の將士の談話を筆錄せしものにして、主君宗廣諸國奔走の事は最も細に網羅せり。

◎淺川傳右衞門は筑後柳川藩主立花宗茂の家人なり。別に「淺川傳右衞門記」の著あり。

こうでんりやくじゆせう　弘傳略頌抄　本一卷　僧　道範

弘法大師空海の傳「弘法大師廣傳」等より略抄したるものなり。「續群書類從」卷二百十、傳部第二十一に收めたり。

ごうなうつくのりのもねすのかみこうにんさんねんたかをやまくわんちやうれきめい　弘仁三年高雄山灌頂歷名　本一卷

嵯峨天皇の弘仁三年壬辰（一四七二）十一月十五日以後高雄山寺に於て金剛界灌頂を受けたる人々の姓名を錄したるもの。「續群書類從」卷七百四十六、釋家部第三十一に入れたり。

こうにんしき　弘仁式　本三十卷　藤原　冬嗣

嵯峨天皇の敕を奉じて朝廷官府の格式規定、及び故事慣例等を採摭詳敍したるもの。上大寶元年辛丑（七〇一）より、下弘仁十年己亥（八一九）に至る。編輯は大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣、正三位行中納言藤原朝臣葛野麻呂、參議從三位行近江守秋篠朝臣安人、參議從四位上行東宮大夫兼行左兵衞督式部大輔藤原朝臣三守、從五位下守左近衞少將橘朝臣常主、從五位下守大判事兼行攝摩、大極臣物部中平宿禰敏久等の與かるところなり。弘仁十一年庚子歲奏進す。然して今傳る本は傳寫なり。

◎藤原冬嗣は內大臣內麻呂の子。弘仁中藏人頭となり、文武の要職を累遷して遂に從三位內大臣となる。夙に文武の才を兼ね、勸學院を興し、施藥院を置く等治績最も多し。又嘗て敕を奉じて弘仁式、內裏式を撰びまた國史を監修す。天長三年丙午（八二六）年五十二にて薨ず。正一位を贈られ閑院

大臣と稱す、後文德帝位に卽に及びて太政大臣を追贈せらる。

こうにんれきうんきかう　弘仁曆運記考　一卷　平田　篤胤

我が古年代、卽ち神代年數說の荒唐なることを辨じて、更に自己の推步年數を說示したるものなり。人皇に至りては推古天皇までのものを考明す。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

こうばいせんく　紅梅千句　一册　松永　貞德

著者の俳諧千句にて、明曆元年乙未（一六五五）五月の編にかゝる。

◎松永貞德の傳記は「歌林雜話」の下にあり。

こうばいいちらんき　興亡一覽記　本六卷

天正以後諸家興廢の始末を略記せしもの。長澤康忠大友義統等の事迹を始しめ五十餘條あり。其の體裁所載とも「古今武家盛衰記」に同じきより推せば、恐くは同書の略抄物ならん。

こうはうづゑ　孔方圖會　二卷　中谷　顧山

和漢古今の通貨錢を模寫したるもの。卷末に誌して「世に錢を圖するもの多しと雖も、皆錢名を知て錢體を知らず、故に弄錢家漸く疑を生ず。今逐一正錢を模し、分つに十等を以てす。是れ錢文の尊卑を顯すに非ず。流行の多少を採るなり」と。享保十三年戊申（一七二八）前川修の跋を添へたり。

◎中谷顧山は古物の研究を嗜みし人。本書の外に「古今百錢譜」を著せり。享保年間の人なり。

こうばふだいしぎやうじやうえうしふ　弘法大師行狀要集　本六卷　僧　賢寶

眞言宗の祖空海の傳なり。卷一は大師の御世。卷二は平城天皇、嵯峨天皇の御世。卷三は嵯峨天皇の御世。卷四は淳和天皇の御世。卷五は仁明天皇の御世。卷六は入定以後の事蹟を記し、卷六は入定以後の傳記に係る。醍醐天皇の御世。卷五は仁明天皇の御世。卷六は入定以後の事蹟を記し、卷六は入定以後の傳記に係る。醍醐天皇の御世。卷五は仁明天皇の御世。卷六は入定以後の事蹟を記し、卷六は入定以後の傳記に係る。醍醐天皇の御世。卷五は仁明天皇の御世。卷六は入定以後の事蹟を記し、卷六は入定以後の傳記に係る。

◎賢寶の傳記は「發菩妙抄」の下に出づ。

こうばふだいしぎやうじやうづゑ　弘法大師行狀圖繪　本十二卷　熊谷　道昌

傳部第二十に收めたり。

こうばふだいしごにふちやうかんけつき　弘法大師御入定勘決記　本二卷　僧　因海

空海入定の次第を詳論したる漢文なり。建曆元年辛未（一一七一）高野山千手院坊に書するところなりといふ。正應六年癸巳（一二九三）眞治三年甲辰（一一〇二四）等寫本の奥書あり。

こうばふだいしでしでん　弘法大師弟子傳　一卷　僧　智燈

弘法大師の諸弟子傳を纂輯したるもの。東寺第二世實慧僧都より、攝州六甲山神呪寺開山如意尼に至る二十人を收む。編者の小序あり。竊惟、我大師之應世、恰似神農之作市、開法藏無盡之寶、防九界聚落之市、交易衍去、各得其所、其易得之處大者、各設一市鄽待賈、遞者十七人、具者三人、錄十人」といへり。全編漢文の記なり。眞享元年甲子（一三四四）八月二十七日の筆記にかゝる。著者智燈は南禪の沙門なり。

こうばふだいしでしふ　弘法大師弟子譜　四卷　僧　道猷

弘法大師の傳圖繪にして、卷一は覺寺無品深守親王。卷二は其の名の示せる如く眞言宗の開祖空海大師の弟子は六條中將有孝。卷四、五は前中納言爲重。卷六は二條前中納言爲重。卷七は四辻權同三司四十六人の傳譜なり。天保十三年壬寅（一八四二）仁和寺義天、高野山得仁の序、及び自序あり。著者道猷は正智と字す。

こうばふだいしねんぷ　弘法大師年譜　十二卷　僧　得仁

弘法大師廣傳　本二卷

贈大僧正法印大和尚、位諡空海、諡號弘法大師の詳傳。全漢文にて記す。「續群書類從」卷百〇九上下、

眞言宗の開祖弘法大師空海一生の履歴を詳記したる大年譜なり。巻の一には大師世系及び援引書目を掲げ、巻の二以下は本紀にして、誕生より入定に至り、巻の十二は拾遺として大師の詩文等を出したり。和文書引用の外は凡べて漢文より成れり。天保九年戊戌(一八三八)一品澤仁親王、大覚寺慈性の序、同四年癸未の自序、同五年甲午僧蘇長、同九年戊戌屋代弘賢文の跋等あり。著者得仁は高野山無量壽院に住し、學靈とも稱したり。

こうぼふだいしねんぶつひじくでんしふ　弘法大師念佛祕事口傳集　本朝一巻　僧　空海

南無阿彌陀佛の意義を示し、念佛の功徳を説きたる假字文の書なり。奥書に明徳二年辛未(一三九一)足利義滿、高雄神護寺の寶藏より之れを撰出せしよしを記せり。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下に出す。

こうはんへうじゆん　洪範標準　本朝二巻

「書經」なる洪範九疇の數の事を假字にて、記述せる書。其の事實は朝鮮人より傳へし者なりと云ふ。

こうひろく　口碑錄　本朝一巻　熊澤　惟興

寶暦年間幕府の執政本多伯耆守正永の仁政美事、及び其の臣下の善行奇跡を記したるものにして數十箇條あり。文政八年乙酉(一八二五)四郷勝映の序を載す。

◎熊澤惟興は本多伯耆守正永の領民なり。

ごうひんき　豪品記　本朝二巻

文字の事に就て考説したるもの。乾の巻に始製文字、六書、古文、大篆、籀文、奇字、小篆、秦篆、隸字、佐書、楷書、眞字、八分、飛白、神代文字、肥人書、薩人書、眞字、漢音、呉音、篆書、八分飛白、行字、草書、草字、點圖。坤の巻に章草、行書、草書、倉頡、倉書、創書、國字、國訓、誤用、謂用省文等の目に就て考説せり。

こうぶうたあはせ　公武歌合　一巻　南華老人

湖上月、禁中月、月下竹の三を題となしたる歌合二十四番あり。奥書に、都下兵亂之後、城南蟄居之間、老懐相加、身如病兒、不携一卷之抄物、頗難忘書儀之風儀、只依來意雖猥、猥注短慮所及、此一卷一覽後於愚判愚詞者早被削除、豈不幸之甚哉、南華老人御判」とあり。「群書類從」巻二百十四、和歌部第六十九に收めたり。著者南華老人は別に「連珠合璧集」二巻をも著せり。

こうぶえいこものがたり　公武榮枯物語　六巻

承久亂の顚末を記したるもの。巻の一高倉院第四の宮御即位の事、後鳥羽院武家追討思召立給ふ事、北条判官能員謀叛の事等の目より、巻の六高倉院第三の宮の御子踐祚の事、阿波院第二の宮御即位の事等の目に至る。致十段に分ち給畫を挿入して通俗に記したり。元祿六年癸酉(一三五三)出版。六巻八册にして行はる。

こうぶきしがき　公武開書　三巻　小笠原長時

第一巻に公家武家間に於ける諸事を記述す。公武の沙汰、官位の事、八省の事、受領の事、文段の事、僧家並女中方の事等を掲げて元和九年癸亥(一六二三)小池甚之丞貞成の奥書あり、第二巻は嫁入の次第以下諸法式第三巻は萬祕傳を掲げ、共に長時、貞慶の署名と、小池貞成の奥書とあり、三巻一册に版行す。

◎小笠原長時の傳記は「元服の次第」の下にあり。

こうふくき　興復記　一巻　僧　善永

淨土眞宗の教義に關して功存の「願生歸命辨」を難詰破斥したるもの。天明元年辛丑(一七八一)二月に脱稿するところなり。

◎善永は寶曆の變名にして。その傳は「歸命本願說」の下に見るべし。

こうぶくじえんねんまひのしき　興福寺延年舞式　本朝一巻

延年舞披露之詞、當辨越天樂歌物開口之詞、亂拍子系統一覽白拍子之歌、遊僧拍子歌舞催歌等各其の文句を擧げ、延年の次第は一番より二十一番までの名を示せり。

こうぶくじがらんえんぎ　興福寺伽藍緣起　本朝一巻　僧　還圓

大和國奈良興福寺の伽藍の沿革を記したること名の示すが如し。「續群書類從」巻七百九十六、釋家部第八十一に入れたり。同巻には「興福寺寶記」、「興福寺現住僧帳」といふ二書も收めたり。

こうぶくじくわんむてふしよ　興福寺官務牒疏　本朝一巻

興福寺の官務帳寺社之部を詳記したる古記なり。地誌の參考に資する事多し。

こうぶくじさんかうぶにん　興福寺三綱補任　本朝三巻

天祿元年庚午(一六三〇)十月任命の別當少僧都定昭より、嘉吉元年辛酉(一四四一)八月に任ぜられたる權僧都維那寛眞に至る三綱(僧正、僧都、律師)補任の記。「續群書類從」巻百〇二の上中下三册、補任部第十四に收めたり。

こうぶくじじむしだい　興福寺々務次第　本朝一巻

天平寶字元年丁酉(一四一七)始めて同寺の別當に任ぜられたる、慈圓以下代々の任命入寂年月等を記して、遂に寛政二年庚戌(一四五〇)の經覺にまで至れる寺務次第なり。

こうぶくじりやくねんだいき　興福寺略年代記　本朝五巻

大和國奈良興福寺に關する年紀の元始より、天正四年丙子(一五七六)に至る一大年記なり。「續群書類從」巻八百五十七上本末、中、下本末の五册、雜部

第百五十七に收めたり。

こうぶごばつかうぶるゐ　公武御八講部類　本朝一巻

康暦二年庚申(一三八〇)安樂院御八講を始として、永享七年乙卯(一四三五)雲龍院、應永十二年乙酉(一四〇五)震筆御八講、同二十一年等持院追善等を記す。「續群書類從」巻七百六十一、釋家部第百五十七に收めたり。

こうぶざつしよ　公武雜書　本朝一巻

此の書は公家武家の御禮次第、官位役職の次第等を記し、德川二代將軍秀忠以下の請來書例等を掲げたるものなり。

こうぶそうたいしきじ　公武奏對式事　本朝一巻

禁裡と幕府との奏對の式例に關する記錄。卽ち元錄より享保に至る朝廷の儀式、敕使、將軍家の上使等の事を記せり。

こうぶだいたいりやくき　公武大體略記　一巻

禁裏、仙院、后宮、親王、執柄家、三家、武家名家、菅家、諸道等の項目に就て頗々の故實由來を記したるもの。長錄二年戊寅(一一九八)三月四日室蔵主年齢六十四」の奥書あり。「群書類從」巻五百〇五、雜部第六十に收めらる。

こうぶたうようふくせい　公武當用服制　本朝一巻

德川時代の冠服の制式を記したるものにして、天子、太上天皇、皇太子、親王、將軍家、武臣、女房、僧侶、樂人、蹴鞠等に分類せり。正德元年辛卯(一七一一)の頃の記錄なるべしと云ふ。

こうぶちらんかう　公武治亂考　本朝三册

公家、武家の古今變遷な考論したるものなり。本朝天下の形勢九變して、武家の代となり、武家の代また五變して德川氏に至る各代の事績を詳論す。其の總論に曰く、神皇正統記に光孝より上つかたは一向上古也萬の例を勘ふるも仁和より下つたかた ぞ申める五十六代清和幼主にて外祖良房攝政す、是外戚專權の始(一變)基經外舅の親によりて陽成を廢し光孝を建しかば天下の權歸於藤氏そのゝち關白を置き或は置ざる代ありしかど藤氏の權ゐのづから日々盛也(二變)六十三代冷泉より關白花山一條三條後一條後朱雀後冷泉凡八代百三年の間は外戚權を專にす(三變)後三條白河兩朝は政出於天子(四變)堀河鳥羽崇德(白河六年鳥羽十三年)近衛(鳥羽十四年)後白河二條六條高倉安德(後白河三十餘年)凡九代九十七年の間は政出於上皇(五變)後鳥羽土御門順德三世凡卅八年の間は鎌倉殿天下兵馬の權を分掌らる(六變)後堀河四條後嵯峨後深草龜山後宇多伏見後伏見後二條花園後醍醐光嚴十二代凡百十二年の間は北條陪臣にて執國命(七變)後醍醐重祚天下朝家に歸する事纔三年(八變)その

のち天下蒙塵尊氏光明をたて、其の主となしてより天下ながく武家の代となる(九變)。

武家は源頼朝幕府を開て父子三代天下兵馬の權を司どれり凡三十三年(一變)平義時承久の亂後天下の權を執るそのゝち七代凡百十二年高時が代に至て滅ぶ(二變)此の時に擯武將軍二代親王將軍四代ありき。後醍醐中興のゝち源尊氏反して天子蒙塵尊氏光明院を北朝の主となしてみづから幕府を開く千孫相繼て十二代におよぶ凡二百卅八年(三變)このうち南北戰爭五十四年胆仁亂後百七年の間天下大に亂る實に七十七年が間武威あるがごとくなれども東國は皆鎌倉に屬せし也)足利殿の末織田家勃興して將軍を廢し挾天子令天下と謀りしかど事未成して其臣光秀に弑せらる(四變)豐臣家其故智を用ひみづから關白となりて天下の權を恣にせしこと凡十五年(四變)その〻ち終に當代の世となる(五變)諸按鎌倉殿天下の權を分たれし事は平清盛武功によりて身を起し遂に外祖の親をもて權勢を專にせしによれり清盛かくありし事も止は上皇の政みだれ下は藤氏累代權を專にせしに倣ひしによれるなりされば王家の衰へし始は文德幼子をもてよつぎとなされしによれりとは存するなり、尊氏天下の權を恣にせられし事も後醍醐中興の政、正しからず天下の武士武家の代をしたひしによれるなり尊氏より下は朝家はたゞ虛器を擁せられしまゝにて天下はまつたく武家の代とはなりたるなり」と。此の書の大體を窺ふべし。按ずるに、本書は、新井君美の「讀史餘論」(十二卷)の原稿なるべし。

こうぶわそうろんき
公武和雙論記　一卷

關東より石川主殿頭、松平下總守兩士、今出川殿へ上使の事並三箇を送る事より、兩公江戸發駕の事、並中山卿昇進の事、後朝廷より御製二首關東へ下る事に至る三十條を記せり。「異本中山下向記」と同物なり。文化十一年甲戌(二四七四)筆者の奥書あり。

こうへんざつろく
公遵雜錄　一卷

著者が主家執役の人々と酬答せし書牘を集めたるもの。凡べて享保(二三七六—二三九六)の頃のに係る。

◎桑名元章は仙臺の儒臣。十右衞門と稱せり。

こうへんさつわひつき
後編雜話筆記　七卷　神田　勝久

諸國雜事、諸將士の雜話等を記載す。著者享保十五年庚戌(二三九〇)「雜話筆記」二十卷を編輯す。本書は其の續編なり。

◎神田勝久の傳記は「合戰高名記」の下にあり。

こうへんしよめいしふ
後編所名集　一卷　小馬　命婦

本書は「江戸近在所名集」に續きて江戸近在の所名を擧げ、各略記を付し、大山より以下相州、東海道の部はいと少し。俳諧發句等を附載せり。桐葉舍秀風の序、一洲の跋あり。

◎鵜海一漁のことは「江戸近在所名集」の下に出でたり。就きて見るべし。

こうへんはしがきぶり
後編はしがきぶり　一卷　建部　涼袋

作文の端書例(自作)を集めたるもの。例へば君に奉る詞、父母に奉る詞、第一いふ詞、子にいふ詞、友どちにいふ詞、佛に奉る詞、神に奉る詞等の如し。著者遐に八代集中の端書を抄集して「はしがきぶり」と號けし故、本書には「後編」の字を冠したるなるべし。安永二年癸巳(二四三三)正月出版せらる。

◎建部涼袋の傳記は「歌文要語」の下に出づ。

こうほうがくかう
燄硝學校　四卷

燄硝使用軍隊の行動技術を說明練習したるものにて、二百二十六條あり、英書中より譯出したるもの。一卷の中に一千八百三十六年(我が天保七年)の印刷に係る燄手學校の事をも收めたるなり。

こうまのみやうぶしふ
小馬命婦集　一卷　小馬　命婦

「たとへつゝ岸の邊に身を捨てゝ、つながぬ舟そのどけかりける」より、「ひとりしてみじかき日をば忘れじと、誰かは我をおもひ出たる」に至る六十餘首を集めたり。「群書類從」卷二百七十二、和歌部第百二十七に收めたり。

こうめいろく
扣鳴錄　二卷　僧　天倪

淨土眞宗の教義に就て、日溪法霖が正定と滅度と

の二益なることを主張せしことを辨明し、折衷編、蹄涔記、窺班錄等の文を會通して、以て暗に智運の徒等が日溪の所說を一益逢解とするを非難したる書なり。明和四年丁亥(二四二七)の作。

◎天倪は眞宗本願寺の僧、日溪法霖の門人にして、豐前平田西淨寺に住せり。著書には本書の外、方便法身應問錄、辨隱方錄各一卷あり。

こうもうくわじゆつろく
紅毛火術錄　卷二卷　鮎川　竹

和蘭砲術に關する說明なり。享保十二年丁未(二三八七)の自序を附す。

こうもうだん
紅毛談　二卷　後藤　光生

和蘭國の地理風俗產物等を略記せり。明和二年乙酉(二四二五)上梓發行す。

◎後藤光生の傳記は「垂加文集」の下にあり。

こうゆうさう
拘幽操　卷一卷　山崎　嘉

唐韓退之の作りて湯武夷齊の事績、文王の心事を發明せる「羑里操」に標章し、且程朱の言を附して、更に其の義を明にしたるものなり。淺見安正の同附錄と併せ見るべし。

◎山崎嘉の傳記は「垂加文集」の下にあり。

こうゆうさうふろく
拘幽操附錄　一卷　淺見　安正

山崎嘉の標章したる「拘幽操」に、更に程朱及び諸儒の說を集錄して、其の義を擴充したるものなり。元祿四年辛未(二三五二)の自跋あり。

◎淺見安正の傳記は「靖獻遺言」の下にあり。

こうらくゑんきじ
後樂園紀事　卷一卷　源　信興

後樂園は江戸小石川にあり。水戸光圀の經營になれる名園なり。光圀將軍に謁を得て庭宅を賜り、此の地を擇み明の歸化人朱舜水、及び築山巧者德大寺某とに謀り、幾多の歲月を費して大成したるものなり。後樂の名は宋の范文正公の「士當先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」の語を取りて附したるものなり。本書は此の園の略記事にして卷末に「大猷公源威公兩距義公之時、經營全成、雖然近來沿革異同、其地理不定、恐後世放失其事、遂有疑惑、仍爲使子孫知之、把筆硯十一於千百也、後樂絕勝何秀筆之所盡哉、元文元年丙辰(二三九六)八月日、後樂園源信興」とあり。

こうらくゑんのき
後樂園記　一卷　坂　昌成

江戸小石川なる名園後樂園の記。「本園の由來等は前項に詳記せり」文政九年丙戌(二四八六)十月、同園內に八幡宮の遷座ありし時、參拜の席に庭苑を作れりとなり。

◎坂昌成は連歌師なり。天保十三年壬寅(二二五二)八月十一日歿す。享年未だ詳ならず。

こうらくだうきつさべん
後樂堂喫茶辨　一卷　小川　可進

嶺元天皇の天和四年甲子(二三四四)より東山天皇の貞永三年丙戌(二三六六)に至る朝廷の恒例、及び臨時參仕の記なり。書名は性質によりて後人の附したるものなり。

こうれいしゆしやうぐわつくわんじやうじんめいちやう
恒例修正月祕請神名帳　卷一卷

正月の守護神大和國の諸神名より、「爲十二月守護」四海道諸神に至る全國二百六十餘座の神名を十二箇月に配して記したるもの。寬政元年己酉(二四四九)藤井貞幹、曾賴岡の手蹟本に依りて寫本せる由を奥書す。「續群書類從」卷六十一、神祇部に收めたり。

こうれいりんじさんしのき
恒例臨時參仕記　卷一卷

嶺元天皇の天和四年甲子(二三四四)より東山天皇の貞永三年丙戌(二三六六)に至る朝廷の恒例、及び臨時參仕の記なり。書名は性質によりて後人の附したるものなり。

こうろいちだへん
紅爐一唾編　一卷　僧　實詮

華嚴宗鳳潭の「偏界紅爐雪」に、空海の諸書及び實詮の「密乘菩提心戒義」の解義を非難せしを、辨破したる書にして、「醫覺心繩生義」に附刻せられたり。享保五年庚子(二三八〇)の作に係る。

◉實詮の傳は「醫覺心繩生義」の下に見るべし。

こうろせつへんだきう
紅爐雪反唾劑　二卷　僧　鳳潭

眞言宗の僧實詮が嘗て「紅爐一唾編」を著して、鳳潭の「偏界紅爐雪」の所論を辨破せしを、更に返駁したるものにして、享保十五年庚戌(二三九〇)四月の著作に係れり。

◉鳳潭は「因明入正理論疏瑞源記」の下に傳す。

ごうんしふ
五雲集　四卷　僧　獨吼

著者の文集にして、「獨吼禪師五雲集」と題す。卷一に七言八句、五言八句。卷二に七言四句。卷三に七言四句、五言四句、四言。卷四に贊、序、跋、銘、祭文を收む。延寶五年丁巳(二三三七)の自序あり。倂者道榮の編錄するところなり。著者獨吼は黃檗宗の僧にして、性獅と號す。

ごうんしふくしんはふ
五雲子腹心法　一卷　雲　統

胸腹病症の診法療方を略說したるもの。假名書短篇なり。五雲子は著者の父なりといへり。天保十四年癸卯(二五〇三)人見元德の寫本により解題す。

ごゑいかかなぜう
御詠歌假名鈔　二卷　小關　泰法

西國札所三十三箇所の觀音詠歌を詳註したるものなり。西國巡禮の由來より、各寺の來歷等をも詳記す。安政四年七月二十日惣冊の忌日に思ひ立ちて同五年戊午(二五一八)四月十七日、大悲之緣日に此の書を作り終れりといふ。著者小關泰法は臨濟宗の僧侶なり。

こえきいつかげんほ
古易一家言補　一卷　新井　祐登

先聖「古易一家言」の遺漏を補逸したるもの。共に發明の說多し。

◉新井祐登の傳は「古易一家言」の下に出す。

こえきさつびやうでん
古易祭病傳　一卷　僧　便道

卜筮によりて病因、病症、治法等を占斷するの法を說きたるもの。天保十四年癸卯(二五〇三)に成る。

こえきたいしやうけいでん
古易大象經傳　十二卷　生田　國秀

「古易大象經」を傳註したるもの。其の師平田篤胤の命によりて、其の說を補述し、其の未發を啓きて五たび草稿を改め、四たび裘葛を易へて始めて卒業せりといふ。天保六年乙未(二四九五)六月の自敍、同五年平田篤胤の序、同七年新田目道蔭の序等あり。

◉生田國秀の傳は「古學二千文」の下にあり。

こえきたいもん
古易對問　一卷　新井　祐登

本書は「古易一家言」の異名なり。解題は同改名の下に於てせり。就きて見るべし。

こえきだん
古易斷　三卷　新井　祐登

周易本文の註解。其の中、上中の二卷は「易學要領」と標して古人の說と自說とを擧げ、下卷は正しく易經を註解したるなり。この書は寶曆九年己卯(二四一九)に成り、安永五年丙申(二四三六)に版刻せられたり。

◉新井祐登の傳は「古易一家言」の下にあり。

ごえきべんらん
五驛便覽　一卷

五海道駄賃付の事、木賃の事、宿人馬御定の事等より、豆州君澤郡河內村御林迄道日長泊御用狀差出候節御觸案、美濃路大垣驛傳廻り道御屆振等に至る道中制規三十條を輯錄したるものなり。

こえきれいづ
古驛鈴圖　一折

諸國の社寺其の他に總藏せる古驛鈴圖十餘箇を圖出して、其の所藏、寸法等を附記せり。

こえきれいづかう
古驛鈴圖考　一卷

古代の驛路鈴、神社鈴等の圖を載せて考證說明したるものなり。

ごゑでんくわんせつ
御繪傳勸說　六卷　眞野　大譽

見眞大師の繪傳を更に詳說したるものなり。今見るところは、明治十三年鬼木洲附錄一册を添へ、凡て七册に發行す。同人の序あり。

こゑのふりわけ
こゑのふりわけ　二卷

我が邦在來の音と、中古外國より傳來せる音との區別を主として記載したるもの。嘉永三年庚戌(二五一〇)四月の作なり。

ごえふしふ
五葉集　二十卷

後冷泉院、後三條院、白河院、堀河院、鳥羽院、五代の御製歌を集めたれば、「五葉集」と稱し、或は「五葉集」と名けたるなり。本書は一に「月次集抄」と稱し、或は「山階集」とも云へり。

こえふるがのねしふ
古葉管根集　七卷　清水　濱臣

古事記、日本書紀、續日本後紀、萬葉集等の長歌を類聚して傍註を加へたるもの。四季、賀、別、旅、物名、戀、哀傷、雜等に分類せり。序文中に「いやしくもふるき歌の跡を見がひ、殘れることの葉をあつめて、後葉和歌集となづけて、わかちてはたまきとせり」とあれども、卷十九以下を散佚して存せず。群書類從(卷百四十七、和歌部第二)に收めたり。

ごえふりやくるじゆせう
古葉略類聚抄　五卷

安永六年丁酉(二四三七)江田世恭の新寫。「古葉略類聚抄」の序中に「古葉略類聚抄と題號ある木をもとめ出て、寫に書寫し侍りぬ。其の抄のやう萬葉一部の歌をわかつこと古今六帖のごとくにして、大凡十二卷ばかりもありぬべきものなれども、年久しくなりて散り失せるにや、今ある本卷のついで八より十二まで、紙なかゝふるに二百ばかりなり」と云ひ、また「此の抄は此の本の外絕て世に傳はらざりけるにや、近き世に萬葉の博士にて代匠記つくられける契沖阿闍梨、その弟子にて萬葉緯あつめたる京の今井似閑、萬葉新註作りける難波の海北若沖、あまねく萬葉の古本あつめられける中にも、此の抄の名は見えず。たゞ賀茂眞淵が作れる萬葉考の中にぞ始て此の抄を引て古葉略葉といへる。されども題號もたがひ、抄のやういひたるにもたがへる事あれば、またしく此の集を見たるにはあらで、おしはかりごとにいひたるやうなり」と云へり。以て本書の由來大概を知るべきなり。

こえふるねじゆ
古葉類聚　五卷　村上　眞澄

此の書はあらゆる古書によりて、我が古言を集錄類聚したるものなり。著作の年月、及び著者村上眞澄の傳記は詳ならず。

ごえふわかしふ
後葉和歌集　十八卷

延久第三の親王「補仁」の「年のうちに春たちくれば一とせに、ふたゝびまたる霞のこゑ」を始めとして、敍百首の和歌を撰集したるもの。四季、賀、別、旅、物名、戀、哀傷、雜等に分類せり。序文中に「いやしくもふるき歌の跡を見がひ、殘れることの葉をあつめて、後葉和歌集となづけて、わかちてはたまきとせり」とあれども、卷十九以下を散佚して存せず。群書類從(卷百四十七、和歌部第二)に收めたり

ごえん
語園　二巻　一條兼良
諸書中より漢土の故事を抄錄して、假字文に譯したるもの。寛永四年丁卯(一六二七)に刊刻す。
◎一條兼冥の傳は「歌林良材集」の下にあり。

ごえんゆうのゐんごじやうのき
後圓融院御譲位記　本一卷
永德二年壬戌(一三八二)四月なる同御譲位の次第を記す。「續群書類從」卷二百七十七、公事部第二十に收めたり。

こおほのきみしふ
小大君集　一卷　小大君
「いかにて起るあしたにいふことを、昨日をこそとけふをことしとより、「ちるをこそあはれとみしか梅の花、ばなやことしは人をしのばむ」に至る百四十餘首を集めたり。「群書類從」卷二百七十四、和歌部第百二十九に收めたり。

こおんゐんりやく
古音韻略　本二卷
五十音と拗音とを擧げて、喉音三行の、いうえを、各別種の假名に書き記せり。文永九年壬申(一九三二)書寫の奥書あれど、或は後世の僞託書なるべしといふ。

こがいしふい
古鎧拾遺　本三卷　新渡戸維民
新古甲冑の故實、及び精粗得失を述べ、且つ其の圖式を示したるものなり。天保十五年甲辰(一二五〇四)撰進吉の序あり。著者新渡戸維民は章卿と字す

こかいだうさいけんき
五海道中細見記　一卷
東海道五十三次、中仙道六十九次、伊勢參宮大和廻り、播州巡り金毘羅道、甲州街道身延山道、奥州道中松前迄、日光山參詣道、奥州白川より會津道、善光寺より新潟道、越後新潟より庄内道、久保田より松前海道に至る驛々旅宿等の事を悉しく記す。宿屋主人の編輯するところなるべし。安政五年戊午(一二五一八)横本小册に出版す。

こかいだうとりしまりしよもつるゐしふ
五街道取締書物類集　本三十八册
幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして文政年度のものにかゝる。

こがうしふ
枯杭集　六卷
本書は圓說に題ひ、かつくい集」として「か」の部に解題せり。

ごがうたんかう
御降誕考　本一卷
德川家康の子女生出逝去の年月を記したるもの。實歷三年癸酉(一二三三)竹溪源義堯といふもの、奥書に、本書は延寶四年丙辰(一二三六)記するところなる由あり。

ごかうぶるゐき
御幸部類記　本一卷
後嵯峨院の寛元四年丙午(一九〇六)永明門院御幸の記、同年賀茂御幸記、後深草院建長三年辛亥(一九一一)閑院內裏に遷幸の記、八幡御幸記、永仁七年己亥(一九五九)新院石清水賀茂に臨幸の記、延慶二年己酉(一九六九)八幡御幸の記、永仁六年戊戌(一九五八)願始記、應安四年辛卯(一三七一)新院北山亭に御幸の記等を輯錄す。「陽龍記」「經後鄉記」「雅後鄉記」「竹林院記」「兼綱公記」等より抄出せるなり。

こかゞみ
小鑑　本二卷
「大的掛樣の事並渡之事」といふ目より、「角板立樣の事」といふ目に至る三十三項、凡て射藝弓術に關する故實を記したるもの。詳に插圖して說明せり。真享二年乙丑(一三四五)田島安右衛門より瀧野次太夫へ宛てたる奥書あり。

こがくえう
古學要　本一卷　本居大平
我が邦古學の要を論述せり。册の中間に書して曰く、「文化六年(一四六九)春のころかく書きつゞれり。かゝる事は、猶いくらも思ひ寄ることあれば、猶このつゞきにも書つぐべし」と。以下いろはの事、五十音の事、其の他の古意古傳說を喚へ、册の終りに「文政十年(一四八七)四月二十八日しるしぬ。本居大平」と書せり。嘉永四年辛亥(一二五一一)

本居豊穎氏の序を附して刊行せるものなり。
◎本居大平は國學者なり。桃園天皇の寶曆六年丙子(一四一六)に生る。初め稻懸氏を稱す、本居宣長翁の門に遊ぶこと數年、遂に其養子となりて本居氏を冒す。仁孝天皇の天保四年癸巳(一四九三)九月十一日に歿せり、享年七十八。著す所、本書の外、玉鉾百首解、八十浦の玉、名草の濱果、已未紀行、和屋紀行、答村田春海書、古記類案、姓氏錄考、家集稻葉集、ありまの道の記等あり。

こがくをしやうごろく
古岳和尚語錄　五卷　僧　古岳
洛客の語錄にして、卷一に筑後州熊耳山定林禪寺語。卷二駿州府龜谿山大林禪寺語。卷三長崎海雲山崇福禪寺語。卷四法語、小佛事。卷五頌古、眞讚、疏、祭文、行狀、跋等を收む。禪法圓機、榮匡等の編するところなり。寛延元年戊辰(一四〇八)白龍の序、及び清國人の序、同二年一丁の跋あり。三册に裁行す。
◎古岳は日峻と諱し大同老人と稱す。肥前佐賀の飯盛に生る。幼にして出家の志あり、年十四始めて斷髮し、宗就天海和尚に依て薙染し、長じて密雲徹師に大戒を受く。夫より漸く諸州に遊歷修行し學德共に成る。寛保二年壬戌(一四〇二)八月晦日、法臘六十歲、世壽七十三にて寂す。

こがくかいてい
古學階梯　本二卷　橋本稻彥
記紀延喜式等の中より、特種の詞を抄集し、五十音順に排列して解釋したるものなり。
◎橋本稻彥の傳は「古今假字づかひ」の下にあり。

こがくさいだんじろん
古學截斷字論　二卷　橿之本北元
俳諧切字に關する古書の說を抄出して、批評したるもの。其の抄出せる所の原書は、芭蕉の「梧一葉」「俳諧有也無也圖」、支考の「古今抄」、濱口竹亭の「なだまき」、應々坊山の「曉山集」、富士谷成元の「俳諧手爾波抄」、春秋庵白雄の「寂栞」、元木阿彌の「俳諧古學選求抄」、又「切字論」といふ。
◎橿之本北元は天保九年戊戌(一四九八)二月十五日歿せり、享年未だ詳ならず。

こがくしえう
古學指要　二卷　伊藤長胤
上卷古學原論より、心就已發說に至る十一條。下卷人物褒貶異同駁より、心法道法論に至る十五條凡て二十六條より成る。蓋し父仁齋の緖論を擴充したるなり。正德四年甲午(一三一四)の自序あり。享保四年己亥(一三七九)出版す。

こがくかいてい
古學階梯　本二卷　橋本稻彥
記紀延喜式等の中より、特種の詞を抄集し、五十音順に排列して解釋したるものなり。
◎橋本稻彥の傳は「古今假字づかひ」の下にあり。

こがくさいだんじろん
古學截斷字論　二卷　橿之本北元
俳諧切字に關する古書の說を抄出して、批評したるもの。其の抄出せる所の原書は、芭蕉の「梧一葉」「俳諧有也無也圖」、支考の「古今抄」、濱口竹亭の「なだまき」、應々坊山の「曉山集」、富士谷成元の「俳諧手爾波抄」、春秋庵白雄の「寂栞」、元木阿彌の「俳諧古學選求抄」、又「切字論」といふ。
◎橿之本北元は天保九年戊戌(一四九八)二月十五日歿せり、享年未だ詳ならず。

こがくしえう
古學指要　二卷　伊藤長胤
上卷古學原論より、心就已發說に至る十一條。下卷人物褒貶異同駁より、心法道法論に至る十五條凡て二十六條より成る。蓋し父仁齋の緖論を擴充したるなり。正德四年甲午(一三一四)の自序あり。享保四年己亥(一三七九)出版す。
◎伊藤長胤の傳記は「韜軒小錄」の下に出づ。

こがくじしふ
古額字集　本二卷
有名なる古額の眞寫なり。其の中には嵯峨清凉寺、信州善光寺、山城八幡宮、南都眞言寺、紀州丹生明神、大極殿、和州大峯、山城八幡宮、南都眞言寺、紀州丹生明神、大極殿、和州大峯、山城愛宕山、清水寺、敕諡大圓禪師の額(以上空海の筆)其の他行成、佐理等の筆に成れるもの、及び筆者の名の知れざるもの等を併せ、凡て四十餘種あり。古名手の筆蹟を窺ふに足るべし。

こがくしんしよ
語學新書　二卷　鶴峰戊申
吾人の言語を、實體、虛體、代名、運體、活用、形容、接續、指示、感動の九品に分ち、てにをはを能主、所生、所與、所役、所寧、呼名、現在、過去、未來の九格に分ち說明す。和蘭文典に參考して編輯したるものなり。一名を「西洋假名必讀」といふ。齋藤拙堂の跋中に、「此の書もと詞の品定めと名けて、九品に九卷、九格に九卷、附錄二卷、すべて二十卷なりしを、さては受業の者、謄寫たやすからねば、同盟相計りて遂に師に請ひて、本書のしげき節して二卷となしつるを、名をもあらためて、語學新書とはせられたるなり」といへり。仁孝天皇の天保二年癸卯(一四九二)の自序、同四年辛巳島田易藩の序、同年小山田與清、橘地山茂樹の跋等ありて、同年出版せらる。
◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

こかくせうせい
孤角小成　本一卷　惠川景之
孤三角法を詳論したる數學書なり。全編漢文にて記す。幾石殿の序あり。嘉永七年甲寅(一二五一四)出版せらる。
◎惠川景之は紀藩の人にして、彌五郎と稱し、正甲と號す。本書の外に、新製乘除豁數表、孤三角捷法解等の著あり。

こがくせうでん
古學小傳　三卷　清宮　秀堅

我が國學の傳來を主張して、各學者の小傳を掲げ、學統、履歷、生卒年月、葬所、墓碑等を參錄し、且故編纂者の序跋中にても其の生平に關係あるものは悉く掲げたり。其の擧ぐる所は源光圀を主として、僧契沖、下河邊長流、以下凡て七十五名を網羅せり。但し本書は安政四年丁巳(一八五七)六月の作なるを、明治十年更に增補して、同十九年、孫立諸家の序を附して出版したるなり。今は同增補によりて解題す。

◎清宮秀堅の傳記は「靈樔略傳」の下に掲げたり。

こがくせんせいしふ
古學先生詩集　二卷　伊藤　維楨

五言律五十五首、五言古四首、七言律八十三首、五言絶六首、七言絶二百五十三首、凡て四百〇一首を收む。男東涯の編輯するところ、「古學先生」は著者の諡號なり。享保元年丙申(一七一六)八月、門人北村可昌の序、及び翌二年二月、東涯の跋を附して發行す。

◎伊藤維楨の傳記は「論語古義」の下に出す。

こがくせんせいぶんしふ
古學先生文集　六卷　伊藤　維楨

第一卷序、紀。第二卷論。第三卷辨、說、讀。第四卷講義。第五卷策問筆記。第六卷雜著等に編次す。男東涯の輯するところ、「古學先生」は著者の私諡なり。享保二年丁酉(一七一七)三月香川修德の跋を附して出版す。

◎伊藤維楨の傳記は「論語古義」の下に出す。

こがくせんせいわかしふ
古學先生和歌集　一卷

著者古學先生(私諡號)の詠歌集。二百數十首を載せたり。卷末に自敍して曰く、「予もとより稽古もなく師傳もなくして、歌よむ事實に目しひの蛇を恐れざるためしなれど、花最月夕、折にふれて心の興を得ずして盲ひ出せる駄めごとなれば、已むことを得ずして、誠に歌の風情にもかなはず、又法度禁忌をも知らざれば、其のことはりに及ばず、唯自らの歌に點を加ふること如何と思ひ侍れども、老後の慰にぜんがため、心にまかせ、よしあしを定めず、點を加へ侍りぬ。古人も自の歌を香ひ自歌合と名付けられしためしも侍れば、くるしがるまじき歟」といへり。時に元祿十六年癸未(一七〇三)二月中旬なり」と。そのや「第六に收めたり。

◎伊藤維楨の傳は「論語古義」の下にあり。

こがくづ
古樂圖　一卷

腰鼓、揩鼓、揭鼓、篳篥、奚琴、簫、笙、横笛、五絃、尺八、琵琶、箜篌、箜篌、方啓等の樂器の圖、及び按摩皇帝破陣樂、蘇合香、皇鷰、秦王破陣樂、打球樂、柳花苑、採花老、異槍、胡飲酒、放鷹樂、入破舞、吐伏舞、神娃篌、異劍、三童頂立、弄玉入馬腹舞、其の他數種の舞樂の繪圖を載せたり。この圖極めて古くして出版す。

◎伊藤維楨の傳記は「論語古義」の下に掲ぐ。

こがくせんせいわかしふ
古學先生和歌集　一卷

著者古學先生(私諡號)の詠歌集。二百數十首を載せたり。卷末に自敍して曰く、「予もとより稽古もなく師傳もなくして、歌よむ事實に目しひの蛇を恐れざるためしなれど、花最月夕、折にふれて心の興を得ずして盲ひ出せる駄めごとなれば、已むことを得ずして、誠に歌の風情にもかなはず、又法度禁忌をも知らざれば、其のことはりに及ばず、唯自らの歌に點を加ふること如何と思ひ侍れども、老後の慰にぜんがため、心にまかせ、よしあしを定めず、點を加へ侍りぬ。古人も自の歌を香ひ自歌合と名付けられしためしも侍れば、くるしがるまじき歟」といへり。時に元祿十六年癸未(一七〇三)二月中旬なり」と。そのや「第六に收めたり。

◎伊藤維楨の傳は「論語古義」の下にあり。

こがくづ
古樂圖　一卷

腰鼓、揩鼓、揭鼓、篳篥、奚琴、簫、笙、横笛、五絃、尺八、琵琶、箜篌、箜篌、方啓等の樂器の圖、及び按摩皇帝破陣樂、蘇合香、皇鷰、秦王破陣樂、打球樂、柳花苑、採花老、異槍、胡飲酒、放鷹樂、入破舞、吐伏舞、神娃篌、異劍、三童頂立、弄玉入馬腹舞、其の他數種の舞樂の繪圖を載せたり。この圖極めて古くして出版す。

◎伊藤維楨の傳記は「論語古義」の下に掲ぐ。

こがくに
古學二千文　二卷　生田　國秀

我が國の開闢以來、天正慶長の後に至る、支、儒、佛、易、曆、兵醫、律、令、歌學、其の他治亂興亡、成敗得失の事績を漢土の千字文に倣ひ押韻を以て四字句に書き綴りたるもの。文字凡て二千四百十六字あり。書中の事實には註を附し、更に來に振假字をつけて讀例を示せり。嘉永二年己酉(一八四九)中秋、出羽秋田賀藤狄琴の序、同年睦月十五日菅原豐秋のおくがきあり。

頗る微とするに足るものあり。

ごがくづ
語學圖彙　本朝　三卷　堀　秀成

開合二義五衆圖、分生略圖、開合清濁略圖等語學に關する事を八十五圖に作りたるものなり。

◎堀秀成の傳は「音韻妙用論」の下にあり。

こがくつうべん
古學通辨　一卷　水原　宗梁

國學の大義を論述したるもの。嘉永二年己酉(一八四九)僧敬彦の序あり、明治十六年男宗芝吏郎跋を附し、同年佐々木弘綱の序をも附し、荻原廣道、佐佐木弘綱、西田直養等の評さへ加へたるまゝに出版せり。

◎水原宗梁は近江の人、商にて、眞弓樓主人と號し、城戸翁の門に遊び國學に勉勵す。男を史郎といふ、東京に住し、詩歌に名あり花雨吟社を興し、筆の花と云ふ雜誌を每月社友に頒てり。

◎生田國秀は、平田篤胤の門人にして、備林(松平右近將監)の藩士なり。名を道滿といふ。通稱小膳、後に萬と改め、華山と號す。天保八年凶荒の時、越後國柏崎の窮民を救はむが爲め、其の徒五人と柏崎の陣屋を襲ひて討死す。同志その首級を匿す。妻女は囚はれたるが、幼子二人を絞殺し、舌を噛みて死す。人其の貞烈を嘗歎せり。明治三十三年同所八坂神社境内に碑を建て、其の德を慕む。之れより先、隣村比角村の石黑久助と云ふ者、日吉神社の境内に、徽証を建て、崇敬せり。本書の外に、三木一鎌、古易大衆經傳、象易編大學階梯外編等あり。

こがくのりとしふ
古學諄辭集　二卷　平田　篤胤

著者の自作、代作、若くは其の校閲添削したる門人の譯辭どもを編輯したるものなりといふ。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

こがくべんぎ
古學辨疑　二卷　富永　潤

古學に基きて、經義を論じたるものなり。上卷に、道、德、仁、義、禮、智、天命帝、鬼神、性、情才、心、志意。下卷に孝悌、忠信恕、中庸、理、儘、恭敬、誠、和、五行、五常、勇強、文質、經權、體用、詩、書、易、春秋、禮、樂等を論じ、漢文にて記す。卷に伊勿二家の得失をも論じたり。天保五年甲午(一八三四)稍個彦博の序、及び野公臺の序、遠村修の跋、藤原有容の跋等あり。

◎富永潤は江州淺井郡國友村の人にして、左仲と稱し、子源と字し、沿浪と號す。幼より學を好みて、父祖の業たる銃工を席とせず、弟に家を譲がしめて、自ら別居し、專ら學問に經營に通じ、徒を集めて教授す。學は漢唐の註說を折衷し、書は經說葉註、鶴肋集、及び古學辨疑等を著せり。明和二年乙酉(一七六五)八月十九日、年三十三にて歿せり。

こがく
五國　本朝　一册

俳諧の集。京、江戸、大阪、丹波、備前等の人集む。延寶年中のものなるべし。

◎定直のことは「卯月まで」の下にあり。

こがこしよのでん
古河御所之傳　本朝　一卷

古河御所は鎌倉御所、或は京都川御所と號す。本書には足利尊氏を祖として輝氏に至れる傳譜なり。「續群書類從」卷百十一、系圖部第六に入れたり。

◎小笠原持長の傳記は「洙泗微塵」の下にあり。

こがさかけ
小笠掛　本朝　一卷　小笠原持長

「伊勢弓馬叢書」の中の一書にして、一家の祕傳十九箇條を記せる三枚餘の册子なり。寛政四年一六〇)八月信濃の奥書あり。

◎小笠原持長の傳記は「大追物集書」の下にあり。

こがさかけゆらい
小笠掛由來　本朝　一卷

「伊勢弓馬叢書」の中の一書にして、小笠懸の由來二十餘箇條を記せる三枚餘の册子なり。寛政四年壬子(一七九二)九月一日伊勢貞春の奥書あり。

こがし
許我志　本朝　三卷　原　善

下總國許我の舊蹟人物墓碑等に關することを、諸書より雜抄したるものなり。文化五年戊辰(一八〇八)の自序に、本書編纂の由來を記せり。曰く、「余未嘗蹈許我、安能詳其地之事哉。而作之志、揚搉其舊墟、記述其故事何也。嘗嘗祖、仕許我土井侯、以故數余與其藩諸君子相交、猶去者、余有嗜古之癖、諸君予亦憐之、語以其所嘗聞見往事、蓋爲余殆無遺焉。余每叩之、不知膝進、輒退錄之。夫根幹既存、枝葉不得不有焉。乃引證諸史、旁搜稗記、以爲之數衍二十又九條、許我非盡于斯、盡余所聞耳」と。考證確實なるを見る。

◎原善の傳記は「洙泗微塵」の下にあり。

ごかしはばらのゐおんうたあはせ
後柏原院御歌合　本朝　一卷　後柏原院

文龜三年癸亥(一五〇三)六月十四日、三十六番歌合なり。題は擣扇夏月、水邊納涼、寄道祖神にて、後柏原院女房、近衛政家、入道親王道永、伏見式部親王、曉風法親王、前關白一條冬良其の他等なり。

◎後柏原院の御傳は「柏玉集」の下にあり。

こがしやうこくき
久我相國記　本朝　一卷　久我　雅實

長治二年乙酉(一七六五)八月、嘉永二年己酉(一八四九)二月の日記にて、公卿敕使に關する自記也。

◎久我雅實の傳記は「雅實公記」の下にあり。

ごかせいれい　伍家制令　一巻

讃岐高松藩に定めたる五人組の法令なり。天明五年乙巳〔一七八五〕これを制定し、同七年儒臣三野密に之れが註解を命じ、版刻して郡邑に頒布したりといふ。

こがねのはしにあそびあうくわをみるき　遊小金井橋観櫻花記　本一巻　佐藤坦

文化三年丙寅〔一八〇六〕の春、林祭酒に從ひて、武州多摩郡なる小金井に觀櫻したる時の漢文記なり。小金井は江戸を距ること數里、覚永中官より櫻樹を植ゑ、元文中更に増植して數千株に至り、櫻花の爲に專ら稱を取るに至れり。

◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文詩」の下に掲ぐ。

こがねのはしはなみのき　小金井橋花見の記　本一巻　辻知篤

享和三年癸亥〔一八〇三〕二月二十四日武藏國小金井に櫻を觀覧したる時の和文記事なり。「輪池叢書」第九に收入す。

◎辻知篤は御徒士忠左衛門なり。輪池屋代弘賢と詞華言葉を以て莫逆の友なりしが、文化二年乙丑〔一八〇五〕死去せる由、弘賢の奥書に見えたり。

こがねのししがりのき　小金野鹿狩之記　本一巻　藤原政修

徳川將軍家、覚政七年の例にならひて嘉永二年己酉〔一八四九〕獵生十八日、下總國小金野に鹿狩を催す。著者其の數に入りて見聞するところを詳細に記述したるものなり。最初に十餘枚の繪圖を掲げ、次に細記あり。同年同月晦日作成の奥書あり。

こかばこ　小革籠　一巻　横井也有

兒女教訓の爲めに物したる物語文なり。附錄を添ふ。文化三年丙寅〔一八〇六〕半洲の序あり。近年發行の俳諧文庫第六編「也有全集」中にも收めたり。

◎横井也有の傳は「鶉衣」の下にあり。

こかはでらえんぎ　粉河寺緣起　本一巻

寶龜元年庚戌〔七七〇〕の草創にかゝる紀伊國那賀郡粉河寺の沿革を記せること名の示すが如し。「續群書類從」巻八百十九、釋家部第百〇四にあり。

こがひがはこほりゑづ　小貝川通畫圖　本一鋪

小貝川は上總國眞壁郡小栗川、五行川の合するところより、下總國豐田郡と、常陸國筑波郡との界を經て、下總國利根川に入る川なり。此の圖は本枝流の狀態を圖し、その經過する地名等を記せり。

ごかんきんいんづしゃう　後漢金印圖章　一巻　田敬之

後漢の金印を模刻し、更に考證を附したるもの。蓋し天明四年甲辰〔一七八四〕筑前國那珂郡志賀島村に於て農夫の耕田中より拾ひ得たる「漢委奴國王」と記せりし小黄金印を圖考したるなり。

ごかんくわんせいづ　後漢官制圖　本一巻　伊藤長胤

表題の示せる如く、彼國後漢時代の官制を圖示したるもの。元祿七年甲戌〔一七〇四〕の作に係る。

◎伊藤長胤の傳記は「輶軒小錄」の下に出づ。

こかんさつさん　古簡雜纂　本十二巻　塙忠寶

圓城寺、興福寺等僧侶の訴狀、後鳥羽院の御文、僧義空、俯遍照、賴朝、泰時、尊氏、義統、信長、家康、謙信、秀吉、文學上人、其の他諸將士の尺牘、下知狀、消息文、眞宗目安抄、犬追物、神社佛閣の諸記錄等を纂輯したるものなり。

◎塙忠寶は保己一の男にして、次郎と稱し、温古堂と號す。世々德川幕府に仕ふ。麿、老中安藤信正の邸に召されて、覚永以前、幕府の外人待遇式例等を取調べたることありしを、時人誤解して流言すらく、忠寶前田夏蔭と共に、信正の命によりて廢帝の典故を按ずるとゝ爲に浪士に暗殺せらる。時に文久三年癸亥〔一八六三〕十二月二十二日、年四十九。著書は本書古簡雜纂の外、南朝編年稿、近世武家名目一覽、近世華押分類、集古文書、現存書目補正考、和學講談所書目、觸目私抄等あり。

ごかんしょうもんしふ　御感證文集　本六巻

盛狀及び起請文等の案文を輯錄せしものにして、

弘治永祿慶長の間德川氏より與へしもの、天正慶長の間豐臣氏より與へしもの、其の他諸家より臣下へ與へしものを網羅ぜり。

ごかんぢやうしょつとめかた　御勘定所勤方　本三冊

御勘定所勤方の部に九條。御代官諸入用拝借等の部に十二條。御城米破船之節吟味の部に七條。諸役所定書並御切米御扶持方渡方等の部に二十一條。諸國御圍米の部に六條。御鷹場の部に二十七條。寺社御修覆金の部に八條。雜の部に五十條。通計百四十一條の書類を收錄す。

ごかんぢやうしょむきおんさだめ　御勘定所向御定　本二冊

御勘定所勤方等の部に御勘定所勤方之儀御書付より、京都町奉行支配御代官地方に付御川向は御勘定奉行可取計旨御書付に至る九條。御代官諸入用拝借等の部に御代官諸入用相渡候定書より、御代官支配所住宅の陣屋普請入用之儀書付に至る十四條。御城米破船之節吟味之部に、御城米破船之節吟味覚書付より、關八州伊豆國駿河國御廻米河岸之道法運賃書付に至る七條。以下諸役所定書並御切米御扶持方渡方等之部に二十二條。諸國御圍米等之部に六條。御鷹場之部に二十八條。寺社御修覆金之部に八條。雜之部に五十條。以上百四十二條を第一冊とし、以下第二冊には、御勘定所掟並御料所諸事取計等之部に十九條。御取箇一件並夫食貸等之部に十九條。檢地條目並知行割新田一件之部に九條。諸國堤川除御普請並濱地代地等之部に十五條。

ごかんぢやうぶぎやうへひきわたし　御勘定奉行へ引渡　本一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。天保十四年癸卯〔一八四三〕のものなり。

こきうしかう　壺丘詩稿　十六巻　生瀬褧

著者の詩集にして、初編二編各八巻より成る。天明元年辛丑〔一七八一〕同三年、同四年、同五年、同八年等の諸家の序跋あり。

◎生瀬褧は佐伯侯の臣子。字を公錦と稱し、扶搖ま た壺丘等の號あり。大内承裕に從ひて漢學を修む。著書は本書の外に、制度考、書籍考等あり。天明六年丙午〔一七八六〕五十七歳にて歿す。

こきうぞくき　御九族記　本九巻　半岡資模

德川氏九族の記にして、享祿四年辛卯〔一五三一〕より、覚保三年癸亥〔一六四三〕に至る二百十餘年間に於ける、誕生、元服、官位、嫁娶、隱居、家督、薨逝等の大概を記したるもの。覚保三年癸亥〔一六四三〕の自序あり。九巻五册に寫傳す。內閣文庫に特別書として所藏ぜり。

◎半岡資模の傳は「天明五年遠忌錄」の下にあり。

こきかう　古器考　本一巻　賀茂眞淵

以上六十二條。通計二百四條の書付等を類聚したるものなり。年代は覚文享保間のものたり。

ごかんぢやうぶぎやうへひきわたし　御勘定奉行へ引渡　本一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。天保十四年癸卯〔一八四三〕のものなり。

こきうしかう　壺丘詩稿　十六巻　生瀬褧

著者の詩集にして初編二編各八巻より成る。天明元年辛丑〔一七八一〕同三年、同四年、同五年、同八年等の諸家の序跋あり。

◎生瀬褧は佐伯侯の臣子。字を公錦と稱し、扶搖ま た壺丘等の號あり。大内承裕に從ひて漢學を修む。著書は本書の外に、制度考、書籍考等あり。天明六年丙午〔一七八六〕五十七歳にて歿す。

こきうぞくき　御九族記　本九巻　半岡資模

德川氏九族の記にして、享祿四年辛卯〔一五三一〕より、覚保三年癸亥〔一六四三〕に至る二百十餘年間に於ける、誕生、元服、官位、嫁娶、隱居、家督、薨逝等の大概を記したるもの。覚保三年癸亥〔一六四三〕の自序あり。九巻五册に寫傳す。內閣文庫に特別書として所藏ぜり。

◎半岡資模の傳は「天明五年遠忌錄」の下にあり。

こきかう　古器考　本一巻　賀茂眞淵

几案盤盥其の他の飲食古器を諸書に徵して考證說明したるもの。毛貪、兩面錦、二色旋代、就文考の四考を附錄とせり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に出づ。

こきせうよく　古義抄翼　本四巻　伊藤善韶

祖父伊藤仁齋の「論語古義」を抄譯したるもの。父東涯の初學晩生の爲めに作り初めたるなれば、善韶繼ぎて大成せるなり。全編假名交文にて記す。天明六年丙午〔一七八六〕十二月の自序あり、四巻四册に作る。

◎伊藤善韶の傳記は「古義堂遺書總目紘釋」の下にあり。

こきだういしよそうもくじよしゃく　古義堂遺書總目紘釋　一巻　伊藤善韶

古義堂伊藤仁齋、及び男東涯の著述書目なり。各書につき著作の由來、及び其の年代等を附記せり。卷尾に右父祖の著す所の書既に刻して世に行ふもの、未だ刻せずして同志に傳寫するもの、未だ全書を成さずして校定讀正を待つもの、及び抄錄のもの、輯補のものとも悉く列擧したる由を云ひ、最後に仁齋の年譜を掲げたり。明和六年己丑〔一七六九〕五月の自序あり。安永三年甲午〔一七七四〕出版。

◎伊東善韶は、東涯の長子にして、東所と號し忠藏と稱す。家學を襲ぎ京師の儒者として有名なり。著書には古義抄翼、中庸發揮抄、古學十論、本實雜論、翼詩解詩名物、操觚字訣、訣林、訣原、助字考小解、

四聲譜辨、集帖姓名、修成先生詩集、修成先生文集等あり。文化元年甲子(一八〇四)七月二十九日、七十七にて歿す。私諡して修成先生と稱す。

ごきていもんだふ
御規定問答 寫一卷

元文以下文化年代に至る法令に就き、諸國諸種の問答を記載したるもの。服忌之儀に付御達書五通りより、久離は目上より目下の事、兩親許よりは勘當と唱候儀にも有之哉、武家にても勘當と申付候哉、義絶或は通路不致之唱は同盟か親始諸親類不殘久離屆に目下之者も簡候哉之事に至る、凡て七十六條を收む。

ごきでんにようごうたあはせ
弘徽殿女御歌合 寫一卷

天喜四年丙申(一〇五六)の催に係る同歌合なり。

ごきでんにようごじふばんうたあはせ
弘徽殿女御十番歌合 寫一卷

長久二年辛巳(一〇四一)二月、大和守藤原義忠朝臣の判にかゝる、十番歌合なり。

ごきないさんぶつづゑ
五畿內產物圖會 五卷 大原 東野

五畿內各地の產物名品を圖出し、其の上に古今人の詩歌名句一二首づつを揭げて、最も風雅に編輯せり。畫は著者自筆の彩色畫にして、原書紙に刷出す。卷一を攝津、卷二を和泉、卷三を河內、卷四を大和、卷五を山城の部とす。文化七年庚午(一八一〇)勉亭主人(宮小路正三位刑部卿貞恒)の序、同八年著者の自序あり。同十年發行す。

◎大原東野の傳は「大日本名產圖繪」の下にあり。

ごきないし
五畿內志 六十卷 並河 永

「日本輿地通志」中の畿內部なり。「日本輿地通志」は、並河永の友、關祖衡の二人が、永に屬して其の後を繼がしむるものなるが、永しきも、永に屬して其の後を繼がしむるものなるが、永また志を遂げずして畿內のみにして止みたるものなり。享保十九年甲寅(一七三四)並河永自撰の上書あり、本書の由來を詳述す。第一卷より十卷まで第十一卷より二十六卷までで大和國の部、第二十七卷より四十三卷までで河內國の部、第四十四卷より四十八卷までで和泉國の部、第四十九卷より六十卷までで攝津國の部とせり。六十卷十冊に版行す。

◎並河永の傳記は「河內志」の下に揭げたり。

ごきないづ
五畿內圖 寫一鋪

五畿內全州を詳圖し、各國郡村城下、給所、海道筋、池川、寺社、運貨等までを記し、又其境界據歷、丹波、近江、紀伊の國邊までを記せり。

ごきやういぶん
古京遺文 一卷 狩谷 望之

南部以前の法隆寺如意輪觀音菩薩造像記より道澄寺鐘銘に至る造像記、碑銘、墓誌、鐘銘等凡て三十餘編を集めたるもの。文政元年戊寅(一八一八)九月二十四日の同家歌合なり。自序を載す。

◎狩谷望之は字を雲卿といひ、掖齋また蠖翁と號せり。其の居室に扁して、常閑書院、また實事求是書屋といふ。夙に和漢の經史律令を研究し、博覽強識最も考證に長ず。和名類聚抄箋註、轉註說、日本靈異記考證、扶桑略記校誤、聖德法王帝說證註、度量權衡考等を著す。天保六年乙未(一八三五)閏七月四日、享年六十一にて歿す。下谷天龍寺に葬られたり。

ごきやうがへりさぼはなし
古鄉歸江戶噺 六卷

卷の一は武藏國の古事を記し、新橋より南品川に至る町を擧ぐ、凡て八項。卷の二は神田明神階り明達法印の事より、王子村金輪寺の祭に至る十八項。卷の三に小石川傳通院より、東海寺階り三僧の事に至る二十三項。卷の四に芝東禪寺より、日比谷稻荷に至る十七項。卷の五に淺草聞覺堂より、誓願寺に至る十二項。卷の六に吉原傾城町より、護ヶ岡に至る十二項。本書は他邦人がたま〳〵江戶に來りて名所を遊覽し、故鄉に歸る時父母近隣の人等に噺し聞かせんために作りたるものなりといふ。延享二年乙丑(一七四五)江戶に於て發行したるものにて六卷八冊に作れり。自序自跋あれど氏名を記さず。

ごきやうごくけうたあはせ
後京極家歌合 寫一卷

建久元年庚戌(一一九〇)九月二十四日の同家歌合なり。

ごきやうごくせつしやうき
後京極攝政記 寫一卷 藤原 良經

正治二年庚申(一二〇〇)十二月十二日以下同三年四月八日に至る日記なり。永享十二年庚申(一四二九)寫本の奧書あり。

◎藤原良經の傳記は「殿記」の下にあり。

ごきやうごくどのうたのはん
後京極殿歌判 寫一卷

建仁元年辛酉(一二〇一)千五百番歌合にして、後京極殿の判に係る。今見るところは其の中の一册にて、四百五十一番より、六百番までを收めたり。

ごきやうごくどのおんうたあはせ
御京極殿御歌合 一卷 藤原 良經

建久九年戊午(一一九八)仲夏釋阿(後成卿)に贈りて判詞を乞ひし自歌合百番あり。末に「結びおく言葉の露のいかなれば、きのみは玉の聲ゆらくらほ」といふ判者の歌をも添へたり。「群書類從」卷二百十九、和歌部第七十四に收めらる。

◎藤原良經の傳記は「殿記」の下にあり。

ごきやうしうめう
非經業妙 四卷 船橋 元美

關春の奧妙を說明したるもの。古今の妙手を輯錄し、自家の實驗、試設等を擧げて詳を悉す。卷一に生、死、黠の部を、卷二に卸、攻の部を、卷三に鏡、追落、夾、縛、斷、征の部等を論じ、卷四を附錄とす。屬無盧五百二十あり。文化八年辛未(一八一一)の自序あり。著者船橋元美は江戶の非家にして、蜀柯堂と號す。今其の詳傳を得ず。

ごきよかう
湖魚考 寫一卷 小林 義兄

近江國琵琶湖中の魚介類に關する考說を載せたるものにして、文化三年丙寅(一八〇六)に成れり。

ごきよくしふ
五玉集 寫一卷 僧 頓阿

本書は別名「句題百首」といへる題下に解題せり。

ごきよせいしや
湖魚生寫 寫一卷 渡邊 奎輔

近江琵琶湖なる、あらゆる魚類、凡そ五十七種を生寫したるもの。此の書著者の年代を記されど「淡海魚譜」の卷尾に「湖魚生寫」目錄を附載するものに同じければ、今、斷じて同人の作となす。

◎渡邊奎輔のことは「淡海魚譜」の下にあり。

ごぎよふ
湖魚譜 寫一卷

近江國琵琶湖中に產する名魚の形狀等を詳說したるものなり。著者年代共に詳ならず。

ごきりこせんく
きりこ千句 一册 野々口立圃

此の書は著者が俳諧千句の集なり。編綴の年月等は詳ならず。

◎野々口立圃の傳記は「なるな源氏」の下にあり。

ごきりく
御記錄 寫一卷

諸家の記錄によりて、新生小兒剃髮事、五十日、百日、眞菜始、始喰前物、垂髮事、髮流付着綿、深曾幾事、着袴以前着用物事等を類記す。

ごきんあいがせう
古今榮雅抄 二十卷 飛鳥井雅親

本書は古今和歌集の註釋書なり。榮雅は著者の入道の號なり故に名とす。本書は一に「古今祕蜜抄」とも云へり。

◎飛鳥井雅親の傳記は「亞槐和歌集」の下にあり。

ごきんきりかみくでん
古今切紙口傳 寫一卷

古今和歌集の口傳。三個の大事、三人の翁の人、あうんのこと、主客の事、祕書二十五首の事、眞名序の事、飛鳥井家說の事等を記せり。文明十八年丙午(一四八六)の奧書あり。

ごきんくでんせう
古今口傳抄 寫一卷

古今和歌集につき、三重三木並三鳥、四重七首の祕歌、五重七箇之大事、六重古今の二字、撰者の口傳、七重一首の祕歌等を說明したるものなり。此の一卷二條家深祕の書たる趣、前權大納言藤原朝臣の奧書にあり。

ごきんくんてんせう
古今訓點抄 寫一卷 河崎 延明

古今和歌集中、特殊の訓法あるものを抄出して、片假名と眞名とにて記し、音の清濁、調の平上去等を示したるもの。嘉元三年乙巳(一九六五)正月二十九日訓説を受け畢る由、筆記者延明の奥書あり。著者河崎延明は外宮權禰宜なり。

こきんけうろく
胡琴教錄 ㊀二卷

琵琶の傳授に關するもの。卷上には教學琵琶、取上撥差柱、撥音、諸調子品、十二律調、樂曲備馬樂、師傳相承其の他等にて十五條。卷下には琵琶彈時の用意、嘴所作、樂屋琵琶、琵琶資物、琵琶名所其の他ともに二十四條。凡て三十九條あり。「群書類從」卷三百四十四、管絃部第二にも收めたり。

こきんけつみやくせう
古今血脈抄 ㊀四册 僧 堯惠

古今和歌集の註釋書なり。卷首の「古今和歌集聞書」と題して、文明三年辛卯(一四七一)正月二十八日の開講より、同七月二十五日功成の由しるし記せり。本書は最初に題號の事を述べたる外は、多く他の事を云はず、本文の讀み方註釋を主とせり。延德四年壬子(一四九二)十月二十六日、著者の奥書に「當流二條家玄淵之義也」とあり。

◎堯惠は堯孝法印の門に入りて和歌を學び、此の道に通じて、古今傳授に至れり。著書は本書の外に「古今抄延五記」二十卷あり。正德頃の人なり。

こきんさんてうきりがみでんじゆ
古今三鳥剪紙傳授 ㊀一卷

一條 兼良

古今和歌集の中なる三木、三鳥の祕傳を解說したるものなり。

◎一條兼良の傳記は「歌林良材集」の下にあり。

こきんしやう
古錦繡譜 ㊀一卷

緞子、金襴、銀襴、間道紗金、印金風通海氣等の地合模樣を委しく記したるものにして、又た其の價をも附し、卷末には江田世榮の「印金考」あり。

こきんしつちう
古今集註 ㊀二十卷

古今和歌集の中の語句を抄出して、簡略に解釋註したるものなり。應永三十年癸卯(一四二三)等寫本の奥書あり。二册に寫傳す。

こきんしふ
古今集 二十卷

本書は「古今和歌集」といふ名下に於て解題せり。

こきんしふおほでんじゆ
古今集大傳授 ㊀一卷 東 常緣

古今和歌集中なる三島、三木、三草を「三箇祕傳」と稱して詳しく說明したるもの。末に「右古今集大傳以二條家當嫡流儀者、以三神器、可應密之外者、不可有口授者也。東下野守常緣在判宗祇叟」とあり。

◎東常緣は美濃の人。歌人として知らる。下野守任ぜられ、足利幕府に仕ふ。依て野州と稱す。夙に和歌を善くし詠するもの多し。文明三年辛卯(一四七一)三月、古今和歌傳を宗祇に授く。蓋し古今傳授こゝに始る。又嘗て准后藤原政家、右大臣藤原公敦、將軍足利義尚等に歌道を授けたることあり。著書は本書の外に古今天眞獨期之卷、古今傳授切紙口訣、東野州消息及び歌集等あり。

こきんしふさくしや
古今集作者 ㊀一卷

古今和歌集の作者目錄なり。各小傳を記す。下野守東常緣の奥書、文和二年癸巳(一三五三)三月十八日頓阿の奥書、嘉吉三年癸亥(一四四三)十二月二十七日和歌所老掃法印奥書、道遙の奥書等あり。

こきんしふじよかう
古今集序注 二卷 僧 顯昭

古今和歌集なる眞名の序を註釋したるもの。壽永二年癸卯(一一八三)極月中旬の作なり。「群書類從」卷二百八十六、和歌部第百四十一雜六に收む。

◎顯昭の傳記は「佛本朝臣人麿勘文」の下にあり。

こきんしふじよへうかう
古今集序表考 ㊀一卷 賀茂 眞淵

古今和歌集の序の國文の分と、漢文の分とを比考し、更に國文の方を解釋したるものなり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

こきんしふせいぎ
古今集正義 二十卷 香川 景樹

古今集の註解。遠鏡、餘材抄其の他の註釋の是非も論徵して微細に說論せり。其の總論の末に曰く「前略、當初より疏遠註解數十家に及び、まゝ或は思ひを重ね構きを究めざるに非ずと雖も、其の旨とある意を知ることなければ、靴を隔つる痒のもとかしみを免れざるのみならず、我を被くの誤りも多からん。已れ少きより此の集を喜みて讀歌ること年久しく、遂に紀氏の神髓ちはひて、たまたま其の微志のある所を見る事あるに際び、おほけなくも大御國の大御國たる。萬古の始めを認め得て、大和歌の大和歌ならひ千歲の惑ひを解くに似たりと雖も、尚後世の非議あらむを恐る〳〵のみ。希くは世の識者我が過を補ひて深き悔ならしめば不朽の幸ならんと云ふ。天保三年壬辰(一八四二)九月十五日、正位下行長門介平朝臣景樹」とあり。

◎香川景樹の傳は「桂園一枝」の下にあり。

こきんしふでんじゆ
古今集傳授 一卷 今川 了俊

古今和歌集の傳授に關するもの。著者の別著「言塵集」の中より摘出して別册としたるなり。

◎今川了俊は「今川壁書」の下に傳す。

こきんしふでうもうせう
古今集當蒙抄 二十卷 一條 兼良

古今和歌集の中、假名序の詞、並に卷十九、卷二十の所々、其の外卷々の解にして、他註に遺れるものども詳しく記したるもの。全編通じての解、また評にはあらず。文明八年丙申(一四七六)六月中、著者の書寫するところ。「群書類從」卷二百八十七、和歌部第百四十二雜七に入れたり。

◎一條兼良の傳記は「歌林良材集」の下に出せり。

こきんしふとほかゞみ
古今集遠鏡 六卷 本居 宣長

「古今和歌集」を倭譯したるもの。諸家の說をも是非取捨せり。首に「雲のゐる遠き雁がねいにしへをみれのみ、うつせばこゝにみれのげ、此の意を說明敷衍して、「此の集は世々に物よく知れりし人々の註釋どもしもあらざなるに、今更さる業は如何なれば、といふに、彼の註釋といふすぢは、例へば最と遙かなる高き山の椙どもの、有りとばかりほのかに見ゆれど、其の木どもに墨白も分かぬを、其の山近き里人の、明暮のつま木の傳りにも能く見知れるに、さしてかれはと問ひたらむに、何の木、くれの木、もとだちほしじかか、椙のあるやうはかくなむ、とやうに語り聞かせたらむが如し。さるはいかによく知りて、いかにつぶさに物らざめるを、世に遠めがれとかいふなる物のあるして、うつし見るには、加何に遠きも、あさましきまで、只こゝもとにうつりき、下葉の色の濃き淡きまで、軒近き庭の植木に、こゝなきけぢめもあらざるばかりに見ゆるにあらずや。今此の遠き代の言の葉の、くれなゐ深き心ばへを、やすくちかく手染の色にうつして見するも、專ら此のめがれのたとひにかなへらむ物をや」云々と云へり。其の用意を見るべし。光格天皇の寛政九年丁巳(一七九七)著者の書寫するところ。「群書類從」卷二百八十七、和歌部第百四十二雜七に入れたり。

◎一條兼良の傳記は「古非記傳」の下にあり。

こきんしふとをみびさしらずかう
古今集讀人不知考 ㊀一卷

書名の示す如く「古今和歌集」中なる「讀人不知」に就きて考究したるものなり。春上に二十四、春下に十八、夏十二、秋上三十七、秋下十六、冬十、賀十一、離別九、羇旅二、物名八、戀一に七十一、戀二に十四、戀三に廿五、戀四に四十、戀五に四十一、哀傷五、雜上三十二、雜下三十三、旋頭歌三、俳諧三十、大哥所御歌十七、東哥十三等の讀人を考定せり。末に「此一帖はじめて撰出者也、努々他見あるべからざる由申候。永正六年(一五〇九)三月日法印宗碩」とあり。「續群書類從」卷四百五十三、和歌部第八十六に出版す。

◎本居宣長の傳記は「古非記傳」の下にあり。

入にあり。

こきんしふわかじよじぶんるゐ　古今集和歌助辭分類　二巻　村上　織部

助辭とは、てにを波、といふ事の借字にて、てにをは、とは語の意を成らしむる詞の、千種萬別を總稱したるものなりとて、普通に謂はゆる助辭の外、發語の辭、延約音の辭等をも、五十音表の列順に列擧せり。明和六年己丑(一七四九)の著なり。

◎村上織部のことは「紫語紗註」の下にあり。

こきんじよちう　古今序註　十巻　僧　了譽

此の書は「古今和歌集」なる組貫之の假名序を詳細に註解したるものなり。後小松天皇の應永十三年丙戌(一四〇六)仲秋、著者了譽が六十六歳の時著せる由を記せり。

◎了譽の傳記は「釋淨土二藏義」の下にあり。

こきんせいづ　古金正圖　寫一巻　白虎洞主

古金の圖を掲げ、更に二百七十六箇の古金目錄を列擧す。寛政四年壬子(一七九二)六月の奥書に、「右載る所の古金數箇は、部下一家戸の藏貯するところなり。河合政之一日其の形狀及び數員を寫すものを持し來て余に示す。卷を展べ一覽するに、昆陽子の金銀譜中に載せざるもの若干なれば、則ち其の目錄及び昆陽子の書に載せざる所のものを贈す」云々とあり。

こきんせうえんごき　古今抄延五記　二十巻　僧　堯惠

古今和歌集の註解。「延五記」と名けたるは、原本延暦五年の作なるによれり。永錄八年乙丑(一二二五)二月、堯惠自筆の書により校合したる由奥書あり。

◎堯惠の傳記は「古今血脈抄」の下にあり。

こきんせん　古今選　三巻　本居　宣長

諸歌集より撰出したる歌集なり。文化五年戊辰(一八〇四)村田春樹出版の由を記して序文とせり。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下にあり。

こきんせんくわがゞみ　古金泉貨鑑　二十巻

和漢歷代の錢を列擧し、寸分、重量、鑄出年月、等を詳記したるものなり。著作出版の年代詳ならず。

こきんぞうせう　古今增抄　寫二十巻

古今和歌集を註釋したるもの。著者未詳。

一條禪閤の抄、堯惠の聞書、宗祇の註等を以て最も詳細に增註したるものなり。

こきんつう　古今通　寫二十巻　本居　宣長

古今和歌集の註解。數多の諸說に關係せず、特殊の見解を以て說明せり。

◎五井純祐の傳記は「源語詁」の下に出づ。

こきんでんじゆあうひ　古今傳授奥祕　寫一巻

古今傳授に關する祕事を記したるもの。紀貫之より當門定家に傳へ來りたるものなりといふ。卷端に「二條家古今傳授目錄」と記して、古今眞號之奥祕口訣、大和歌眞號口訣、八雲神詠反歌口決、六種之儀甚深口傳、六人歌仙勝劣極祕口訣、天皇御即位古今御傳授之大祕口傳、假字序總體口訣、歌道者王道王道者神道之口訣、以上八箇の大事を古今傳授とし、更に附屬として追加傳三條、雜之傳二條を揭げたり。こは元祿年中、學頭藤原常樹を以て口授せる由を記す。

こきんでんじゆきりかみくけつ　古今傳授切紙口訣　寫一巻　東　常緣

此の書は古今和歌集の傳授につき、三箇の大事、四箇の祕事、十八通の切紙を纂めて一巻の口傳としたるものなり。

◎東常緣の傳記は「古今集大傳授」の下にあり。

こきんてんしんぞくらうのまき　古今天眞獨朗之卷　寫二巻　東　常緣

上卷に御賀玉の事、要戸に削り花、賀和名草の三大事、百千鳥、呼子鳥、稻負鳥の三鳥の事、及び美多野の翁の大事等を揭げ。下卷に卷頭の大事、戀卷頭軸の大事、蝉丸之歌三種の事、日神の御歌の大事、大

歌所御歌の大事、卷軸の歌の大事等を詳記し、延寶九年(天和元年)辛酉(一六八一)風觀辨長雅の奥書あり。

◎東常緣の傳記は「古今集大傳授」の下にあり。

こきんはいかいしふ　古今俳諧集　一巻　獨　谷　子

右今諸家の俳諧を集めたるものなり。享保十七年壬子(一七三二)九月編成す。

こきんひでんせう　古今祕傳抄　寫二巻

「古今和歌集」の名義、由來、其の他の祕訣と稱するものを擧げて、佛說に附會せる俗書なり。藤原俊成以來代々相承の祕傳書なりといふ。元享三年癸亥(一三二三)冷泉中納言藤原爲相の奥書、その他の傳寫奥書あり。

こきんひみつせう　古今祕密抄　二十巻　飛鳥井雅親

此の書は本名「古今葉雅抄」の下に解題したり。

こきんよさいせう　古今餘材抄　寫三十巻　僧　契沖

「古今和歌集」を詳解細釋したるもの。著者嘗て「萬葉代匠記」を著し、數多の珍書を集め廣く參考したるに、尚其の材料の餘れるを、工匠の家を作りて材木の餘りあるにたとへ、「萬葉代匠記」に參考應用したる材料の餘れるを利用して、本書を成せる意より、殊に「餘材抄」とは名けたるなり。

◎契沖の傳記は「萬葉代匠記」の下に掲ぐ。

こきんわかくわんぢやうき　古今和歌灌頂部　寫一巻　津守　國夏

「古今和歌集」の中、春十一首、夏七首、秋十一首、冬一首、賀二首、離別四首、物名二首、戀三十四首、哀傷三首、雜十八首、旋頭一首、俳諧歌十三首、大歌所御歌八首、短歌部六首、詞三、人名三等を詳釋したるものなり。

◎津守國夏は攝津國住吉の祭主右大辨吉祥の裔にして、左近將監從四位下國冬の子なり。國夏從五位下に敍せられ、神主の職を襲ぎて攝津守となる。北條高時を討つ時、敕命を受けて平定な新り、高時の滅後從三位に進められる。正平七年壬辰(一三五二)車駕還京の途、住吉に至り、國夏の家に御すること十八日に及び、正三位に進められる。後幾もなく、六十五歳にて薨ぜり。

こきんわかしふ　古今和歌集　二十巻　紀　貫之

萬葉集につける歌集を面かも敕撰の第一なり。卷の一春歌上、卷の二春歌下、卷の三夏歌、卷の四秋歌上、卷の五秋歌下、卷の六冬歌、卷の七賀歌、卷の八離別歌、卷の九羇旅歌、卷の十物名歌、卷の十一戀歌一、卷の十二戀歌二、卷の十三戀歌三、卷の十四戀歌四、卷の十五戀歌五、卷の十六哀傷歌、卷の十七雜歌上、卷の十八雜歌下、卷の十九雜體、卷の二十大歌所御歌等に分ち、凡て一千一百餘首を收む。醍醐天皇の延喜五年乙丑(一五六五)御書所預紀貫之、大內記紀友則、前甲斐目凡河內躬恒、右衛門府生壬生忠岑等が敕を奉じて編輯するところなり。紀貫之に序して和歌の語華、歌人の標榜等を論じ紀浪望漢文の序を附す。當し貫之の和文を漢譯したるものなり。本書は後世和歌者流の金科玉條として囃され、專門家には隨一の資として研究せらる。從て註解評論の書頗る多く又「古今集傳授」といふことさへあり。基俊、俊成、二條爲世、頓阿、經賢、孝尊、堯惠、堯孝、東野州、宗祇、實隆、公條、實澄、細川幽齋等の系統たり。

註釋は慶雲の「顯註密勘」八卷、飛鳥井雅親の「古今和歌集兩序鄙言」二卷、堯惠の「古今抄延五記」二十一卷、榮雅抄」二十卷、堯惠の「古今集童蒙抄」一册、契沖阿闍梨の「古今餘材抄」三十卷、賀茂眞淵の「古今集打聞」二十卷、岡「古今集講義」二卷、本居宣長の「古今集遠鏡」六卷、山崎美成の「頭書古今集遠鏡」八册、白井固の「古今集遠鏡補正」二册、香川景樹の「古今集正義」二十卷、岸本由豆流增註の「古今和歌集標註」四册、村田春樹補考の「冠註古今和歌集」二册、尾崎雅嘉の「古今集鄙言」六卷、宗祇の「古今和歌抄」「古今和歌集深祕抄」六卷、五井純祐の「古今通」二十卷、菊地春林の「古今集眞名字解」四卷、尾崎雅嘉の「古今和歌集兩序鄙言」二卷、著者未詳の「古今集秘歌」、「古今和歌集私記」「群書類從」中の「古今集歌人不知考」一卷、今川了俊の「古今集傳授」一卷、大森盛顯の「古今和歌集一首撰」「古今切紙口傳」「東常緣の「古今傳授切紙口訣」「同一古今天眞獨朗之卷」宗光齋の「古今和歌集傳授切紙」、著者未詳の「古今和歌集傳授」一卷「古今和歌集六種の祕傳」一卷等あり。又

本書の類題を集めたるもに、松井幸隆の「古今和歌集類題」二巻、作者未詳の「古今和集類礎」五巻等あり。尚註釋講義に關して近年の刊行に係るもの多し。

◎紀貫之の傳は「紀貫之集」の下にあり。

こきんわかしふいつしゆせん
古今和歌集一首撰　一巻　大森　盛顯

古今和歌集の中より、讀人の名を記し、歌一人に一首づつ凡て一百三十首(即ち一百三十人の)を拔き出でたるもの。兒女の暗誦に便りせんとて作れりといふ。嘉永五年壬子(一八五二)睦月、在原正高の序あり。

こきんわかしふうわさき
古今和歌集打聽　二十巻　賀茂　眞淵

古今和歌集の講說を筆記したるもの。廣く古來の諸註を參考比較して取捨するもの多し。契沖の「古今餘材抄」等をも辨難するところ少からず。本書は某女生の筆記したるものに、自己の考をも加へて上田秋成の出版したるものなり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下にあり。

こきんわかしふかうぎ
古今和歌集講義　二冊　賀茂　眞淵

題名の表せる如く「古今和歌集」を一首毎に講義したるものなり。春の部津の里人橘の經亮が後序あり。講義の年月詳ならず。明治二十六年癸巳(二五二六)活刷に託して行はる。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に出づ。

こきんわかしふき
古今和歌集私記　一冊　二冊

古今和歌集に詳細なる頭註を加へたるもの。著者年代共に詳ならず。

こきんわかしふしんぴせう
古今和歌集深祕抄　六巻　宗祇

古今和歌集の註釋書「古今和歌集抄」の別名なり同書の下に解題す。

こきんわかしふせう
古今和歌集鈔　六巻　宗祇

古今和歌集の註解。卷首に「古今和歌集兩度聞書」と記せるは著者が東野州の講義を筆記したるものなればなり。文明四年壬辰(一四七二)東常縁の奥書あり。曰く「傳授之後、宗祇庵主書三此一帖、以被々加筆加削者也。門弟隨一愚先見。常緣所存少々加筆加削者也。門弟隨一愚先有之、仍爲後證、又加此詞耳」と。跋あり。萬治二年己亥(一六五九)七月出版せらる。

◎宗祇の傳は「新蒐玖波集」の下に出す。

こきんわかしふでんきよがき
古今和歌集傳聞書　一冊　三巻

古今和歌集の講義聞書なり。最初貫之の序を講じ、次に編者の系譜を擧げ、集に入りて各首を略解したるものなり。慶長十五年庚戌(一六一〇)玄旨法印藤孝入道の傳ふるところなりといふ。

こきんわかしふでんじゆきりかみ
古今和歌集傳授切紙　一冊　一巻　清原　宣賢

三木の事、三鳥の事等より、伊勢物語の七大事なる呼子鳥、都鳥、住吉行幸、鶺鴒、芥川、此の他の祕傳なり。元祿十年丁丑(一七〇三)の奥書あり。

◎清原宣賢は環翠軒宗允、又船橋宗允と署名せり。京都の人、和漢の學に通じ、儒を以て朝に仕へ、歳人の直講となり、侍從に任じ、遂に昇殿を許さる。著書には神代卷抄、職原抄私記、式目抄、同診解、四書抄、論語集注書奥書、伊勢物語惟清抄等あり。享祿二年剃髮して宗允と法號し、天文十九年庚戌(一五一〇)七十六にて歿す。

こきんわかしふひでん
古今和歌集祕傳　一冊　一巻

歌道に關する故事慣例を評說したるもの。永仁五年丁酉(一九五七)の奥書に「以上古今大事悉く傳之、和歌に心ざし淺からん人には、敢て傳ふべからざる狀如件」とあり。又冷泉左中將爲綱が元祿四年辛未(一六九一)七月十一日の奥書に「此古今祕傳一册阿佛之眞跡無疑者也、爲後證如件」とあり。

こきんわかしふひなことば
古今和歌集俚言　六巻　尾崎　雅嘉

「古今和歌集」を俗譯して頭書したるものなり。其の後は專ら契沖の「古今餘材抄」「歷註密勘」等の說に從へりといふ。

◎尾崎雅嘉の傳記は「群書一覽」の下にあり。

こきんわかしふへうちう
古今和歌集標註　四冊　岸本由豆流

本書は僧契沖の考に、賀茂眞淵の後拔を附し、更に著者が發明を增註したるものなり。

◎岸本由豆流(弓弦)は伊勢の朝田氏なりしが、江戸に出でて幕府の弓弦師岸本讃岐の家を嗣ぎたり。通稱を大隅といひ、植園と號す。博學にして古書の考證に得たり。また歌人を以て知らる。著書には土佐日記考證、鳴門中將物語考證、多武峰少將物語考證、徒然草考證、新とりかへばや物語考證、十六夜日記考證、皇朝風土記鉤沈、江談抄考證、故事談考證、古今集序考、日本紀竟宴和歌標註、洪水故事和歌集考證、續和歌集考證、入代集增註、堀河院百首考證、永久四年百首考證和泉式部家集標注、草山和歌集考證、曾丹集考證、契沖雜記考證、同雜々記考證、契沖俳諧歌考證、讀書爲宗、顯註類纂、諸國土產考、槐園雜纂、植園類纂、同續纂志等あり。仁孝天皇の弘化三年丙午(二五〇六)五月十七日、五十八にて歿す。

こきんわかしふりやうじよひなごとば
古今和歌集兩序鄙言　二巻　尾崎　雅嘉

此の書は其の名の示せる如く「古今和歌集」なる紀貫之の假名序及び紀淑望の眞字序とを俗語を以て譯したるものなり。漢字序の讀方は全く叶雲岡圖梨のに從へりといふ。

◎尾崎雅嘉の傳記は「群書一覽」の下にあり。

こきんわかしふるゐだい
古今和歌集類題　一巻　松井　幸隆

古今和歌集の歌と同意同調の歌を集錄して類題としたるもの。材料は二十一代集の外、管家萬葉集、古今六帖、夫木集、六家集、其の他の家集、歌合、物語類より取れりとなり。

◎松井幸隆の傳は「愚問賢註六密抄」の下にあり。

こきんわかろくでふ
古今和歌集六帖　十巻

六帖とは第一帖春、夏、秋、冬、天。第二帖山、川、野、都、田舍、宅、人、佛事。第三帖水。第四帖鏡、祝、別。第五帖雜戀、服飾、色、錦綾。第六帖草、蟲、木、鳥等なり、更に細目ありて、古今和歌を分類列載せるなり。寛永二年(一八八七)三月二十日、前和歌所本奥書あり。本書一名「紀氏六帖」といふ。「袋草子」には、「貫之女子所爲之、故號紀家六帖。雖盜、重之筆歌載之」といひ、また「和歌四千六百九十六首、此中長歌、九首、旋頭歌十七首、但本々不定也」云々といへり。

こきんわかろくでふかうほん
古今和歌六帖校本　六巻　賀茂　眞淵

此の書は前契沖の校正したる「古今六帖」を、更に校正したるものなり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下にあり。

こきんわかろくでふへうちう
古今和歌六帖標注　六巻　山本　明清

古今和歌六帖に標注を加へたるもの。六帖の名は「唐書藝文志」に「白氏經史事類一名六帖三十卷」とあるを慕ひて滋川川人朝臣の撰したるものなるべしといふ。本標註書は卷首に提要、時代、書名、部類、作者、歌集、別本異同、校正書目、等を擧げたり。天保二年辛卯(二四九一)十月十七日の記なり。非上文雄、伊庭時言等の序あり。

◎山本明清は號を蟲之助と通稱し、東溪と號す。江戸の儒者たり。著書には四十二物辭考證、倭古假名格、及び古今和歌六帖標註等あり。天保六年乙未(二四九五)四十二歳にて歿せり。

こくいかう
國意考　一巻　賀茂　眞淵

我が國古代淳朴の風、固循の俗を體揚して、儒教の非を論じたるもの即ち我が國風の天眞を考論したるなり。末に渙海野公雄が「續賀茂眞淵國意考」、同辨、及び橘本稚彦が「辨續國意考」の二論編を附して、文化三年丙寅(二四六六)版行せり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に出でたり。

こくいかうべんまう
國意考辨妄　一巻　沼田　順義

賀茂眞淵の「國意考」を論じたもの。天保四年癸巳(二四九三)林壑、小松原雄、金子祐倫の序あり。

◎沼田順義の傳は「續長戸風」の下にあり。

こくおんろく
國恩錄 一卷 大野 武範

古來の將士軍事を問答體に評論したるものなり。頼朝等古將の事ありと雖も、多くは元亀天正以來、徳川氏時代に係るものなり。

◎大野武範は自得流砲術の祖にして、宇右衛門と稱す。本書の外に「自得流鳥銃」「大銃守鎮法」等の著あり。延享頃の人なりといふ。

こくがうかう
國號考 一卷 内山 眞龍

日本全國の國號を考説したるものなり。卷一に國道國造幾内十九箇國、卷二に東海道四十五箇國、卷三に東山道二十九箇國、卷四に北陸道十六箇國、卷五に山陰道二十一箇國、卷六に山陽道二十一箇國、卷七に南海道十三箇國、卷八に西海道二十七箇國を擧げたり。斯く百八十九に分ちて、我が古稱の國號を説明す。華強の説を免れずと雖も、亦參考すべきなり。光格天皇の寛政八年丙辰(一七九六)の自序あり。

◎内山眞龍の傳記は「地名記」の下にあり。

こくがうかう
國號考 一卷 戸部 良熙

此の書は古來本邦の國號に、於保耶麻騰、豐葦原千五百秋瑞穗國、大耶麻臨聘秩洲、大倭、大日本等稱あることを考證説明したるものにして、桃園天皇の寶暦十四年甲申(一七六四)に作りたるなり。

◎戸部良熙の傳は「大島筆記」の下にあり。

こくがうかう
國號考 一卷 奈佐 勝皐

我が國號の考證なり。卽ち外國人が日本を指して日本國と稱したる事例を抄錄して考證を附せり。天明四年甲辰(一七八四)に成る。

◎奈佐勝皐は徳川幕府の士。通稱を久左衛門といひ、關東と號す。嘉保己一の門人にて國學者なり。著書は本書の外に、古語拾遺考異、藥師寺緣銘釋、山吹日記、いなむしろ、示蒙抄校補、疑竇等あり。

こくがうかう
國號考 一卷 本居 宣長

日本國號の考證なり。卽ち倭、大倭、倭奴、日本等と稱したる事例を抄錄して考證を附せり。天明四年甲辰(一七八四)に成る。

◎奈佐勝皐は徳川幕府の士。通稱を久左衛門といひ、關東と號す。嘉保己一の門人にて國學者なり。著書は本書の外に、古語拾遺考異、藥師寺緣銘釋、山吹日記、いなむしろ、示蒙抄校補、疑竇等あり。

こくがくき
國學記 一卷

開卷に「備陽岡山學校記」と題し、寛文六年丙午(一六六六)より元祿十三年庚辰(一七〇〇)に至る同校の漢文日記なり。

◎青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下に出づ。

こくがくしぶんしふ
國學詩文集 十四卷

岡山學校諸士の詩文を纂輯したるもの。其の中、卷一に元祿十四年辛巳(一七〇一)八月十五夜賦答せし詩文を載せ、以下毎卷年序を追ふて編集せり。

こくがくじんぶつし
國學人物志 一卷 高階 惟昌

元和寛永の頃より安政年間に至る。國學者の名を國分けに列記したるものなり。安政六年己未(一八五九)に成れり。著者高階惟昌は淡路國野島崎の人なりといへど、今その傳を得がたし。

こくがくべんぎ
國學辨疑 六卷 吉見 幸和

こくかきんぎんせんふぞくしふ
國家金銀錢譜續集 一卷 青木 敦書

古今の金銀錢圖に年代量目を附記したるもの。卽ち延享三年の作「國家金銀錢譜」の續集なり。本書は寛暦八年戊寅(一七五八)九月に編す。

◎青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下に出づ。

國學上の疑問の解説したるもの。天七地五の辨より、神代文字の辨に至る凡そ五編の論説なり。延享三年丙寅(一七四六)の自序に「予、子弟の學に進まんことを欲し、自ら辨目數條を書し、之れに示し、日に各其の辨目一條を採り、其の見る所を記して審辨せよと命ず。各唯して退く。不日其の説を持し來りて几前に置き、のち雌黄併せて之れに序せんことを請ふ。然れ共毎編何ぞ雌黄を加へ、且序することを得ん。唯其の我が言を信じ、速に辨じ來るを嘉し、卽ち麁を採り一語を書し、數編となし、其の貴を裘くのみ」といへり。

◎吉見幸和は源姓にして、風水翁と稱し、悲軒と號す。名古屋東照宮廟の祠官、正四位下左京大夫に敍任せらる。國學典故に精しく、五部書説辨、兩宮辨、增益辨ト鈔俗解、温泉紀行、伊勢紀行、雜雜事記、社穆問答、國字辨等を著す。明和年間八十餘歳にて歿す。

こくがくべんよく
國學辨翼 一卷 荻生 茂卿

我が儒學者流の動もすれば彼れを貴び、吾れを賤しむ事のあるより、先づ萬葉に先ちて我が君位、國體を辨へざるべからざることを説述したるもの。卽ち國學の大要を知らざるべからざることを論じたるなり。文化十一年甲戌(一八一四)刻成、文政二年己卯(一八一九)發行せらる。

◎荻生茂卿の傳は「靈園祕錄」の下にあり。

こくがくわすれがひ
國學忘貝 三卷 森 長見

國學の要旨に關する隨筆なり。此の書備忘のために記せるなれば、生國松ヶ浦に産する忘貝に取りて名けしとよし、天明三年癸卯(一七八三)の自序に云へり。著者森長見は讃岐の人なり。

こくかさんせつ
國歌三說 一卷

賀茂眞淵の「國歌八論餘言」、田安宗武の「八論餘言」、及び眞淵の「國歌説」を合せて三説と名づけたるも、「國歌説」は「國歌八論餘言」の論述なり。何人の編輯したるかを知らず。

こくかはらん
國家變異錄 二十卷

此の書は「古今大小名家亂記」と大同小異の本なり。記載の事實は全く同しく唯順序を異にし文段に少しく增減あるのみ。解題は「古今大小名家亂記」の下に於てせり。

こくかん
國鑑 二十卷 柴野 邦彦

漢土の史を編年體に述作したるもの。帝堯陶唐氏に始りて、後漢光武帝に至る治亂興亡の事蹟を記し、往々評論を加へたり。光格天皇の天明八年戊申(一七八八)幕府命じて編輯せしめたるものなるが、著者中途に歿したるゆゑ、依田利和が續成したりといふ。文化七年庚午(一八一〇)同人の跋あり。

◎柴野邦彦は讃岐高松の人にして德川幕府の儒官たり。彦輔と通稱し、栗山、また古愚軒と號す。最初後藤芝山に從ひ、後林家に學び、當年の學者皆川淇園、赤松滄洲、西依成齋等と友たり。後召されて昌平黌の教官となり、また幕府の學政を修め衆説を排して悉く程朱の學を尊ぜしむ。著すところは雜字類編、聖賢圖像考、資治概言、冠服考證、栗山文集等あり。文化四年丁卯(一八〇七)十二月朔日、年七十四にて歿す。

こくき
國基 一卷 紀 維貞

和漢の書に就きて、本邦國體の事を論述し、孔儒の道亦た我國體に背戻せざるゆゑんを陳べて、暗に谷川士清、木居宣長等國學者の論に當りたるもの。漢文にて記さる。天保六年乙未(一八三五)に成り、同八年版刻せらる。

こくきうじふつ
國牛十圖 一卷 河東 三直麿

此の書は國牛を圖讃して、「くに」の部に解題したり。原本は「群書類從」卷四百九十三にあり。

こくきしやうひつき
克己章筆記 一卷

克己復禮の義を詳釋したるものなり。諸書を引きて假名書數枚に記せり。

こくくわしふ
國花集 一卷 花艶谷

熟字、成語、平仄、故事、作例等を類聚して詩作の資料としたるもの。天文、地理、人事、其の他に部門を分つ。寛永五年戊辰(一七二八)出版せらる。

こくくわじんきやうし
國華人鏡史 本 二巻

徳川時代の職員人名錄にして、初代將軍より十代將軍家治の世、文化年間までのを掲ぐ。上は大目付、諸奉行を始めとして下は御徒頭、小十人頭に至る職員の氏名を類記し、任免死卒の年月を記したるものなり。

こくくわまんえふき
國花萬葉記 十四巻 菊本 賀保

我が諸國居城の人名、家門、系圖、先知、任國、諸城先主の次第、神佛の領地、名所等を記せり。卷一、二に山城、卷三に大和、卷四に河内、卷五に和泉、卷六に攝津、卷七に武藏、卷八より十に東海道十四國と東山道、卷十一に東山道五國、卷十二に北陸道七國、卷十三に山陽道、卷十四に南海道、西海道及び二島を擧ぐ十四卷二十二册に作らる。元祿十年丁丑(一六九七)發行したるものなりといふ。著者菊本賀保は雜波の人なり。

こくぐんぜんづ
國郡全圖 二卷 青生 元宣

本邦各國の形狀郡區等を粉色圖示す。大抵一國を一紙圖に載せて觀覽に便せり。享和三年癸亥(一八〇三)菅原長親、內田觀齋、秦鼎及び撰者の序、文政十一年戊子(一八二八)奥田叔建の跋を載す。天保八年丁酉(一八三七)十月刻成。

こくぐんめいじかう
國郡名字考 本 一卷 新井 君美

⊙高橋正澄の傳は「靈の宿」の下にあり。

こくごりつりよかい
國語律呂解 一卷 橘 春暉

齋汲本の「國語」の中なる「王將鑄無射云々」の章に就き、律呂の事を考へて註解したるもの。寛政六年甲寅(一七九四)福井軌の序あり、翌七年出版す。

⊙橘春暉は京都の人。醫を以て業とす。惡風と字し、梅仙また南陽と號し宮川を氏とす。夙に父の學を受けて精勵し、長ずるに及びて文學、醫術、共に大に行る。著書は本書の外に傷寒論分註、傷寒外傳、傷寒論輯義、痘疹永鑑傳、藥方小鑑、痘疹玉環方、東遊記、西遊記、北窓瑣談等あり。文化二年乙丑(一八〇五)四月十日歿す。享年未だ詳ならず。

こくさうせいぎ
國喪正議 本 一卷 室 直清

正德二年壬辰(一七一二)十月十四日德川六代將軍文昭院家宣薨去の時、大學頭林信篤の意朝に依て國喪を議したるの不當を論辨したるもの。漢文にて記す。正德三年正月の作なり。

⊙室直清の傳記は「駿臺雜話」の下に掲ぐ。

こくさんかう
國産考 二卷 大藏 永常

我が農産品類の著名なるものを記し杉檜松等の培養譜法を圖記し、總論には國産植物擴張の事を辨せり。天保十三年壬寅(一八四二)の出版にかゝる。後年(天保十五年)本書を改成して「廣益國産考」二八卷を成せり。

⊙大藏永常は「製葛錄」の下に傳す。

こくさんししふ
穀山詩集 一卷

著者の詩文集を弟子源眞雄等の編輯したるもの。寛政十一年己未(一七九九)に至るまでの年表。但し未定の稿本なり。

⊙小田煥章は字を子章といひ太室と號す。嘗て井上蘭臺、林鵞峯等に從學し、一時篤學を以て知らる。長門の瀧鶴臺、肥後の秋山玉山、水戸の名越南溪等と交る。壯年以來佐倉侯に聘せられて咨詢を受け、世子封を襲ぎ大阪城代となるに及びて老職となる。著書には建官考、職官考、典禮考、左國通攷、韓非子正誤、勢遠手輪具佐、名勝集等あり。天明八年戊申(一七八八)六月十四日、六十九にて歿せり。

こくしかい
國辭解 二卷 大村 光枝

こくしき
國史紀事本末 四十卷 青山 延光

神武天皇の東征より、足利の隆盛時代に至る本邦史上の事實を分項叙列して、一目に瞭然たらしむ。宋の袁樞の「通鑑紀事本末」に明の陳邦瞻の「宋史紀事本末」を參照して、之に倣ひて作れるものなり。

こくし
國史 本 二十七册 澁井 孝德

德川家康以下、七代將軍有章院家繼に至る略史、紀、表、志、傳等に順序して詳叙したるもの。漢文にて記せり。明和八年辛卯(一七七一)の序あり。

⊙澁井孝德は字を子章といひ太室と號す。嘗て井上蘭臺、林鵞峯等に從學し、一時篤學を以て知らる。長門の瀧鶴臺、肥後の秋山玉山、水戸の名越南溪等と交る。壯年以來佐倉侯に聘せられて咨詢を受け、世子封を襲ぎ大阪城代となるに及びて老職となる。著書には建官考、職官考、典禮考、左國通攷、韓非子正誤、勢遠手輪具佐、名勝集等あり。天明八年戊申(一七八八)六月十四日、六十九にて歿せり。

こくしかいてい
國史階梯 本 一卷 林 恕

長保元年己亥(一六五九)より、貞永元年壬辰(一二九二)に至るまでの年表。但し未定の稿本なり。

⊙林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

こくしかう
國史考 本 三十八卷 林 恕

山槐記、日次記、北山抄、西宮抄等數十部の書より、史料に供すべき事を抄錄せしものにして、甲乙丙丁の四部に分ち、三十八卷となす。

⊙林恕の傳記は「本朝通鑑」の下に出づ。

こくしきじほんまつ
國史紀事本末 四十卷 青山 延光

神武天皇の東征より、足利の隆盛時代に至る本邦史上の事實を分項叙列して、一目に瞭然たらしむ。宋の袁樞の「通鑑紀事本末」に明の陳邦瞻の「宋史紀事本末」を參照して、之に倣ひて作れるものなり。

こくくわじんきやうし
國華人鏡史 本 二卷

德川時代の職員人名錄にして、初代將軍より十代將軍家治の世、文化年間までのを掲ぐ。上は大目付、諸奉行を始めとして下は御徒頭、小十人頭に至る職員の氏名を類記し、任免死卒の年月を記したるものなり。

こくくわまんえふき
國花萬葉記 十四卷 菊本 賀保

我が諸國居城の人名、家門、系圖、先知、任國、諸城先主の次第、神佛の領地、名所等を記せり。卷一、二に山城、卷三に大和、卷四に河内、卷五に和泉、卷六に攝津、卷七に武藏、卷八より十に東海道十四國と東山道、卷十一に東山道五國、卷十二に北陸道七國、卷十三に山陽道、卷十四に南海道、西海道及び二島を擧ぐ十四卷二十二册に作らる。元祿十年丁丑(一六九七)發行したるものなりといふ。著者菊本賀保は雜波の人なり。

こくぐんぜんづ
國郡全圖 二卷 青生 元宣

本邦各國の形狀郡區等を粉色圖示す。大抵一國を一紙圖に載せて觀覽に便せり。享和三年癸亥(一八〇三)菅原長親、內田觀齋、秦鼎及び撰者の序、文政十一年戊子(一八二八)奥田叔建の跋を載す。天保八年丁酉(一八三七)十月刻成。

こくぐんめいじかう
國郡名字考 本 一卷 新井 君美

こくごりつりよかい
國語律呂解 一卷 橘 春暉

齋汲本の「國語」の中なる「王將鑄無射云々」の章に就き、律呂の事を考へて註解したるもの。寛政六年甲寅(一七九四)福井軌の序あり、翌七年出版す。

⊙橘春暉は京都の人。醫を以て業とす。惡風と字し、梅仙また南陽と號し宮川を氏とす。夙に父の學を受けて精勵し、長ずるに及びて文學、醫術、共に大に行る。著書は本書の外に傷寒論分註、傷寒外傳、傷寒論輯義、痘疹永鑑傳、藥方小鑑、痘疹玉環方、東遊記、西遊記、北窓瑣談等あり。文化二年乙丑(一八〇五)四月十日歿す。享年未だ詳ならず。

こくさうせいぎ
國喪正議 本 一卷 室 直清

正德二年壬辰(一七一二)十月十四日德川六代將軍文昭院家宣薨去の時、大學頭林信篤の意朝に依て國喪を議したるの不當を論辨したるもの。漢文にて記す。正德三年正月の作なり。

⊙室直清の傳記は「駿臺雜話」の下に掲ぐ。

こくさんかう
國産考 二卷 大藏 永常

我が農産品類の著名なるものを記し杉檜松等の培養譜法を圖記し、總論には國産植物擴張の事を辨せり。天保十三年壬寅(一八四二)の出版にかゝる。後年(天保十五年)本書を改成して「廣益國産考」二八卷を成せり。

こくごかう
國語考 本 四卷 戸崎 允明

語源を論じたるもの。古事記、萬葉集、伊勢物語等の語を抄出して解釋し、次に音義の事、濁音の事、語尾の變化、音便の轉化等を說述す。寛政六年甲寅(一七九四)信濃國旅舍にありて書記したる由なり。一名を「國事解便蒙」また「大和字解」といふ。

⊙大村光枝は賀茂眞淵の門人にて、初の名を降住といへり。

こくごほんぎ
國語本義 本 十卷 高橋 正澄

國語の語源を解說したるものなり。天保前後の作なるべしといふ。

こくごだまべんめい
國語言靈辨明 本 八卷

我が音語の義を解釋し、併せて手爾遠波、動詞等の變化などを說明したるもの。卷端に「夫れ詞は一聲を本とす、二聲、三聲、五聲、七聲、合せて名となり詞となればなり、故に一聲の義を辨へざれば、名詞の義を解くこと難し。其の義に變化あり、人に喜怒哀樂の情あるに似たり。されば一筋にかゝる義なりとのみ心得ては又誤き得べからず、義の化をよく辨ふべし」云々といへり。卷の最尾に「天保四年(一八三三)九月より同六年三月に至り寫終五十川支配」とあり。

こくごこんげん
國語古言解 本 二卷 谷口 山詩集 六卷

著者の「草山集」三十卷中より詩體の詩を抜抄して別行したるものなり。

⊙元政の傳は「扶桑隱逸傳」の下にあり。

こくげんがうかんもんそうもんしだい
國解年號勘文奏聞次第 本 一卷

年號勘文を奏進するときの儀式を記したる者也。

こくげふゆしん
黑業油新 一卷

著者の漢文集。蓮華草子年紀略、三課算數、禮誦日式、四月戊申日口號、印符攝遊等七願、行服十四件、自述六條等あり。享保元年丙申(一七一六)の自引に、「臨濟師祖曰、看經看教造塔寫經而平常禮誦等三昧、乃泥梨黑業之油脂也。雖然無一法可捨、固依此七編、且衛是謗如來正法輪耶、亦不謗耶」と記せり。享保元年田代政敎の跋、門人宗謹の跋等あり。

⊙著述の傳は「墨江紀略」の下にあり。

こくこうさんししふ
谷口山詩集 六卷 僧 元政

著者の「草山集」三十卷中より請體の詩を抜抄して別行したるものなり。

⊙元政の傳は「扶桑隱逸傳」の下にあり。

こくごかう
國語考 本 四卷 戸崎 允明

事本末』等の體例に倣ひて作りたるなり。文久元年辛酉(一八六一)の自序あり。

◎菅山延光の傳は『弥穗四十七士傳』の下にあり。

こくしきはん
國史窺斑　木一卷　林　恕

神武天皇より齊明天皇に至る歷史の一班を記したるもの。自序中に「本朝の事は今の學者家鶏を賤じて野鶩を尊ぶやうに侍るを、いとあさましく覺え侍れば、卿か國史の一班を窺ひて、前後經かね事を記して、弊たる帶にかへて家に殘し侍るなり」とあり。但し未定の稿本なり。

◎林恕の傳記は『本朝通鑑』の下にあり。

こくしぐわいかう
國史外考　木二十三卷　林　恕

多くの漢籍中に本邦の事を記し、而も我が修史の資料に供すべきものを抄錄したるもの。松下見林の『異稱日本傳』と其の類を同うせる書なり。

◎林恕の傳は『本朝通鑑』の下にあり。

こくしくわつたう
國史括蹈　木十卷　林　恕

昌泰元年戊午(一五五八)より、慶長十六年辛亥(一二七一)に至る年表なり。『國史片玉』と體裁相同じくして、此の書の記する所、稍詳密なり。

◎林恕の傳は『本朝通鑑』の下にあり。

こくしさんろん
國史纂論　十卷　山縣　禎

德川光圀の『大日本史』、林道春の『羅山文集』等の他凡て二十八家、三十四部の書により、神武天皇より後陽成天皇に至る史論を拔萃して、各條毎に評論を附したるものなり。凡例中に「讀二先輩論一史之旨一、往々有二得二吾意所一レ欲レ言者一、輒改二頭換一面一以爲二己創意一、則固余之所レ不レ敢也。於二是據一レ據其尤精確者一、纂爲二一書一、使レ得二失・法・前代・鑑・往事一、而爲二論作也一。是以事多二闕略一、文或有二未レ順者一、有二本史略レ

◎林衡の傳は「逸齋偶筆」の下にあり。

こくしりやく　國史略　五卷　岩垣　松苗

上は神代より下は後陽成天皇の天正十六年戊子（一二四八）聚樂城へ行幸の事に終れり。「十八史略」の筆法に倣ひて漢文なもて記す。文政九年丙戌（一二四八六）前右大臣公修の序を附し同年出版す。安富國民の「標註國史略刊誤」あり。そは題名の下に解題す。

◎岩垣松苗は初の名を維光といひ、字を長筭と稱し、謙亭また東園と號す。京師の儒者にして古學を主張し、また國史に通ぜり。從五位上音博士大舍人助に敍任せらる。嘉永二年己酉（二五〇九）十二月、七十六歳にて歿す。

こくしるゐそう　國史類要　本朝三卷

天皇、皇太子、皇后、親王、詔敕、行幸、遊宴、制法、禮儀、官職、位祿、文學、書籍、姓氏、諸臣、才藝、諸藝、神事、佛事、樂舞、器用、武備、宮殿、地理、畜獸、草木、凶事、雜事等の部類を分ち、日本紀、續日本紀、文德實錄、三代實錄、日本逸史等の文を抄出類聚したるものなり。

こくしるゐめい　國史類名　本朝十九卷　内藤　廣前

本邦六國史中の名詞を、一史毎に五十音順に類聚して、一々其の原本に就ての所在（同名數ヶ所にあるものも悉く其の卷數丁數表裏等を列舉す）、解釋等を示せり。卷一、二、三を、日本書紀部、卷四、五、六、七、八を續日本紀部、卷九、十、十一を日本後紀部、卷十二、十三、十四を續日本後紀部、卷十五を文德實錄部、卷十六以下終卷十九までを三代實錄部とせり。卷末に「此類名者」以下終卷十九までを三代實錄部直清書寫了。安政七歳次庚申（二五二〇）二月十日」と奥書あり。

◎内藤廣前は德川幕府に仕へて大番組與力たり。夙に諸書を好み、中年にして官を辭し、專ら史學の研究に從へり。文政中尾州侯の爲めに大内裏考證を校訂し、大内裏圖を完成し、また水野家の爲めに丹鶴叢書を編し、八代集作者傳を作りたることあり。慶應二年丙寅（二五二六）九月十九日歿せり。年七十六。碑を赤城祉に建つ。

こくじわけめいしふ　國字分名集　一卷

いろは分にして武家萬石以下五百石までの人名を擧げ、石高、家紋、及び改名、屋敷替等を記す。文政十年丁亥（二四八七）閏六月、即ち本稿の成れるまでのを記せり。同十二年出版す。

こくじんろん　谷人論　本十卷　孔雀老人

國體、制度、學術等の事を論じ、更に學者、軍人の事績逸話等を附錄したるもの。天保四年癸巳（二四九三）卯月の自序中に「いやしき谷の杣子定規によせ、蠶食ふ蟲のすきにかたふける、俗論なればとて、かりにその文字をかたとりて、谷人の名は課せ侍りね」云々とあり。十卷五册に作らる。

こくせいもんだふ　國政問答　本二卷

政務時事を概論したるものなり。全編問答體に假名書す。年代署者共に詳ならず。

こくせんやかつせん　國性爺合戰　二卷　近松門左衛門

淨瑠璃本としての作なり。其の筋の大要を云へば、明國の大臣李蹈天といふもの、私に鄭芝龍（老一官）は諫め入れられずして却て放逐せられ、我が日本に寄寓し、國性爺を生む。明にありては李蹈天逐に帝及び皇后を弑し、皇族忠臣等を殄滅して、自ら國王となる。明忠臣吳三桂、幸うじて皇族楠榁姫と皇后遺腹の皇子とを助けて、後圖を謀る。皇妹は漂流して日本に來り、鄭芝龍父子に邂逅し、共に又明に渉り、先づ國性爺の紬婚甘輝を降從せしめ、吳三桂と共に李蹈天を亡ぼし、遂に皇子を立てゝ明國を再興するに終れり。蓋し作者の意は、外事に據て我が國體を諷示せるなり。

◎近松門左衛門は有名なる淨瑠璃作者なり。承應二年癸未（二三一三）を以て生る。幼名を彦四郎といひ、後作名を巢林子と號す。夙く和漢の雜書を嗜讀し、博覽多通の人となる。初め傀記小說の作に從ひ、歌舞妓座萬太夫、宇治加賀太夫、井上播磨椽等の爲めに淨瑠璃を作り、是れより創作するもの頗る多し。事實に主張あり神道、佛教、國體、信義等を託逸す。且文章巧緻にして人を感動せざるものなく、一世に大名を博せり。著書は、國性爺合戰、雪女五枚羽子板、曾我會稽山、日本振袖始、釋迦如來誕生會、出世景清、百日曾我、四明寺殿百人上臈、天智天皇曾根崎心中、丹波與作小萬待宵、關八州繋馬、兼好法師物見車、心中重井筒、蟬丸、孕常盤、山姥娘、夕霧阿波鳴門、心中二枚絵雙紙、相模入道千匹犬、女殺油地獄、傾城返魂香、雙生隅田川、信州川中島合戰、今宮心中、心中天の網島、博多小女郎波枕、酒呑童子枕言葉、天鼓、本朝三國志、梅川忠兵衛宴途飛脚、心中宵庚申、島原蛙合戰、平家女護島、二人靜胎内探、大經師昔歌屋、曾我五人兄弟、曾我扇八景、菅原天神記、世繼曾我、吉野忠信、赤染右衛門、榮花物語、義經將棊經、本朝五翠殿、唐土勝今國性爺、弘徽殿鵜羽産家、堀川浪の鼓、日蓮上人記、おなつ清十郎歌念佛、待夜の小室節、甲賀三郎、曾我昔見室、卯月の色土、卯月の紅葉、非儒樂平河內通、おさき次郎兵衛揚鯛心中、傾城揚柳物語、曾我虎の石碑、滝口横笛蛾歌加留多、持道天皇歌軍法、紅葉狩劍本地、攝津國大嶽池、嵯峨天皇甘露の雨、傾城吉岡染、山崎與次右衛門霜門松、大磯虎稚物語、長町女腹切、源晉兵衛薩摩歌、日本武尊東鑑、國性爺後日合戰、賴朝伊豆日記、加古敎心七墓巡、大掛物十幅對、十二段長生島亀、鎌田兵衛名所の杯、浦島年代記、佐々木大鑑、鬼德太子繪傳記、源氏烏帽子折、墨繩太平記及跡追、鎗權三重帷子、賴朝七騎落、源氏冷泉節、今樣小栗判官、文武五人男、多田院開帳、忠臣二十日正月、今川制詞條目等八十八種あり。中御門天皇の享和九年甲辰（二三八三）十一月二十二日歿す、年七十一。大阪入丁目寺町法妙寺に葬れり。或はいふ山口縣山口妙泉寺に葬ると。

こくだいかうせう　穀堂遺稿抄　八卷　古賀　謹

著者の詩文集なり。卷一より卷五までは文集にして、書、序、記、論、墓誌、祭文、雜著等凡て五十九編あり。卷六以後は琴鶴堂詩鈔と標して、賦、古詩、律、絶句、通計百數十首を載せたり。天保十五年（弘化元年）甲辰（二五〇四）古賀煜、野田逸の序あり。

◎古賀謹は綉里の男。佐賀藩の儒者なり。字は溥廬、號は穀堂、幼名文太郎、敏二、修理等に改め、最後に藤馬と稱す。幼より業を父に受け、翁冠にして父に從て江戸に出で其の家塾に寓す。時に柴野、尾藤、中山、賴等の諸先輩の間に周旋し、深く稱評せらる。後、藩に還りて敎官兼椎隊長となり、文化十四年世子傅に轉じ復た江戸邸に住せり。最堂の學は程朱を宗とすと雖、博く經史を渉獵して敢て拘泥する所なく、其の詩文を爲るや雄大瑰麗常に万丈の光燄を放てり。天保七年丙申（二四九六）没す。享保五十九。

こくだうしし　古愚堂詩　一卷　兒北　溟

著者の詩集なり。慶應元年乙丑（二五二五）の中村正直、白井庸の序あり。

こくづ　國　圖　五卷　内山　眞龍

五畿七道各國の郡を分ち、每國其事紀に考へて寨名を擧ぐ。外に陸奥一國の圖を鉤として附したり。享和三年癸亥（二四六三）正月の著なり。

◎内山眞龍の傳記は「地名記」の下に掲げたり。

こくづえうろく　國圖要錄　本一卷　若松惣兵衛

國の圖面を製する方法を記したるもの。佐藤信淵の遺志によりて作りたりと云ふ。著者若松惣兵衛は伊集國宇和島の人なり。

こくてうかせつろく　國朝佳節錄　本一卷　松下　見林

我が國年中の節句毎月の故事等を考證したるもの。漢文にて記せり。貞享五年戊辰（二三四八）孟夏念五に認めたる跋文あり。今其の全文を掲ぐ曰く「我朝月令之義、詳大者政事要略、江家次第等書是也。語小者公事根源抄、年中行事大概抄類是也。余嘗爲二三子著公事根源抄義。此佳節錄者有二入畧一通二於上庶一節令上間二源起一、故引二證漢家本朝書一、間加二今按一以應二從容之求一云爾。」とあり。以て大概を窺ふべし。

◎松下見林の傳は「異稱日本傳」の下にあり。

こくてうかんさうろく　國朝諫諍錄　二卷　藤井　滅

歷代諫臣の略傳を記し、併せて論贊を附したるもの。野見宿禰に起り、六角義弼に終る凡そ三十七條を掲げ、每條出據を註記す。貞享四年丁卯（二三四七）の序跋等あり。

◎藤井滅（蘭齋）の傳は「國際筆記」の下にあり。

こくてうき　國朝記　本二册

◎内山眞龍の傳記は「地名記」の下に掲げたり。

こくづえうろく　國圖要錄　本一卷　若松惣兵衛

國の圖面を製する方法を記したるもの。佐藤信淵の遺志によりて作りたりと云ふ。著者若松惣兵衛は伊集國宇和島の人なり。

こくてうかせつろく　國朝佳節錄　本一卷　松下　見林

我が國年中の節句毎月の故事等を考證したるもの。漢文にて記せり。貞享五年戊辰（二三四八）孟夏念五に認めたる跋文あり。今其の全文を掲ぐ曰く「我朝月令之義、詳大者政事要略、江家次第等書是也。語小者公事根源抄、年中行事大概抄類是也。余嘗爲二三子著公事根源抄義。此佳節錄者有二入畧一通二於上庶一節令上間二源起一、故引二證漢家本朝書一、間加二今按一以應二從容之求一云爾。」とあり。以て大概を窺ふべし。

◎松下見林の傳は「異稱日本傳」の下にあり。

こくてうかんさうろく　國朝諫諍錄　二卷　藤井　滅

歷代諫臣の略傳を記し、併せて論贊を附したるもの。野見宿禰に起り、六角義弼に終る凡そ三十七條を掲げ、每條出據を註記す。貞享四年丁卯（二三四七）の序跋等あり。

◎藤井滅（蘭齋）の傳は「國際筆記」の下にあり。

こくてうき　國朝記　本二册

德川氏の系圖にて、其の祖先より、文政年間に至る。大本二冊に寫傳せり。

こくてうきうしやうろく
國朝舊章錄 ㊀十卷 室 直清

著者の議論、及び林信篤、同春齋、新井君美、林信言、太宰春臺、雨森芳洲等の著な收錄す。其の總目を示せば卷之一に天下之論、大學三綱八條目之詠歌、神祖御在世御舍殿場、御當家御代々御院號文字出所。卷之二に除邑錄。卷之三に武家執政之事、御法條之事、新帝踐祚之事、御即位之事、嘉定之事。卷之四に本朝貨事略、歲紀考。卷之五に米穀金銀之事。卷之六に殊號事略上。卷之七に殊號事略下。卷之八に朝鮮風俗、琉球國之事、御宮御佛殿御座鋪並所々御建立寺社給額筆者之事。卷之九に御當家御代々御家號を被下候家々之事。卷之十に天正より元文迄事物乃權輿世上の變略等の事等なり

◎室直清の傳記は「駿臺雜話」の下にあり。

こくてうきうしやうろくほけつ
國朝舊章錄補闕 ㊀一卷 林 信篤

前に出でたる「國朝舊章錄」の補遺として、林信篤の除邑錄を載せたり。除邑錄は慶長五年庚子(一二六〇)毛利輝元の減領より、享保元年丙申(一三七六)小笠原長邑の除邑まで、百四十條の諸侯除邑の事を記せり。

◎林信篤の傳記は「鳳岡林學士集」の下にあり。

こくてうきくわいてん
國朝會典 ㊀四十一卷

こくてうたいげふくわうき
國朝大業廣記 ㊀百四十七卷

天文十一年壬寅(一二〇二)より、元和二年丙辰(一二七六)に至る七十五年間の德川氏大業事績を年序的に記したるもの。最初三卷は目錄たり。木村高敦の著「武德編年集成」を本文として、他に諸書の引用及び自按等を低書せるなり。明和元年甲申(一四二四)三秋林信言の序、及び自跋あり。

◎樋口榮芳は觀門と稱し雲汀と號す。林榮洞信言の門人なり。

こくてうさんじふさんくわんおんだうぢやうげさん
國朝三十三觀音道場偈贊 一卷 僧 章子

西國三十三箇所の觀音來由を記せる漢文の書なり。一所毎に其來由を記し、末に偈贊を掲げたり。

◎著者章子は正德六年丙申(一三七六)の自序あり。泉州の人にして、禪樂寺の住僧なり。蓮華と號す。

こくてうりつ
國朝律 ㊀二卷

元祿寬保間に於ける奉行所等の法律書類を收錄す。上卷に目安裏書判之事より、御仕置仕形之事に至る百三條。下卷に評定所始之事より。辻番所定書之事に至る八十一條を收む。

こくふうはつめう
國風發蒙 ㊀十卷 深澤 薰

詠歌に關するあらゆる要件を述べたるもの。例へば歌よむべきはじめの心得の事、歌を後世和歌といふ事、歌に祕傳ありといふ辨等を最初として數十項の注意を說き、更に詞づかひ用例等を示すもの多し。寬政十年戊午(一四五八)秋七月二十五日の再序あり。

◎深澤薰は江戸の人にして、三日月落士たり。南山と字し、君山と號す。著書には管窺記、詩文集、及び國風發蒙等あり。文化六年己巳(一四六九)六十九

にて歿す。

こくほんまんえふしふふくぎう
刻本萬葉集復舊 ㊀一卷 木村 正辭

今の鏤版の萬葉集は、活字附訓本を翻刻したるもので、其の翻刻のまり、誤りたるもの少からず、故に活字附訓本によりて、一々に其の誤りを正したるものなり。文久二年壬戌(一二五二)二月の作。

◎木村正辭の傳は「萬葉集美夫君志」の下にあり。

こくほんろん
國本論 二卷 松平 定信

人民は國の根元なることを論旨として、太平の人君下情に通ぜず、人民の勞苦を察せず、漫りに苛斂を附して自ら奢侈に安ずることの流弊を痛論したるものなり。天明元年辛丑(一四四一)秋八月二十一日の漢文自序あり。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下に出づ。

こくほんろんふろく
國本論附錄 三卷 松平 定信

本書は「國本論」二卷の附錄として、財をおさむる事、田地年貢の事、人民をふやす事、民にかゝる役なたらぶ事、使をやりて民の困究なめぐむ事、民のうれひを救ふ事等を論じたり。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下に出づ。

ごぐまいき
後愚昧記 ㊀五卷 藤原 公忠

卷の一後光嚴天皇の照安四年辛亥(一〇三一)正月より、卷の五同七年九月に至る署者の日錄なり。

◎藤原公忠は後三條內大臣實忠の子にして、また內大臣に至る。後、押小路と稱せり。本書「後愚昧記」は其の日記なり。

こくめいかう
國名考 ㊀一卷

畿內、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の名義、あづま、筑紫の名義等を考說す。漆強の說多し。書中に、安永八年己亥(一四四九)五月十九日、景福寺の記せる由あり。

こくめいせう
國名鈔 ㊀一卷 伊藤 弘風

日本總國の名義、數島、豐秋津國、中國等より、五畿七道各國の名義を或問的に解說したるもの。一々古徵に據りたり。元文四年己未(一三九九)の自序あり。一に「大日本諸國名義鈔或問」と題して寫傳せるもあり。署者伊藤弘風は七郎左衞門と稱す。

こくめいふどき
國名風土記 八卷

我が五畿八道六十六箇國の國名由來を記したるもの。卷一畿內五國、卷二東海道十五國、卷三東山道八國、卷四北陸道七國、卷五南海道六國、卷六山陽道八國、卷七山陰道八國、卷八西海道九國及び二島のことを記す。

こくらくぢまる
敎訓心法極樂住居 五卷 樹下 翁

運俗の敎訓書なり。自序に本書の由來を辨して、「神聖佛の道は鄙へて直きに原つくの敎なれども、聖賢の要語は市井の幼童女子開馴れざるも多かるべし。故に鄙諺の中より耳なれし淨圖氏の言によりて、極樂住居と題するものぼ、主となりし先入の言葉に擬て、以て勸善のたしと成すことしかり」とあり。初編二卷は天保六年乙未(一四九五)に成り、二編三卷は同八年丁酉に作られたり。

ごくらくものがたり
極樂物語 一卷 僧 源信

彌陀の極樂に往生すれば、第一聖衆來迎樂、乃至第十增進佛道樂といへる十樂あることを俗文にて書き記したるものなり。現本は寬文八年戊申(一三三八)の開版にかゝる。

◎源信の傳は「往生要集」の下にあり。

ごくらくもんじぼんぞう
五句類菓集 三卷 松枝 子泰

古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の以上二十一代集、六家集、大和物語、源氏物語、狹衣等にある歌の各句の詞ないは順に類集したるものなり。

こくわあんびばうろく
故花庵備忘錄 ㊀百〇八卷 三木 維清

仁勳、忠烈、以下道德、智識、雜藝に關する數十の題

目を被けて、古來の事績を記したるもの。巻頭、仁孝天皇の仁恕より、あらゆる德智者の言行遺功を類書せり。仁孝天皇の事を敍するに、今上天皇と申し奉れば、同代の著なること知らる。著者三木維清は超然と號し、また枚花庵と稱す。

ごくわいはじめわか　御會始和歌　本一冊

天保三年壬辰(一八四二)正月御會始詩歌、二月三日御製題、同御當座、二月十二日御製題、同御當座、二月二十三日御製題、同御當座、三月四日御製題、同御當座、三月十三日御製題、同御當座、三月二十二日御製題、四月三日御製題、同御當座、四月二十三日御製題、同御當座、五月三日御製題、同御當座、五月十三日御製題、同御當座、五月二十三日御製題、同御當座、六月三日御製題、同御當座、六月十二日御製題、同御當座、六月二十三日御製題、同御當座、七月三日御製題、同御當座、七月十二日御製題、同御當座、七月二十三日御製題、同御當座、八月三日御製題、同御當座、八月十一日御製題、同御當座、八月二十三日御製題、同御當座、九月三日御製題、同御當座、九月十二日御製題、同御當座、九月二十三日御製題、同御當座、十月三日御製題、同御當座、十月十三日御製題、同御當座、十一月二十三日御製題、同御當座、十一月十二日御製題、閏十一月三日御製題、同御當座、閏十一月十三日御製題、同御當座、閏十一月二十三日御製題、同御當座、十二月三日御製題、同御當座、十二月十二日御製題、同御當座、十二月二十三日御製題、同御當座、十二月十二日御製題等を輯めたるものなり。

ごくわうごんのゐんぎょき　後光嚴院御記　本一巻　後光嚴院

貞治四年乙巳(一三六五)禁中の儀式典例を御記錄あらせられしもの。漢文なり。「此御記以三條西本書寫畢。于時天明五年(一七八五)正月二十一日、判等の奥書あり。

◎後光嚴院は光嚴帝の第三皇子にして崇光帝の同母弟なり。夙に和歌を好み、また琵を嗜み巧に草木鳥獸を寫き給ひきといふ。御在位中南朝諸臣の來降の爲め、乘輿しばゝ播遷し給ふ。在位二十年にして應安七年甲寅(一三七四)正月二十九日崩ぜらる。御年三十七。

ごくわうごんのゐんごじやうゐのき　後光嚴院御讓位記　本一巻

應安四年辛亥(一三七一)同御讓位の次第を記したるもの。「群書類從」巻四十二、帝王部第十四に收めたり。著者廣橋兼綱は後に左大臣を贈られたる人なり。

ごくわうごんのゐんごせんそのき　後光嚴院御踐祚記　一巻　中原　師茂

一名「大外記師廣記」の下に解題せり。彼れは寫本にして、此れは「群書類從」卷九十一、公事部第十三に收めたるものなり。

ごくわうごんのゐんぎょはじめのき　後光嚴院御幸始記　一巻　廣橋　兼綱

應安四年辛亥(一三七一)閏三月二十一日、北山邸に御臨駕以後、初度の行幸を爲しまゐらせし時の次第を記したるもの。「群書類從」巻四十二、帝王部第十四に收めたり。著者廣橋兼綱は後に左大臣を贈られたる人なり。

ごくわうみやうていぎょせいししふ　後光明帝御製詩集　本一巻　後光明天皇

御製の詩九十一首を編次したるものにて、巻末に慶安四年辛卯(一六五一)の御製「愼斎文集」序を掲げらる。

◎後光明天皇は後水尾帝の太子にして、御名を紹仁といふ。明正帝の禪を受け、年十二にして卽位し、在位十一年にして崩御す。年二十二。泉涌寺に葬せり。

ごくわうみやうてんわうぐわいき　後光明天皇外記　本一巻

後光明天皇の御幼時より、御成長に至る御德の種種を書記したるもの。文化十五年戊寅(一八一八)四月源吉從、無名の草本を謄寫せる由の奥書あり。

ごくわくわんずゐひつ　護花關隨筆　本十巻　堀田　方舊

著者見聞隨筆なり。安永九年庚子(一七八〇)著者卷首に書して曰く「耳にふれ、目にとまる事どもを、心の趣く折々、筆にまかせたる反古を拾ひ集めて、護花關隨筆といふ」と。天明元年辛丑(一七八一)磯谷正興、君山翁等の序、同二年前津藩醫八十一翁の序あり。

◎堀田方舊は張藩の和學者。維新と字し、治右衛門と稱し。護花關主人と號す。別著に「護花關錄稿」五卷あり次に解題せり。寛政中、年八十三にて歿す。

ごくわくわんろくかう　護花關錄稿　本五卷　堀田　方舊

著者の詩集なり。五言古一、七言古二、五言排律一、五言律三十八、七言律一百十一、五言絕三十四、七言絕四十五、六言一、四言一、凡て二百三十四首を收む。巻首に寶曆十四年甲申(一七六四)松平秀雲の小引を附す。

◎堀田方舊の傳記は「護花關隨筆」の下に出す。

こぐわふ　古冤譜　本一巻　藤井　貞幹

ごくわうみやうてんわうぐわいき　後光明天皇外記　本一巻

後光明天皇の御幼時より、御成長に至る御德の種種を書記したるもの。文化十五年戊寅(一八一八)四月源吉從、無名の草本を謄寫せる由の奥書あり。

ごくわくわんずゐひつ　護花關隨筆　本十巻　堀田　方舊

著者見聞隨筆なり。安永九年庚子(一七八〇)著者卷首に書して曰く「耳にふれ、目にとまる事どもを、心の趣く折々、筆にまかせたる反古を拾ひ集めて、護花關隨筆といふ」と。天明元年辛丑(一七八一)磯谷正興、君山翁等の序、同二年前津藩醫八十一翁の序あり。

◎堀田方舊は張藩の和學者。維新と字し、治右衛門と稱し。護花關主人と號す。別著に「護花關錄稿」五卷あり次に解題せり。寛政中、年八十三にて歿す。

ごくわくわんろくかう　護花關錄稿　本五卷　堀田　方舊

著者の詩集なり。五言古一、七言古二、五言排律一、五言律三十八、七言律一百十一、五言絕三十四、七言絕四十五、六言一、四言一、凡て二百三十四首を收む。巻首に寶曆十四年甲申(一七六四)松平秀雲の小引を附す。

◎堀田方舊の傳記は「護花關隨筆」の下に出す。

こぐわふ　古冤譜　本一巻　藤井　貞幹

こくわんかう　古冠考　本一巻　賀茂　眞淵

推古天皇の十一年癸亥(一二六三)より、文武天皇の大寶元年辛丑(一三六一)に至る、九十九年間に於ける冠位の事を、諸史中より抄輯したるもの。宋に「直冠之考」を附したり。寶曆十年庚辰(一七六〇)六月の自記奥書あり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に出づ。

こくわんきだん　菅官紀談　本三巻　杉山　和一

菅者の禮式諸法に關して抄出考說したるもの。巻一を錦織傳來記、當道川集、川集續集。巻二を菅官階級。巻三を當道古式目、當道新式目等に續載す。元祿五年壬申(一六九二)の作。

◎杉山和一は江戸の鍼醫。大和の盲人なりしが、江戸に出でて檢挍山瀨琢一に從ひ、また京師の入江良明に學び漸く鍼術に長じ、遂に杉山の一流を創む。延寶中德川五代將軍綱吉の病に侍して功あり、祿五百石を得て關東總檢挍となり、祿で三百石を增加せられ、鍼治の講習を開く。是れより大に此の流を布く。元祿七年甲戌(一六九四)六月二十六日、八十二にて歿す。

こくんこじき　訂正古訓古事記　三巻　本居　宣長

世に流布せる寬永版、及び度會延佳の校正したる「古事記」の共に誤字、脫文、譌讀の多きより、屢く古書古言に徵して、更に校定して訓讀をも正したるものなり。寬政十一年己未(一七九九)の自序あり、同年出版す。享和三年癸亥(一八〇三)長瀨眞幸の跋もあり。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下にあり。

ごけいづならびにさんしうき　御系圖並三州記　本一巻

德川氏系圖にて、家康三州にある時の記事を添へたり。

こけいのはし　虎溪の橋　一册

大阪の四処、京の祇宿、江戸の松意等の俳諧集なり。編述の年時は未だ詳ならず。

こげいふ　御系譜　木四二十二册

徳川氏歴代の系譜なり、其の目を挙ぐれば、御系圖、御系譜前錄、東照公譜、台徳公譜、大猷公譜、殿有公譜、常憲公譜、文昭公譜、有章公譜、有徳公譜、惇信公譜、浚明公譜、公子譜、尾張譜、紀伊譜、田安譜、一橋譜、轉封錄、附錄等にて、轉封錄三卷を除く外他は各一卷づつなり。例言目錄を添へ、凡て二十二册に寫傳す。

こけごろも　苔衣　木四二卷

宮人どもの戀愛に關する作り物語なり、古雅にして、最も優麗なる筆を以て綴れり、雅文上他の物語類と併せ讀むべきなり。年代詳ならざれど、稍、古きものなるべし。

こけにおしおきうかがひ　御家人御仕置伺　木四百〇六册

幕府評定所より引繼ぎて内閣文庫に保存せり。天明四年甲辰(一七八四)より慶應二年丙寅(一八六六)に至る。

こげんえをべん　古言衣延辨　一卷　平　てる實

阿行の衣(え)と夜行の延(江)との假字遣の差別を考證し、梶取魚彦の著「古言梯」に列擧せる用例をも補正したるものなり。文政十二年己丑(一八二九)の著なり。

こげんき　古諺記　木四一卷　牛込　重恭

牛込時樂軒、板倉周防守、酒井雅樂頭、安藤帶刀、土非大炊頭其の他數人が在職中の雜話十七箇條を集錄す。別名を「牛込家傳」また「時樂記」と稱す。

◎牛込重恭は忠左衛門と稱し、時樂軒(或は自樂軒)と號す。幕府目附役を務め、更に長崎の奉行となり、致仕して貞享四年丁卯(一七四七)に歿せり。

こげんしふ　五元集　四卷　榎本　其角

延寶より寶永までに詠みたる俳句を集めたるもの。其の間五度の改元を經たるにより「五元集」と名けたり。延享四年丁卯(一七四七)百萬坊言原と共に序文をも記したり。「續いふもの、全編を校合して序文をも記したり。「續五元集」四卷は、同年間の旨原の俳句を集めたるものにして、寶曆二年壬申(一七五二)に校刻せり。

◎榎本其角の傳は「旬兄弟」の下にあり。

こげんしふだつる　五元集脫漏　一卷　榎本　其角

「五元集」に漏れたるものを、江田誓の撰集したるものとて、近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」に收めたり。原寫本は眞田眞平氏の珍藏本なりと。

◎榎本其角の傳は「旬兄弟」の下にあり。

こげんじやうもくろく　御獻上目錄　一卷

幕府の聖堂へ、全國諸侯より寄附奉納したる圖書器物の目錄なり。末に元祿四年辛未(一六九一)九月中院と記せり。

こげんせいだくかう　古言清濁考　三卷　石塚　龍麿

我が古言の清濁を考究したるもの。古事記、日本紀の歌、又訓註萬葉集中の假字書等に就て、其の清濁を指示したるなり。五十音順に排列して、各其の所在を記し、正誤を示す事最と明かなり。本居宣長の序、及び寛政六年甲寅(一七九四)の自序あり。享和元年辛酉(一八〇一)出版す。

◎石塚龍麿は安右衛門と通稱す。遠江國敷智郡の人にして、本居宣長の門人たり。最も語學に通ず。

こげんせいだくろんねんきやうせうたい　古言清濁論韻鏡照對　木一卷　足代　弘訓

◎石塚龍麿の「古言清濁考」に、古事記其の他より列擧せる假名清濁の區別を、韻鏡圖の位置と音と

に對照比較したるものなり。

◎足代弘訓の傳は「寛居閒書」の下にあり。

こげんだいごたうざ　御兼題御當座　木一卷

享和三年癸亥(一八〇三)正月十二日の御會始より、四月十二日の御兼題までの詩歌を輯む。概ね三百餘首あり。

こげんてい　古言梯　一卷　梶取(カヂリ)　魚彦(ナビコ)

我が古言雅語を輯め、いろは順に排列し、各、一言、二言、三言、四言、五言とやうに順序し、各音を平假字にて記し、其の下に萬葉假字にて古事記、日本紀、續日本後紀、延喜式、萬葉集、新撰字鏡、和名鈔、三代實錄、古今和歌集等の用例を挙げ、假名遣、音の清濁を記し且、漢字をあて、語義を示したる一種の古言字彙なり。明和元年甲申(一七六四)八月の編成。同二年藤原宇萬伎の序、賀茂眞淵の跋等あり。木書を標註したるものあり。次に解題す。

◎梶取魚彦は下總梶取郡の人、伊能氏たり。(音通にて梶生を用ふることもあり)通稱を茂右衛門、號を淨生庵、俳名を青藍といふ。幼より讀書を好み、俳諧を善くし、また繪畫に巧なり。殊に梅と鯉とに意を得たり。中年以後賀茂眞淵の門に入りて日夜古學を精研し、遂に徒を集めて教授す。諸侯の聘禮を受くるもの多かりき。著書は木書の外に、萬葉干歌、奈良の葉、筆のさきこと、雨夜の燈火等あり天明二年壬寅(一七八二)三月二十三日、年六十にて病歿す。

こげんていおんせつせうたい　古言梯韻說照對　二卷　足代　弘訓

魚彦の古言梯にあげて、韻鏡圖の位置音等と比較對照したる漢字と、韻鏡圖の位置音等と比較對照したるものなり。

◎足代弘訓の傳は「寛居閒書」の下にあり。

こげんていしふい　古言梯拾遺　木一卷　田中　延香

梶取魚彦の「古言梯」に漏れたるものを補捨し、「古言梯」の體に編成したるもの。天保十五年甲辰(一八四四)十一月の自序あり。

こげんていしやうこ　古言梯掌故　木三十一卷

萬葉集其の他の語調を集めて、一々註を加へたるものなり。著者年代共に詳ならず。

こげんぶくしだい　御元服次第　木一卷

享保十八年癸丑(一七三三)二月朔日、皇太子昭仁親王御元服の略記なり。

こげんぶくしだい　御元服次第　木一卷

前項に解題せる「古言梯」に、千賀眞恒、村田春海、清水濱臣、山田常典等の考註を標註したるもの也。

◎梶取魚彦の傳は「古言梯」の下に出づ。

こげんぶくしだい　御元服次第　木一卷

安永十年辛丑(一七八一)正月元日、光格天皇御元服の次第を略記す。同日「後宴次第」、同七日「賀表白馬次第」を併せて錄傳す。

こげんほんおんかう　古言本音考　一卷　石倉　晉主

古言梯、假名拾遺等に漏れたる假名遣に關する調を集めて、其の假名を考證せり。

◎岡木保孝の傳は「韻鏡攷」の下にあり。

我が古言の本音に就て考究したるもの。即ち「古事記」「萬葉集」其の他の古書を引徴して、我が上古の聲音言語には濁音といふものあらざりしと論定したるものなり。文政十年丁亥(二四八七)十一月の作、同十一年本居大平本書に序して成書の由來を記せり。

◎石金音主は陸奥國信夫郡の人にして左次兵衛と通稱す。文化十年癸酉(二四七三)二月本居大平の門人となりて、我が古學の研究を嗜みし人なりと。

こげんやくかい
古言譯解　一卷　萩原　廣道

我が古言を五十音に列擧し、各、音數に順序して、一々近世普通の俚言に譯出したるもの。其の凡例に曰く、「此の書は先進鈴木氏が雅語譯解の例に倣ひて、上古の言を今の世の俚言に譯して解きたるなり」云々とあり。嘉永元年戊申(二二五〇八)十一月の凡例、及び西田直養の序を附し、同四年出版す。

◎萩原廣道の傳記は「源氏物語評釋」の下に出づ。

こげんやくつう
古言譯通　四卷　鹿持　雅澄

我が古言を通俗語に譯したるもの。卷首總論中に「此の書を書ける事のゆゑよしは、初學のともがらの、古の雅言にしかく〳〵とあるは、如何なる意ぞと問ふに、時々今の俗言に譯して説き諭さむとの煩はしさに、之れ見て知り易とて、古へぶりの歌學ぶともがらの、常に聞き得るともあるものから、言の義の、極めて悟り易からぬと、或はさる意の言ならむとは思ふものから、尚、いぶかしくて、定かにきはめがたき類と、或ほかゝる意なり、と漠く悟り得たりと思ふにも、尚き、たがへて、古人の意に戻れる類もあるとなれば、今はさる類の調を此れ彼れ啣かつみ出て、古きふみ見、古ぶりの歌よみする人のたづきとせるのみなり」云々といへり。さて其の古雅言は主として「萬葉集」より摘き出でて、一語毎に其の所在の卷目丁數等を記せり。其の他古事記、日本紀、宣命、祝詞の中よりもまゝ摘出せるもあれど、そは煩はしとて在所までは記さず。排列のあれど、そは煩はしとて在所までは記さず。排列は五十順音に從へるも、音數によりての次第には有らず。天保四年癸巳(二四九三)六月六日の總論を附し、同八年丁酉八月十四日の自敍を附す。全編四卷を春夏秋冬の四册に作り、別に一册本書の目次を附す。

◎鹿持雅澄は藤原姓土佐の和學者にして古義堂と號す。著書には萬葉集古義、同品物解、同名所圖考、同秋詞解、同雜攷、同卷詞編、雅言成法、言靈德川、舒言三轉例、用言變格例、結詞例、鍼灸、永言格、及び本書古言譯通等あり。就中「萬葉集古義」は百五十二卷の大部にて斯學に高價を有す

こご
娛語　一卷　星野　寶宣

著者の隨筆なり。天保三年壬辰(二四九二)の自序に「娛語とは何ぞや。自ら戯れ娛むなり。迂人の語、人豈に之れを聞かんや。自ら戯き娛む。或は學術を論し、或は雜事を記し、得るに隨て之れを錄す。聞よりも序次なし。之を人に示すに非ざるなり。然れども、世に迂人あらば、則ち亦取る所あらんか」と云へり。大體を窺ふべし。

ごご
唔語　二卷　名島　桃源

上卷に五十連音、ん文字、冠辭、阿志比彼、比佐加多、佐琉俄泥、いろは、旅行以前爲門出、眞似、道祖神、敏大神社、比佐豆知神社、湯立、煤拂、地獄の沙汰も金次第、布久津武、幸伊勢國、波多横山、渡唐天神、須利波太古等を説明し。下卷に長瀬神社、御饌殿、豎木、秋茄子嫁に不食、加太古、天狗、萬葉集攷加、赤染右衛門、百人一首、鬼頭、童頭藥、六代御前碑、葬儀、忌日等の雜説を記述したるものなり。文政七年甲申(二四八四)後藤聖民の序、文政四年柴田以文の序、文政九年高橋知周の序等あり。一名「雙槐の落葉」と云ふ。

◎名島桃源は慶會政龍の末子にして政方と稱し、雙槐園と號す。夙に國學を好み、谷川士清に就學し、更に京に遊歷して研究するところあり、國に歸りて豊志郡大村の里に寓居したりといふ。

ごこうげんせう
股勾弦鈔　一卷　星野　寶宣

股勾弦算法書。内題に「股勾弦鈔雜好一百五十箇法術」と題して、同題の解答を詳示す。寛文十二年壬子(二三三二)の自序あり。著者星野寶宣は通稱を勘衞門尉と稱す。

ごこくわうほうせん
五穀荒豐占　一卷　中西　敬房

農家に便ぜんため年中の水旱豐凶、物價の昂低等なば氣象によりて豫知するの法を記したるものな

り。望氣大意、遊應問答、水旱問答、桑麻問答、雨水問答、社日の雨の占、等の數篇を載せたり。安永九年庚子(二四四〇)の作。

◎中西敬房は字を如環と云ひ京都の書賈なり。天文算數の學に精通し、曆學法數原等の著あり。歿年未だ詳ならず。

ごこくくわつつならびにたけのなんによかう
五穀果實並竹之男女考　一卷　宮負　佐平

五穀、蔬樹、果樹等、凡て三十三種の雌雄を圖示説明したるもの。文政十一年戊子(二四八八)の著。

◎宮負佐平の傳は「草木撰種錄」の下にあり。

ごこくしいうべん
五穀雌雄辨　寫一册

五穀菜蔬を始めとして木綿、煙草、その他の草木等の雌雄を論じたるものなり。著者の名は、「雲藩漫筆某」とのみ記せり。

ごこくじやうのき
護國寺供養記　寫三卷

建武元年甲戌(一九九四)八幡護國寺供養の記。當日の詳細、前後の次第等を敍述す。長祿四年庚辰(二一二〇)筥取の奥書あり。「續群書類從」卷七百八十二上中下三册、釋家部第六十七に入れたり。

ごこくしよはつ
古刻書跋　一卷　栗原　信充

古代刻本の跋語を摹刻せしものにして、刻本の最も古き天平寶字の敕願の相輪陀羅尼の模刻を卷首に掲げたり。凡て十九種を收む。文政二年己卯(二四七九)の自序あり。近藤守重と同輯するところ也

◎栗原信充の傳記は「鞍經新書」の下にあり。

ごこくせつかいづ
五國接界圖　寫一鋪

唐山、朝鮮、琉球、韃靼、魯西亞の接界區畫を主と著せる地圖なり。年代著者共に詳ならず。

ごこくむじんざう
五穀無盡藏　二卷　原上　無休

養和寛文より享保天明に至るまでの凶年の出來事を記し、併せて備荒貯蓄、窮民賑恤の方法等をも述べたり。天明七年丁未(二四四七)の著。

ごこしふ
古語集　寫二卷

伊勢物語、大和語物、萬葉物語、枕草紙、及び狹衣の和歌を抄輯したるものなり。

ごごしふいくかい
古語拾遺句解　二卷　藤原　齋延

本邦故實の記錄なり。本書の發端に曰く、蓋聞く、上古の世未だ文字あらず、貴賤老少日々に相傳へ、前言往行存して忘れず、書契ありてより以來、四を誄することを好まず、浮華競ひ興りて、還て舊老を嗤る。遂に人をして、世を歷て彌新に、事代を遠て變改せしむ。願りて故實を問ふに、根源を識るものなし、國史家牒其の由を破すと雖とも、一二の委曲猶遺る所あり。愚臣言す、恐くは、絶て傳ふること無からん、幸に召聞を蒙りて、蓄憤を陳んと欲す。故に舊說を錄して敢て以て上聞すと云爾」とあり。以て本書の作意を知るべし。又此の書を拾遺と名けしに就て「和學通」に云く「太玉命は天照太神の御時より、皇孫降臨の時に至るまで、天兒屋根命と半角の神なるに、人皇に至りて兒屋根命の子孫中臣氏は代々盛にして、太玉命の子孫齋部氏は世々に衰へ、廣成の身に及びて漸く六位五位の官にて居りたれば、是を慣り悲みて、十一箇條の漏れ遺りたる事績を書きたて、作りし書なり」と。義後曰く「古語拾遺は正しき古書なれども、廣成が誣妄にして、元來書籍には非ず、齋部を申立る條々に無理ありしゆへ、誣妄の通には遂げざりしなり。古書なれば考證に備ふべし」と。卷末に大同二年丁亥(一四六七)二月十三日と記し。元祿九年丙子(一二五六)大伴重堅の跋あり。「群書類從」に收めたるは日下部勝皐の校本にして、敬巢二卷を附せり。本書の訓を正し、旬解註釋したるものには、芝山花守の「古語拾遺正訓」二卷、藤原齋延の「古語拾遺句解」二卷、海陽白谷の「古語拾遺示蒙節解」四卷、龍尚舍の「古語拾遺等あり。皆、つぎ〳〵に紹介す。尚、近年講義したるもあり。

◎齋部廣成は、其の先、天太玉命の孫、天宮命より出で、宮廷の祭祀を司れり。大同二年丁亥(一四六七)「古語拾遺」を著せり。

ごごしふいくかい
古語拾遺句解　二卷　藤原　齋延

齋部廣成氏の「古語拾遺」を摘句註解したるもの。本文を掲げて其の間に割註を插記せり。卷首に元祿十一年戊寅(二三五八)松下見林の序、及び同人の「太玉命註記」を載せたり。

◎藤原齋延は、或は修して藤齋延と書せり。國學者にして、「神道入重垣傳」五卷の別著あり。

こごしふいさんおう
古語拾遺纂註 四卷　磯部　昌言

「古語拾遺」に漢文註釋を加へたるものなり。廣く諸家の說を參酌取捨せり。乾卷三十五枚、坤卷三十六枚に寫傳す。

◎磯部昌言のことは、「總葉榮錄」の下にあり。

こごしふいじもうせつかい
古語拾遺示蒙節解 四卷　高田　宗賢

齋部廣成の著「古語拾遺」の每章各節に就て、國字の註解を施したるものなり。寶永四年丁亥(二三六七)の自序、同六年己丑の廢崎守齋の序あり。

◎高田宗賢は京師の人。吉兵衛を通稱とし、未白と號し、また海關白翁と號す。國學者を以て知らる。山崎闇齋の門に入りて、神道を唱へ神書を講じ徒弟に敎授したり。著書は本書の外に「伊勢物語祕訣」四卷、「枕草紙抄」三卷、「徒然草大全」十三卷等あり。

こごしふいせいくん
古語拾遺正訓 二卷　柴田　花守

齋部廣成の「古語拾遺」の音訓を正し、假字遣を明かにして、學生の讀誦本に供したるものなり。卷首に「古史徵」及び「古事記傳」にこの「古語拾遺」を評論したる文を抄錄して載せたり。

◎柴田花守は肥前小城の藩にて、劒國神社の權宮司に任ぜられ、後に實行敎の管長となれり。蘐園また祭園と號し、書をも善くす。八十餘歲にて歿せり。

こごしふいせう
古語拾遺抄 五卷　龍野　熙近

齋部廣成の「古語拾遺」の註釋。諸書を考據して疏けり。天和二年壬戌(二三四二)の自序に、疑はしきに遇ひては卽ち之れを闕て闕如す故に言餘抄と名けたる由あり。貞享二年乙丑(二三四五)出版す。

◎龍野熙近は伊勢山田の人。俗右衞門と稱し、倚舍、道旦、生白等の號あり。姓を修略して龍と稱せり。和學者を以て知らる。其の著書には南山紀行、凡下集、蒼雲興集、愚吟集、三餘隨筆、破記、破記、大成經破文、神代卷頭書、同祕記、同祕記、同注、同科解、同科解、同解體頭、神代章國論、同疎鈔、同疎鈔、神國三德評、同決疑編、神宮祕深祕鈔、神武紀五解、外宮神德略說、御鎭座本紀註、二宮祕祕鈔、伊雜宮勘文、八雲神詠祕記、山上幸神記、小熊野辨正記、尾上社勘文、六根清淨祕鈔、中臣祕深祕抄、同俗解、同俗解抄、緩靖紀注、古語拾遺抄、同言餘抄等あり。元祿六年癸酉(二三五三)刊行す。

◎齋藤一雄の傳は「拾遺和歌集」の下にあり。

ごこふ
五鼓譜 一卷

五鼓の譜を詳記したるものなり。正四位上勳五等朝臣倫秋藏書の奥書あり。

ごこまつのゐんおんひゃくしゅ
後小松院御百首 一卷　後小松院

卷二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀二十首、雜十首の御百首なり。「續群書類從」卷三百八十七、和歌部第二十二にあり。

◎後小松院は後圓融帝の太子。神器を後龜山帝に受けて卽位し給ふ。在位凡そ三十年にして位を皇子躬仁親王に後に稱光天皇と申す」に譲り、後花園帝の永享五年癸丑(二〇九三)御年五十七歲にて崩じ給ふ。

ごこまつのゐんほうぎょのき
後小松院崩御記 一卷　飛鳥井雅綱

歌學の書十九種二十一卷を合刻したるもの。卽ち「秘蘊抄三卷(朝恒作)」、新撰髓腦一卷(公任作)」、「袋草紙(俊頼作)」、後鳥羽院御口傳一卷、和歌式一卷(定家作)」、正風體抄一卷(同上)」、和歌庭訓一卷(同上)」、和歌口傳一卷(家隆作)」、近來風體抄一卷(良基作)」、莖玉集一卷(鴨長明作)」、纖の河上一卷(辨入道作)」、八雲口傳一卷(爲家作)」、夜の鶴一卷(阿佛尼作)」、耕雲口傳一卷、桂明抄一卷(堯孝作)」、八雲一言記一卷、和歌二言集一卷、和歌口傳一卷等を收めたり。元祿十五年壬午(二三六二)刊行す。

◎齋藤一雄の傳は「拾遺和歌集」の下にあり。

後小松院の永享五年癸丑(二〇九三)十月二十日に崩御在しまを追悼し奉れる記文にして、長歌短歌をも雜へ記せり。「群書類從」卷五百十八、雜部第七十三に收めたり。

◎飛鳥井雅綱の傳は「宗雅千首」の下にあり。

こころのざうし
心の雙紙 一卷　松平　定信

人心の形態と相應しからぬことをも論ぜず、衣紋正しき紳士にも、德裝り高き僧侶にも、中には鄙劣の心あるさまを、諷刺の圖に示して、數十篇を掲げたり。享和二年壬戌(二四六二)三月の自序あり。今其の全文を掲ぐ。「色うるはしく形みやびに、衣あざやかなれば、誰てふ心は誰かあらむ。彼の一指の延びざるだに遣つ國の藥師へたのみ得るは、一指の人にことなるを歎くにぞありける。心若しあらはれ出てたらば如何あらむ。かくるゝはあらはるるよりも苦しきものなれど、愚なる心からしらで過ぎ侍るにこそあなれ。樂翁、日比、我がうへ人の上にも、此の心顯れ出でたらばとやあらむと、清閑の一樂に思ひめぐらしけるが、今年春の末つかた、時疫行はれ、翁も疫にうみけるに、かたはらに居ける養淺に筆とらせて、清閑の戲れに、心のあらはるゝさまを畫かせて、みづからもかきして、心雙紙となむ名け侍りぬる」といへり。以て其の心を知るべし。「百家說林」の中に收めたり。

◎松平定信の傳記は「花月草紙」の下にあり。

こころのたね
心の種 三卷　橘　守部

歌學上の注意を述べたるもの。「歌はかならずよむへきもの、事より、てにをはの活用」等に至るまで二十一箇條あり。天保七年丙申(二四九六)の自序を載せたり。同九年出版す。

◎橘守部の傳は「稜威道別」の下に掲げたり。

こころのたね
心の種 二卷　萩原　廣道

詠歌に必要なる言詞、書式、作法等を記して初學者に便したるものなり。本書には別に拾遺もあり。著作の年月を記さず。

◎萩原廣道の傳は「源氏物語評釋」の下にあり。

こころのたねしふ
心の種拾遺 二卷　萩原　廣道

前編「こころのたね」二卷に遺漏したる諸要件を集說したるものなり。これまた著作の年月を見ず。

◎萩原廣道は「源氏物語評釋」の下に傳せり。

こころのたびのにつき
許古路乃旅能日記 一卷

今年神無月、淮后一品の宮、武藏野の月の宮より、九重の花の都に移らせ給ふを、河崎の驛まで送り奉れる由を記し、河崎より京までの日數を計り、其の御經過の所々を想像して記せるより、「許古路乃旅能日記」とは名けたりといふ。著者は「法眼古軒」とのみ記せり。

こころのつき
心の月 一卷　安祥院

著者が天明元年辛丑(二四四一)の春より、翌年秋にかけて詠み出せるところの歌を集めたるものにて概ね三百餘首あり。

◎安祥院は三浦五郎左衞門義知の女にして、松平叉八郎親春の養女となり、惇信院德川家重の部屋女たり。寬政元年己酉(二四四九)四月六日歿す。上野普門院に葬る。安祥院は其の法號なり。

こころひとつ
心ひとつ 一册　中島　貞義

俳句の集にて、寶永三年丙戌(二三六六)京都にて出版したるものなり。

◎中島貞義は後に貞辰、貞宣と改む。通稱を內藏之丞といふ。松永貞德門の俳人にして、京より江戶に移り、鍛冶橋に住せり。

こころいくさものがたり
古今軍物語 卷一卷

豐臣秀賴の事より、以下諸國諸種の雜說、遍照、兼好等の事をも記せり。必ずしも軍談のみにあらず。元文元年丙辰(二三九六)の奥書あり。

こころいんれい
古今印例 二卷　曾根　隼

古今諸家の印章譜なり。凡例に「此の編大率諸名家印譜、及び書畫法帖、或は名家眞蹟に取り、敢て謬なき者を載せず」と。天保十二年辛丑(二五〇一)松崎復の序あり。

◎曾根隼は肥前唐津の藩士なり。通稱を定左衞門といひ、字を翔卿と倂し、十齋と號す。名工益田勤

齋に從ひ、篆刻家を以て知らる。嘉永五年壬子(一八五二)九月二日病歿す。

ここんいんれいにへん
古今印例二編 二卷　曾根　隼

本書の凡例には、「印、式あり法あり、而して前編簡約を要し、其の類似のものを合併して部を立つ。恐くは初學の探索を煩す。故に今區別して部を立つ。前編缺漏あるものは再び其の部を設く。然らざれば則ち擧げず、編中一二注解を下すものは篳篥に便するのみ」云々といへり。嘉永二年己酉(一八四九)佐藤悦、同三年安積信の序等あり。

◎曾根隼の傳記は「古今印例」の下に出づ。

ここんえうみかう
古今妖魅考 五卷　平田　篤胤

我が古今に傳說せる妖怪に關して說明したるもの。古今の記錄物語書等を探りて、謂ゆる天狗、妖魅の種々に世を亂し、或は地獄、極樂などいふを變現して人を惑はし、或は異驗なども見せて人に信を起さしむる有樣などを說き、且其の物等に、三熱の苦みといふ事のある因緣までを具に論じ盡せられたる書なり」と「伊吹能舍著攜書目」に云へり。天保二年辛卯(一八四九)桂齋正の序あり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下に在り。

ここんえうらんかう
古今要覽稿 本二百五十四卷　屋代　弘賢

神祇、天文、地理、神璽、時令、居處、禪敎、人物、姓氏、官職、政事、和歌、小學、飲食、器財、禽獸、草木、雜事の十八部に分類して、古今の諸說を集錄したるもの。考證頗る該博なり。此の書は文政天保の頃、幕府の命に因りて弘賢總判となり、屋代通賢、大河戶儀成、志村知孝、橋本好舉、山下正房、林高典、栗山定與、南條近行、栗原信充、松岡行簡、岩崎常正、其の他數人、相會して編輯、校正、圖畫、評寫等を分擔し、以て纂輯の功を竣へたるものなりと云ふ。まゝ本書の部分を摘抄して寫傳單行するものあり。

◎屋代弘賢は江戶の人にして世々幕府に仕ふ。最初詮賢と名け、後に弘賢と改め、更に詮丈と改稱せり。號を輪池といふ。和學を塙門に修め兼ねて書法に熟達せり。幕府の命筆に擧げられて祿百俵を受く。其の門に就きて業を受くるもの三千人の多きに至れりといふ。著書には、伊勢物語參考、和歌入門相見之記、梅檀瑞像考、有卦無卦考、加津美考、鳴之巢、道之幸、道成寺考、通賢花暦抄、琉球狀、高野大師書訣註、不忍池罪抄、輪池雜錄、輪池叢考、古今要覽稿抄、武家名目抄、古今倉庫、古文孝證、古今經附錄、歸田の意、及び本書古今要覽稿の大部等あり。天保十二年辛丑(一八四一)五月十八日、年八十四にて歿す。

◎屋代弘賢の傳記は「古今要覽稿」の下に在り。

ここんえうらんてうしんもくろく
古今要覽調進目錄 本一卷　屋代　弘賢

「古今要覽」五百六十册を、漸次呈覽したる目錄なり、一面より云へば、同書の總目錄ともいふべし。今呈覽の年時を見るに、文政四年辛巳(一八二一)十二月より始めて、天保十三年壬寅(一八四二)正月に至る二十二年間、四十五回に、五百六十册を獻上したるなり。

◎屋代弘賢の傳記は「古今要覽稿」の下にあり。

ここんえんかくかう
古今沿革考 一卷　後藤　光生

和漢古今の雜考。印璽、花押、圖扇、唐鞍、烏帽子、金銀、地誌、器物其の他雜多の物に就て其の沿革を考究したるものなり。享保十五年庚戌(一七三〇)の自序あり。

◎後藤光生の傳記は「甘蔗記」の下にあり。

ここんえんかくかう
古今沿革考 本一卷　柏崎　永以

本邦輿地、其の他の沿革を考證したるものなり。年代詳ならず。

◎柏崎永以の傳は「參考落穗集」の下にあり。

ここんかいひつき
古今夏夷筆記 本二卷

古來我が國と、諸外國との關係を、順序に記したるもの。上は垂仁帝の三年甲午(六三四)新羅國の來

貢、景行帝の時、日本武尊の蝦夷征伐、神功皇后の三韓征伐等より、下は文化年中魯西亞人の出入等に至る。記事は最も簡にして、事實は當時の往復書等掲げて確實を期せり。

ここんかうしよくかう
古今交蝕考 本一卷　保井　春海

推古天皇の三十六年戊子(六二八)の日蝕より、貞享の蝕に至るまで、二十四蝕五十一事を記せり。內閣文庫に特別書として所藏せり。

◎保井春海の傳記は「新撰曆命」の下にあり。

ここんがくへん
古今學變 三卷　伊藤　長胤

古今學問の沿革異同を論じたるもの。享保七年壬寅(一七二二)四月の自序に、其の父二千餘年の教法を看破して復古の記を發す。其の遺言を繼で唐歿以來宋明に至る學問教法の異同なつ゛いで其の變を審すよしを云へり。以て其の梗概を窺ふべし。延享元年甲子(一七四四)奥田士亨の序を附し、寛延三年庚午(一七五〇)出版せらる。

◎伊藤長胤の傳記は「蟹甲小錄」の下に出づ。

ここんかぢのはやみだし
古今鍛冶銘早見出 二卷　尾關　永富

其の凡例中に「遠く大寶中の天國を始として、今代に至るまで、年歷時と千百餘年の間、其の國時代を校正し、攷するところの銘、凡そ一萬〇三百六十餘工、一頭字いろはの順を以て次第をなし、見出の速なるに便す」と云へり。能く本書の包容攬載等を紹介す。嘉永二年己酉(一八四九)出版す。

◎尾關永富は通稱を善兵衛と曰ふ。著書には別に古今刀劍正眞便覽、古刀銘鑑等あり。

ここんかなづかひ
古今假名遣 一卷　橋本　稻彥

古今假名遣に關する諸を集めたるもの。凡例によれば、記、紀、萬葉、新撰字鏡、和名抄の類に出でたるを古假名といひ、定家の假名遣を基として荒木田某の集めたる類字假名遣といふを今假名といひ、右二書に照し、字音の假名をも加へて此の書を作りたる由なり。文化九年壬申(一八一二)石津亮澄の序あり、嘉十年出版す。

◎橋本稻彥は通稱を中壘と云ひ、薩州の國學者なり。木居宣長の門下に入りて造詣甚だ深く大平翁を輔けて家學の復興を勉め、同門下の巨擘と稱せらる。本書の外訂正姓氏錄等の著あり。文化の季年に歿したり。享年未だ詳ならず。

ここんかんじやうしふ
古今感狀集 本三卷

武士の感狀を集錄す。元暦年中のより元和年中の年間の物たり。終りに感狀の認方故實等を載せたり。

ここんきけんれんしゆほう
古今奇驗連珠方 本一卷　活　民子

種々の實驗治療法を集錄したるもの。自序に「古へに亙り今に及びて、奇驗累々として連珠の如きものを編集し、以て古今奇驗連珠方と名づく」云々といへり。享德三年甲戌(一四一四)の自序なり。

ここんきだんしふ
古今奇談集 本二卷

事物の起元、名家の略傳、神社古蹟の由來、字義訓話の當否等を說きたる隨筆なり。上卷に二十、下卷二十四、凡て四十四項より成る。

ここんきんぺいろく
古今金平錄 本一卷　狩野　探信

諸般の絵原由來を考證し、其れに關する和歌俳句、及び圖畫等を記入したるもの。目錄には門松、雛祭、盆踊、節季候、厄拂、風呂屋之說、祭之考、鑑之始、臘脂、はやり歌、申古之質朴、炭團、葬之市、さいふ、其の他とも凡て四十三項あり。天保三年壬辰(一八四二)の作。

◎狩野探信は建家なり。名を守道といふ。世に守道探信と稱す。與齋と號し、また惡筆兵衛の狂號あり。探牧の長子にして家流の構に違して德川將軍家の畫事を勤む。天保六年乙未(一八三五)五月五日、五十一にて歿せり。

ここんくわつるんかいがふづ
古今括瀾開合圖 本一卷　僧　文雄

韻鏡、洪武正韻、五音集韻、古今韻會の四書括瀾開合の異同を一圖に作りたるものなり。末に同自撰刻韻逐序例總目を載せたり。寛延元年戊辰(一七四八

入と記せり。
◎文雄は丹州の人、中西氏を稱し、無相、蓬然、蓮社、僧綱等の號あり。京都了蓮寺十七世の住職となり、後浪華傳光寺に住す。夙に儒學に志し、殊に音韻の學に通ず。著す所に磨光韻鏡、磨光餘論、九弄辨、經史疏音、翻切伐枝、三音正僞、廣韻字府、古今韻栝、韻鏡律正等あり。寶曆十三年癸未(一七六三)九月二十三日、六十四にて入寂せり。

ここんぐんりんいつさくせう
古今軍林一徳鈔　二十卷
最初武道に關する或問二十六箇條を說明し、出陣、押陣、陣令、以下數十項、軍陣職掌の服制要事を記述したるもの。著者未詳の在來古本につきて、山本倫勝が校正したるなり。明曆二年丙申(一六五六)出版す。

ここんけふかくでん
古今俠客傳　木五卷
古今の俠客事績を輯錄假名書したるものなり。五卷二册に寫傳す。

ここんげんめつき
古今滅滅記　木三十三卷
古今衰滅家の事歷を記したるもの。秀吉時代以來天和年間に至る凡そ百年間に、衰微若しくは滅亡したる名家二百五十餘家の事績を敍記す。就中石田三成、大谷吉隆等に係る記事は尤も詳細にせり。

ここんけんもんすゐひつしふ
古今見聞隨筆集　木二卷
明曆三年丁酉(一六五七)江戸本郷本妙寺の火事一件より、文化年中までの江戸及び諸國の出來事五十二條を筆記したる隨筆なり。

ここんこつたうかう
古今乞盜考　木一卷　平田　篤胤
古來の惡魂、僞官、妖怪共の他の奸曲事實を輯錄して痛く筆誅を加へたるものなり。嘗て源順の和名鈔人倫部乞盜類中の基礎說に感するところありて、本書を著せりといふ。
◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

ここんしきのとも
古今四季友　二册　小谷(タニ)　立靜
著者の俳諧集にて、盤窓の序(一七三一七)九月の編にかゝる。著者小谷立靜は俳諧道遁」あり。

ここんしせん
古今詩僊　七卷　戸崎　允明
「唐詩選」に倣ひて本邦古今の詩人九十六家、三百四十三首を集めたり。卷一五言古詩。卷二七言古詩。卷三五言排律。卷四五言絕句等に排す。明和元年甲申(一七六四)の自序あり。
◎戸崎允明の傳記は「國語考」の下にあり。

ここんしまそく
古今書則　一卷　菅原　忠俊
菅家の書則を記述す。卽ち古今傳授筆法十訣を演義したるもの。漢文にて記せり。光格天皇の文化七年庚午(一八〇七)の自序、同九年菅原長親の序、文化七年高岡秀成の跋等あり。著者菅原忠俊は法橋たり。

ここんしんがくるゐじゆせう
古今神學類聚鈔　百卷　眞野　時繩
古今神學に關する類抄なること名の示すが如し。著者生平涉獵するところの、歷史家牒中より、國朝の事實、諸社の傳略等を筆記したるものなり。神國編六卷、神道編五卷、神階編十二卷、諸院編六卷、祭物編四卷等は正德年中より享保年中までに漸次刊行し、其の餘は寫本のまゝ傳ふ。東山天皇の元祿十一年戊寅(一六九八)松井見傳の序、及び自序あり。
◎眞野時繩の傳は「異域同日譚」の下に在り。

ここんしんだうへん
古今神道編　五卷　眞野　時繩
神道の事を論辨し、卷一には神國道說、神道字義、中極之辨、理當心地之辨、三教枝葉花實說。卷二には神道受用、神道僻見辨、神學時宜。卷三には神道盛衰、元本宗源、唯一神道說、社例傳義。卷四には兩部習合、諸行事、神道髓腦宗源行事。卷五には十八神道、印相、灌頂、三元三妙三行加持、吐普加身依身多女、神祕等を敍錄せり。正德五年乙未(一七一五)に成る。「古今神學類聚抄」百卷中より、「神道編」五卷を單行したるなり。
◎眞野時繩の傳は「異域同日譚」の下に在り。

ここんすうえうしふ
古今樞要集　木三卷
外科の傳書金瘡治法に關するものを集錄す。著者年代共に詳ならず。

ここんすまふたいぜん
古今相撲大全　五卷　木村　政勝
相撲に關する故實沿革を記したるもの。凡例第一に曰く「此の書もと三卷、今中下を分ちて五卷とす。其の上卷は和漢相撲の鑑觴、及び上古相撲節部領使の事を記し、中卷は古今珍らしき相撲の古書に散見するものを集む。下卷は當時勸進相撲の古實、予が相傳、及び古老の聞傳へし事を記すし」とあり。其の大概を知るべし。寶曆十三年癸未(一七六三)の作なり。著者木村政勝は寶曆年中の相撲行司たり。

ここんせいごでしふ
古今制度集　木二十一卷
天正慶長以來、朝廷の制度、公家武家の諸法度等を雜錄したるものなり。

ここんぜいむえうらん
古今稅務要覽　木一卷
水戶領の地租損益高下を記したるもの。萬治元年戊戌(一六五八)より、享保元年丙申(一七一六)に至る五十八年間のものなり。

ごこんせつ
五魂說　一卷　龜川　長保
五魂說、五產靈神社圖說、五魂分位圖說、論幽顯死生、論萬物各有天地、論祭政一致、論可復學令學課の七條を口述したるものなり。異英の假名文に編次し、明治十四年辛巳(一八八一)出版す。
◎龜田長保は通稱保次郎、字は中之、靈谷學孔堂、本敎々會、穗吉機等の號あり。もと下總國岡田郡東蕗田村の人、鈴木氏なりしが、龜田綾瀨に從學し、其の養女に配して遂に師家を嗣げり。性寡慾にして議論を好み、義理明晰、論旨公平なり。晚年閑窗落の資師となり、獻替する所ありしが、維新の際志士に連累して投獄せられたることあり、後、東京深川に住し、更に本所横川に移り、明治十四年辛巳(一八八一)八月二日卒す。壽七十五。

ここんせんくわかん
古今泉貨鑑　十二卷　朽木　龍橋
古今錢人花押叢　一卷
古今錢人の花押と小傳とを記したるもの。其の中東山殿より千ノ宗守に至る八十人は花押小傳を並に分ちて說明したるものなり。文久元年辛丑(一八六一)百序を附して同年出版す。著者松井義は別に「和漢合統」二卷を著せり。

ここんこうたいかう
古今象棋　三卷　本因坊丈策
我が國古今の象棋譜なり。序は博局にして、こゝには將棊盤の事に用ひ、象棋」は卽ち將棊のことなり。仁孝天皇の天保十二年辛丑(一八四一)の自序を附し、同十四年上梓す。著者本因坊丈策は江戸の棊手なり。

ここんしやへい
古今象棋　三卷　本因坊丈策
我が國古今の象棋譜なり。序は博局にして、こゝには將棊盤の事に用ひ、象棋」は卽ち將棊のことなり。仁孝天皇の天保十二年辛丑(一八四一)の自序を附し、同十四年上梓す。著者本因坊丈策は江戸の棊手なり。

ここんしやうかい
古今字樣考　一帖　松井　義
古今の字體を、省文、從古、通用、選時、相似の五類に分ちて說明したるものなり。文久元年辛丑(一八六一)百序を附して同年出版す。著者松井義は別に「和漢合統」二卷を著せり。

ここんしやうへい
古今象棋　三卷　本因坊丈策
我が國古今の象棋譜なり。序は博局にして、こゝには將棊盤の事に用ひ、象棋」は卽ち將棊のことなり。仁孝天皇の天保十二年辛丑(一八四一)の自序を附し、同十四年上梓す。著者本因坊丈策は江戸の棊手な

べ挙げ、珠光より三谷丹下に至る五十四人は単にその小傳のみを記したり。延享三年丙寅(一七四六)茶湯の序あり。同年上木す。

ここんちゃじんけいふ
古今茶人系譜　一巻　鈴木　政通

本邦室町幕府以来に於ける茶人伎傳以上の傳統系譜なり。即ち将軍家の師範たる南都称名寺珠光、武田因幡守紹鷗、田中與四郎宗易、古田織部正重勝、小堀遠江守政一、片桐石見守貞昌等六宗匠を始めとして、其能、其藝、其相の三阿彌、尚其の他等を傳せり。天保三年壬辰(一八四二)冬十二月の凡例及び成島司直の序を附して同年出版す。

◎鈴木政通は文政天保頃の人半寸庵の門人にして早部庵と號し、世々茶局を営り斯道の明者なりといふ。別著に「茶道傳統」二巻あり。

ここんちょもんしふ
古今著聞集　二十巻　橘　成季

政教文藝雑事に關して著しき傳話を記す。「宇治拾遺」「江談抄」等に倣ひて著せるなり。部類を神祇、釋教、政道、文學、和歌、管絃、舞、能書、術道、孝行、恩愛、好色、武勇、弓矢、馬藝、相撲、畋獵、博奕、偸盗、祝言、哀傷、遊覧、宿執闘諍、興言、利口、怪異、飲食、草木、魚蟲、禽獣等に分てり。建長六年甲寅(一二五四)の自序あり。東山天皇の元禄三年庚午(一六九〇)上梓す。本書は「國史大系」の十五巻にも収めたり。該書は、佐藤球氏所藏の古寫本、及び史籍集覧本を以て流布刊本に増訂を加へたるものなりといふ。

ここんでんせいつうかう
古今田制通考　本　九巻　船橋　慥信

皇國度量衡の制源、和漢度量衡比較、等の目を最初として、古今の田制、貢法、檢地、其の他の沿革來歴等を詳しく考究したるものなり。

ここんにつけいれき
古今日契暦　二巻　平田　篤胤

「伊吹能舎著撰書目」に、「皇國は皇美麻邇々藝命の天降座せる元年に當る、庚申の歳の歳首、甲辰冬至より今是天保四年癸巳歳の冬至、戊寅の日に至りて、凡て四千八百九十四年、積日百七十八萬七千五百三十四日が間の目記暦なり」云々といへり。凡そ五百巻にて完成すべきの由なれど、世に出でたるは初編、二編の二巻のみなり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下に出でたり。

ここんにはかせん
古今俄選　五巻

古今俄滑稽の淵源沿革を記し、更に其の種類方法を列擧して、流行の時代を記したり。安永四年乙未(一七七五)秋九月朔日の凡例あり。

〔一四三五〕出版す。

ここんはいかいめいだいしふ
古今俳諧明題集　本　五巻　建部　涼帒

古今の俳諧數百首を集めたる題のみを出し集めたる由なり。春夏秋冬雑の五冊に作り、毎冊巻首に目錄を掲げ、毎俳諧の下には必ず國所と人名とを記せり。寛暦十三年癸未(一七六三)秋九月朔日の凡例あり。

◎建部涼帒の傳は「歌文要語」の下にあり。

ここんはうゐ
古今方彙　一巻

古今の處方百數十種を記し、終りには藥性歌を附したり。著作の年月と著者とを詳にせず。

ここんひゃくせんづ
古今百錢圖　一巻　中谷　願山

古今種々の貨幣を圖錄したるものなり。享保六年辛丑(一七二一)に成る。

◎中谷願山の事は「孔方圖絵」の下にあり。

ここんひゃくふくだん
古今百福談　四巻　青路館主人

最初に福待の來由を記し、續て孝子、獵師、俳人、倫兒、座頭、香道、勇者、歌人、忠臣、御者、醫師、慈悲者、町人、信心者、武士、遊藝、蹴鞠、風流人等の幸福を得し物語に、教訓の意を寓せしものなり。明和十年(安永二年)癸巳(一七七三)の著。

ここんひやくものがたりひやうばん
古今百物語評判　五巻

越後新潟にかまいたち有る事、雄岸和尚肥後にて轆轤首見給ふ事、鬼といふに様々の號ある事、以下凡て數十條、虚實相混じて小説的に物したるなり。寛享三年丙寅(一七八六)季夏の梓行。

ここんぶけせいすゐき
古今武家盛衰記　本　三十巻

慶長元和寛永の頃に斷絶せし諸家の略譜なり。其の體例、先づ大綱を掲げ、更に細目を分記して興廢の由來する所を示す。本書に載する所は、石田三成始終譜、大谷吉隆興廢譜等を初めとして、都合百十五譜、數百條あり。間々杜撰の點なきに非ずと雖ども、斯る時代に在りて本書の如き豊富の史料を集覧せんこと、亦成し易きの業に非ず。後世史家の好材たり。著者の氏名、撰集の年月を記さゞれど、寛文年間(一六六一〜七三)の作なるべしと云ふ。

ここんぶけどうじくん
古今武家童子訓　五巻　神田　勝久

古來武家年少者の戰功事績を列擧して、同流者の訓誡奨勵に充てたるもの。安永三年甲午(一七七四)出版す。

◎神田勝久の傳は「駿河名記」の下にあり。

ここんぶゆうおぼえがき
古今武勇覚書　本　二巻

戰國以來の武勇、智謀、義烈等に關する事を雑載す。材料は菊池軍記、太平記、前太平記、北條五代盛衰記、皇朝通記、關原合戰、信長記、太閤記、三河記等よりとれり。

ここんぼつくてかがみ
古今發句手鑑　一巻　尾形　乾山

芭蕉、其角、嵐雪、許六、以下俳諧諸家の眞蹟を集めたるもの。編者尚古老人が、安政四年丁巳(一八五七)の端書に曰く、「蝶夢が眞蹟集にならひて、人々の自筆を集めて初學びの弄となさむと、往し年より寫し置きしに、今また逝きれなましへて、古今發句手鑑と題して、山櫻の老も若きも花をさかせん事を願ふものから、それに漏れたるは、今も昔も後編にあらはすことしかり」と。

◎尾形乾山のことは「古今名物類聚」初編の下にあり。

ここんめいげん
古今名諺　一巻　荒井　公廉

漢書中に古來引用せるところの名諺を摘出して各、其の出例を示したり。寛政十年戊午(一七九八)奥田元繼の序あり。

◎荒井公廉は名を狗、また龍平といひ、庵號また牛藏と稱し、鳴門、南山、狗庵、蝮屋軒等の號あり。岡波の那波魯堂に程朱の學を受け、また江戸に出でて林述齋に學び、藥成りて淀藩の儒官となり殊遇せらる。著書には中庸新疏、學庸挨注、孝經觀注、增注孟子外書、江湖詩鈔、師弟錄、濱城紀聞、吉野志、芳野新詠、浪華四時雑興、還都前後金石遺文、狗庵隨筆等あり。嘉永六年癸丑(一八五三)七月二十九日、年七十九にて歿す。

ここんめいぶつるゐじゅ
古今名物類聚〔初編〕　七巻　尾形　乾山

茶器の圖説。中興茶入部五巻、大名物茶入部二巻より成る。凡例中に名物といふことを稱していへるあり、「慈照相公茶道舊器にすかぜ給ひ、東山の別業に茶會を設け、古今の名畫、妙墨、珍器、資盧の類を案め給ひ、なほ當時の數奇者、能阿彌、相阿彌に仰せありて、彼此に求めさせられ、各其の器の名と假とを定めしめ給ふ。次て信長、秀吉の二公も、亦此の道に好み給ひ、利休、宗及等に仰せて、名を命し、假をも定めしめらる。後世是れ等の器を稱して名物といふ」云々。といひ尚、其の後を中興名物、次を大名物と稱する等の所由を記したり。本書は右東山時代以下の諸器即ち唐物、古瀬戸、春慶、藤四郎、金華山、破風の類を圖示し、寸法所藏等に至るまで詳に記載せり、天明七年丁未(一七八七)の凡例あり。寛政元年己酉(一七八九)上梓す。

◎尾形乾山は倫古老人、又、陶齋と號す。別に古今名物類聚二編(寛政元年上梓)、同三編(同年上梓)、同四編(同三年上梓)古今發句手鑑(安政四年著作)等の著あり。

ここんめいぶつるゐじゅ
古今名物類聚〔二編〕　五巻　尾形　乾山

初編に續きて茶器を圖説す。目次には、後窯、國燒、天目茶碗、樂燒茶碗、茶杓、茶入、茶箱、壺、水指、釜、硯等あり。寛政元年己酉(一七八九)上梓。

◎尾形乾山のことは「古今名物類聚」初編の下に出せり。

ここんめいぶつるゐじゅ
古今名物類聚〔三編〕　四巻　尾形　乾山

前二編の拾遺にして亦た茶器を圖説す。藤四郎、金

華山、破風、唐物、古瀬戸、香炭、掛物、歌の物、小倉色紙、香爐、盤、盆、香等あり。寛政元年己酉(一四九)上梓す。

◎尾形乾山は「古今名物類聚」初編の下に傳せり。

ここんやうじやうろく　古今養生錄　十五卷　竹中　敬

古今數多の書中より其の衛生法に關する事を集錄大成したるもの。其の凡例に曰く、「凡そ歷代の方書修養法を載すと雖も、雜糅混淆して未だ嘗て其の全書を見ず、王中暢泰定の養生主論の如き僅に一萬餘言、且其の要とするところ許多なし。蓋、診視の暇、電閲する所を錄し以て之れを集編す」と。修養總論、四時修養、平生旦夕、居所、衣服、食廚、飲酒、飯菜、飲食禁忌、情志、道引、修養諸術、急救諸術、婦人、小兒、壓疾、呪由、鍼灸等の諸編より成る。東山天皇の元祿四年辛未(一三五一)林道春、高元泰、山田晉、竹厚の序及び自序あり。同五年壬申出版す。

◎竹中敬は字を敬昌といひ、通庵と稱す。江戸の醫家なり。

ここんるゐじゆ　古今類聚　三十四卷　山本　春正

古今の和歌を集め、其の下の句の頭字により、いろは順に類聚したるもの。二十一代集、伊勢物語、大和物語、源氏物語、狹衣、六家集等より抄拔し、各首の所在、同謌人等を記せり。古歌を考索せんには尤も好き乘なるべし。

◎山本春正の傳記は「源氏物語絵入」の下にあり。

ここんるゐじゆえちぜんこくし　古今類聚越前國志　十七卷　有馬　純芳

越前國地誌にして、卷一に建置沿革、疆場、形勝、政事、郡界並磽地。卷二に山川並原野。卷三に租庸調、土產未成、城邑並治所、關梁、驛路。卷四に神社。卷五に佛宇、墳墓。卷六に古蹟。卷七に名宦、流寓並蕃客、人物、列女、浮屠。附錄に輿地圖あり。國史、律令、格式、古人の文章詩歌、稗官小說等に材料を得たるところなり。文化元年甲子(一二四六)刊行す。

◎有馬純芳は字し、憑目と號し、清太夫と稱す。山川を跋涉して遺事を掇拾し、公の用舍を取り七年を經て此の書を成せりといふ。

ここんるゐじゆひたちこくし　古今類聚常陸國誌　十卷

常陸全州の建置沿革、疆域名、郡名、風俗、山川、土產、城邑、治所、關梁、驛路、神祠、墳墓、古蹟、名宦、流寓、人物、烈女等を類聚したるもの。漢文にて記す。次に寛永年中水戸黃門賴房公の命を承けて家臣岩月恒隆に撰ばしめたる常陸國中古以來圖あるべきを編纂して此の書を成せりといふ。

ここんるゐじゆいきでん　古今類聚名譚傳　二十五卷　小野　高尙

古今の人名を網羅して其の生卒官位等を略記す。漢文にて、排列の法は天子、后妃附嬪宮、嬪院、皇子附諸王、公卿、雲客、武家、婦女雜纂の八門に分ち、各其の頭音のいろは順に列載す。明和元年甲申(一二四二四)の作。「番外雜書解題」には原本二十五卷中、十七、十八の卷、夙く佚失したる由を記し、今目擊するところは僅に八卷なり。然れども暫く原卷數を記して尙探索すべし。

◎小野高尙は通稱を忠左衞門といひ、竹叢また佚泰子と號す。初めの名は平直方にて、秋山色樹、曉樂齋等の寓名あり。其の著書には、改選武家盛衰記、中興武林雜記、考訂細選錄、東武編年要錄、新編城主記、竹園小傳、信玄年譜、溫故園筆、竹叢漫筆、夏山雜談等あり。

ここんれきだいえんかくちづ　古今歷代沿革地圖　一鋪　長久保玄珠

大清國、海陸道程圖、高貴九州圖(附古帝王都)、周職方氏圖、春秋列國圖、戰國七雄圖、秦三十六郡圖、西漢州郡圖、東漢州郡圖、三國州郡圖、兩晉南北朝圖(附五胡十六郡)、唐十道圖、大明一統志圖、亞細亞小東洋圖。以上十三圖、皆朱色にして著せり。寛政元年己酉(一二四九)立原萬の序、乾隆五十四年古杭沈琥綸の序等あり。

◎長久保玄珠の傳記は「長崎紀行」の下にあり。

ございえぶるる　御齋會部類　一卷

御齋會の記錄を集めたるもの。御齋會は、正月八日より十四日に至る七日間、大極殿に於て、護勝王經

を講じ國家護持を祈らるゝ公事なり。

ござうろくぶしだい　五臟六腑次第　一卷

針灸の上より、五臟六腑の位置、疾病の事を圖說したるものなり。

ござがのゐんうたあはせ　後嵯峨院歌合　一卷　後嵯峨天皇

寶治二年戊申(一九〇八)の歌合にして、前權大納言藤原朝臣爲家の判にかゝる八十五番歌合なり。

◎後嵯峨天皇は土御門帝の第二皇子にして、御名を邦仁といふ。四條帝の御崩後、平泰時迎へて之れを立つ。在位四年にして、位を太子久仁に譲り、以後二十餘年、政を院中に聽き給ふ。蹴鞠を好みて、中興の祖と稱せられ給ふ。文永九年壬申(一九三二)薨去五十三にて崩御し給ふ。

ござがのゐんくわうとうけいづ　後嵯峨院皇統系圖　一卷

後嵯峨院(邦仁)より出でて、十數代の本枝皇裔を譜圖す。「續群書類從」卷百〇七系圖部第二にあり。

ござんいんかう　孤山遺稿　十六卷　薮　慥

著者の遺稿を集めたるもの。文化十三年丙子(一二四七六)島田貞幹の序あり。孤山は著者の號なり。

◎薮慥は字は士厚、孤山又は朝陽山人と號し、茂次郎と通稱す。幼にして江戸京都に遊學すること數年、國に還りて熊本藩の教官となり、大に重用せらる。博く經史に渉り詩文を善くし程朱の學を尊崇す。其の著すところ本書の外に「藥洋集」あり。寛政二年庚戌(一二四五〇)病を以て職を辭し幾くもなくして歿せりと云ふ。

ござんおんいんのりもくろく　御產御祈目錄　一卷

元永二年己亥(一一七九)後賀門院御產の時の諸佛御祈願を始めとして、延慶四年(延元二年)丁丑(一九七七)宣政門院御着帶の加持等に至る目錄なり。

ござんきよもんだふ　顯山居問答　六卷

卷一には言葉の事、聲音の事、延約言の事、七十五韻の事等を論述し、卷二以下に、てにをは等の事を說明せり。天保四年癸巳(一二四九三)五十川支謙寫本の奥書あり。

ござんぐんしかう　五山群綱考　一卷　林　道春

五山僧侶の列名書なり。羅山の自筆本なるより、內閣文庫に、特別書として所藏せり。

◎林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

ござんけたかばつ　御三家農場絵圖　一鋪

尾張家は高麗、入間、足立、豐島、多摩の五郡に係り、紀伊家は埼玉、豐島、足立、比企、入間の五郡に係り、水戸家は武州にて埼玉、葛飾の二郡、總州にて相馬、印幡、葛飾の三郡に係れり。本圖もと三鋪なりしを、撮合せて一鋪に作りたるもの、如し。

ござんけならびにしよういきよさいしよ　御三家並庶流旦細書　一卷

清水、田安、一橋の三卿の家譜なること名の示すが如し。天保年間の記事に及べり。

紀伊、尾張、水戸なる徳川三家の家譜。宗家より支流に至る生誕、元服、縁組、叙位、大禮、隠居、逝去の年月日、法號等を洩らさず記載せり。徳川八代將軍吉宗治世の當時に成りしものなるべし。

こさんしふ

壺山集 二卷 本多 忠憑

上卷古詩、律詩。下卷律詩、絶句等にて、凡て四百〇三首を載す。世子從四位下侍從彈正大弼忠籌校訂し、寶暦九年己卯(一七五九)宮田明の跋あり。

◎本多忠憑は字は子璋、壺山又は神翁と號し、奥州和泉の藩主なり。服部南郭に學んで詩名に通ず。安永二年癸巳(一七七三)二月、六十歳にて逝けり。

こさんだうしわ

五山堂詩話 十三卷 菊池 桐孫

著者の詩話を編纂したるもの。本編十卷、補遺三卷より成る。本書中に壺號の由來を敘して曰く、「余貧不レ得レ聘レ書、偶有二勝得一早已物化去。隣中留二集五部一、白香山、一李義山、一王半山、一曾茶山、一元遺山、外レ此無レ有、因以二五山一名レ堂」と。文化四年丁卯(一八〇七)の自序及び友人葛休文の序あり

◎菊池桐孫は字を無絃といひ、左太夫と稱し五山、娯庵、小鈎舍等の號あり。讃岐高松の人。嘗て江戸に出でて儒を市河寛齋に學び、業成りて江戸に教授し詩を以て當時に聞ゆ。後年高松侯の記室に聘せられ、安政六年己未(一八五九)八十四にて歿す。

ごさんでうのみんごそくのき 一卷 後三條院御即位記

治暦四年戊申(一〇六八)七月、後三條天皇御即位の次第を記錄せるものなり。『群書類從』卷九十一、公事部第十三に收められる。

ごさんぶんぺん

五山文編 一卷 林 道春

五山禪林の遺稿文編を輯拾したるもので、弘治三年丁巳(一五五七)羅山の筆本なれば、內閣文庫に特別書として所藏せり。

◎林道春の傳記は『羅山文集』の下にあり。

ごさんめいそうせうでん

五山名僧小傳 一卷 伴 信友

南禪寺、東福寺、建仁寺、相國寺、永源寺の五山、二十七僧の略傳を記し、各其の詩集の名も載せたり。列擧すれば南禪寺の義堂〔空華集、貞和集〕惟肖〔村庵集〕春澤〔枯木集、蘐雪集〕惟忠〔猿吟集〕惟肖〔東海瓊華集〕岐山〔岐山集〕東福寺の夢窓〔草露集〕虎關〔濟北集〕妙葩〔不二稿〕建仁寺の雪村〔岷峨集〕月舟〔幻雲藁〕靈庵〔實圃疏稿角虎集〕九淵〔九淵遺稿〕祖溪〔水拙集〕。相國寺の絶海〔蕉堅稿〕東沼〔流水集〕周江〔蜀葵集〕橫川〔京華集〕宜竹〔翰林葫蘆集〕萬里〔梅花無盡藏〕雲溪〔臥隱集〕。永源寺の永源〔寂室錄〕無名氏八〔棟門集〕等也

◎伴信友は若狹小濱藩の人。初め銳と稱し後に州五郎と改め、立入と號す。嘗て本居宣長の卓識に心服し、其門下に入らんと欲せしも、第偶々病歿して其の意を果さず。仍て村田春門を介して歿後の門人となり、專心和漢學の研修に從事せり。博覽強記にして旁引考證到らざるなし。著書には中外經緯殿、神名帳考證上代、神社古緣起類集、神社私考、神聖三辨、若狹國神階記、鎭魂傳、八所御靈考、倭姫命世紀古文考證、八幡神考、蕃神考、中臣祓要解、祖見の小川、長等の山風、正卜考、大刀契考、資錢祕說、殘燈記、驗杉、松の藤扉、佛神論、皇居遷災例、皇居遷災抄出、續修國史姓名抄、武邊叢書、和紙系圖付考、高橋氏文考、上野三碑考、史籍年表、裏章伊勢月記附

こさんろうしびやうぶ

湖山樓詩屏風 二卷 橫山 卷

著者諸國名家の詩一百首を撰び、手づからそれを一屏風に錄す。本書は其の詩を寫傳せるものなり。弘化四年丁未(一八四七)の自序あり。

◎橫山卷は近江の人。字は舒公、湖山と號す。夙に詩を梁山星巖に學び遂に有名の詩人となる。後氏名を小野長愿と改め、侗翁と字す。後特旨を以て從五位に敍せらる。

こじいつでんかう

古事逸傳考 一卷 伴 信友

古事記傳の首に載せたる『書紀本紀』の考說に基き、『書紀本紀』卷三の「天孫本紀」等の文を拔抄したるもの。文化九年壬申(一八一二)の自序あり。

◎伴信友は若狹小濱藩の人。初め銳と稱し後に州五郎と改め、立入と號す。嘗て本居宣長の卓識に心服し、其門下に入らんと欲せしも、第偶々病歿して其の意を果さず。仍て村田春門を介して歿後の門人となり、專心和漢學の研修に從事せり。博覽強記にして旁引考證到らざるなし。著書には中外經緯殿、神名帳考證上代、神社古緣起類集、神社私考、神聖三辨、若狹國神階記、鎭魂傳、八所御靈考、倭姫命世紀古文考證、八幡神考、蕃神考、中臣祓要解、祖見の小川、長等の山風、正卜考、大刀契考、資錢祕說、殘燈記、驗杉、松の藤扉、佛神論、皇居遷災例、皇居遷災抄出、續修國史姓名抄、武邊叢書、和紙系圖付考、高橋氏文考、上野三碑考、史籍年表、裏章伊勢月記附

證、若狹禁事考、遠文風土記、和名抄國郡鄉考證、朝鮮筆山聲記事、古唱集、方術原論、射實私論、環肉鑒湯考、日本靈異記索引、長谷寺緣起繪偽、假字本末、應神考、源順家馬毛歌合注、神樂催馬樂私論、同上歌音考、竹葉抄、鈴廼舍翁年譜、古文物小集、古文書集、勅植名葉、遊古世、玉勝間學のことぐさ、藤垣內翁答問錄、比古婆衣、眞菅弓牘考、周易私論、加佐佐伎考等あり。晩年名聲頗る高く、知名の士來訪を求むるもの甚だ多し。弘安五年壬午(一九四二)十月、享年七十四にて京都に歿す。

こじいんえんしふ

故事因緣集 五卷

諸國の因緣故事を記し、各國名を擧げ、一字を下げて評を附す、多くは因果應報の俗佛說に近し、佛者の手になりしものなるべし。凡て百六十項あり。元祿二年己巳(一六八九)浪華にて出版せらる。

こしろんばん

古詩韵範 五卷 武 元質

古詩の組法を詳說して、古人作意の妙致を知らしめ、併せて學詩の軌範に供せしものなり。文化八年辛未(一八一一)稲夔の序、同九年の自序等あり。

◎武元質は備前國の人。儒學を善たり。景文と字し、登々庵、行庵、泛庵等の號あり。夙に四方に遊歷せり

こしえうでん

孤矢要傳 一卷

孤矢に關する諸事を說明したるものにて、『弓術祕傳書』の中に收む。

こしかい

吳子解 一卷 河田 孝成

「吳子」に漢文細註を加へたるものなり。原書の義を解すると共に、著者の見を窺ふべし。

◎河田孝成の傳記は『周易傳註』の下にあり。

こじき

古事記 三卷 太安萬侶

我が國開闢の最初より、人皇三十四代推古天皇の御代に至る、神人歷代の事實を記したるもの。蓋し記錄の事は既に殷中天皇の御時〔紀元一千〇六十年代〕諸國に史官を置きて四方の言事を記さしめ給ひ、又推古天皇の御代〔紀元一千二百五十年代〕に至りては聖德太子、蘇我馬子と議りて諸紀を撰ばれしも、蘇我氏亡滅の時大方は燒失せり。古事記以前の記錄として今日に傳存するものは殆稀なり。故に神代以來歷代の事實を敍したる書にては「古事記」を最初とす。是によりさき天武天皇の御代〔紀元一千三百三十年代〕に至り、帝說古傳の漸く亡佚し、又虛僞に流れんことを憂ひ、博聞強記なる稗田阿禮に古傳說を誦み習はしめ給ふ。元明天皇の朝〔紀元一千三百六十年代〕に至り、史臣太安萬侶に詔して御代代に傳へ來りし古傳說、帝紀、舊辭、本辭、先紀の諸

本、其の他の諸本を以て比校せしものを、谷森善臣の更に増補校訂せる手校本二部、及び聽閣本等に據りて、古訓古事記に標註訂正を加へたりといふ。本書の校正註釋抄略の類には、多田秋濤の「古事記本義」一卷、賀茂眞淵の「古事記私記」一卷、同「古事記頭書」三卷、同「古事記訓考」一卷、本居宣長の「古事記傳」四十八卷、及び「新古訓古事記」三卷、同宣長著吉岡德明編の「古事記傳略」十二卷、藤以正の「古事記傳說」八卷、敦田年治の「古事記評註」七卷、度會延佳の「鼇頭古事記」三卷、多田秀泉の「略解古事記」三卷、長瀨眞幸の「訂正古訓古事記」三卷、契沖の「厚顏抄」三卷、林諸鳥の「紀記歌集」二卷、三國幽眠の「古訓古事記」三卷、佐伯有義の「古事記講義」二卷、龜田鵬谷の「古事記序解」(明治九年版)其の外「古事記傳付考」三十卷、「神字古事記」三卷、「記紀索引」二卷、「古事記抄」二卷、尙近年の刊行にて同書の講義に係るもの多し。

◎太安萬侶は神武天皇の皇子神八井耳命の後裔なり。慶雲元年甲辰(一三六四)正六位下より從五位下となり、和銅四年辛亥(一三七一)正五位上となり、靈龜元年乙卯(一三七五)從四位下となり、同二年氏の長となり、養老七年民部卿となれり。博學多識にして最も典故に通じ漢學に精しく又能く文を屬す。當時朝廷隨一の博學者を以て稱せられたり。養老七年癸亥(一三八三)卒す。享年未だ詳ならず。

こじきあかし

古事記燈　二卷　富士谷成元

我が言靈の事を說きて神典研究の注意等を記したる者。文化五年戊辰(二四六八)山脇之昉の序あり。

◎富士谷成元の傳は「百人一首燈」の下にあり。

こじきかうほん

古事記校本　三卷　賀茂　眞淵

古事記を校訂したるものにて、鼇頭に自家の考を掲ぐ。上卷の奥書に、「寶曆七年(二四一七)八月、病間閑之、雖正訓義、猶訓儒書之濫謬多矣。從來一變者、恐爲皇朝古語乎。賀茂眞淵」の傳は「冠辭考」の下にあり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

こじきじよかん

古事記序解　一卷　龜田　長保

太安萬侶朝臣の作れる「古事記」の序文を詳解口授したるものなり。中島慶太郎筆記。明治九年活刷に附す。

◎龜田長保の傳記は「五魂說」の下にあり。

こじきでん

古事記傳　四十八卷　本居　宣長

古事記を註釋詳解したるもの。實に古事記の註釋書中の巨魁とす。其の第一卷には古記典總論、書紀の論ひ、記歌號の事、諸本又註釋の事、文體の事、假名の事等の諸論編おりて、同末に「直毘靈」の一論編を掲げて皇國の道といふ事を論述せり。又第十七卷には門人服部中庸の「三大考」とて天地開闢國土の事等を論辨したる一編を附錄とす。而して總卷數の內三卷は全部の目錄たり。本書は明和元年甲申(二四二四)「著者三十五歲の時」起稿し、天明六年丙午(二四四六)(五十七歲)漸く古事記の上卷を傳し、寬政四年(六十三歲の時)其の中卷を傳し、同十年戊午(二四五八)(六十九歲の時)其の下卷を傳し終る。實に三十五年間の經營に成れるなり。而して文政五年壬午(二四八二)悪く版刻となり、紀州侯親筆の題號を附して發行せらる。別著「古事記傳略」「古事記傳附考」等あり、宜しく研究に參すべし。

◎本居宣長は享保十五年庚戌(二三九〇)六月七日、伊勢國松坂本町に生る。名けて小津富之助といふ。後、彌四郎、榮貞、春庵、中衛、健藏等に改め、鈴廼屋と號し、本居と改姓す。幼にして讀書を好み、而かも強記絶倫なり。父母之れを愛し堀景山に就て儒を學ばしめ、武川幸順に醫を受けしむ。「玉勝」に云へることあり。「母なる人氣丈夫にして彌四郎は家業をなすに疎くして只讀書をのみ好めり。斯くては商賈の道いと覺束なし。されば强めて其の心構へあるべし。商人となるより醫者となりて、自ら好む所の學問をなさしむるに若かずとさてこそ京都に上りて醫者の弟子となりたるなり」と。其の就學の最初を知るべし。業成りて鄕に歸り、醫を業とす。嘗て契沖の百人一首改觀抄、勢語臆斷、古今餘材抄等を讀みて古學研究の念を起し。更に賀茂眞淵の冠辭考、其の他を見て其の學識に敬服し遂に名簿を送りて門人となる。「其の學問の次第につきては詳しく「玉勝間」中にいへり」是れより古學の研究を以て事生の事業とせり。往々、格式、家記、物語、歌集類に至るまで渉獵せざるものなし、其の門を張るに及びては來り從ふもの多く全國六十四箇國に渡りて四百九十人の多きに至れりといふ。又紀州侯に仕へて書を講じ、搢紳家に出入して教授する者。文化五年戊辰(二四六八)山脇之昉の序あり。

◎富士谷成元の傳は「百人一首燈」の下にあり。

こじきかうほん

古事記校本　三卷　賀茂　眞淵

古事記を校訂したるものにて、鼇頭に自家の考を掲ぐ。上卷の奥書に、「寶曆七年(二四一七)八月、病間閑之、雖正訓義、猶訓儒書之濫謬多矣。從來一變者、恐爲皇朝古語乎。賀茂眞淵」と記せり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

こじきじよかん

古事記序解　一卷　龜田　長保

太安萬侶朝臣の作れる「古事記」の序文を詳解口授したるものなり。中島慶太郎筆記。明治九年活刷に附す。

◎龜田長保の傳記は「五魂說」の下にあり。

こじきでん

古事記傳　四十八卷　本居　宣長

古事記を註釋詳解したるもの。實に古事記の註釋書中の巨魁とす。其の第一卷には古記典總論、書紀の論ひ、記歌號の事、諸本又註釋の事、文體の事、假名の事等の諸論編おりて、同末に「直毘靈」の一論編を掲げて皇國の道といふ事を論述せり。又第十七卷には門人服部中庸の「三大考」とて天地開闢國土の事等を論辨したる一編を附錄とす。而して總卷數の內三卷は全部の目錄たり。本書は明和元年甲申(二四二四)「著者三十五歲の時」起稿し、天明六年丙午(二四四六)(五十七歲)漸く古事記の上卷を傳し、寬政四年(六十三歲の時)其の中卷を傳し、同十年戊午(二四五八)(六十九歲の時)其の下卷を傳し終る。實に三十五年間の經營に成れるなり。而して文政五年壬午(二四八二)悪く版刻となり、紀州侯親筆の題號を附して發行せらる。別著「古事記傳略」「古事記傳附考」等あり、宜しく研究に參すべし。

◎本居宣長は享保十五年庚戌(二三九〇)六月七日、伊勢國松坂本町に生る。名けて小津富之助といふ。後、彌四郎、榮貞、春庵、中衛、健藏等に改め、鈴廼屋と號し、本居と改姓す。幼にして讀書を好み、而かも強記絶倫なり。父母之れを愛し堀景山に就て儒を學ばしめ、武川幸順に醫を受けしむ。「玉勝」に云へることあり。「母なる人氣丈夫にして彌四郎は家業をなすに疎くして只讀書をのみ好めり。斯くては商賈の道いと覺束なし。されば强めて其の心構へあるべし。商人となるより醫者となりて、自ら好む所の學問をなさしむるに若かずとさてこそ京都に上りて醫者の弟子となりたるなり」と。其の就學の最初を知るべし。業成りて鄕に歸り、醫を業とす。嘗て契沖の百人一首改觀抄、勢語臆斷、古今餘材抄等を讀みて古學研究の念を起し。更に賀茂眞淵の冠辭考、其の他を見て其の學識に敬服し遂に名簿を送りて門人となる。「其の學問の次第につきては詳しく「玉勝間」中にいへり」是れより古學の研究を以て事生の事業とせり。往々、格式、家記、物語、歌集類に至るまで渉獵せざるものなし、其の門を張るに及びては來り從ふもの多く全國六十四箇國に渡りて四百九十人の多きに至れりといふ。又紀州侯に仕へて書を講じ、搢紳家に出入して教授

することあり。尙翁の詳傳は、三哲小傳、玉祿、三十六家集略傳、古學小傳、語家人物志、鈴屋翁年譜、家の昔物語等に就て見るべし。著書頗る多し。音韻語學に關するもの、皇學神道に關するもの、歌學文章に關するもの、註釋評論に關するもの、隨筆家集に關するもの、其の他雜著に屬するもの等あり。即ち神代正語、神代紀髣髴山踏、古事記、歷朝詔詞解、大祓詞後釋、石上私淑言、出雲國造神壽後釋、直毘靈、玉くしげ、鉗狂人、天祖都城辨々、馭戎慨言、葛花呵刈葭、紫文要領、源氏鈴の色音、萬葉集、源氏玉の小櫛、萬葉集玉の小琴、萬葉集追考、後撰集詞のつかれな、古今集遠鏡、草庵集玉帚、仰瞻園漫長歌、玉鉾百首、櫻三百首、一名枕の山、國歌八論斥非評語、手向草、手枕、初山踏、字音かなづかひ、詞の玉緒、字音假字用格、玉勝、古今選、紐鏡、御國歌活用抄、毯の言の抄、紀氏能米具毯、續すてたる枕の草葉、漢字三音考、國語考、眞暦考、さき竹の辨、意宇都古文解、地名字音轉用例、美濃の家苞、同折添、管窺日記、本居系圖、家の昔物語、水草の上の物語、疑義辨、答問錄、玉勝間、鈴廼舍集等なり。享和元年辛酉(二四六一)九月二十九日、七十二にて歿せり。墓は松坂を距る二里許なる山室山に改葬す。謚して「秋津彦美豆櫻根大人」といふ。明治十六年二月二十七日正四位を贈らる。

こじきでんつゞけいかうふろく

古事記傳追繼考附錄　一卷　加藤　熙

「隨御名方富命彦神別神社考」と題して、「古事記傳」の「水內社は右の如く古に記載社に並ぶばかりの名神大社に座しに、今の世に其社のまだかならずは、甚いぶかしきわざなり」といへるに基きて考究し、其の水內社は、善光寺內金堂(如來安置の堂)の北方なる年神堂なりとして、其の證據たるべきものを考論したるものなり。明治十五年岡田高質の跋を附して、尾張名古屋書籍出版す。

こじきでんぶかう

古事記傳附考　寫三十冊　加藤　熙

古事記の註釋書「古事記傳」のもの。其の說は多く會澤正志の主張に係るといふ。安政五年戊午(二四五一八)十月二十八日の自序附言等あり。

◎加藤熙の傳は「二騎獻疑」の下にあり。

こじきでんりようぼばつすゐ

古事記傳陵墓拔萃　寫一卷　賀茂　眞淵

古事記の中より、陵墓に關する項を抄出したるものなり。日子穗々手見命より、應神天皇等に至る六十餘項あり。

こじきどうしよ

古事記頭書　三卷　賀茂　眞淵

古事記の本文の關外に考語を頭註したるもの。上卷の奥書に「寶曆七年十壯歲紀元(二四一七)八月、病間之暇を閑す。訓義を正すと雖も、猶儒書を調するの憾多し。後來一變せば恐くは皇朝の古語たらんか」とあり。

◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下にあり。

こじきぶろくせう

古事記袋抄　寫一卷　峰立齋庭竹

小野高尙の著たる「古事記袋」「武家雜說」を記したるもの。五冊中より抄出したるものなり。寬政十年戊午(二四五八)の寫本に依る。

こじきりやうでんせう

古事記兩傳抄　寫一卷　青柳　高鞆

古事記の天地初發より神世七代までの記事に、古事記傳、古史傳の文を引きて註解を施したるものなり。本書に兩傳と名づけし所以は此の二傳に據れる故なり。

◎青柳高鞆の傳は「祝詞正解」の下にあり。

こじきわかりやくちう

古事記後歌略註　寫一卷　僧　契沖

別著「厚顏抄」の第三卷を別行したるものにて、「古事記」の和歌凡て百〇七首の中、「日本書紀」に出で

たる五十一首を省き、殘り五十六首を取り出でて各首に詳註を加へたるものなり。賀茂眞淵の評を加へたるもあり。

◎契沖の傳は「萬葉代匠記」の下にあり。

こしけいづ

古史系圖 一卷 平田 篤胤

我が古史中なる神系なり。伊邪那岐、伊邪那美の二神より、中臣連、藤原朝臣、大中臣朝臣、津島直、壹岐直、四國卜部等の祖たる天種子命に至る。而して末に古史神代卷に出でたる神にして、此の系圖に記しがたきものとて、諸神を列記し、更に祭詞一編を掲げたり。文化十二年乙亥(一四七五)九月記。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

こしせいぶん

古史成文 三卷 平田 篤胤

古事記の文法にならひて、神代のことを詳記したるもの。材料は古事記、日本紀、古語拾遺、風土記、其の他等に取れり。此の書凡て十五卷、推古天皇の御代までを記されたるが、今版刻するところは、神代部三卷のみにして、文政元年戊寅(一四七八)の出版に係る。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

こしたいげんづせつ

古始太元圖說 一卷 鈴木 重胤

我が國の開闢說を敷衍說明したるもの。著者嘗て「開闢圖」を著す。本書は主として同圖を解說したるなり。古書に徵證し、圖畫に說示して、詳しく神代開闢の次第を記述す。

◎鈴木重胤は「祠の塵芥」の下に傳す。

こじだいぜん

故事大全 二卷 岡田 有信

傾城の說、田分の說を始めとして、人間萬事悉皆馬に至る。百條餘の故事を考察したるものなれども、平凡の嫌を免れず、能はず。文政十三年庚寅(一四〇)の出版に係る。

こじだん

古事談 六卷

古來の傳說を雜記したるもの。部を王道、后宮、臣節、僧行、勇士、神祇、佛事、寺宅、諸道等に分ちて數百箇目あり。二三の例を擧ぐれば、孝謙天皇、道鏡を寵したまふ事、榮平朝臣二條后を流す事、御葬殿遊女小觀音を召さるゝ事、淳時の大將をこばいの大將といふ事、小野宮大臣遊女香爐を愛せらるる事、清少納言零落の後駿馬の骨を買はずやといひし事、行基菩薩の歌の事等の類なり。本書は「國史大系」の第十五卷にも收載せり。該書は史籍集覽本を原として校訂したるものといふ。

こしだんわ

古士談話 本 五卷

畠山休山、其の他數人が、贈臣德川頼の武士の事歷に就て談話したるふしぐを記載したるなり。

こじだんわ

古事談話 一卷 六中庵

和漢の雜話數箇條を記したるものなり。著者六中庵の何人なるかは未だ知ること能はず。

こしちかゞみ

越路加賀見 本 一卷

加賀國從三位宰相前田吉德が一家騷動の略記なり。大槪內識允なる佞臣國を奪はん爲め、吉德の卒せし後、其の二弟を誅殺せんとして、陰謀忽ち露顯し、黨類悉く刑罰を蒙りし顚末を記せり。是れ實に元文年中(二千三百九十年代)の事なりしと云ふ。

こしぢぐさ

越路草 四冊 卜 琴

俳諧の集なり。何時編輯したるものなるか、明記なくて知りがたし。

ごしちにおこしゆしやうそうかうめい

後七日御修請僧交名 本 四卷

僧 亮照

元和九年癸亥(一二八三)より、安永四年乙未(一四三五)に至る、毎年正月禁中に於て御修法御執行の時請待せられし僧侶の列名なり。著者亮照は僧正たり、今その詳傳を得ず。

こしぢのき

越路之記 本 一卷

寶曆四年甲戌(一四一四)六月二十七日、江戸板橋驛を發して、翌年七月二日京生津といふ所に着するまでを記したる紀行なり。末に「月次の文」一編を添へたり。

こしちよう

古史徵 四卷 平田 篤胤

先著「古史成文」に採用せる事實ども、他の書史の異同あることを辨じ、其の正確を取用せることを詳論して、同書研究の參考に資したるもの。而して第一卷を「開題記」と稱して春夏秋冬の四册に分ち、第二卷以下を各上下とし都合四卷十册に作れり。文政元年戊寅(一四七八)十二月山崎篤利、同二年己卯新庄道雄の序等あり。

◎平田篤胤は「古史傳」の下に傳す。

こしちようかいだいき

古史徵開題記 一卷 平田 篤胤

古史徵の卷一を「古史徵開題記」と名け、春夏秋冬の四册に分けて單行せるなり。「伊吹能舍著撰書目」に「皇國の古傳說の起原より、諸祝詞、日本紀、古事記、姓氏錄、風土記、令式格律の御典、和名鈔、古語拾遺など、其外古こと學びに專要と讀むべき書等のさた、古學の見識を綴しく書き著されたり」といへり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

こじついまものがたり

古實今物語 五卷 清涼井

當時的物語を輯錄したるもの。松前長兵衛が事、絹屋彥兵衛三人の娘の事、姫君おせんの方の事等あり。文化元年甲子(二四六四)出版す。

こしつう

古史通 四卷 新井 君美

神代より神武天皇に至るまで史蹟の大槪を記したるものにして、漢事紀、古事記、日本書紀等を通考取舍せるなり。首卷に古史讀法及び凡例あり中御門天皇の正德六年丙申(一二三七六)三月と記したる由あり。本書は近年活版に附して發行したるもあり。

◎新井君美は「折たく柴の記」の下に傳す。

こしつうわくもん

古史通或問 本 三卷 新井 君美

自著「古史通」の條意を論じて或問的に記述したるものなり。同書と同じく正德六年丙申(一二三七六)三月に記す。

◎新井君美は「折たく柴の記」の下に傳す。

こじつきゝがき

故實聞書 本 一卷 石野 則員

弓馬故實の書にて、小笠原家傳の抜書なり。寛文十年庚戌(一三三〇)稻葉美濃守へ傳ふるところなり。石野氏は赤松姓なり。

こじつけいこもくろく

故實稽古目錄 本 一卷

弓馬故實研究の目錄次第なり。的の時數革をかいぞへゆめて數く事、ひしもずほれとけぬ事、一番に矢をふる人數の事等より、正月弓初の事、はやなと矢の事等に至る百三十九條の目錄なり。天正五年丁丑(一二三七)五月二十五日、武田右衛門佐より、平岡遠江守に傳ふるところなり。「弓馬撮集」の中に收む。

こじつしんぴせう

故實深秘抄 一卷

有職器財の圖を著し、其の尺寸製法等を詳にしたるものなり。

こじつせんかでう

故實千箇條 本 四卷 多田 義俊

本書は一名「故實纂要」と云ふ該題の下に解題す。

こじつさんえう

故實纂要 本 四卷 多田 義俊

神代の事を始め、種々の器物服飾雜事等の故實を記したるものにして、一名を「故實千箇條」と云へり。著作の年月を記さず。

◎多田義俊の傳は「遊相草」の下にあり。

こじつしふえう

故實拾要 本 十五卷 篠崎 維章

主として名僧に關する解說をなせり。天子の稱以下官職、神器、敕書の事、其の他節會、叙位、叙目等朝廷の事を詳記したるものなり。本書は近年活版に附せられたりと聞けど、今は、見る所の寫本に據れり。

◎篠崎維章の傳は「壬寅元旦請集」の下にあり。

こじつしよれいせう

古實諸禮鈔 本 二卷 竹內 義方

古今の書中より、故實式目書禮等を摘出したるものなり。著作の年代を詳にせず。

こじつしんぴせう

故實深秘抄 一卷

有職器財の圖を著し、其の尺寸製法等を詳にしたるものなり。

こじつせんかでう

故實千箇條 本 四卷 多田 義俊

本書は一名「故實纂要」と云ふ該題の下に解題す。

こひつはなし
古實咄　㊀九册　長野　素恒

足利將軍以來、享保年間に至る武家の事蹟、諸所の雜話、其の他の事等を記したるものなり。卷端に自記して、此の古實咄九册者、所々の筆記、其の外彼是取集て爲置者也。年月又は人の姓名、事の次第等、不合の事もあらむ歟、能く知る人に便て、重て可レ改レ之也」といへり。享保九年甲辰（二三八四）十月の作。同十七年壬子大野武範の序あり。著者長野素恒は別に「武家塵談」正續二編を著せり。

こひつひえうせう
故實秘要抄　㊀二卷　壺井　義知

男帝女帝の事、攝政關白の事、三種神寶の事、南面の事、兩殿再拜の事、大嘗會、新嘗會の事、よみくせの事、五攝家の事、冠の事、かけ緒の事等の故實を記したるものなり。

◎壺井義知は「官職浮說或問」の下に傳す。

こひつろく
故實錄　三卷

主として武家故實を記したるもの。事例は元和寛永頃の事より、享保寛延の事多く、就中元文中の事旨と記されたり。

こしでん
古史傳　三十二卷　平田　篤胤

皇國の古道を詳說したるもの。卽ち自著「古史成文」を註解細釋したるなり。「伊吹能舍漫攜書目」に「此の書は鈴能屋翁の古事記傳に倣ひ、右の古史成文を悉く註解したる書にて、我が古道の眞意は、凡て此の書に說き盡されたり」とあり。本書に八帙三十二卷にて神代の卷を註し終るべき豫定なるが、今日までに版行せられたるは二十九卷までなり。「古史傳目錄」といふもの三卷明治九年九月二十五日、豐前國中津人渡邊重春といふ人の手に成れり。

◎平田篤胤は通稱を大角といひ、初め眞菅舍と號し、後氣吹廼舍と號す。後桃園天皇の安永五年丙申（二四三六）出羽久保田の城下谷町の邸に生る。一才醫術を學び、二十才の時奮起して江戸に出で、入學問答、古道大意、神靈眞柱、古史成文、古史徵、靈能眞柱、古今妖魅考、六合要指論、伊勢物語古意、玉勝間、入學門、天津祝詞考、每朝神拜、詞記、大祓詞再釋、志都能石屋、古史傳、五種類考、古史本紀逸文、扶桑國考、三五本國考、赤縣太古傳、五種類考、六合要指論、天柱五嶽考、古今妖魅考、鬼神新論、伊勢物語梓弓、三大考辨辨、獸道大意、五十音義訣、訓字辨、古學辨辭集、葛儀翁文粹、赤縣度制考、皇國度制考、夏殷周年表、孔子聖諦考、老子經集解、老子集書、玄學得門、編神仙敎化編、神仙方術編、神仙行氣編、神仙導引訣、神仙服藥編、太一道甲古義、五嶽眞形圖說、鉄命祿、太昊古易傳、三易由來記、乘易編、八卦碎疑傳、三曆由來記、三統曆譜辨、三統曆譜考文、三統曆譜集解、弘仁曆運紀考、天象實義、天朝無窮曆、古曆日步式、古曆月步式、古史年曆編、春秋曆本術編、春秋命曆序考、前漢曆史辨、牛頓天王曆神辨、太昊古曆傳、古今日契曆、古今交蝕圖說、古今星運考、幹支字原考、家相九說辨、古道太元圖說、終古冬至格、徵古蔵時記、玄學月令編、醫道大意、醫宗神器考、醫宗脈言、傷寒雜病論集解、金匱玉函經考文、名醫方函類編、閱學用意、赤縣太古傳、印度藏志、出定笑語、密法修事部類、悟道辨、再生紀聞、仙境紀聞、四籍餘論、武學本論、家醴徵古編、阿妥書、しもとのまにく、稻生物怪錄、尻日物語、千島白波、萬葉大統譜、師長論、氣吹廼舍筆叢、同文集、雜稿拾遺等なり。門人千餘、實に古學を以て一世に鳴れり。仁孝天皇の天保十四年癸卯（二八四三）閏九月十一日、六十八歲にて卒す。明治に至り正四位を贈らる。諡を神敏の眞柱の大人といふ。東京、秋田兩所に社を建て、平田神社と稱す。

こしでんいねんがうかう
古史傳異年號考　一卷　伴　信友

前に解題したる平田篤胤の「古史傳」の中に、伴信友の異年號考あるなれば、後人が拔抄したるものなり。この考は藤井貞幹の「逸號年表」の脫漏を補ひたるなり。

◎伴信友の傳は「古事遡傳考」の下にあり。

こしねんれきへん
古史年曆編　一卷　平田　篤胤

自著「古史成文」に基き、又諸歷考によりて、天地開闢以來の年數等を、漢土の歷數に比較對照して、研究說明したるものなり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

こしのいへづと
越廼家土產　㊀一卷

小倉百人一首の註釋書なり。初め提要と標して大體論をなし、以下各首に就て作者の小傳、每句の意、及び一首の大意を敍述せり。簡なりと雖も亦頗る叮嚀なる註釋書と謂ふべきなり。

こしのかたりごと
許斯能加多理基登　㊀一卷

武藏國板橋の驛より、中仙道を經、信濃より三越に入り、京都に出でて、木曾路より甲州路を經て武藏に歸るまでの略日記なり。書名は記中の「みゆきふる越の旅路は言のかだりごとにもなりなんや」云云といへる語によりて名けたるものなるべし。

こしのものゝめきふのしよ
腰物目利書　㊀一卷

刀劍鑑識書、及び同鍛冶系圖等を編集したるものなり。年代著者共に明ならず。

ごしはいしよおんあづかりどころむだかならびにおぼえかき
御支配所御預所村高並覺書　㊀一卷

佐波國雜太郡三十九箇村、羽茂郡四十九箇村、加茂郡八箇村の石高、小物成、宿入用、田畑地拂等を記したるものなり。

こしばのゆき
木柴之雪　四卷　渡邊　重名

藤原定家卿の著といへる歷三百五十四首の俳を、更に註釋したるものなり。卷頭の歌詞をとりて、木柴之雪」と名けたるなり。光格天皇の文化十三年丙子（二四七六）出版す。

◎渡邊重名は豐前中津の人にして、家世々吹出濱古裝神社の大宮司たり。重名父の命により兄石見守重喬の猶子となり家を繼ぐ。天明六年從五位下に敍せられ、上野介に任ぜらる。少時父に請ひて京都に遊ばんとして許されず、安永五年家を脫して京都に出で、柴野栗山、賴春水等と交りて研究する所深し。一日慨然として神道を學ばんと志し、天明二年伊勢に入りて荒木田久老に就き皇學を學ぶ。故ありて再び京に出で學資に窮して、久老の補助を受く。天明七年本居宣長に從ひて業に勵む。寬長信重、皆瀨眞幸と共に九州の三大家と稱せられ、後、重名の京に遊ぶ時、時雨柳種信、皆瀨眞幸と共に「潘主奧平侯從竹を執りて學を受け、侯若干を給するに方り、藩士爭うて其の門に學び、また藩黌たる進修館に國典を講ぜり、性豁落不羈にして、雄辨流るゝが如し、交る所の公卿志士、朝野の間人傾る多し。千重姬、孫重春、重石丸、皆家學を承けて世に知らる。重名の著す所は、菅の根、八十浦玉、萩の古枝、深山の落葉、神祕即戰論、樂山堂歌集、木柴の殘雪、及び木柴の雪等なり。天保元年庚寅（二四九〇）十二月二十三日、七十二歲にて卒す。申津東林寺に葬り。明治十七年、同地淨安寺に改葬せり。

ごしふいわかしふ
後拾遺和歌集　二十卷　藤原　通俊

古今、後撰、拾遺に次ぎて成れる敕撰なり。卷首に撰者の長編序文ありて歌集の沿革敕撰の次第を述べたり。又其の序中に「大凡古今後撰二つの抄に入りたる歌の家の集をば、これに除きたり」又「なしつぼの五の人といひて歌に巧なるものあり、これらの人の歌を先として、今の世の事を好む輩にいたるまで、目につき心に適ふをば入れたり」などいへり。春上下、夏、秋上下、冬、賀、別離、羈旅、哀傷、戀一、二、三、四、雜一、二、三、四、五、神祇、釋敎、俳諧等に分ち凡て一千二百十八首（八雲御抄の計）を收めたり。白河天皇の應德三年丙寅（一〇八六）九月十六日撰進したるものなり。證滋法師、大江佐國等の補助するところなりといふ。

た歌よみ多く集ひたる頃なれば面白き歌も多けれど候を難後拾遺といふものにぞ。。。

五十音の發音法を記述したるもの。文政九年丙戌〔一八二六〕九月五日成稿。同十年荒瀬安船の跋、十一年本居大平の序、十二年高橋勝房の序等あり。

こしべぜんにせうそく　越部禪尼消息　本一巻　越部　禪尼

續後撰和歌集の時に物したる和文消息なり。三枚に寫傳す。崇光天皇の觀應二年辛卯〔一三五一〕九月九日頼阿の奥書あり。著者越部禪尼は藤原後成卿の女なり。

こしほんじきやう　古史本辭經　四巻　平田　篤胤

此の書一名「五十音義訣」の下に解題せり。

こじまみやけけいづ　兒島三宅系圖　本一巻

第五十九代宇多天皇を祖として、實繼、長繼等の子孫に至る。「續群書類從」卷百三十四、系圖部第二十九にあり。

ごじやうゐがたでんそうごほうしよわけさげしよ　御譲位方傳奏御奉書分下書　本一巻

寛正五年甲申〔一四六四〕七月、後花園天皇、成仁親王〔後土御門天皇〕に御譲位の時の記錄なり。

こじやうゐるしだい　御譲位次第　本一巻

享保二十年乙卯〔一七三五九〕中御門天皇、位を皇太子昭仁〔櫻町天皇〕に譲り給ひし時の記錄なり。

ごじやうゐのこと　御譲位事　本一巻　吉田　兼倶

歷代御譲位の次第を記す。文明十一年己亥〔一四七九〕十二月、兼倶の奥書に、「依種玉老嚴命、聊顯累葉之家風者也、冀致外見」とあり。

◎吉田兼倶のことは「神祇道服品令」の下にあり。

ごじやうゐぶるゐ　御譲位部類　本一巻

永元四年庚午〔一八七〇〕十一月、土御門天皇位を皇太子守成〔順徳天皇〕に譲り給ひし時の記錄なり

ごじやうゐぶるゐき　御譲位部類記　一巻

御譲位に關する記錄を集めたるもの。其の中には宮槻記「野宮左大臣公繼公記」、德大寺相國記「櫛廛記」安住卿記等あり。「群書類從」卷九十六、公事部第十八に收められる。

ごじやうおんじくわんばくりやうあんき　後成恩寺關白諒闇記　一條　兼良

諒闇に關する禮例故實を集錄したるもの。入棺、葬禮、停止、葬服、裘服、追號其の他等を記す。「續群書類從」卷九百九十二、雜部第百四十二に入れたり。

◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

ごじやうおんじふおかはのき　後成恩寺藤川記　一巻　一條　兼良

本書一名「藤川の記」の下に解題せり。

ごじやうくん　五常訓　五巻　貝原　篤信

五常の德を揭げ、聖經賢傳を引徵して最も親切に其の訓義儀則等を說明論述したるものなり。寶永七年庚寅〔一七一〇〕竹田定直の序あり。

◎貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

ごじやうぞくづしき　御裝束圖式　本二巻

我が中古に於ける天皇及び女御、親王、臣下等の御裝束を彩色圖出したるものなり。年代詳ならず。

ごじやうないぎせう　五常内義抄　本一巻

五常の義を俗解したるもの。其の序文の下半に曰く、仍て最俗を勿めんが爲に日本漢朝の說據、並に內外典の本文を集めて、五常內義抄と名づく、又は現當教訓抄とも云へり。只是れ愚昧の爲めとす。賢眼に及ぼすことなかれ」と。末に少納言入道信西作とも或は小松殿作ともいへる由を記す。今未詳に附す。「續群書類從」卷九百四十八、雜部九十八に入れたり。

ごじやうみやうじゆゐんのき　後淨明珠院記　本四巻　二條　康道

關白康道の記錄。卷一、卷二には寛永二十年癸未〔一六四三〕の九月十月。卷三には寛文二年壬寅〔一六六二〕の十月。卷四には同三年正月二月の出來事

を記し、元服譲位行幸等の事に關するもの多し。

◎二條康道の傳は「寛文記」の下に出でたり。

ごじやうらくぐつき　御上洛日記　本一巻

寛永十一年甲戌〔一六三四〕七月、征夷大將軍德川家光が上洛入朝したる時の日記なり。儀式禮法行列等を詳しく記せり。

ごじやうらくのき　御上洛記　本一巻

寛永十一年甲戌〔一六三四〕六月、德川三代將軍家光が上洛せし時の記事なり。終りに林道春が草したる御巻內の記を載せたり。「續地叢書」の第二十四册に收められる。

こしやかざりせう　古寫飾抄　本一巻　一條　兼良

藤原氏時代に於ける、裝束、車馬、文書、神事、入室、門跡等の儀式習例を委しく記載したるものなり。慶安三年庚寅〔一六五〇〕藤原隆眞が飛鳥井雅章より借り寫せしよし奥書あり。

◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

ごしやひやくしゆ　五社百首　本一巻　藤原　俊成

伊勢、賀茂、春日、日吉、住吉の五社へ奉納したる百首の歌を集めたるものなり。北朝の文治六年庚戌〔一八五〇〕清書して太神宮へも奉納したるものなりと云ふ。

ごしやほうご　五重反古　一巻　谷口　蕪村

春泥舍名波の追善の爲めにとて集りたる連俳句集なり。天明三年癸卯〔一七八三〕の編にかゝる。蕪村發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

ごしやほんふ　御寫本譜　本二巻　近藤　守重

德川幕府の寫本譜錄なり。一々由來傳歷等を記したるものなり。

◎近藤守重の傳記は「右文故事」の下にあり。

ごしやれいしよ　御赦例書　本七十六册

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せるもの にして、寶永年度より、嘉永年度に至る、申渡、取計、水波女出島願、例書の外、御家人の部、手鉢、遠島者女子、赦非一件留、一座御申合書、御赦類集、御書付類等に分類せり。

ごしゆいん　御朱印　本九巻

德川將軍家より、諸大名、神社、寺院等に下附したる朱印書を集錄せしものなり。

ごしゆいんおかきつけぞうつうし　御朱印御書付雜寫　本一軸

三州各寺社より差出したる古文書集なり。

ごしゆいんじしやりやう　御朱印寺社領　本五巻

各國社寺の朱印領の石高、宗旨、祭神の名等を記したるものなり。

ごしゆいんもんごんうつし　御朱印文言寫　本十册

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せるものにして、年度は不詳なり。

ごしゆから　五種加良　本一巻　岡本　保孝

「から」といふ語に五種の別あることを記述せり。一、からうす、からすき、の如く機關の意。二、からさけ、からかしは、の如く乾の意。三、からあぬ、からもゝき、の如く三韓または唐の意。四、からかみ、からくさ、の如く舍當にことなる意。五、からひつ、からくしげ、の如く美稱に用ふるものとの五種あることをいへるなり。

◎岡本保孝の傳は「韻鏡攷」の下にあり。

ごじゆだいき　御入內記　本一巻

元祿十年丁丑〔一六九七〕女御入內の際の記錄にして、拜見の場所、賜はり物、諸家獻上物等を記せり。

本書は「おんさけ救使記」として、「お」の部に出づ。

こしゆるるかう　五種類考　一巻　平田篤胤

扶木暘谷の考につきて得られし、扶桑記、蒿木考、兎木川考、速吸門考、姫島考の五種にて、著者の閲を請へる書なるを、或人の勧によりて三五本國考の附巻としたるもの、由「伊吹能舎叢書目」に云へり。

◎平田篤胤は「古史傳」の下に傳す。

こしようだんき　御昇堂記　一巻　多田義俊

中御門天皇東宮に立ち給ひしより、御即位に至るまで、即ち寶永六年己丑(一三六九)より、正德元年辛卯(一三七一)に至る儀式次第宣命賀表等の事を記録したるものなり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

こしようにつき　後松日記　十五巻　松岡行義

有職故實の考證數百條を掲げ、京都筑紫間の紀行數編をも載せたり。全編假字書きにして、旅行中思ひ出るまゝに書き記したるもの、如し。記中天保十二年辛丑(一八四一)頃の記事あれば、其の年代のものなるべし。書名「後松」の出所は其の師となせる五松堂滋野井公麗、三松亭尾崎穉興の、此の二松の後の義にして、松岡行義は其の家號を雙松亭といへり。故に後松としたること知るべし。

◎松岡行義の傳は「手綱染機考」の下にあり。

こしようもん　古證文　七巻

建武頃より、慶長年代に至る、諸家及び社寺等の古證書類數百通を雑集したるものにて、七巻四册に傳寫せり。

こしようもんかめいもくろく　古證文家名目錄　一巻

「古證文」七巻に收むる所の各家名を、巻毎に列擧したる目錄なり。

ごしらかはのゐんごきしゃう　後白河院御起請　一巻　後白河天皇

長日不斷行法手細事、攝器並可補供僧事、供僧故障時代不可用非供僧人事、供僧改補手細事、佛餉供以下用途事、以上五箇の御起請文なり。末後に「文治三年五月一日岡崇行眞起請」とあり。文治三年(一八五)三月十三日、御年六十六にて崩じ給ふ。文治七年丁未(一八四七)にて、行眞は後白河院の御法號なり。「續群書類從」卷八百十八、釋家部第百〇三に入れたり。

◎後白河天皇は島羽帝の第四子、崇德帝の同母弟なり。在位三年にして位を皇太子守仁に譲り政を院中に聞き給ふ。藤原信賴、平清盛、木曾義仲等の爲めに屢々擯遥し給ふ。帝夙に畫を善くし給ひ、今傳寫類數百通を雑集したるものなり。

こしりやく　古史略

神代の事實を略説したるもの。初學者の便に供せんため、平田篤胤の「古史成文」及び「弘仁曆運記」より、上代の事を抄出略敍したるなり。文久二年壬戌(一八六二)の自序あり。

◎角田忠行は宿渡の人にして、初め藤田東湖に學び、後平田篤胤の門に入りて古學を修む。足利木首皇示に依りて潜伏し、澤宣嘉卿に仕へ、皇學所に奉職し、後熱田大宮司に任ぜらる。著書數部あり。

ごしりやく　五事略　一巻　新井君美

殊號事略、琉球國事略、外國通信事略、高野山事略、本朝寶算通事略、の五種を編輯したるものなり。

◎新井君美は「折たく柴の記」の下に傳せり。

こしるゐだいわかしふ　古詞類題和歌集　三巻　高井八穂

和歌八代集歌仙歌集の中より、假名書の端書きあるものを抄出類聚して假名題よむべき人の參考としたり。

◎高井八穂は江戸の和學者。伊十郎と通稱す。樵千陰、村田春海等と交りを結び、徒弟を集めて頻りに國學の普及を謀りたり。

ごしれきはふ　御試曆法　一巻

本書は曆法の書なり。其の要綱を擧ぐれば、推日躔法、二十八宿黄道緯度鈴、推月離法、推月食法、推日食法、推土木火三星法、推金水二星法、推凌犯法等なり。

こじんごひやくだい　故人五百題　二巻　松露庵主人

芭蕉、季吟、風雲、其角、許六、去來等元祿時代の俳人の詠みたる俳諧六百餘句を集錄したるものにして、春夏秋冬に部類を分てり。「未醒(年號未詳)自記の凡例及び男鹽旭庵逸足の序あり。

◎松露庵主人は俳諧師白井烏酔の門人にして、烏明と號し、また俳諧を以て知らる。

ごしんじゐんどのぎよき　後深心院殿御記　七巻　藤原通嗣

著者の日錄なり。巻一には應安二年己酉(一三六九)、巻二には同四年春夏。巻三には同五年。巻四には同六年。巻五には同七年春夏。巻六には永和元年乙卯(一三七五)。巻七には同五年秋冬の出來事を記せり。

◎藤原通嗣は父園自棄嗣に襲ぎて園自職に任じ、後深心院と稱す。

こじんぞうたふかせう　古人贈答歌抄　三巻　清原雄風

萬葉集をはじめ、二十一代集の中より、贈答の歌を撰集し、之れを四季戀雜の類に分ちて、初學の人に便せしもの也。藤原一虎、小野幸雄の校訂に係る。

◎清原雄風は有名の歌人。名は藏、字は伯高、晁岡と號す。和漢の學に精しく、豐後關侯の爲めに擧用せられて學館の司業となる。後去りて諸方に游歴し、儒者にては龜井道載、國學者にては楫千陰、村田春海等と交る。性粗落にして榮利に淡く又生計を修めず。月花を伴とし詩歌を以て樂ものみ。著書には怜野集、草怜野集、新撰六帖、雄風家集、及び本書等あり。文化七年庚午(一八〇七)八月二十日、六十四にて歿す。

ごしんるゐえんじやのき　御親類緣者記　三巻

德川氏歷代の親類書なり。即ち家康より九代將軍家重までの血緣續柄の事に關する記錄にして、其の本姓、本國、家紋、官位、生卒、法名等を委細に記せるものなり。

ごずいしんさんじやうき　御隨身三上記　一巻

御隨身の日錄にして、永正九年壬申(一五一二)正月より同九月に及べり。「群書類從」卷四百二十三、武家部第二十四に收められたり。大外記清原教隆の編するところなり。

ごすくわうのゐんひやくしゆわか　後崇光院百首和歌　一巻　後崇光院

萬葉集、二十一代集の中より、贈答の歌を撰集し、之れを四季戀雜の類に分ちて、初學の人に便せしもの也。藤原一虎、小野幸雄の校訂に係る。

◎清原雄風は有名の歌人。名は藏、字は伯高、晁岡と號す。和漢の學に精しく、豐後關侯の爲めに擧用せられて學館の司業となる。後去りて諸方に游歴し、儒者にては楫千陰、村田春海等と交る。性粗落にして榮利に淡く又生計を修めず。月花を伴とし詩歌を以て樂ものみ。著書には怜野集、草怜野集、新撰六帖、雄風家集、及び本書等あり。文化七年庚午(一八〇七)八月二十日、六十四にて歿す。

ごしんるゐえんじやのき　御親類緣者記　三巻

德川氏歷代の親類書なり。即ち家康より九代將軍家重までの血緣續柄の事に關する記錄にして、其の本姓、本國、家紋、官位、生卒、法名等を委細に記せるものなり。

ごずいしんさんじやうき　御隨身三上記　一巻

御隨身の日錄にして、永正九年壬申(一五一二)正月より同九月に及べり。「群書類從」卷四百二十三、武家部第二十四に收められたり。大外記清原教隆の編するところなり。

ごすくわうのゐんひやくしゆわか　後崇光院百首和歌　一巻　後崇光院

立春水のけふといへばまつわが水なむすべとや、つら〳〵吹しと春の初かぜ」より賀社雜の「君が世をもに至る。宇和四年(文化元年乙甲子(一四六四)二月十日源弘賢の奥書に、「右後崇光眞蹟一卷、誤門人山本萬盈模寫以納不忍文庫」とあり。「續群書類從」卷三百八十八、和歌部第二十三に收む。

◎後崇光院は「看聞御記」の下に傳しまつる。

ごすぎまふ　小すぎまふ　五册

諸家の俳諧百韻にて、寛文七年丁未(一六六七)七月、東都東六條にて版行したるものなり。

ごせいゐんごそくゐのき　後西院御卽位記　一巻　二條光平

明曆二年丙申(一六五六)正月二十三日に於ける、後西院天皇御卽位の次第を記しまつりたるもの。全編眞字にて記されたり。二條光平筆作の由は奥書に記せり。

ごせいばいしきでう　御成敗式條　一巻

此の書は後堀河天皇の貞永元年壬辰(一八九二)に制定したる法令五十一箇條を記したるもの。所謂「貞永式目」是れなり。「群書類從」卷四百、武家部第一に收めたり。

ごせいばいしきもくえせう
御成敗式目絵抄 一巻 杉村次兵衛
本書は「貞永式目」の各條に振假名訓點等を附し、更に標註し圖出したるもの。元祿十年丁丑(一六九七)自らの奥書あり。當年の版行なり。
◎杉村次兵衛は繪師にして、本書は自ら圖を書き略解を施したるものなりといふ。

ごせいばいしきもくつるか
御成敗式目鈔 本朝一巻
清和天皇より源實朝までの系圖、頼朝より護良親王まで十二代將軍の位置生卒、北條遠江守より駿河守重時までの系圖、將軍次第、關東將軍次第等を載せたり。元和九年癸亥(一六二三)十月十六日、立真花押あり。

ごせいばいしきもくつるか
御成敗式目追加 一巻
前に出でたる「御成敗式條」の追加として、評定判決の實例數十箇條を列擧したるものにして、事は嘉祿年間より元亨年間に係れり。『群書類從』巻四百、武家部第一に收めたり。

ごせいばいしきもくぬきがき
御成敗式目抜書 本朝一巻
古來の成敗式目、五十條の抜書にて、追加數條を添ふ。正三位清原と記したる奥書あり。

ごせいはふ
御制法 本朝十三巻 久保 正員
德川家歴代の制法を纂輯したるものなり。即ち慶長以後寛文年間に至るまでに發布せられたる令條下知狀、朱印書等、百四十餘條を網羅す。寛文十年庚戌(一六七〇)十二月に成れり。
◎久保正員は通稱は金右衛門、吉左衛門正之の三男にして、召されて右筆となり、延寶五年丁巳(一六七七)に死す。

ごせうそくしふ
御消息集 一巻
淨土眞宗の開祖親鸞聖人が、其の徒弟に與へたる假字消息文を集めたるものにして、凡べて十一通あり。『眞宗法要』第四巻に收めらる。註釋書には越後の僧興隆の『御消息集錄』一巻(寫傳)あり。
◎親鸞の傳は『敎行信證』の下に在り。

ごせうだいづ
巨勢氏系圖 一巻
巨勢金岡より、筑前法橋長有に至れり。『群書類從』巻六十三、系譜部第四に收められる。

ごせうねんねんどのしやうぞくせう
後照念院殿裝束抄 一巻
表冠裝束に關する故實典例を寛正の『群書類從』巻百十五、裝束部第四に收めらる。

こせうほんかみよのまき
古鈔本神代巻 本朝三巻
本書は『日本書紀』神代巻並神武紀の古鈔本なり。三島神社の寶物中に傳はるものなりといふ。

ごせつかんえいきよくじ
五節間歌曲事 本朝一巻 俊 量
節句に奏する音曲歌謡の事を記したるもの。裝束の事なども附記せり。永正十一年甲戌(一五一四)家傳を筆記せるよし奥書あり。著者俊量は當時按察使たり。

ごせつく
五節句 一册 内田 順也
著者の俳諧集なり。延寶九年辛酉(一六八一)の編にかゝる。

ごせつくかざりでんき
五節供飾傳記 本朝一巻
節句飾物の由來等を説明したるもの。安永四年乙未(一七七五)池田氏之れを記すよし奥書あり。

こせんおほえがき
古戰覺書 本朝一巻
慶長元和を中心に、諸家の古戰談を寫書したるものなり。嘉永四年辛亥(一八五一)勝喪の奥書に、此の書は濃州加納永井家の世臣安池市之助家傳の書にて其の祖先の同志夏目郡八といふもの、自筆本なるを、其の後來孫尊々寫傳したる由あり。

ごせんおほさかき
御撰大阪記 本朝十九巻
幕府の撰述にかゝる大阪陣の記錄なり。巻一に關東御入國之時城地被仰付候面々知行高並三千石以上の姓名。巻二に關東御入國より慶長年中諸番頭諸物頭諸奉行等被仰付候姓名並年月日。巻三には大阪冬御陣之節御陣觸並御留守居御供諸方御固姓名。巻四、五には大阪冬御陣之節被仰出之品々。巻六には大阪冬御陣之節御感狀。巻七には大阪冬御陣之節攻口丁場割。巻八、九、十、十一には大阪冬御陣始末之記。巻十二には大阪夏御陣之節諸方御固並奉行宿割等姓名其外被仰出之品々。巻十三には大阪夏御陣之節御感狀。巻十四には大阪夏御陣之節寄口御備定。巻十五、十六、十七、十八には大阪夏御陣始末之記。巻十九には慶長元和之際の御定書等を輯錄す。

ごせんおほさかぐんき
御撰大阪軍記 本朝十九巻
巻一には德川家康關東入國の時配下の知行高。巻二には永祿慶長間諸番頭諸奉行職の知行。巻三には大阪陣までの願書、誓詞供の姓名等。巻四、五には大阪陣中の觸書、注進狀等。巻六には大阪冬陣の諸士勳功の感狀。巻七には諸軍の攻口陣場等。巻八より十二までは冬陣の始末。巻十三より十九までは夏陣の始末を記せり。德川家記錄掛の編輯するところなり。

こせんかう
古泉考 本朝一巻
和漢古來の錢貨を說明考說したるものなり。著作の年月明ならず。

ごせんかうちやうか
御遷幸長歌 一巻 本居 宣長

こせんかんたいせい
古錢鑑大成 一巻
秦より唐に至る古錢貨四百餘種の圖を纂め、其の名稱、種類、古文年錢、不知品、島錢、勝勝品、寄品、偽錢等、錢布の年曆、著作當時の通貨等を記したるものなり。巻首に清和天皇より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

ごせんぎものかきぬき
御詮議物書抜 本朝一册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。享保十七年壬子(一七三二)より、天保九年戊戌(一八三八)に至る。

ごせんぎものしよじめ
御詮議物諸事留 本朝六册

こせんぐんかん
古戰軍鑑 本朝三十巻 小幡 景憲
德川家康の系圖及び戰記にして、巻首より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

ごせんぎものかきぬき
御詮議物書抜 本朝一册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。享保十七年壬子(一七三二)より、天保九年戊戌(一八三八)に至る。

ごせんぎものしよじめ
御詮議物諸事留 本朝六册

こせんぐんかん
古戰軍鑑 本朝三十巻 小幡 景憲
德川家康の系圖及び戰記にして、巻首より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

上の姓名。巻二に關東御入國より慶長年中諸番頭諸物頭諸奉行等被仰付候姓名並年月日。巻三には大阪冬御陣之節御陣觸並御留守居御供諸方御固姓名。巻四、五には大阪冬御陣之節被仰出之品々。巻六には大阪冬御陣之節御感狀。巻七には大阪冬御陣之節攻口丁場割。巻八、九、十、十一には大阪冬御陣始末之記。巻十二には大阪夏御陣之節諸方御固並奉行宿割等姓名其外被仰出之品々。巻十三には大阪夏御陣之節御感狀。巻十四には大阪夏御陣之節寄口御備定。巻十五、十六、十七、十八には大阪夏御陣始末之記。巻十九には慶長元和之際の御定書等を輯錄す。

ごせんおほさかぐんき
御撰大阪軍記 本朝十九巻
巻一には德川家康關東入國の時配下の知行高。巻二には永祿慶長間諸番頭諸奉行職の知行。巻三には大阪陣までの願書、誓詞供の姓名等。巻四、五には大阪陣中の觸書、注進狀等。巻六には大阪冬陣の諸士勳功の感狀。巻七には諸軍の攻口陣場等。巻八より十二までは冬陣の始末。巻十三より十九までは夏陣の始末を記せり。德川家記錄掛の編輯するところなり。

こせんかう
古泉考 本朝一巻
和漢古來の錢貨を說明考說したるものなり。著作の年月明ならず。

ごせんかうちやうか
御遷幸長歌 一巻 本居 宣長

こせんかんたいせい
古錢鑑大成 一巻
秦より唐に至る古錢貨四百餘種の圖を纂め、其の名稱、種類、古文年錢、不知品、島錢、勝勝品、寄品、偽錢等、錢布の年曆、著作當時の通貨等を記したるものなり。巻首に清和天皇より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

ごせんぎものかきぬき
御詮議物書抜 本朝一册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。享保十七年壬子(一七三二)より、天保九年戊戌(一八三八)に至る。

ごせんぎものしよじめ
御詮議物諸事留 本朝六册

こせんぐんかん
古戰軍鑑 本朝三十巻 小幡 景憲
德川家康の系圖及び戰記にして、巻首より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

ごせんぐんかん
古戰軍鑑 本朝三十巻 小幡 景憲
德川家康の系圖及び戰記にして、巻首より四代將軍家綱までを順記し、家康開府の兄弟の事等を載せ、以下年月を追うて二條合戰、三方ヶ原合戰、小牧合戰眞田征伐、關ヶ原合戰、大阪冬夏陣等の始末を記せり。家綱の時代の作なるべしといふ。

こせんしふことばのつがねを
後撰集詞のつがね緒 一巻 本居 宣長
此の「後撰集詞のつかれ緒」は「言葉のつかれ緒」の內題なり。故に同書の下に解題す。
◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下に在り。

ごせんしふしやうぎ
後撰集正義 本朝一巻 冷泉 爲家
後撰和歌集を義解評論したるもの。主と定家の說を引用して評釋に用ふ。本書の特色は、書中に「ぬれきぬ」といふ詞の故事を註せるところにあり。『續群書類從』巻四百五十四、和歌部第八十九に入れたり。
◎冷泉爲家の傳は「續後撰和歌集」の下にあり。

ごせんしふしやうぎとうかく
後撰集象潟攻格 本朝二巻
將棊雜手百番を撰びて其の攻手を研究したるものなり。一册は其の圖式なり。大本二册に淨書す。

こせんぢやうびつちうふし
古戰場備中府志 本朝五巻 平川 親忠
備中國內の古戰場を考證せるもの。元文二年丁巳(一七三七)歌窩の序に、本書の大要を述べたり。曰く「陋書也、標幕古城亂附庸、凡一百八十餘

所、分之以郡邑、開之以景勝和歌、皆用國字、併便製覽、若其事實引證焉、則措據諸家正說、取其要而折衷、間亦進己之意、以斷之、題曰備中府志」云々といへり。事實を記外せる文なり。次に享保二十年乙卯〔一七三五〕進藤益堅の序あり。著者平川親忠は備中國河上郡穴門郷の人なり。

ごせんぢやうやわ

古戰場夜話 一卷　**片山　秋扇**

出陣前の作法、軍法、將士の心得、殿の事、鏡波の事、對陣の作法、其の他とも圖を加へて說明したる戰書なり。寛永十五年戊寅〔一六三八〕の著。

◎片山秋扇は父祖の業を繼で醫を能くし、越前の太守に事へ、醫藥を施すの暇、まゝ兵事を談ぜり。本書は武藏鴨田川の邊に在りて著せしなりと云ふ。別著「一騎受用抄」あり。

ごせんせう

後撰抄 一卷　**冷泉　爲家**

後撰和歌集を抄解したるもの。奥書に「此書中院入道大納言爲家所令撰作也。三代集口傳不可有他見而已」とあり。

◎冷泉爲家の傳は「續後撰和歌集」の下にあり。

ごせんせきぬんはいぶんかう

古錢積年背文考 一卷

明和三年丙戌〔一七四六〕以來、歷代古錢の年數を考へ、更に背文考、近代和錢考等を掲げたり。

ごせんせんしゆ

後撰千首 一卷　**後水尾院**

後柏原院の御製、年内立春のうた、玉つはさとしに ふたゝびあら玉の、はるのかけみる花もさかなん」を始めとして、寛隆興政以後公卿、武臣、僧侶等の秀逸の歌千二十八首を撰び、御製をも五十餘首入れさせたまひたり。

◎後水尾院の御傳は「一字御抄」の下に掲げたり。

ごせんそのき

御先祖記 四卷

既掲「御先記」と同本なり。唯首卷の系圖と第五卷とを闕くの異あるのみ。

ごせんとくしつろん

古戰得失論 三卷　**森　則房**

古戰の得失を批評したること其の名の示せるが如し。信州海野口城攻、河州赤坂城攻守、播州一谷鵯越、源頼政宇治川防戰、源平尼張川合戰、源平砥浪山合戰、其の他の數箇條を論評す。元祿五年壬申〔一六九二〕の出版に係る著者の傳は未詳なり。

ごせんにつき

古戰日記 三卷

豊臣秀吉の履歷にして、天正十年壬午〔一五八二〕山崎合戰の事に始まり、朝鮮征伐の事に終る。秀吉終身の事績を詳記せるなり。

ごせんぬきがき

古戰拔書 一卷

武家高名記等によりて、古戰の勝敗得失を評論したるものなり。小豆坂合戰、戸部合戰、上田原合戰、桶狹間合戰、河中島合戰、三增合戰、柳瀨合戰の事等を記せり。元祿二年己巳〔一六八九〕林將親の序あり、翌年出版す。

◎中川正倚は遠州の人。皆て風山先生に從て兵法を學びたりと云ふ。

ごせんひやくにんいつしゆ

後撰百人一首 一卷　**二條　良基**

歌人百人を撰び、各一首を集めて成せるもの。著者眞基、元享正中の頃、世の亂離を厭ひて、小倉山二尊院の側に閑居し、定家の小倉百首にならひて、續百人一首を撰び出せしが、その中の六首蝕み失せければ、中院關白昭實撰び添へて「後撰百人一首」とは名づけたるなり。

◎二條眞基の傳は「寃玖波集」の下にあり。

ごせんわかしふ

後撰和歌集 二十卷　**大中臣能宣**

「古今和歌集」に次ぐる敕撰歌集なり。村上天皇の天曆五年辛亥〔一九五一〕大中臣能宣、清原元輔、源

順、紀時文、坂上望城等の五人、御所の昭陽舍に於て「古今和歌集」に漏れたる歌、及び「古今和歌集」以後の歌を集めたるなり。之れを梨壺の五人と云へり。取むる所の歌數は「八雲御抄」「拾芥抄」等に云ふ所各異り、契沖の「後撰和歌集標注」に依れば、一千四百二十六首ありと。其の中重出の者六首、「古今和歌集」に出でたるもの八首あり。調査の粗漏なりしを證すべし。「後撰集」の名は「古今和歌集」の後に撰成せるの意なりと「榮花物語」にも云へり「古今和歌集」と後の「拾遺和歌集」とを合せて、三代集といへり。古は萬葉、古今、後撰を三代集といひたりしが、拾遺出でてからは萬葉は除かれたり。

撰評　本居宣長の「後撰集詞の東緒」に曰く、「後撰集は未だよくもえりとゝのへざりしまゝにてや傳り來ぬらむ。歌のよさあしさ、わきだめなく、集められたり。歌のみならず、讀人不知のしるさるゝもみだりにて、しどけなきな。」云々とあり、「阿佛房口傳」には「後撰にやさしき歌多く、又みだりかましき歌も多く交り、梨壺の五人こゝろ〳〵やかはりけむ」といへり。又順德院の「八雲御抄」には「梨壺の五人めでたしといへども、彼の古今の四人に及ぶべからず。能宣、元輔は重代のうへ、尤然るべきの歌人なり。順また精古の者なり。望城、時文は父が子といふばかりなり。云々長明の「無名抄」には「後撰にはよろしき歌、古今により盡されて、後いくほども經ざりければ、歌得がたくして、すがたを撰ばずして心をきゝとせり」また中山美石の「後撰集新抄」には「此の集撰ひおほらかにて、貝珠交れるがおもしろし、又戀雜などの歌と見ゆるが、四季の中に入りたるなども折々ありて、歌の序もいとみだりがはしく、諸人の名のしるしさまも、如何にぞや見ゆる所々もあり。歌のこゝろも無下におさなげにつたなきさまなるも、されゝには交れり。兎に角他集と比べては亂りかはしき集なり」とあり。略其の概質を察すべし。

此の書の註釋評訂等に關するものを擧ぐれば、釋契神の著にして、岸本由豆流の補へる「後撰和歌集標註」四册、中山美石の「後撰集新抄」十五册、本居宣長の「後撰集詞東緒」一卷、北村季吟の「八代集抄」「爲家の一後撰集正義」「爲家の一後撰集註」等あり。

◎大中臣能宣は和歌を以て聞えたり。天曆中讀歧權椽と爲り、坂上望城、源順、紀時文、清原元輔等と敕を奉じて「後撰和歌集」を撰す。天祿中從五位下大副に進み祭主となり、尋て正四位下に敍せらる。正曆二年辛卯〔一六五一〕年七十にて卒せり。

ごせんわかしふしんせう

後撰和歌集新抄 二十卷　**中山　美石**

後撰和歌集を註釋したるものにて、古今の註解諸抄を引徵し、廣く師友の說をも參考して、最も綿密に註釋し、更に作者の系傳官位等をも悉く卷末に載せたり。本居大平序して曰く、「これが註釋とては、爲家の大綱言の抄、「後撰集正義」と、季吟法師の八代集の抄、さてては契沖阿闍梨の卿づつ書き加へたるのみにて、何れも皷に解きさとしたる物にしも非ず。こゝに已が門人中山美石は、三河の國吉田殿に仕へて、萬まめ人なるが、先つ頃某君より長き仰事を、内々ながらうけたまはりて、これが註解を

なむものする」云々といへり。

◎中山美石は參河吉田の藩士にして通稱を彌助といふ。本居大平に從て古歌を研究し、其學大に進み歌人を以て世に知らる。別著に「後撰和歌集新抄別記」「饑饉食物大略」等あり。

ごせんわかしふちう

後撰和歌集註 二十卷　**冷泉　爲家**

後撰和歌集の歌を註釋したるものなり。內題には「後撰和歌集聞書注」とせり。廿卷一册に寫傳す。

◎冷泉爲家の傳は「續後撰和歌集」の下にあり。

ごせんわかしふへうちう

後撰和歌集標註 二十卷　**岸本由豆流**

契沖阿闍梨の註に、賀茂眞淵の後按を附し、西山宗因の考異をも加へ、更に和漢の數百書を引徵して、增註したるものなり。慶長本といふ古寫本を原本としたれば、普通の流布本に百餘首の歌をも增入せり。

◎岸本由豆流は「古今和歌集標註」の下に傳す。

ごせんわかしふるゐそ

後撰和歌集類礎 五卷

後撰和歌集中の歌を、悉く同韻を以て類聚したるもの。先づ歌の初句の同韻を集め、更にそれないろは順に列擧す。以下第二句の終りの同字、三句、四句、五句ともに、悉く其の同字により、いろは順に列集したるものなり。

ごそうかくだん
梧窓客談　二巻　山田　久作
此の書は一名を「秋風錄」といふ。該題下に解題す。

ごそうきぶん
護送記聞　東四　寫二巻
寛政四年壬子(一七九二)唐國の漂流者を送還せし事、文化元年甲子(一八〇四)唐船本邦漂流者を送り來りし事、寛政五年癸丑(一七九三)邦人唐國へ漂流せし事等の事情取調書なり。

ごそうしわ
梧窓詩話　二巻　林　瑜
著者の詩學談を集錄せるものなり。文化九年壬申(一八一二)大窪行の序あり。
◎林瑜は加賀國の儒者。天明元年辛丑(一七八一)六月に生る。字を孚尹、號を蘭坡又は藤坡と云ひ、周輔と通稱す。夙に江戸昌平黌に入りて儒學を修め、學成り國に歸りて藩侯の侍講と爲り、藩内士民の文學的氣風を鼓吹するには大に與りて力ありしと云ふ天保七年丙申(一八三六)七月歿す年五十六

ごそうにつき
護送日記　寫一巻
寛政元年己酉(一七八九)十一月廿二日、唐船我が土州に漂着したるを、藩府の命に依て、肥前長崎へ護送することゝなりし其の始末を記したるもの也

ごそうまんぴつ
梧窓漫筆　六巻　太田　元貞

學藝道德に關する隨筆。修身齊家の訓誡は勿論、經書子史等に就て古人未發の新說、作詩習文の祕訣、奇事瑣說等の博聞に資くるものを輯錄し、歷史の事證に據りて因果の說を述べたるところもあり。文政五年壬午(一八二二)出非元凱の序、同六年堤公憲の序等あり。
◎太田元貞は「周易詳說」の下に傳す。

ごそうまんぴつこうへん
梧窓漫筆後編　二巻　太田　元貞
本編と同じく道德、學術、其の他等の隨筆なり。文政七年甲申(一八二四)出非元愷片倉直等の序あり
◎太田元貞の傳は「周易詳說」の下にあり。

ごそうまんぴつさんぺん
梧窓漫筆三編　二巻　太田　元貞
前記「梧窓漫筆」同後編等に續ける隨筆なり。智識、道德、經濟、時務等に關することを論述せること前書と異ることなし。
◎太田元貞は「周易詳說」の下に傳す。

ごそうろく
護送錄　寫一巻
慶長の初年、呂宋の漂船を長崎へ護送して、歸路に就かしめたる時の始末を記し、併せて其の筆語、及び贈答の詩等を掲げたり。

ごそくねかなせう
御即位假名抄　寫一巻　一條　兼良
御譲位の事、御即位の事、御禊行幸の事、大嘗會の事等を記す。文明十年戊戌(一四七八)に成れり。
◎一條兼良の傳は「歴林良材集」の下にあり。

ごそくねけんもんしき
御即位見聞私記　寫一巻　平　興胤
御即位の順序、儀式の次第等を記したるもの。即、寛永七年庚寅(一六三〇)十一月、中御門天皇御即位の時なり。著者平興胤の傳は未だ詳ならず。

ごそくねしきたてゑづ
御即位式建繪圖　一具
寛永七年庚寅(一六三〇)中御門天皇御即位式の圖なり。人物器財を圖示排列して、詳に當時の禮式實況を寫せり。

ごそくねしだい
御即位次第　寫一巻　三條　實繼
一般御即位の御次第を詳細に註說したるもの。皇室憲典の研究には最も參考たるべきものなり。

ごそくねしだい
御即位次第　一巻
享保二十年乙卯(一七三五)十一月三日、櫻町天皇の御即位次第を詳記したるものなり。

ごそくねていじやうのづ
御即位庭上之圖　一折
享保二十年乙卯(一七三五)十一月三日、皇太子昭仁親王、寛恭十六にして即位して櫻町天皇となら

せ給ふ時の庭上實景を圖刻したるものなり。

ごそくねぶつゐ
御即位部類　寫一巻
保安四年癸卯(一一二三)二月崇德天皇御即位の時の記錄を編輯したるものなり。

ごそくねりやくしだい
御即位略次第　寫一巻
正親町天皇、及び後陽成天皇の御踐祚次第を記錄したるものなり。

こそくづかん
古鏃圖鑑　三巻　近松　茂矩
古鏃圖鑑といふ著者不明の古書を得て、佐枝種重之れに增補し、更に近松茂矩增補したるものなる由、元文五年庚申(一七四〇)十月、茂矩の奥書にあり。三巻の中、一巻は附錄にして、延享二年乙丑(一七四五)輯錄したるものに係る。
◎近松茂矩の傳は「案窓問話」の下にあり。

こそだてぐさ
こそだて草　一巻　小池　貞景
子女教導の心得を論述したるもの。著者の雜記中より、此の一事を取り出でて世に發行せる由、弘化四年丁未(一八四七)の自序に見えたり。
◎小池貞景の傳は「觀音經別傳」の下にあり。

こだいいんづ
古代印圖　寫一巻　八條　房繁
古代の牧名及び牧馬の燒印に用ふる印圖を模寫して略說を附したるものなり。
◎八條房繁は關東の人。源氏を姓とし、近江守と稱す。小笠原流より出でて、遂に一流の馬術を創始す。謂ゆる八條流の祖なり。永正五年戊辰(一五〇八)八月歿せり。

ごだいごてんわうにつちうぎやうじ
後醍醐天皇日中行事　寫一巻　後醍醐天皇
禁中日々の行事を記したまへるもの。毎日早朝卯の時に主殿の司の朝湯する事より、夜の御殿のさし油の事に及べり。本書、名「禁中日中行事」と云ひ、其の御親撰なるよしは「假名年中行事」の奥書にも見えたり。
◎後醍醐天皇の御傳は「禁裏政要」の下に拜掲す。

ごだいだいしいか
御代々詩歌　寫二巻　近藤　守重
將軍德川氏代々の詠作にかゝる詩歌を集錄したるものなり。
◎近藤守重の傳は「右文故事」の下に出づ。

ごだいだいぶけしよはつさかう
御代々武家諸法度考　寫一巻
慶長以來享保頃までの諸家の諸法度例を集げて、其の存廢等を考說したるもの。普法度罰之事、叛逆殺害人之事、他國之者入交り住居之事、諸國居城之事、企新儀結徒黨之事、結姻之事、請大名參覲從者之事、妄發之事、乘輿之事、儉約之事、異變有之時之事、行刑罰時之事、私之評論之事、本主障之事、陪臣質人之事、道路驅馬并橋之事、私之關所之事、五百石以上船之事、諸國寺社領之事、萬事如江戸之法度之事、耶蘇宗門之事、人馬兵具等之事、百姓訴論之事、養子之事、殉死之事等を收錄す。

ごだいだいぶんじへう
御代々文事表　寫五巻　近藤　守重
德川家代々の文學的事績を集錄したるものなり。
◎近藤守重の傳は「右文故事」の下にあり。

ごだいていわうものがたり
五代帝王物語　一巻
後堀河天皇より、龜山天皇に至る五代間の御事を記したるものなり。序跋なし。「群書類從」卷三十七帝王部第九に收められたり。

ごだいはじめのしき
御代始之式　寫一巻
享保二十年乙卯(一七三五)三月、櫻町天皇御即位の次第を記錄したるものなり。

ごだいはじめのせう
御代始抄　寫一冊　一條　兼良
本書は「お代始抄」として、「おほ」の部に解題せり。

ごたいへいき
後太平記　二十一巻　多々良南宗庵
後土御門天皇の應仁元年丁亥(一四六七)より、正親町天皇の天正年中に至る凡そ百二十年間の事を

記せり。畠山義就兄弟繼嗣の爭亂、山名宗全、細川勝元等之れに與して、洛中に大戰攪きし始末、羽柴秀吉の諸軍功、播州上月の落城、尼子家の滅亡、山中鹿之助の伏誅等に至る。凡て諸國の爭亂、足利氏の興廢等を記したるものなり。著者多々良南宗庵は別に「後太平記評判」を著せり。

ごたいへいきひやうばん
後太平記評判　四十卷　多々良南宗庵

前掲「後太平記」を評判增註したるもの。諸家の系圖を出し、政道の善惡、爭亂の虛實等を攻め、更に將士の善惡を評註したるものなり。著者多々良南宗庵は「後太平記」の著者なり。

ごたいぼくおやうひつけい
五體墨場必携　二卷　市河　三亥

二字句以下十四字句に至る成語を、楷行草隷篆の五體に寫して、墨場書家の用に供せるものなり。天保十二年辛丑(二二五〇一)山背の跋あり、同十四年出版す。

◎市川三亥は有名なる江戸の書家にして、書家寃齋の子なり。字は孔陽、柔庵と號し、小左衞門と通稱す。小山林堂、金羽山人、百筆齋、樂齋、赤顏道人等は、皆其の別號なり。書は夙に米元章の書體を學びて、別に一家の風を成し、尤も楷隷に巧なり。著す所に、米家書譜、柔荑墨談、皇國州名歌、西遊小草、毛信遊草、及び本書等あり。皆行る。孝明天皇の安政四年丁巳(二二五一七)七月、八十歲にて、江戸に歿せり。

ごたいみぶんしふせうろく
五體身分集抄錄　四卷　生西

人身各部の病症を二十一分に區別し、各其の概狀を記して、簡短なる療法を示したるもの。文政四年辛巳(二二四八一)十二月、奈須玄盧自抄の奥書ありて、小冊子一冊に作れり。

◎生西は筑紫の醫僧なり。香椎宮の學頭となり、能く醫術に通じたり。

ごたいわかんりやくしふ
五代和漢略集　二卷　僧　彥岑

興山法印、勢譽法印、聰昌法印、立譽法印、雲堂法印、以上五代僧の和歌詩文等を輯錄す。寬永七年庚午(二二九〇)の自跋、同八年僧雪峰、大雄美の序あり。著者彥岑は高野山の僧なり。

ごたうくんもうしやう
古道訓蒙頌　一卷　久保　季茲

神道の事を五言二百韻に賦して、童蒙頌歌の用に供せしなり。安政四年丁巳(二二五一七)鷲峰茂申の序あり。翌五年出版す。

◎久保季茲は天保元年庚寅(二四九〇)五月十二日江戸本郷に生れ、德川幕府の醫たり。字は鎭吉、後に玄真、又琴書と稱し、杉乃舍、杉庵居士、玉甌道人、永玉老人等の號あり。幼にして漢書を學び醫術を習ひ、十餘歲にして「古事記傳」を讀み、是より邦典皇學の研究に從事せり。明治維新前大に尊王攘夷を唱へ、幕府政權奉還の後は暇を請うて隱遁す。後、明治元年十二月朝廷に召されて神祇官書記となり、累遷して大學大助敎、宣敎中博士、敎部省出仕等に任ぜられ、正七位に敍せられ、大神神社大宮司に任じ、中敎正に補せらる。武藏大久保村に住居したる時、類燒して著書は大抵烏有に歸せり。明治十九年丙戌(二二五四六)三月五日、五十七歲にて病歿したり。

ごたうけきねんろく
御當家記年錄　八卷　源　忠次

德川氏累代の實錄。自敍に曰く「御當家記年錄」は右親、親氏、參州に住するの始より、大猷院殿「家光」薨御に至るまで、粗之れを記す。然りと雖も、清康主以前は、未だ詳に之れを識ること能はず、是れより以來は、則ち或は落記を搜求し、或は諸家の系譜を訪ひ、或は古老の談を聞き、以て據となす」と。以て本書の成立を知るべし。寬文四年甲辰(二二二四)に成る。

◎源忠次のことは別に「かきね色目」の下にあり。

ごたうけけいづ
御當家系圖　一卷

德川家の系圖。清和天皇より十代將軍家治に至る系脈、官位、生卒の年月等を詳記せり。

ごたうけだいだいき
御當家代々記　一卷

德川氏代々の略傳逝去の年代等を記して、祖先親氏より家康に至れども、家康の事蹟のみ委しく記し、上六代のは唯概略に止まれり。天正十三年乙酉(二二四五)を以て結局とす。

ごたうけねんぺう
御當家年表　三卷　宮地　仲枝

天文十一年來の土佐國山内家歷代の年譜なり。一名を「御國年代記」といふ。文化九年壬申(二四七二)著者の凡例あり。

◎宮地仲枝の傳記は「觀田樂記」の下にあり。

ごたうけふ
御當家譜　一卷

德川氏の家譜なり。初め「新田松平家年譜」と題して、清和天皇より五代將軍綱吉までの事を記し、次に「松平家安儀御年譜」と標して、信光君迄人より東福門院に至る法名、及び生卒の年月を記し、後に「新田德川松平山來聞書」と題し、家康出生より後水尾天皇の元和元年(二二七五)までの事績を詳記したるものなり。

ごたうけりやくき
御當家略記　三冊

德川氏の略日記なり。第一册に元龜元年庚午(二二三〇)天正二年甲戌(二二三四)、慶長六年辛丑(二二六一)より同十三年に至るものを掲げ、第二册に同十四年より十七年に至り、元和二年丙辰(二二七六)より同五年に至り、同八年のものとを掲げ、第三册に寬永元年甲子(二二八四)より同八年に至り、同十一、十四、十九、二十年の日記なり。卷末に享保二年丁酉(二三七七)十二月、林大學頭の奥書あり。

◎右借幕記寫之、全雖不爲正說、獻上焉」とあり。

ごたうしんたうめいしふいちらん
古刀新刀銘集一覽　一卷　田中　清房

新古刀の銘を集錄して、いろは順に示したるもの。文政十一年戊子(二四八八)七月、著者の例言に曰く「此の書は世に行はるゝ目利の書にはあらず、差し向き在銘のものにあたりて、國時代又同銘多きものを見定めがたき時、慣より出し速にしらしむるために、輯錄して童蒙に便ならしむるのみなり」云々といへり。以て其の大概を知るべし。

ごたうたいい
古道大意　二卷　平田　篤胤

我が古道の大要を講釋したるものなり。親切叮嚀に言文一致の文を以て筆記せられたり。著者平田篤胤は「古史傳」の下に傳す。

ごたうたいげんづせつ
古道太元圖說　一幅　平田　篤胤

古道の太元を顯幽二方に分ちて、道理の本原を圖示したるものなり。著者平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ごたうだいしやうぞくせう
御當代裝束抄　一卷

德川氏時代に於ける裝束の名義故實、色目寸法等を記し、更に年中行事、位階等の雜說數件を掲ぐ。

ごたうべん
悟道辨　二卷　平田　篤胤

佛者の悟道といふことを破斥し、儒者道學者、神道者、心學者等の惡說を破して我が古道國體の尊重なるを鼓吹したるもの。文化十年比の口述を門人どもの筆記せるところなり。下卷は「屁口物語」と號して、文化八年辛未(二四七二)本郷式部といへる人の悟道といふ事を說きて俗人を惑はしむるを憤りて口授したるを筆記したるものなり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ごたうめいかん
古刀銘鑑　一卷　尾關　永吉

古刀の銘を鑑定するにつきて、古き銘鑑の誤謬を正し、系圖の時代を校し、又の形の品々、五の目の種々、茎の色々、番鍛冶又は其の官名位列等鑑定の次第を精述したるものなり。故に一名を「鑑定祕事錄」といふ。栗原信充の序を附し、安政三年丙辰(二五一六)出版し、橫綴小本一册にて行はる。

◎尾關永吉の傳は「古今鍛冶銘早見出」の下に見よ

ごたうめいづくしたいぜん
古刀銘盡大全　九卷　菅原　弘邦

刀劍目利の書。第一卷初心目利手引、目利心得之次第、刀劍心得事並に疵之次第、研之差別、目利傳之事、刀劍携來事、刀と名附事、刀劍定法、燒及部類分、小鍛指造事、中心銘見分之次第、諸鑑治心得事、古刀新刀差別、名劍害劍事等を始として、第二卷以下諸國鑑治系圖祕談抄、刀劍見樣、燒及中心押形中心銘押形等を詳細に記す。其の凡例第一に曰く「前の古今銘盡といふは、慶長十六年の寫本にして、其の頃は今の新刀と名付るものなし。慶長の頃まで

の作を集るに因て、古今銘盡と外題す。今改て古刀銘盡とせしは、慶長八年より後の作を新刀と呼ぶ。新古の差別あるによつて書の號を改む」と。寛政三年辛亥(一七九一)の著に係り、諸家の序跋あり。

◎菅原弘邦は仰木氏を稱し、汲古堂と號す。夙に刀劍鑑定の研究を好み木阿彌家に就て學べり。其の著書には古今銘盡、古刀銘盡大全懐本、古刀手鏡、銘書秘傳書、古刀御鑑、類字銘鑑、古刀名鑑治角力、古今角力銘盡、同增補類懐本等あり。

こだんじつろく
古談實錄 ㊀二卷

中古以來諸將士の智謀勇略の事績を、諸傳記より取舍雜記せしものにして、凡て百二十餘條あり。

こだんはふのき
五壇法記 ㊀一卷

土御門天皇の正治二年庚申(一二〇〇)以下、龜山天皇の文永十二年乙亥(一二七五)に至る五壇法を記したるものなり。『續群書類從』卷七百三十六、釋家部第二十一に入れたり。

ごちうき
後中記 ㊀一卷　押小路資賴

押小路中納言藤室賴卿の日記なり。仁治三年壬寅(一二四二)正月より、十月までを記す。元祿二年己巳(一六八九)寫本の奥書あり。

ごちうさんぶつづしよう
湖中產物圖證 ㊀六卷　藤居　重啓

近江琵琶湖中なる魚類を取り出でて、各性質形狀效用及び深淺住所等を說明し、圖は彩色を以て大小色形眞を期して圖證したるもの。文化十一年甲戌(一八一四)侯命によつて圖寫したるものなり。今見るところは、嘉永七年(安政元年)甲寅(一八五四)山本榕室の覆寫による。

◎藤居重啓は近江彦根の人にして、井伊侯に仕へたるものなり。

ごちうじつさうき
五重十操記 一卷

音曲に關して、五重、十操、七則、三差等の事を記せるものなり。『群書類從』卷三百四十一、管絃部第一に收めたり。

ごちうじよ
五重序 ㊀一卷

絲竹管絃の事を記したる書。五重は毛皮肉骨懐の事なり。書中、眞保親王の記を引き、奥書に元祿四年辛未(一六九一)大秦廣當書寫せるよしを記せり。

ごちうせう
壺中抄 ㊀一卷

何事に論なく古史より雜抄せしもの。位署讀樣の事、神事札の事、殿上帶劍の事、還行の事、黃手の事、裝束進退の事、姓氏の事、華表の事等數十條あり。

◎壺井義知の傳は『管職浮說或問』の下に出づ。

ごちうさんぶつづしよう
湖中產物圖證 ㊀六卷　藤居　重啓

ごちやくたいぶるゐ
御着帶部類 ㊀一卷

女院の着帶に關する記錄を集めたるものなり。

ごちやくたうひやくしゆ
御着到百首 ㊀一卷

文龜三年癸亥(一二六三)御製の百首にて、春夏秋冬戀雜より成れり。萬治二年己亥(一六五九)賀茂縣主氏盛の寫本なり。

ごちようらうぐもうらみのをだまき
小女郎蜘蛛怨苧環 一卷　瀧澤　馬琴

蜘蛛の妖怪の爲めに、弘安年中攝津國三島郡多田賴行の家の滅亡するに至れることを綴り成せる小說なり。天保十二年辛丑(一八四一)の自序あり。

◎瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

ごちんさしだいき
御鎭座次第記 ㊀一卷

後鳥羽天皇の文治元年乙巳(一一八五)四月二十一日、伊勢國太神宮の正殿假殿遷宮の記なり。

ごちんさしだいき
御鎭座次第記 ㊀一卷

伊勢の內外二宮の御鎭座の次第を記錄せしものにして、阿波羅波命、荒木田押刀、乃乃古命、赤冠藥、乙乃古命の五人の手に成りたるものといひ傳ふ。

ごちんさしだいきせう
御鎭座次第記抄 ㊀一卷　秦　信慶

所謂神道五部書の一にて阿波羅波命の撰述といふ『御鎭座次第記』を釋註したるものなり。『御鎭座次第記』は神記第二にして、『御鎭座傳記』は神記第一にして、『神代卷風俗抄』の下にあり。

◎秦信慶の傳記は『神代卷風俗抄』の下にあり。

ごちんしふ
鼓鹿集 ㊀二卷

太鼓打方曉方の書なり。四日の能打樣、脇能打樣、修羅打樣、還打樣、物狂打樣、十體打樣等より、八拍子、重拍子、調の拍子、遠近、たけくらべ、發心、當座の花つゐの事に至る七十三條を略說す。

こつきやう
骨經 一卷　石坂　永敎

人體骨格の組織、及び其の生理等を解剖說明したるものなり。上梓の年月日未詳。著者石坂永敎は鍼科の侍醫にして、筆齋と號したり。

ごちんさでんきげんちう
御鎭座傳記諺註 ㊀一卷

伊勢內外二宮の御鎭座の次第を記したる『伊勢二所皇太神宮御鎭座傳記』を和解したるものなり。

ごちんさほんえん
御鎭座本緣 ㊀一卷

『御鎭座本記』の抄錄にして、相殿の神、及び諸攝社の神系等を詳記せり。仁和三年丁亥(一五四七)の奥書あり。

なすを最初として、永德二年壬戌(一四〇二)の補任に至る。『續群書類從』卷九十三、補任部第五に收めたり。

ごちやくたいぶるゐ
御着帶部類 ㊀一卷

女院の着帶に關する記錄を集めたるものなり。

ごちやくたうひやくしゆ
御着到百首 ㊀一卷

文龜三年癸亥(一二六三)御製の百首にて、春夏秋冬戀雜より成れり。萬治二年己亥(一六五九)賀茂縣主氏盛の寫本なり。

ごちようらうぐもうらみのをだまき
小女郎蜘蛛怨苧環 一卷　瀧澤　馬琴

蜘蛛の妖怪の爲めに、弘安年中攝津國三島郡多田賴行の家の滅亡するに至れることを綴り成せる小說なり。天保十二年辛丑(一八四一)の自序あり。

◎瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

ごちんさしだいき
御鎭座次第記 ㊀一卷

後鳥羽天皇の文治元年乙巳(一一八五)四月二十一日、伊勢國太神宮の正殿假殿遷宮の記なり。

ごちんさしだいき
御鎭座次第記 ㊀一卷

伊勢の內外二宮の御鎭座の次第を記錄せしものにして、阿波羅波命、荒木田押刀、乃乃古命、赤冠藥、乙乃古命の五人の手に成りたるものといひ傳ふ。

ごちんさしだいきせう
御鎭座次第記抄 ㊀一卷　秦　信慶

所謂神道五部書の一にて阿波羅波命の撰述といふ『御鎭座次第記』を釋註したるものなり。『御鎭座次第記』は神記第一にして、『御鎭座傳記』は神記第二にして、『神代卷風俗抄』の下にあり。

◎秦信慶の傳記は『神代卷風俗抄』の下にあり。

ごちんさほんぎ
御鎭座本紀 ㊀一卷

豐受皇太神宮鎭座の記錄なり。豐受太神宮所地の事、皇孫命天降、相殿神、天照太神鎭座、豐受太神鎭座、高宮相殿神等の事等を記す。異本數種ありて記事各增減あり。著者は大神主飛鳥と署名せり。

ごちんしふ
鼓鹿集 ㊀二卷

太鼓打方曉方の書なり。四日の能打樣、脇能打樣、修羅打樣、還打樣、物狂打樣、十體打樣等より、八拍子、重拍子、調の拍子、遠近、たけくらべ、發心、當座の花つゐの事に至る七十三條を略說す。

こつきやう
骨經 一卷　石坂　永敎

人體骨格の組織、及び其の生理等を解剖說明したるものなり。上梓の年月日未詳。著者石坂永敎は鍼科の侍醫にして、筆齋と號したり。

こつけいざつだん
滑稽雜談 ㊀二十一卷　四時堂其諺

事實を十二月に配當し、每月の時令、人事、動植物等の名稱故實等を考證したるもの。殆んど二十項あり。正德三年癸巳(一七一三)の著。

◎四時堂其諺は京都の俳人なり。四山正岡姻の住職にして骨董翁と稱す。四時堂は其の號なり。晉て眞珠庵如泉に從ひて和漢の學に進し、本書の外、御傘執補抄、鄰交手、金衣鳥等の著あり。元文元年丙

辰(一三九六)七十一歳にて入寂したり。

こつけいしじふはちくせ

滑稽四十八癖　一巻　式亭三馬

四十八癖を材料として綴り成せる滑稽小説なり。文化八年辛未(一四七一)の自序あり。

◎式亭三馬の傳記は「阿古義物語」の下にあり。

こつけいしわう

滑稽雌黄　四巻　桂井在高

滑稽的戯文を集めたるもの。短檠教解、三絃天機、屏風論直、下駄孝慈、登天冤徳、猫口論命、花盛園廃、飯是辨啓、櫻餅辨無、雨玉止事、風蝶教蛛、植盆仙術、酒樽忠臣、松樹弘敬、蛍辨眞友、強槍五常の十五編あり。資暦九年己卯(一四一九)穐稍以貰の序文中に、「雌黄者不敢自是、簒君子下雌黄、亦就有道而正焉之意也」と云へり。著者桂井在高は狩人と稱す。

こつけいたいへいき

滑稽太平記　八巻　北藤浮生

俳諧道の滑稽逸話を集めたるもの。巻一に、俳諧由来の事以下凡て七條。巻二に松江重頼野々口親重確執の事以下凡て十條。巻三に窯藤徳元の事以下凡て十三條。巻四に雛屋立圃手柄の事以下凡て八條。巻五に誓紙起の事以下凡て十條。巻六に神田貞頼の事以下凡て四條。巻七に貞宣催撰集の事以下凡て六條。巻八に尾州友我の事以下凡て七條を収め、俳諧文庫第廿編俳諧逸話全集にも収めたり。

◎北藤浮生は江戸銀町に住したる俳人にて、銀塘居、また通櫻雑園と號す。享保二年丁酉(一三七七)正月廿三日、四十八にて歿す。小日向金剛寺に葬る

こつけいふうかえひ

滑稽二日酔　二巻

大晦日と元日との世の有様を、可笑しく書き成したる一編の戯文なり。巻首に「歳暮往来錯乱之圖」といへる狂画を掲げたり。文化八年辛未(一四七一)の作。

◎十返舎一九は「道中膝栗毛」の下に傳す。

こつけいほつくるるだいしふ

滑稽發句類題集　三巻　金太樓

本書の内容は其の名の示せるが如し。四季、戀、人物、生類、天地、遊藝、雑等の部を分ち間々狂歌をも挿入せり。文化十四年丁丑(一四七七)出版。

こつけいゆめすがたり

滑稽夢輔譚　一巻

滑稽材料によりて、書き綴れる小説なり。天保十五年甲辰(一八四四)の自序あり。著者一筆庵主人は東都楓川市隠とあり。

こつさん

古圖纂

神像、佛具、古器等の圖二十四種を集めたるもの。著者の名及び年號を記さず。

こつじきでん

乞児奇傳　一巻

乞食阿蕨、兵太、阿銀、部志摩、泥望八、庚申亀、甚右衛門、半彌等の略傳、狂像を掲げたるもの。天保年中なる諸家の戯作序跋頗る多し。

こつせんだん

滑川談　一巻　塚田虎

此の書は道徳経済等の事を論ず。「倹約」より「學問」に至る凡て九編より成る。開巻の最初に、青砥藤綱が滑川の逸話を掲げしより、取て書名とはしたるなり。光格天皇の寛政三年辛亥(一四五一)に書きたる自序あり。

◎塚田虎は信濃の人。字を叔貌、通稱を多門、號を大峯といふ。父旭嶺は室鳩巣の門人なり。大峯幼初父に學びしが、敢て程朱の學を奉ぜず、獨學以て諸經に通ぜり。天明元年尾張侯の侍讀となり、文化八年同藩明倫堂の督學に擢でらる。天保三年壬辰(一四九)三月二十一日、八十八にて歿せり。

こつちみかどのゐんじふさんくわいせいきのき

後土御門院十三回聖忌記　一巻

永正九年壬申(一五一二)九月二十三日より、三日間禁中に於て法華懺法講を御修行あらせられし次第を記したるもの。「群書類従」巻四百二十九、釋家部第五に収められる。

ごづてんわうへん

牛頭天王辨　本朝一巻　天野信景

牛頭天王の説の非を辨じ、漢文にて記せり。諸書に其の明徴を取れり。寛永元年甲申(一三六四)の漢文自序あり。「輪池叢書」第三十五巻にあり。

◎天野信景は世々尾張藩に仕へ、字は子顯小名は權三郎、後宮内と稱す。享保十五年病に因りて致仕し信阿彌又は白華翁と號せり。信景は博聞強記にして學文武を兼ね和漢の書は殆んど渉猟せざるものなく、殊に國典を度會及び尾張氏に學び造詣頗る深し。其の著す所には神器授受傳、神宮訝、同問集記、神代巻聞書、神祇本源抜萃、伊勢參宮里程抄、神事覚撰、神代紀聞、神宮問集記、伊勢太神宮參詣記、總社參詣記、牛頭天王辨、祭記雑説、倭姫記考異、卜氏辨、纒神皇正統記辨、真享御即位聞書、新撰姓氏錄校考、尾張人物志、熱田神社問答、熱田問答雑錄、同覚平記頭註、大日猿楽聞意祕訣、淫祀辨、尾張五社略記、同祠考、同十五寺略記、神皇正統記校考、王代一覧補遺、姓氏考、南朝紹運圖、參考尾張本國帳、藤原系圖傳、大和稱呼祕解、師壇名辨、武業記、諸士家紋窓傳、源氏棚壺大儀、百人一首聞書、海道里程、鹽原雑記、浦の名殘、藤川の記校考、職原抄聞書、造酒辯、德川世記、盛衰記拔抄、家紋記、古今集序註、徒然草逸見、六千鳥、あまかり、小島の慰校考、後の今宵、釉の海、尾張古城志、本朝學令和解、同釋典和解、孔子家封辨、儒者名辨、著卜圖解、古今易断、辨惡公請郊論、滿州字式、蓬門要略、秩のはと、吉野紀行、雷鉄年月明鑑抄、朱子家封辨、學庸闕題、朱易衍義補、三年無改辨、讀書龜、鎮親要、心異解、地親記東、義解念佛抄、倚島記事、遯子説、歩射祕解考、白華雑記、机上一覧、聞考集記、遯疑隨筆、庚辰隨筆、我聞如是、落葉問捜、善隣記事、一枚起請沿訓、犬追物檢見考、茅花隨筆、秋雨閑筆、破窓漫筆、立之和筆、戊寅冬記、凝寂堂筆記、聞人章書、事言錯記、壬午和筆、寛永始末、輪轅故事、壁茶盌筆、同附録、考槃靜記、聞見雑記、乘燭閑話、壁虎、壬午二筆、梅雨窓筆、聞津漫書、同閑筆、備忘雑著、時雨閑筆、孤燈掲盧、剪燈漫志等あり。享保十八年癸丑(一三九三)九月歿す。

ごづてんわうれきしんべん

牛頭天王暦神辨　三巻　平田篤胤

牛頭天王と稱し、また天道神と申し、柳楽鹿島尊を牛頭天皇と稱し、また稲田姫命を歳徳神と傳稱するに柳楽鹿島尊の御子八柱を八將神と號して暦神としたること等の非を辨じ、且、其の傳説由來等をも記したるなり。

◎平田篤胤は「古史傳」の下に傳す。

こつとうざふだん

骨董雑談　三巻　新井君美

我が國の故事古傳等に關する隨筆なり。手形の事、文字初めて我が邦へ渡る事、端の假名、手習の事、奥の假名の事等より、嫡子及伯父叔父の事、後の世の石様はいやしき事、筆墨並に筆石の事等に至る。筆墨並に筆石の事等に至る。敬十項よりなれり。並牛「隨筆集誌」の中に印行す。

◎新井君美は「折たく柴の記」の下に傳す。

こつとせいけつかうづ

骨度正穴考圖　二巻　岡田子成

漢書骨度書の經絡穴に就き考證して針灸簡所を正定したるもの。全身解剖の部分を圖して、各寸分等を註記せり。文化九年壬申(一四七二)の自序、同十年友人秋元芝仙の序あり。文政五年壬午(一四二二)に出版せられたるものなり。

◎岡田子成は武蔵國巌驛の人にして、靜默と號す。芝仙の序によれば、家に僭石の儲なく衣服は寒温に適するのみ、世俗と交らず、古人を師とし、詩書を友とし、性、考索を好み、遂に經穴に依て一家言をなし、千古の寒に復せんことを主張せり。又音韻の學を好めり。

こつるるじゆ

古圖類從　一巻　高島千春

古圖類從中、調度部の一にして、文房具のみを挙げたり。各品を模寫し、名稱、所藏主等を記せり。文政五年壬午(一四八二)成島司直の序、同六年屋代弘賢の序あり。東京帝國大學に貴重品として所藏せり。

◎高島千春は鼎湖また融齋と號し、通稱を壽一郎といふ。土佐流の書家なり。初め大阪に居り後遷りて江戸に住し安政六年己未(一八五九)十一月十二日、八十三にて歿す。

こていせふひつ

湖亭渉筆　四巻　安積覺

唐宋等史書中の奇事珍譚を抄記論斷せしものにして、第四巻には多く俗諺の出處を輯錄せり。享保十二年丁未(一七二七)、宝直清の序及び自序あり。

◎安積覺は水戸藩の鴻儒。字を子先といひ、澹泊、老圃、常山等の號あり。晩に老牛居士と號し、通稱

を覚兵衛と云へり。幼時朱舜水に江戸に従つて句讀を受け、長するに及び博識能文にして尤も史學に長ぜり。水戸義公大日本史を編修するに方りて滂泊の撰述に係れり。滂泊の學は程朱を主とし而も之れに拘泥せず。深く白石鶏巣等と交り頗る推重せらる。著す所本書の外、烈祖成績、滂泊齋文集、老圃詩稿、朱文恭遺事、大日本史論贊、大日本賛藏、神祖遺事等あり。元文二年丁巳(一三九七)八十歳にて病歿せり。

ごでうひやくく

五條百句 一冊

此の書は寛三年癸卯(一三二三)春の俳諧百句にして、俳諧師の評判あり。

ごでうもく

御條目 和一巻

正徳五年乙未(一三七五)四月、奉行より達したる萬石以上家の法度條目と、萬石以下の法度條目とを併せ錄したるものなり。

こてふ

胡蝶 和一巻 **後水尾院**

胡蝶の一人物を假りて、世の果敢なき事、佛道修行に志すべき事などを示されたる物語なり。末尾に「此の草紙を見給はん人は、慈悲正直をもつぱらにして、とんよくじやけん、れんぼあいしく、もろもろの惡業ぼんのう大てきのさはいかーる時は、にんにくじひをたてにつき、めうがうのりけんをもつて、これを玉づめ給ふべし」とあり。

◎後水尾院の御傳は「一字御抄」の下にあり。

こてふあんずゐひつ

胡蝶庵隨筆 一巻 **胡蝶庵**

書籍上、又は事實上に於て如何と疑はる、事々を擧げて評辨したるものなり。神佛の說、奇怪の談、風流の談とも何くれとなく、古今に渉りて論評せり。天明六年丙午(一七八六)の序あり。

ごでふせうそく

五帖消息 五巻 **僧 蓮如**

淨土眞宗本願寺の第八祖蓮如上人が其の信徒に與へし訓誨的消息文を編纂したるものにして「御文章」又は「御ふみ」とも通稱す。初帖十五通、第二帖十五通、第三帖十三通、第四帖十五通、第五帖二十二通、合計八十通ありて、年代は寛正元年庚辰(一四六〇)より、明應八年己未(一四九九)に至る四十年間に亙れり。註釋の書の主なるものを擧ぐれば西福寺慧空の「叢林集」三巻、平乘寺蓼鎧の「聖窓隨筆」五巻、播州智運の「御文解」十四巻、快樂院業遠の「寶章圖畧」一巻、淨信院道隆の「寶章明燈鈔」二巻、鬼木沃州の「寶十七巻、同人の「明燈鈔通關」二巻等あり。

◎蓮如は眞宗本願寺第八世の住職。字は兼壽、信證院と號し、童名を布袋丸と稱せり。幼より一宗の中興を以て自ら任に、各處に行化して多く宗祖の遺蹟を復興し宗勢大に振へり。山徒之れを嫉み寛正六年大谷坊舍を破滅す。爾來北陸各處に遷轉行化し、文明七年越前より還り攝河泉の間に在ること多年。同十二年本願寺を山城山科に再興す。延德元年宗務を光兼實如に譲り、明應八年己未(一四九九)三月二十五日、八十五歳にて入寂。明治年間慧燈大師と敕諡せられたり。著書は別に「正信偈大意」あり。

こてふのゆめ

蝴蝶夢 一巻 **杉山 隨翁**

本書は「莊子」を根據となせる著者の道德觀なれば老佛の說に雜へて述べたるもの。平易なる假字文なり。終りに莊子七篇大意(漢文)を載す。前後相對照すべし。天保十年己亥(一八三九)の著。

こてふはうぐわん

胡蝶判官 一冊 **伊藤 信德**

寺田重德と共に編輯したる俳句集なり。元祿五年壬申(一六九二)の編なり。

◎伊藤信德の傳記は「俳諧大句數」の下にあり。

ごでんけんゆうかうたいかう

古傳顯幽考大綱 本一巻 **堀 秀成**

端書に「此の一小卷は古傳に三段の御伝(ニヨサン)十段の顯幽といふ事の有る由を、己れ委しく攷へて、既に古傳顯幽老といふものを著せるが、今ここに大綱を記して、先其の概略をしらせんとするなり。詳なることは、すべて本書に據りて辨へ知るべし」とあるにて、此の書の性質を推すに足るべし。

◎堀秀成の傳は「盲聾妙用論」の下にあり。

ごでんしふ

語傳集 本四巻

軍談雜事を集めたるもの。卷一羽柴筑前守秀吉都へ門出之事より以下十九條。卷二に松平三河守家康公太平記の評御聞有之御諚の事より以下十一條。卷三人の眠の分知並慮實二つの事以下十三條。卷四に攝津國大阪之内大臣秀頼公七組之侍大將之内眞田左衛門佐再拜討死之事より、眞草行三の分知の事に至る十二條を收錄す。

ごでんせう

御傳鈔 二巻 **僧 覺如**

眞宗本願寺の開基親鸞聖人の傳記なり。委しき解題は本名「本願寺聖人親鸞傳絵」の下に出づ。

ごでんせう

御傳鈔 二巻 **僧 淨賀**

本願寺覺如上人の詞書したる「本願寺聖人親鸞傳絵」を畫きたるものなり。永仁三年乙未(一九五五)繪師の奥書あり。末寺の僧徒これを寫傳し、稱して御繪傳といへり。

◎淨賀は畫人にて法眼に叙せらる。畫を宅磨家に學び、信濃國康樂寺に寓居して、本願寺の祖師親鸞上人の傳を畫いて名あり。其の歿年は、今傳へて本願寺に藏せりといふ。元亨年中の人なり。

ごでんせついじふせい

古傳說遺事集成 和十巻 **鶴峯 戊申**

長歌にものせられたる「古傳說背誦頌」を、當時の通用文に改め、一層博く諸書を渉獵引證して、註解を施したるものなり。但し引證の文は原書の文體に從ひて敢て改譯せず。

◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

ごでんせつはいしようしよう

古傳說背誦頌 和二巻 **鶴峯 戊申**

「古史成文」を長歌に詠じて、人に誦し易からしめ、之れを和漢梵洋の書を引證して、註釋したるものなり。一名を「本教譜誦歌」と云ふ。

◎鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下に出づ。

ごでんにんのしだい

御轉任之次第 和一巻

寛永二年乙丑(一六二五)德川五代將軍綱吉が右大臣に轉任せし時の式例を委しく記したるもの也。

こでんひしよ

古傳祕書 和一巻

弓馬故實の書にて、軍事上、日の吉凶を論述したるものにて、末に相傳の次第を記す。永祿五年壬戌(一五六二)十一月酉部出雲守より小島右馬允に傳ふる所なり。

ごでんりやく

御傳略 和一巻 **岡部 長雅**

德川綱吉の誕生より、將軍職相續までの事歷を略記したるものにして、享保十四年己酉(一七二九)著者岡部長雅の傳は詳ならざれども別に著せり。

ごでう

梧桐 和十二巻

療馬の法を記したるもの。序に曰く「そもくこれを醫の卷といふは、平仲國云、安驥集六十卷の內これを撰して、謀出ることなきものなり。凡唐日本の違分明にして、道具を違へず、秋の月明なる翼ひかくすに醫を以てすと云、唯聖中の朽亂れざるに喩ふ。故に本字の桐を以てするなり」云々と。

ごでうかつせんき

後藤合戰記 和一巻 **長野半右衛門**

大阪城秀賴籠城の節、浪人五將中の後藤又兵衛が、直接に當時の軍事を談話したるを、半右衛門が聞書したるものなりと。寛文五年乙巳(一六六五)二月二十日、宣成寫本の奥書あり。

ごでうさんそうでん

湖東三僧傳 一巻 **僧 信階**

近江國金勝山阿彌陀寺の三僧、開山淨盛房隆堯法印、第二世堯學隆阿上人、第三世中興嚴譽宗眞上人の傳略を、綸入假字書に綴りたるものなり。寛政六年甲寅(一七九四)の編にかゝる。

◎信階は近江金勝山阿彌陀寺の住職なり。此の書を著したる年、即ち寛政六年甲寅(一七九四)は、開山滅後三百四十六年といへり。

ごでうしやうざぶらうゆゐしよがき

後藤庄三郎由緒書 本一巻

德川家康當て京都にありて、一家中より後藤庄三郎といふものを擢でて、天下統一の後途に國政にまで預からしめたる事あり。本書は同人の由緒來歷を詳細に記したるものなり。